
馬鹿勇者は世界を救う？～パラレルワールドだと思っていた世界が実は異世界だった～

ノア

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬鹿勇者は世界を救う？～パラレルワールドだと思つていた世界が実は異世界だった～

【Zコード】

N1488W

【作者名】

ノア

【あらすじ】

「あの勇者は、この国を『馬鹿』にしてしまう様な、恐ろしい脅威となる『馬鹿』なのです！！」

異世界のとある王国『ミケガサキ』に召喚された最強の『馬鹿勇者』。

「ひやう世人は、本気でパラレルワールドだと思い込んでいるようだ。

『女神』の母に『奴隸』の父！？お隣のおじちゃんが、『魔王』！？
『兵隊』の皆さんは元同級生…だよね？

王国『ミケガサキ』で起る領土争い。徐々に世界を巻き込んで行く…。

果たして、馬鹿は世界を救えるか！？

第一章 プロローグ

「此處に居られましたか。女神様」

薄暗い洞窟の中、ガチャンガチャンと金属の擦れる音が響き、やがて止まった。

ピチャーン…と、雪が落ちて洞窟に響く。

「ああ…！カイン！貴方でしたか…！」

女神様と呼ばれた女性が振り向いて、カインに近寄った。艶やかな黒のウェーブがかかつた髪がふわりと揺れる。

「どうしたのです？顔色が悪い。『例の儀式』は失敗してしまったのですか？」

カインは真面目な顔をして訊ねた。女神は力なく首を振る。

「いいえ…！成功しましたわ。ああ！何て事なのでしょう…私は女神として失格だわ！」

顔を覆いながら泣く女神に、どう言葉を掛けて良いか分からず、カインは頭を搔く。

「何をお嘆きになる必要が御座いますか。貴女様はご立派にその大義を務めていらっしゃいます。

『例の儀式』が成功したのならば、さっそく式典の準備を整えましょう。我が『ミケガサキ王国』の復興の宴を

「私とて、大義を果たせたことは誇りに思いましてよ、カイン。しかし、私は愚かです！よりによつて、あんな『勇者』を呼びだすなんて…！」

取り乱す女神を、カインがなだめる。

「さつきから、どうしたというのです？一体、どんな『勇者』を召喚なさったのですか？」

「我が王国に置いて、脅威となりうるのですか？」

「ええ…。ああ、何て事…」

『ぐりとカインは唾を呑み込む。

女神がこんなにも取り乱すほど『勇者』とは一体、何者なのだ…？

「『馬鹿』なのです…！…とてつもない…、今まで生き残れたのが奇跡の様な、絶滅希望種…。あの勇者は、この国を『馬鹿』にしてしまう様な、恐ろしい脅威となる『馬鹿』なのです…！」

『馬鹿』を物凄く強調した女神の悲痛な叫びが、洞窟に木靈した。

＊＊＊＊

三嘉ヶ崎市。

「くしゅんっ！おかしいな、風邪か？おお！生まれて初めてだ…」

『ぐく普通の毎日で、毎年変わらない夏休みだった。

田中優真。

高校三年生、誕生日は一月一日。十七歳。

『ぐく普通の何処にでもいる様なゲーム大好きの学生である。

「あれ、いつの間にこんな暗くなつたんだ？あつ、夏だからか。冬は明るいよな、この時間帯」

そして、正真正銘の馬鹿だった。

当然補習生なわけで、今は帰宅途中。

学校から家までもうそ五分。坂が無ければ一分ほどで着ける近さだ。

現時刻七時くらい。

毎年呼ばれるのだが、何故か毎年覚えたことを忘れていると言つか
ら先生方のストレスは留まることを知らない。

故に、一から教え直すと言うのも中々面倒な訳で、しかも相手が正
真正銘の馬鹿であるから達が悪い。

毎日、朝早くに登校し夜遅くに下校するというのが彼の毎年やつて
来る夏休みの日課だった。

ちなみに留年今年で五回目。来年でレッドカード。
つまり、先生たちが待ち望んだ退場というわけだ。

彼の卒業式には過去彼と同じクラスだった五年間に及ぶ元同級生達
が揃い、『正真正銘の馬鹿で証』を贈呈する手発になつていて
その後の一次会では『田じろのストレス込めて 顔面に思いつき
パイを投げましょ』が密かに企画され、先生方の惜しみない協力
により実行へと移されようとしていた。

何だかんだで、人望ある馬鹿なのだ。

「ただいまーって、陽一さんまだなのか。じゃあ、ゲームでもやる
か。折角居ないことだし。

あー、エアコンタイマー予約し忘れた。珍しー」
お前の頭の方が余程珍しい。

いつもの様にテレビの前に設置してあるゲーム機に、一礼してコン
トローラーを握る。

指定席と化してあるソファーに腰かけた。コントローラーを握る手
に力が籠る。

優真が今やううとしているゲームはつい先日発売したばかりの『勇
者撲滅』というゲームだった。

「スイッチオン！」

ポチッとゲーム機の電源が押された。

それと同時に、ソファーの下に魔法陣が描かれる。

彼の言葉が合図だと言わんばかりに、眩い光を放つ。

ガタンッ…と、持ち主の居なくなつたコントローラーは床に落ちた。テレビ画面は、『勇者撲滅』が表示されている。

「ただいまーって、あれ？」

義父、陽一郎が帰宅。

しかし、辺りは静まり返つていた。

寝てしまつたのかと首を傾げながらリビングへ向かい、その光景を田の当たりにして咳く。

「優真君とソファー、何処行つたんだろう？」

物足りないリビングを見まわし、陽一郎はオウムの様に首を傾げるのだった。

第一章 プロローグ（後書き）

思いついたんで、書いてみました。暇な時、更新していく予定です。

第一話 召喚はオプション付き

「…………」

ゆっくりと、目を開く。

あつ、コンタクト落した。前が見えない…。

というか、何か物凄く視線を感じます。

状況を整理したいのですが、その前にもう一度、前が見えない。

取りあえず立ち上がって、服にひついてないか確認しよう。
あつ、やべ。立ち眩みだ。えーと、こういう時は、頭を下にするんだっけ。

周りから歓声があがる。

あつ、何か蠢いているの人なんだね。良かつた、良かつた。

…いやいや、何一つ解決していないぞ。家はいつから靈が住み着くようになりましたか？

しかも、何か靈も家内も豪華になつてゐるよ。変わつてないの、僕とこのソファー。

亡者に負けたよ、慘めだね。

しかし、よくよく考えてみればそんなリフォームなんて金は一銭たりともない。

そんな金があつたら、我が家は毎晩焼き肉パーティだよ。
定員一人だから、寂しいけど。盛り上がりの欠片も無い。
何か、此処にいる人々全てに負けた気がする。

ドッキリ！にしては看板が見当たらない。というか、あつても見えない。

僕は家でゲームをやるついでにしていたはずだ。

ということは、この状況がそれなわけだ。

つまりはだね。

これが最近流行りの『体験型アクション』なんだよ。
此処は、『勇者撲滅』の世界の中なのか。なんてハイクオリティー
なんだ！

いや、待てよ…。ということは、怪我とかしたら結構痛いんじゃな
いか？

ヤバいな。何の装備も無い。普通のゲームだとボロい剣とか装備し
てるものだけだ。

唯一装備している物といえば、家のソフナーだ。

敵に襲われたら確実に死ぬ。うわっ、絶対痛い！

コンタクト何処だよ？やつぱり眼鏡にするべきだったか？

…ん？制服に着いてた！やつぱりごろの行いだね。

これで、一安心。今なら、無敵な様な気がする。

まあ、ゲームの流れ的に。

召喚からのザコ敵出現、そして戦闘で勝利し仲間と出会つ…ってと
ころか。

『優真様、危ない！』

おー、名前まで自動登録されてるのか。
凄いな、最新作。

…って、え？危ない？というか、なんか向かって来てない？物凄い

速さで。

いや、コントакトしても田に追えないくらいの、どこでもないのが。

待て待て、落ち付け。アレは何？

といつか、このままじゃ確実に…。わざわざ警告されたし。

難易度設定をさせて…簡単に設定させて…無理なり、せめて装備くれ！

「死ねええええ――――――！」

死ぬうううう――――――！」

さつきの無敵発言撤回させて！

ザ「ビビりの騒ぎじやねえ！

何アレ、絶対章の終りとかに登場するラスボスだから…本気で死ぬから！

ちょっと…丸腰相手を殺るなんて、あんたのポリシーはそれで良いのか！？

ほんとに待つて！話せば分かるつて！一秒くらい待てよ…え、えつと…」うううう時は…。

あつ、そうだ…こういう時こそ、あの呪文だ！

ほら、鬼ごっこで使うアレだよ…十秒しか持たないあの呪文！腕をバツ印に構えて…。

「た、タンマツ…！」

あつ…、けど、タンマツじつて言われたら確実にゲームオーバーだな。

完全死亡フラグ。乙。

優真の瞳がキラリと光る。

すると女の足元に魔法陣が浮かび、瞬時に火柱が上がる。

「あ、あれは……あの魔法陣は『ビィーネの業炎』！」

妖魔ビィーネが、罪人を焼き払う時に使われた地獄の業火……

別の女が叫ぶ。

解説する暇あつたら、助けるよ。

もう一つツツ『ミ』いれるなら、初期装備がすでに最強じゃねえか。
『魔眼』でしょ、これ。

主人公とかがさ、二十から三十くらいのレベルで獲得するアレ。
最初、主人公『剣』しか使えないんだけど、『魔眼』によって相手の攻撃下げたり魔法使えたりする地味に便利なスキル。この場合は装備に分類される。

僕、説明読まない派だからさ。まさかこんなのが初期装備とは……。
今までの常識を覆したな。流石、最新作。

「つて……誰か、水持つてきて！燃えてるつて！火だるまになつてるつて！」

ゲームの世界だけリアルだな、おい！」

つまりこのゲームは、バーチャルリアルに分類するのか？

…………。

ぎやあああ————陽一郎さんに怒られる！

あれだけ、バーチャルリアルは止めろって言われたのに！

グッバイ、ゲーム機。中古屋に売られても達者でな…！

「大丈夫です、こいつは唯の幻影。元から命なんてない」
「え…、そうなんですか。ご親切に、どうも」

何か騎士っぽいのが来たな。というか、騎士だ。
鬱陶しくないのか？その長い髪。せめて結べよ。

なんか、流されてるけど…。

職務怠慢じやね？

ドヤ顔で来るなよ。お前の手柄じゃないし。
アレですか、所詮は他人事ですよみたいな。脇役には関係ないみたいな。

「ご無事ですか、勇者様！」

「職務怠慢だな。カイン次期騎士長候補？」

あつ、一人増えた。

こっちの方が真面目そうだな。しかし、戦地では目立つだろ、その
シンシン赤毛。

「…申し訳ありません。ゼリア参謀長」

「ふんっ。それでは、式典を再開しましょ」

「…いいえ、女神さま直々の命により、式はこれにて閉幕だそうです。勇者様には私から説明しておきます」

ゼリア参謀長、眉間にしわを寄せて舌打ち。

くるりと向きを変えたかと思つと、深い青みがかつた夜色の髪をなびかせて去つて行つた。

残されたカイン次期騎士長候補は深いため息をついて僕を見た。

「騎士隊長カイン・ベリアルと申します。よろしく」

「どうも。田中優真です」

カイン隊長は、うーんと唸つてからまじまじと僕を見た。

「馬鹿には見えないが…。歳はいくつだ?」

おっと、いきなり敬語外れましたね。隊長。

馬鹿に扱う敬意はないと言語で示しましたか。何この世界、馬鹿に對する嫌がらせ?

「永遠の十七歳。来年でやつと十八に。ちなみに今年で留年五年目」
「正真正銘の馬鹿か。まあ、良いか。説明始めるぞ」

「の前に、此処何処?なんて国なの」

「それを今から説明するんだろうが。此処は『ミケガサキ王国』。お前はこの国どころか、世界を滅ぼそうと目論む魔王を倒すべく召喚された勇者様なんだよ。馬鹿だけどな」

「りびーとあふたーみいー…じゃなくて、ああ、いいや。もう一度」「だ・か・ら、お前は魔王を倒すべく召喚された…」

「…の前。何処だつて?」

「『ミケガサキ王国』だが…?」

『ミケガサキ王国』。

漢字に直すと、三嘉ヶ崎だよね。

つまりは、此処はゲームの中じやない。

「パラレルワールドに、来たあ————!」

「せんと、鳴鹿だな。お前」

第一話 形見を買ひてgoing to the hell

どいつも、田中優真です。

現在、市場へ向かっています。

ミケガサキには海がある。いや、三嘉ヶ崎にもあるよ。パラレルワールドなんだから、地形は同じだ。

まあ、僕の家からは反対方向だから行ったこと無いけど。

毎週日曜は市場を開き、新鮮な魚とか果物とかその他色々売るらしい。

地域のお祭りしか行ったことのない僕にとっては新鮮な光景なんだろうな。

「カイン、私服他にないの?」

「何を言つている。いつ戦闘になつても良いように万全な装備でなくては危ないだろ?」

ガチャン、ガシャン…と金属の擦れる音が響く。

うん、騎士だからね。別に良いんだよ。それは。

ただ単に、ワイシャツに制服のズボンで歩く自分の姿が惨めだっただけさ。…ふつ。

何故市場に行くか?

それはもちろん『勇者の形見』を買うために。

ゲームーとしてはね、別にそれは良いんだ。

市場には興味あるし、勇者の遺物とか王の冠とか売つてもおかしくない。むしろ、嬉しい。だが、問題は此処からだ。

カインに聞いたけど、僕の前にも当然ながら漁者が召喚されていたらしい。

だが不慮の事故により命を落としたそうだ。

一日程前に。

売り払うの早くね？

普通なら大事に保管しておくと思つた。

「何、呪いでもかけられたの？」

「…いや、まあ、そんな感じた」

どんな感じだ？

「一日で売り払うへりい達の悪い形見を使えと？」

「ほり、着いたぞ。ミケガサキ王国第三十一区。巷では結構有名な
市場だ」

「おお…。」

風に乗つて運ばれてくる潮の匂い。何処からか聞こえてくる汽笛の音。

青い空に白い雲。風を斬るよつに羽ばたくカモメの鳴き声。
何処からか色とつどりの紙吹雪が舞い降りて市場を彩る。

白をモチーフとした建造物の数々に、その隙間から覗く広大な海。

所々に出店が並び、港町らしいマリン色のストライプ柄の屋根で統一されていた。

「もしかして、酒場とかもある？」

「そりや、港町だからな。当然ある。…だがお前、未成年だろ？酒は飲めないぞ」

「いっ…。流石パラレルワールド。その法律は健在か。

「いやいや、酒は飲めずとも写メは撮れる。一度でいいから拝みたい！」

「写メ？」

「いっ…。携帯無いの？ほら、これこれ。此処にカメラが付いてて、どうや？」

ピロコローンという音が鳴り、シャッターが切れた。それでさて、向こうでは何円で売れるか。

「ほれ

「ほおー…。映しの魔術か？凄いな…。機会に魔術が可能になるなんて。

何処に魔法陣を描いているんだ？」

カインが携帯の画面を覗きこみ、驚いた様に言つ。

「魔法陣？いやいや、あー…説明できない。魔法じゃなくて、文明の利器。科学の進歩ってこと。

こつちでは、そういうの無いの？」

「そうだなあ…。映しの魔術は無理だが。例えば…」

カインは少し考えた後、じつ…と腰に差してある自分の大剣を見つめた。そして、片手で持つ。

すると剣はたちまち紅蓮の炎に包まれた。

「この剣は『魔力魂』っていう結晶から作られた剣で、持ち主の意思でこういうことが可能になる。

ほら、あれ見てみろ」

「すげえ。女なのに怪力だな」

カインが指差す先には、木箱を積み木のように積み上げてそれを片

手で運ぶ女性が居た。

「あれは、手の甲に増倍の陣を描いているから成せることだ。人には誰にでも魔力がある。それを魔方陣で以つて具現する。そして、ああいう風に作用する。その魔力の塊が『魔力魂』ってわけだ。滅多に手に入らないから希少価値が高い。」

「こっちのミケガサキは魔法とか非現実的なのが発展してるんだね」「そっちの三嘉ヶ崎は科学が発展してるんだろう? こちらからしてみれば、そっちの方が非現実的だ。平行世界とお前は言つてているが、これが未来の姿かもしれないぞ」

燃料資源が全て枯渇し、ミケガサキ王国を含める国々がパニックに陥つた。

我先にと資源を強奪すべく争いが次々と起こり、新しい開発中の資源である『魔力魂』という結晶を用いて戦争は幕を下ろし、人類は新たに一歩を踏み出した。

「未来ね…。けど元から超能力や魔法使いはいたんでしょ? 今まで使つていた資源がなくなつて一時的なパニックを起こしたに過ぎないよ。人は皆闘争心があつて、そういうパニックとかが起こるとそれが剥き出しになる。だからこっちのミケガサキはさ、始めからそういう魔法が発展した世界としてあつたんじゃない?」

僕なりの解答を述べてみたのだが、何故かカインがすげえ驚いてるんだよね。

馬鹿だつて哲学的な事も考えたりするんですよ。

「実は馬鹿な振りしているだけだろ?」

「頭良かつたらとつぐに卒業してると」

「馬鹿はあそこまで考えつかん」

「カインさ、僕のこと物凄く軽んじてるよね。カウンセラーの先生がそう言つたんだよ」

ぱちくりとカインは瞬きを繰り返す。

「カウンセラーに掛かる程の事があつたのか？」

「唯單に、僕が馬鹿だつただけさ。『馬鹿は風邪ひかない』ってことわざがあるでしょ？あれはさ、風邪ひいたのに気付かないだけで、ひいてないわけじゃない。それと同じだよ。

：：：にしても何処に売つたのさ、その形見」

「あー…、闇市」

ぼそりと呟く様に言われた言葉に硬直する。

聞きましたか、奥様。闇市ですつて。連写の準備ですわ。

心靈写真はいくつ手に入るかしら？

「それは、つまりアレですか。そんな危険な代物を僕に持たせようとしてるわけですか？」

「仕方がないだろ？ 勇者の形見じゃないと魔王は倒せない」

その発言は僕に死ねと言つているようなものだぞ。

「もしも死んだら元の世界に帰れたりするの？」

「いや、そのまま臨終だ」

捨て駒じゃね？

勇者の扱い軽くないか、こっちの世界。

「魔王倒した後のメリットは？」

「元の世界に帰れる」

うん、確信した。

勇者＝捨て駒。

いらなくなつたらポイッ。

「ほり、これ被れ。あと、絶対逸れるな。…そして、魔眼は使つな
よ。絶対に」

カインから渡されたのはボロ布のマント。

着心地は「ごわ」わ。例えるなら、紙やすりだな。肌が切れるが、こ
の「ごわごわ感」。

まあ、闇市だからね。奴隸商とかうつよといふもんね。

闇市の入口は果てしない闇に覆われていた。

隙間から通り抜ける風が不気味な唸り声をあげる。

「闇市は地獄と思え。生きて帰つてこれる運があるといいな」

「ぐぐつと唾を飲み込み、汗ばんだ手の平でマントを掴む。
そして一步踏み出した。

第三話 魔王召喚しちゃいました

ファアアアアー——ン——ン——

何処からか響くラッパなのかシンバルなのか分からぬ楽器の音が『闘犬場』に響いた。

音が止むと同時に始まる歓声と言ひ名のデスコール。僕の前に立ちはだかるのは、茶色のロングコートに身を包んだ顔にタトゥー入った筋肉ムキムキハゲ。

正直に言おう。

「勝てる要素無くね？」

何故僕がこんな所にいるかと訊つと、時は一時間ほど前に遡る。

「カイン、何処に卖ったのや？」
「卖ったのは俺じゃない。だが、噂によると、どいつも『闘犬場』の優勝賞品にされたらしい。
だが、困つたことに『勇者の形見』は勇者であるお前じゃないと触れるのは無理だ」

いやいや、その設定は初めて聞いたぞ。
こじ付けだろ、そつだろ。

何だかんだで出たくないんだろ、お前。

「僕に出ると?」コントローラーしか握った事の無いこの僕に
「自分の非力を自慢するな。ということで……、召喚の方法を教えま
ーす」

超棒読み。

カインは道端に落ちていた木の枝を握ると円を描き、その中に五芒星を描いた。

「そして自分の血を流し、『召喚』と言えば自身の魔力に相当するだけの何かが出てくるだろ。」

ちなみにお前、勇者ってことでいきなり決勝戦だから

そこまでやれるなら、賞品盗めよ。

「で、僕が死んだらどうなる?」

「その点なら心配するな。次の勇者を召喚するまでだ。潔く逝つていい」

勇者の扱い酷いだろ。滅ぼすぞ、この世界。

で、今に至る訳。

「始めて!」

「ああ、始まっちゃった!」

「死ねえ!」

「だが、断る!」

円を描いて…、あつ、ブレた。まあ、良いか。

五芒星…描いたことないな。唯の星で良いか。ああ、星でもないな、これ。

最後にカインから貰つた小刀で腕をえいつと…。

あわわわ…、思つた以上の出血だ。この量ヤバくね？大量出血の部類じゃね？

だって、五芒星が見えなくなつてゐるもの…円一杯に並々と満たされてるもの…！

「おーっとー何と言つことだー勇者の魔法陣が血塗れだあー！一体何を召喚する氣だー？」

僕が聞きたいくらいだよ。

といつうか、何か召喚する前に僕が昇天する。

「とりあえず、何か『召喚』」

はははっ！来れるものなら来てみろよ。…色々な意味で。

目の前まで来ていたハゲの姿が暗闇に飲まれる。

といつうか、『闘犬場^{コロセウム}』全体が真っ暗だ。

ま、まさか…。照明落しただけ？

まあ、僕に魔力なんてものは存在しないからね。多分。

照明消せただけでも良しとしよう。

「大丈夫ですか、勇者様」

鈴の様な声。

頭を上げると、黒髪の美女が立つて僕に微笑みかけていた。

「はあ…、大丈夫、だと思います」

「まあ…。お顔が真っ白よ。けど、そこまでして下さつたからこそ、私を呼びだせたのね。」

私は『死の夜』^{ノワール}。魔王の娘。勇者様に呼ばれるなんて驚いたわ

透き通るような白い肌。紫色の瞳。上品な漆黒のドレス…『ゴスロリ

だけ?

微笑みかける姿は乙女の様に可憐で麗しい。…って、乙女だから当然か。

にしても、最後。

聞きづてならないことを聞いたぞ。

魔王の…娘?

「僕、ピーンチ!」

「あら、大丈夫よ。父さんじゃないから、殺したりしないわ。だって私、彼方のこと好きになってしまったんですもの!」

わお、いきなりの告白。

生涯初の告白が魔王の娘からとは…。やるな、僕。

「問題はここからよ。彼方は、父さんも呼びだしてしまったの。でも、私が何としても彼方を守つてみせるわ!」

何と勇ましい…。

けど、こういうタイプ割と好みです。はい。

「『死の夜』^{ノワール}…。何処だ?」

「…」

「…」

暗闇から『魔王』が姿を現す。

髑髏の首飾りにノワールと同じ漆黒の髪を後ろで一つ結びにしている。

威厳を表した鷹の様な鋭い金色の目。

「間違いない…吉田さん…」

「…誰だ？」

訝しげに眉をひそめる吉田さん…じゃなくて、魔王。

そつかあ…、いつの世界の吉田さんは『魔王』かあ。天職だね、僕個人の意見だけど。

母辺りを期待してたんだけど、これはこれで良い。

吉田さん、近所のおばさん達には評判いいからね。

吉田さんは僕の家のお隣さんで、陽一郎さんの酒飲み仲間。三十一歳のおじちゃん…え、お兄さん。

職業は元配屋で煙草愛好家。

仕事中はにこにこしてて怖さの欠片もないけど、一端オフモードになると超怖い。

「吉田さん…え、魔王様。写メ撮つても良いですか?ほら、ノワールも隣に並んで」

「写メ?…勇者にそんなことをお願いされたのは初めてだ」

困惑を隠しきれずにそっと娘を傍に寄せる魔王さん。あつ、間違えた。魔王様。

うんうん、吉田さんに後でメールで送つてやる。喜ぶ…か?いや、しかし…念願の再会といつか娘の成長が見れたわけだし。

「あつがとうござまーす」

「あつがとうござまーす」

保存してから、メール画面へ。本文書いて、ほい、送信。
「電波届いてんのか、じつち世界。

「用は済んだか？」

「あつ、大丈夫です。お忙しい所あります」といいます

「ふう……、じの勢いでお戻りください。吉田せ……いえ、魔王様。

「いいえ、お父様！まだ、済んでおりませんわつ！」

そつと僕に駆け寄るノワール。

そしてぎゅううーと抱きついてきた。

僅かに魔王様の眉間に皺が寄るのを僕は見逃さなかった。
やめて、やめて。空気呼んで！あれば吉田さんが少しイラついてい
る時にする表情だからー。

「私達、結婚しますつー。」

待て！それは僕が言つべきセリフではー？

いや、そりぢやなくて、とにかくそりぢやないだろー
何とか弁解するんだ、僕ーお前はやれば出来る子だー

「必ず幸せにしてみせますー！」

だからそりぢやないー！いや、そりぢやないだけど。セリフを間違えて

る！

何を口走っているんだ、僕！

「その死にかけの人間勇者がか？笑わせる

にやりとノワールが笑う。

うわっ、素敵過ぎる。鼻血出るかも。

ノワールの顔が直ぐ側まで近付き、唇が重なった。

あれ、僕。今、キスしてる？

あれ、僕。今、キスしてる?

口の中、鉄の味する。

そーいや、僕の友達。初キスはトンカツの味がしたらしげ……どうでも良いけどね。

唾なのか血なのか分からぬ液体をそのまま飲み込む。一気に血圧が上がった気がした。

「はあ……娘に手を出すとは、余程死にたいようだな

いやいや……見てたでしょ、吉田……いえ、魔王様。あー、もう面倒いから吉田魔王様でいいや。

手を出したの、彼方の娘ですよー。

とこづか、意外に親馬鹿なんだな、吉田魔王様。

「さあ、優真。剣を……」

「…………。」

そしてモヒーつ。

うーん、さつきからノワールの姿がやけにあやふやなんだよね。

はつ……、実は蜃氣楼?

全部夢オチ?

いやいや、これだけ死にかけて夢オチはない。

なんだか、このもやつと感。

「どうしたの？今、見ている姿が優真の望む姿なのよ？」

いや、そつなかもしれないけど。

今、僕の目に映っているのは真っ黒な人型の影。

僕ってこれを望んでいたのかな…。何か悲しいね。
いや、元から地味だけど、影になりたいなんてことは断じてない。
空気にはなったけどね。

「『死の夜』、どうやら勇者は氣付いた様だぞ。その魔眼もお飾り
では無い様だな」

マジで！？

何で分かるんだ、吉田魔王様！

うわー、恥ずい…。こんな姿が僕の願望なんて…。

他言無用でお願いしますよー。

…といつか、『魔眼』がお飾りなんて、すげーファッションセンス
だな。

こっちでは普通なのか？

それとも魔王クオリティーの高さから来るものか…。
うん、絶対そうだな。

「あり…残念ね。せつかぐ駄走が頂けると思つたのに…。見た目
より馬鹿じゃないみたいね」

いえいえ、馬鹿ですよ。喰つても美味しい。きっと、カビの味
がする。

まだ人面パンを食べたほうが良いと思つ。あのヒーローは自ら進んで喰われに行くぞ。

見た目よつて、そんな一目で分かるほど鷹鹿オーラ丸出しですか、僕。

「勇者に一目会えただけでも良しとするか。帰るぞ、『死の夜』^{ノワール}」

会えただけでも…つて、僕が召喚したんだけど…。偶然だけど、故意ですよー。

そんなことはお構いなしに魔王達は黒い霧と共に去つて行つた。

さて、ハゲ筋肉君とその他諸々は無事かな。

無事じやなかつたら色々と困る。

ハゲに至つては無事だつたら、僕が困る。

照明が会場を照らす。

あー、久しぶりの光だ。何か安心。

「うーん、これは皆さん無事なのか?やけにべつたりしてるが。ハゲは泡吹いてるし。

蟹なのかお前。水が無いと生きられないのにわざわざこじんまとこに腕試しに…。

何だかんだ言つても吉田魔王様、ちゃんと助けてくれるから偉いよな

うんうんと一人納得していると、カインが入り口から猛スピードで向かってくる。

「これつて勝つことになる?」

「『』の馬鹿が！何処の世界に魔王を召喚する勇者がいる！…とつとと剣頂いて帰るぞ！」

此処に居るじやないか。魔王を召喚した馬鹿な勇者が。まあ、この人達が記憶喪失になることを切に願うよ。…無理だけど。いや、だけどマジで。

チカツ…。

瞳が光る。観客達の足元に魔法陣が浮かんだ。
あー…、やつちました。

発動しちゃつたよ、『魔眼』。

「まあ、今日は大目に見てやるつ。さつさと帰るぞ」

「あー…、何か凄く疲れた…。吉田魔王様とその娘召喚しちゃうし…。けど写真撮れて良かつた」

「吉田魔王様？その娘つて『死の夜』か？」

驚いた様にカインが僕を見てきた。

「そうそう。ノワールって言つてた。キスされちやつた。五分で別れただけど」

「お前、よく死ななかつたな。あれ、死喰い人だから相手の望む人を見せて惑わせ、魂を吸うんだ。

本来の姿は人形の影と言つてたが見たことないから何とも言えないな」

わーお。

凄いな、僕。

にしても、昔から人じゃないものに好かれるよな、僕つて。

「相手の望む姿か…。道理で似てるわけだ。僕の記憶があやふや

だつたから完全にその姿じやなかつただけで…

「おつ、何だ。彼女でも見たか？」

「うーん、彼女つていうか。初恋の人つていうか…。今はさ、行方不明なんだけどね。僕が中学の頃、だつたかな、突然居なくなつた。吉田雪つて言つて、吉田さんとは全然似てない」

その名前が告げられた途端、カインが固まつた。

「吉田、雪…。知り合ひだつたのか、お前」

「うん。お隣さん。カイン、知つてるの？もしかして、こいつの世界に来てたりする？」

「お前が来る前の『勇者』だ」

つまりは、この一田田に売却された剣の前の持ち主。一日前に死んだ勇者。それは、雪ちゃんだつたんだ…。

* * * *

「おいおい、お前が弱つてちぢや話にならないだろ」

カンツと缶ビールが机に乱暴に置かれる。

三嘉ヶ崎、吉田モ。

「誰も見てないつて言つし、先生たちも補習から帰つたのが最後だつで…。

けど、少し安心したのあ…優真君、ソファーアーと居ないんだねー」

「大丈夫か、よーちゃん。あー、大分酔つてんな…。ほれ、これ優真から届いたメール。

一応は無事みたいだぞ」

本文

今、パラレルワールドに来てます。
ほり、証拠写真！結構似てるよね。

「あー…、ロスプレーしてた畠田なんだー。この隣の子、確かに、雪ちゃんに似てますねーー」

「うー」と笑しながら写真を見る陽一郎。

「雪ちゃんもそこには居るんでしょうかね…？」

「此処、唯でさえ行方不明者多いからな…。優真の馬鹿が乗り移つたわけじゃないが…、本当に此処では無い世界に呑まれちまつたんじやないかって思う時がある…。早く帰つて来るといいな…」

「優真君も雪ちゃんも、しっかりしますから、大丈夫ですよ…。私達は、頑張つて待ちましょう。歯がゆいですが…それしか出来ませんから」

第四話 吉田雪（後書き）

ちゅうじつとシリアスにしてみました。
次回は多分、ボケる。

第五話 優真武勇伝

「剣も手に入つたことだし、訓練でもするか」

まあ、いつか言われると思つたさ。

何とか優遇してもらつた僕の家。住み心地抜群です。
ゲーム機あればもつと良いんだけど…そこは仕方がない。

何か、初めてこの世界において勇者の優遇が起こつた氣がする。
といつもの何の偶然か、この世界において我が家に住んでいた住民
が一日程前に他界したらしい。

うん、雪ちゃん。君、此処に住んでたね？君のお家は隣だよ。

ゲーム機の置いていない我が家は実に殺風景だ。
取りあえず僕の指定地に、僕に巻き込まれて召喚されたソフナーを
置いてみる。

台所とか風呂とかは元からあるので一安心だ。

「別にそれは良いよ。だけど、どうしても解せない

「何が？」

カインが不思議そうに僕を見る。

僕は溜息を吐いて、カインを二階の部屋に連れて行つた。
奥の部屋の前に立ち、無言でドアを開ける。

「三嘉ヶ崎では、此処が僕の部屋なんだけど…」

「おかしな所なんて何もないぞ。ちと、殺風景だが……。普通の部屋だ」

「うん、普通の部屋。本来ならこの本棚にはゲームのカセットが並んでるのだけれど、集めようが無かつたんだね……。ベッドの位置からカーテンの柄、本棚の角度まで見事に再現されてる。

雪ちゃんが家に遊びに来ることはたまにあつたけど、僕の部屋に入つたことないのに何で知ってるんだろうね……」

「……それは、恐いな……」

雪ちゃん、恐ろしい子つ……！

まあ、そんなよつな会話をしながら傭兵所へと続く坂道を下る最中です。

此処ミケガサキは、唯一魔王の支配から逃れた国らしく、世界各国から我が物にしようと企む輩に狙われるらしい。

と言つても、ミケガサキの戦力は支配下にされて逃げてきた丸腰の兵たちが敵う程弱くは無い。

よつて、市場がある場所とか、皆が住む住宅街とかを狙つらしい。それらの小分けされた土地は『領土』と呼ばれ、場所により人気が異なり、警備の数が増減する。

今回向かうのはランクBの成り立ての兵士達の訓練場という訳だ。ちなみにランクはD～S。

城とか王宮とかはもちろんランク。兵士の数は万越えとか……。おかしいな、そんなにミケガサキの人口つて多かつたつけ？
まあ、それくらい多いってことだよね。

「傭兵場か……。ゲームでは見れない場所を拝めるなんて、夢みたいだ……！」

「撮影は禁止だぞ。日に焼き付けておけ。あそここの教官は怖いから大人しくしとけよ」

「了解……」

ゲームによつては、鍛え方とか性格次第でステータスが異なるつていつシステムがあるじゃない？

そのシステムが生でしかも本物の鎧とか剣とかまで見られるんだよ？

な、何ですばらしいことなんだ。

こっちのミケガサキはゲームの聖地だ！

「そりいや、ゲーム好きなんだろ？…どういづジャンルが好みなんだ？」

「アクション一筋だよ。ストーリー要素とかのやつはそ、皆、キャラ担当とかストーリーを重視するでしょ？僕はそつじゃなくて、装備とかさ、どれだけダメージを与えられるかとか…何て言うんだろ、どれだけ設定が充実しているか、かな…。とにかくそういうやりがいのあるのが好き。

バーチャルリアル何て結構面白いんだけど、陽一郎さんああいうの嫌いみたいで…。禁止になつた

ちょっとしょんぼりしながら言つと、カインは苦笑する。

「お前、戦闘とか向いてそうだな。狂人者とか言われそう」

「うん。陽一郎さんもそう言つてた。田がマジだつて。だから駄目だつて…」

「…にしても、よく約束守つてるな。それだけ熱意があるのなら買

い戻しそうだが」

「そうしようと思つたけど…陽一郎さんの方が一枚上手だつたよ。

ゲーム機を含めて全部売った

「…本気を出したな」

「僕もそう思う」

あー、早く着かないかな。

傭兵所つてどんな場所か見てみたい。

やっぱり抜け出せない様にそれなりの警備がしてあって、柵とかに障ると電撃走つたり…。

「ほり、着いたぞ」

「…、此処はっ…………！」

もう、オチが分かつて来たよ。

久しぶりだね、我が母校。

まあ、確かにさ…校門とかの柵を跨いで入ると警報は鳴るし、火事とか起きたらスプリンクラーが稼働するよ? そういう壊れるような建物じゃないし、非常食だつてある。

「やけにテンションが低いな?」

「…何となく、坂道下る辺りから予想してたからね…」

カインが門の前に立つていた兵士に何か話し、兵士は敬礼すると快く門を開けてくれた。

これで兵士たちが制服とか着てたらどうしよう…。
シユ・ル過ぎて泣く。

「さて、俺は教官に話していくから、お前はここにでも案内してもらえ」

カインはぽんつとすぐ横に居る兵士の頭に手を置く。

「案内頼んだぞ」

「は、はいっ！」

またもや敬礼してカインを送り出す兵士達。
人気あるんだな、カインって。そういうや、次期騎士隊長候補つて言つてたな。

「えつと、よん……あああああああああつ……！」

「ど、どどどどうしましたつ！？」

「右から順に、山田、佐藤、鈴木、伊東、安田あーーー！」

「大変だつ！勇者様がご乱心ですつ！ー！」

懐かしい顔ぶれだな。

夏休みだから全然会つてないけど、この人達皆、僕のクラスメイトだよ。三年前のね。

五年留年してるけど、僕、身長小さいから全然問題ないんだ。ほんの少し童顔だし。

春になると必ずと言つていいほど、新入生が僕に会いに来る。

何でも、実在する学校の怪談の栄えある（？）一人なのだとか…。

一人も何も、僕しか居ねーよ。

しかも都市伝説じゃなくて怪談なんだよ。別に悲しくないもんね、ぐすつ。

怪談どころか、留年しても退学しない子が増えたんだよー？僕の存在つて偉くない！？

ついには先生たちも語り継べよになつてさ…。この前話声が聞こえたんで、空き教室覗いた時…。

『残念ですが、この成績じゃ留年です…。来年は頑張るんだぞ?』
「りゅ、留年つ…? 先生、俺、退学しようと思つんです…。親とも
そういう約束だから』

「はい…。残念ですが、家業を継がせようと困つんだです』

おお、三者面談か。あれは数学教師の山先生。若くてカッコいいか
ら女子生徒に人気なんだよね。

気弱そいで、たまに胃痛で休む。

あー退学かあ…。そうだよね、氣不味いもんね…。
まあ、僕はそんな視線に五年も耐えてるけど…!
…自業自得だけどさ。

『継ぐも何も、後一歩なんですよ…? 来年、しつかり勉強すれば進
級できます。

お母様も知つての通り、田中優真といつ五年間卒業できずここにいる子
だっているんです!

…希望を持つて下下さい』

何處に希望を持つてる要素があるんですか、先生。

と云うか、生徒のプライバシー駄々漏れじゃないですか。

「そうですね、優真君が居ましたね…』

『そうです、お母様。彼のおかげで留年生に対して差別する生徒な
んていません!

むしろ、留年生を応援する生徒しかいないと言つていいでしょ。
安心して下さい』

「分かりました…。そういうことなら、もう一年だけ…』

ぐつ…。

先生、静かにガツツポーズ。

色々と失礼だな、先生。

馬鹿は傷付かないと思つてんのか、思つてるだろ。

三嘉ヶ崎は広い様で狭いんだぞ！

またお礼の品が贈呈されるじゃないか！

ある年を境に、僕の自宅のポストや机に丁寧に包まれたお菓子とか、お菓子とか、お菓子とか…。

達の悪いのとしては、丁寧に包装されたプリントの束とか問題集とか。

中にはお礼の手紙だつたり、提出期限だつたり…。

つーか、先生方。悪乗りするなよ。ときめかないよ、こんなのが貰つたつて。

「それは色々な意味で凄いですねえ…。尊敬します」

そんな様な事を話すといつか愚痴りながら、傭兵所とこつちの学校を案内してもらつっていたのだつた。

第六話 英雄と脣

「一階はランクC～C。私達、見習い兵の部屋となっています。といつても、ベッドしかスペース無いんですけど…」

本来なら机が並ぶ教室は、三段ベッドがずらつと並んでいた。物凄い違和感である。

「一階がランクB～Aを任される修練を積んだ兵の部屋で、今の私達の目標なんです」

「一階の人達はどれくらい居るの？」

「二十人くらいでしようか…。此処の訓練所は予備部隊で、とても小規模なんです。

だから他の訓練所の兵には使い捨ての脣兵の「ごみ箱」とか噂されるんですけど…。

此処の教官、とっても厳しい人で、容赦ないんです。だから僕達、結構腕には自信あるんですけど…

「へー。そういうや、カインもそんなこと言つてたな。

どんな人だろ…？」

「噂と言えば、じつちの学…いや、訓練場に怪談話とかあつたりする…」

「ありますよ！此処、二つ水練用のプールがあるんですけど…」

「いや、知つてるよ。

僕の学校でもあるからね。水練はしないけど。

安田、やつぱりお前怪談話になるとテンション上がるな。いつかの安田も性質は同じみたいだね。

「その内の一つが満月の晩、真っ黒くなつて、そして、月明かりが
プールに差し込むと、ぼんやりとですが中が見えるんだそうです」

「…………。でも、どうせなら……」

「中を覗(の)う」とすると、真っ黒い手が水面から伸びて来てあの世に

結構信憑性ある話で、何人か行方不明になつてゐるんですよ

何か何処にでもありそうな怪談話だな。

「怪談話つて、ほら、自殺した生徒の亡靈とか、プールで足つっておぼれ死んだ子の呪いとかがよく言われるでしょ？この傭兵所には、そういう人とか居たの？」

「いえ…、分かりません」

「ふうん……」
しゃ
「いかでその怪談あるの?」
かく語り継かれて
「来たとか?」

「それが…、そうだったような気もするし、ついじやなかつたような気もするんですね…。

いきなり流行つたというか、根源が誰なのか知りませんけど……」

珍しい。

安田が怪談話の根源が曖昧だというなんて。

安田は怪談話に異常な執着というか、そういう話を知り尽くした人だからな。

突然広まつた可能性が高いかも。魔術アリな世界だし、記憶の操作とか簡単だろうな。

「何か、勇者様って探偵みたいですね！」

「その思い悩む姿がもう、勉強できる人って感じです！」

鈴木と伊東が女子の様なテンションで騒ぐ。

「いやいや……僕、馬鹿だよ？ 留年五年目」

「……先輩って、きっと本当に頭良いんでしょ？ わざと馴鹿な振りしてるだけで」

佐藤がじっと僕を見た。

君達、何か誤解してるよ。

何か、カインにもそんなこと言われたな……。

「頭良かったらとっくに卒業してるよ……。その噂ってさあ……、もしかして一日前に広まつてない？」

「……一日前……？」

おっ、反応アリ。

鳩が豆鉄砲食らった顔つてまさにこのことなんだろうな。

あー、本物が見てみたい。いや、駄目だけ。愛鳥保護団体に訴えられるけど。

この言葉を考えた人はさ、それを見たってことだよね。で、ウケる～って思つて言葉にした訳で……。見たってことだよね？

僕もね、超見てみたい。

ああ、話逸れた。

「あはははは……、一日前に広まつたなんてそんなわけ無いじゃない

ですか～！」

「やつぱり、馬鹿か…」

イラツ…。

鈴木、お前の反応はとても癒される。
佐藤、お前の言葉はとてもイラつぐ。

仮にも先輩だぞ？ 年上だぞ？

まあ、馬鹿なのは認めるけど…

「けど、曖昧なんでしょう。魔術で記憶操作とか出来るだろ？」

「出来ますけど、私達兵士は元々魔術がうまく使えない出来損ないで、国に貢献できません」

だから国の命令で魔術の使えない国民は兵になるんです。先輩たちも同じで、此処に居る兵達はそういう集まりなんです。他は違いますけど。階級なんて私達の比じゃありません。英雄扱いです」

ふーん…。

だから、使い捨ての屑兵のごみ箱か。

ああ、そういうこと。

少なくとも、こっちのミケガサキでは魔術が一般的に使えるのが当たり前で、必ずいると言つていいくほどのエリート組は『英雄』扱いで、僕ら出来損ないは『屑』扱いですか。

今度から由香子政権と呼んでやる。

ちなみに、由香子とは蒸発した母。
春一番の暑さに耐えきれず、兄と金一緒に夜逃げしましたよ。
陽一郎さん、果然。蛻の殻になった我が家と僕を交互に見てたね。

鳩の比じやない表情してましたよ。

まあ、全財産持つてかれれば絶望もするよなーって呑気に思つてた。実際彼、エリートだから。あれでも次期社長だつたんだよ。あの事件で絶縁されたけど。

これでも忠告はしてたんだよ。今回が初じやないからね。これで五人目。

「置いて行かれちゃつたね」

苦笑しながらそつと言つたあの言葉は陽一郎さんに向けたのやら自分に向けたのやら。

うーん、何柄にもないことを思い出してるんだ。僕。

「魔術が使えるとなると、教官くらいか…。怪しいな、黒幕か？」
「ほう…。誰が黒幕だつて？」

さらりと流れる長い金髪。片目は眼帯だけど、それがまたこの人の美しさを強調してるんだよね。

緑の瞳が僕を見ていた…なんて可愛いもんじやない。睨んでもますよ。思いつきり。

前世は鷹ですね？分かります。

ちなみに僕はミジンコと言われたよ。

最早人外生物。動物ですら無い。単細胞生物…馬鹿だけにね。

いつのミジンコだらう？無性に気になる。
いや、気にするとこそここじゃないのは分かつてるよ。これでも。

「凄いな、アンナに喧嘩売つた勇者はお前が初めてだ」

「ああ、カイン。話は済んだ？」

「もちろん。教官直々に相手になるそつだ。良かつたな。彼女はランクAを任されるエリート中のエリートだ。そして、次期騎士長候補の一人でもある。手強いぞ」

「今度こそ教官とカイン騎士隊長の戦いが見れると思つたんですけど、これはこれで見ごたえありそうですね！皆に知らせてきます！」

「おう、行つてきな」

ヤバい。ヤバいぞ。

最初に言つておこつ。つい訓練場が見れるつてことで興奮しすぎて、剣…置いて来ちゃつたんだよね。どうなるんだろうね？僕。

第七話 勇者VS教官

「剣はどうした？ 勇者殿」

女とは思えないハスキーボイスがまた強そうなこと。へつ、どうせ声変わりしても低くないですよーだ！

「剣無しじゃ駄目ですか？ ぶ…」

「ほう…。私相手に剣無しか…。余程腕に自信があるようだな。…潰す」

待つて、というか聞いて。僕の話を聞いて下さーい。

確かに腕…というか、指には自信あるよ？一秒で五十回ボタン連打が出来る様になつたくらいにね。此処じや役に立たないけどっ！

「いけー！ 教官、勇者を潰せー！」

教官しかお前ら応援してないのは何故？
実は君ら、魔王の手先なのか？

此処の住民達は何故か勇者を田の敵にしたがるな。
そういう風になつてゐるのか？ そういう世界なのかい、此処は！？

「仕方がない。唯一覚えている『召喚』で…」
「絶対、『召喚』でアレだけは出すなよ！」

ちゃんとした使い方教えてから物を言つて下さい。

無理です、絶対無理。

「どうりや、秘策があるみたいだが…私の前で『召喚』を使う間な
ど『アヘン』…
ござ、参る…」

いやいや、上っ気が参ります。止めて下さい。

「つて、早一人とは思えない早さじゃないか…反則だ！法定速度
を守れ…それでも教官か…？」

暴走族も真っ青な早さ。

あっちの三嘉ヶ崎ではとん重宝される」ことだろ？

「何を訳の分からぬこと」と言つてゐる？隙だらけだぞ…」

「ちなみに、教官は速度強化の魔法陣を足に刻み込んでるから時間
稼ぎしても無駄だぞ」

いや、知らないよつ…魔方陣つて消えるものだつたの？時間で？

「じゃ、召喚つて、僕が帰れつて命令したら、いなくなるつ…？」

これでも必死に避けています。

今更だけど、あれ、本物だからね。切れ味よそうだから。絶対切
れるから。

「もちろん。召喚主の命令は絶対だ」

「あー！でも、吉田様、帰らな、そりだな！止めとく…」

「「「吉田様？」」」

そこにいた兵たち全員が首を傾げた。

「ちよこかちよこまかと彫陶しい！」

足元に魔法陣が浮かび上がる。

そこからシタが生えてきた。

鳩尾目掛けた僕の拳はあつさりと分厚い剣でガードされる。ガキンッ…という鈍い音が響き、教官が五十メートル程を一步で退いた。

「… 良い拳だな。しかし、この大剣クレイモアには通じん！」

ツタが絡み付いて身動きがとれない。
うーん、仕方がない！奴を召喚する！

「田安、安田の——！」

一僕二！？」

いやいや、テキトーに書つただけだから。責めめないでー。

テキトーに円らしきものを描き、これまたテキトーに何かを描く。
うわっ、幼稚園生の方が上手いな、こりや。んでもって、血をえい
つと…。

さてさて何が出るかな?

流石に魔王召喚したら本気で僕の命無くなりそんなんで、別のを描

いてみた。

これなら一安心だろ？まあ、吉田様召喚してみるのも一興だけど。

魔法陣が白く光り出す。

おっ、何か良い感じだな。

今回は大丈夫っぽ……。

「む……またお前……」

「退場ッ……！」

つーか、お前かーいつ！

見て無い見て無い……。僕は何も見ていない。

僕は何も『召喚』してない。

魔王なんて居なかつた。僕は何も見なかつた……！

「勇者様、今、何を召喚したんだ？」

「いや、何も見えなかつた……。もしかしたら田畠しだつたのかも……」

「なるほど……」

よーし、誰も見ていない。

カインが顔面押さえてるけど、気にしないっ！

教官が固まってるのも……気にします。

見えた？きやつ、恥ずかしい！

何てボケてる暇は無い。

「ええいっ、こつなりや自棄だー出て来れるもんなら出て来い！」

だつて、直ぐそこまで教官來てるんですもの。

何か凄く怖いんですけど。

足を懸命に動かし、唯の五芒星を描き、血を垂らす。

円? そんなもの時間が無い!

五芒星に血が垂れる。

赤いはずの僕の血は、何故か真っ黒だった。
それともそうだったのかな? 覚えてないけど。
さつきのものもそうだったのかな? 覚えてないけど。

血は何故か溢れ出でくる。

そして五芒星を染め上げた。

それは生き物の様に一步も五芒星の外へと漏れていかない。

ぞくりを背筋が凍る。

冷や汗が流れた。

何か、生理的に無理。

えつ、僕の血って黒かつたつけ?
あれかな、水分不足による…。

あー、何『召喚』する気なんだ? 僕。

足元で、ぼうつ…と陣が黒く輝く。

あつ、ヤバい感じだな。

うん、決めた。ここは潔く。

「降参しまーす」

僕がそう言つたのと、教官が掴みかかって来るのはどちらが早かったか。

正確に言えば、僕がそう言つて、魔法陣が消滅すると、彼女が足で魔方陣をもみ消すの…だらう。
同時だつたかもしれない。

辺りの兵達の歓声が聞こえてくる。

横田で見ると、カインが静かに剣から手を離しているところだった。

「どうやら、僕が思うよりとてつもないものだったらしい。
いやー、危ない危ない。巻き込むところだった。

きつと、血が黒かったのは氣のせいだ。
教官が泣きそうなのも、きっと氣のせい。
意識が薄れていくのも、きっと氣のせい。
全部、氣のせいだったんだ。

「いいなー。父様、また召喚されたんだ?」

「一瞬で還されたが…。にしても、お前の血を飲んで生還した勇者はアレが初じゃないか?」

前の勇者でさえ、アレで死んだといつに…」

くすりと『死の夜』^{ノワール}は微笑む。

そして魔王の傍へ行き、子供の様に抱きついた。

「今回の勇者は案外『適性』があつたのかも…。

それには、前の勇者は死んだわけじゃないのよ? 私、気に入っちゃつたから。

彼女はね、深い眠りについたの。王子様のキスでも起きないくらいの、深い深渊へと誘われて…。もし田を覚ますとしたら、精神なんて壊れちゃってるよ。

眠り姫の見る夢は、昔から悪夢と決まってるんだから…」

「ならば、田覚めたら迎えを寄越さないとな。確か、新しい器が欲

しかつたのだるつ?」

不敵に笑う魔王とは異なり、『死の夜』は幼子の様な無垢な笑みを浮かべた。

「まあ、素敵!早速、新しいドレスを繕つわ!
… そうね、次は深淵の様に黒く、血の似合う服が良いわね。
この服は可愛いけど、上品ではないもの。この器もそろそろ飽きた
わ。勇者様の好みは何かしらね?」

第八話 旧校舎の眠り姫

星屑が降り注ぐ。

どんどん流れ、何処かへ消えて。

此処は何処だつけ？

：ああ、そうだ。夏休みだから昔に建てられたと噂の裏山の廃校に肝試しに出かけたんだ。

大人には内緒で、皆で集まつて。

友達が連れてきた子とか、転校生を誘つて行つた。無口な子だったけど、参加してくれた。

廃校に着いたら、皆その不気味さにきやーきやー騒ぐ。

いつのまにか皆、思い思いの好きな人とくつついて一人一組で行動してた。

誰かが宝探ししようとかで、何故か肝試しではなくなつていた。

何でも、先に下見で忍びこんだ子が財布を落したとか。楽しかつたら別に良いのだけど。

廃校は古くて、至る所がギシギシと軋みんでいた。

その音が鳴るたび、誰かが悲鳴を上げてる。

横目で転校生を見てみれば、氣味悪そうな目で悲鳴を上げながらも楽しんでいるペアを見ている。

顔が真っ青だ。良く見れば手が震えている。情けないな。…けど、可愛いかも。

そう思つていた時、誰かが地下へ続く階段を見つけた。
学校によつては地下もある。珍しい事じやない。

けど、転校生の反応は違つた。

一步退く。顔は最早血の氣がない。幽靈顔負けの蒼白さだった。
静かに外で待つてると告げると、すたすたと入口に向かつて歩いて
行く。

誰かが弱虫だとはやし立てる。

急いで転校生を引きとめた。

強引ではあつたが、何とか出て行くのを止めさせた。

弱虫とはやし立てた子が、お前が行けと転校生の背中を押す。

転校生はその手を叩くと、すかすかと先へ進んでいった。

その後を追つ。元はと言へば誘つたのはいつちだ。

地下は大広間になつていた。

何か意外。普通は教室とかがあるのだけれど。

転校生は隅にいて、手に財布を握つていた。
駆け寄つとした時、景色がぐりやりと歪んだ。

「ひむむむ……。じゅげむつー」

我ながら変な覚め方をしたものだ。
いやー良く寝たよ。今、何時?

「んのつ、馬鹿ものがあー驚かすなあつー！」

ガンツと頭突きを受け、枕に突つ伏する。
お願い、夢なら覚めてー。

「アンナ曰く、まだ寝とけだとよ」

「カインつー余計な事を言つくなつー！」

仲良いねー。

付き合つてゐる？爆発すれば良いと思つよ。

「だから、説明しろと言つてはいる！」

「じゅげむじゅげむゴボウの擦り切れ食つといひは台所以下省略して上級困難の寝ぼ助つていう名前の人人がいるんです」

「いや、何かというか全然違うだろ。それ」

「そんなことはどうでも良いつー何故、お前、魔王を召喚したつ！？何故、『贊』の陣を行おうとした…！？」

『贊』の陣というのか。

つてことは、あのまま発動すれば僕が贊として捧げられたわけで…。何が出てくるんだ？見てみたい…とても見てみたい。

まあ、オチは吉田魔王様だらうけどねつ！

「カインから大まかな流れは聞いてるでしょ。そのまんまだよ。偶然…」

『『魔眼』は持ち主の心を鮮明に映す鏡。『魔眼』 자체が無限の魔法陣つて訳だ。

だから最初お前が『ビィーネの業炎』を発動させたのは身を守るため。

「一度目の『召喚』では、恐らくお前があそこにいた俺を除く人を滅ぼしたいとか思つたんだろ？」

うん。勇者の扱い酷過ぎて確かにこの世界滅ぼすぞつて思つたような気がする。

「けど、『贊』の陣の時は死にたいとか思つてないよ？むしろ、教官に殺されるかと思つた」

「案外、心の何処かで死にたいと思つてるんじゃないのか？」

…前にカウンセラーがどうたら言つてただる」

「ぬう…覚えていたとは…」

騎士より探偵が向いてるんじゃないか？

「まあ、前はあつたけど…。とつてそれが出てくるとは限らないでしょ。

今は人生を謳歌してると思つよ、これでも…あれかな、血が黒かつたことが原因かな？」

「血が黒い？魔族じやあるまいし…」

「ほれ」

指を少しだけ傷つけて血を出す。

その血は黒かつた。

「お前、確か『死の夜』^{ノワール}にキスされたとか言つてたな。血を飲んだだろ。死ぬぞ」

「…マジで？」

「ああ。マジだ。雪はそれで死んだ」

「潜伏期間は？」

「されて直ぐ。多くの勇者がそれで命を落とした。雪同様にな」

「セーセン、生きてますけビ。一田経つてますナビ。ペンペンじて
ますけビ」

そんな氣味の悪い冷めた目で見るなよ。

馬鹿だけど、未知の菌的なものは存在して無いから。…多分。

「もつ良いつ！私は寝るつ！明日からは朝五時に起きるよ、勇者殿
！」

「強化訓練をやうされるみたいだ。まあ、頑張れ。それじゃ

教官の後を追いかけるカイン。

頼みますから爆発して下さい。リア充はいらん。
ビーセ、彼女なんていない歴二十一いや、十七ですけど何か？

寝る…とこつ」と今は夜つてことで。

僕、やつを田が覚めたんだけど…。一度寝は当分不可能だ。

「さて、散歩にでも出かけますかね…？」

窓の外を覗けば、丸い月が照らしている。
こつちの月は、向こうのよりデカイな。迫力ある。なにより、綺麗
だ。

『満月の夜、プールの水が…』

お化けとか、嫌いなんだよね。怖くないんだだけビや。
ちょつと、トライウマ。

大体怪談とかさ、変な噂にはそれなりの真意がある。

その殆どが宝を隠した場所とかそんな感じ。

保健室の幽霊とかさ、あれは近付いてほしくないからそういう尊を誰かがたてた訳で…。

けど、案外そういう間に本当に面たりする。
誰も見えないから黙つとくけど。

そういうや、何が夢見たな。

そんな感じの夢。もう、忘れたけどね。

「という訳で、プールに来てみたけど…。誰も何もないな…。そういうや、二つあるって言つてたつけ。

…探してみるか

にしても広い。

こんなに広いのかとこうほび広い。

怪談に多いのは、大体旧校舎。

その可能性が高いな。けど、プールつてあるのか？

「……わお。あつたよ。まあ、旧校舎内に入らなくて済むのはありがたい」

鍵は、どうかなつと…。
チツ。開いてないか。

だがしかし、『魔眼』といつやつは無限の魔法陣つて言つてたな。
ところが、この世界にも恐らく鍵を開ける魔法陣があるはず…。

僕が望めばその通りになるはずだ。

「開け、孫」

間違えた、ゴマだ。

孫は開けないな。人だし。…そういう問題じゃないか。

ギィイイイ…と鎧びた鉄の扉が開く。

そのまま一直線にプールサイドへ、レッシリゴー！

…勘違いしないでくれ。覗きだけど、下心ではない。断じて下心では無い。

覗くのなら女子更衣室だから。まあ、そこまで出来るほど僕は勇者では無いのでしないけど。

「確かに黒いな…。誰だ、イカスミを流した奴」

…といつても、イカスミほど真つ黒では無い。

夜空の様な、透き通つた黒。

だから余計に気味が悪かった。

月明かりが中央に差し込み、辛うじて中が覗けるといつも。けど、何でかな。微かながらに、違和感を感じる。

まるで埃が溜まっているみたいな、僅かな薄い膜の様なものがプール全体を覆つっている。

「指入れてみるか」

人差指を真つ黒な水へと入れる。

ぼちやつ…。

「こつづり…」

静電氣にも似た痛みが走ったかと思えば、いきなり水が黒い手となつて引きずり込もうとする。

ホラーだ。本物のホラー。迫力ヤバい。

まあ、鈍間な僕が逃げ切れる筈も無く。

「僕、トンカチだから止めてー」

案外、あつやつと引きずり込まれました。うん、どうじょううね。
ぶあ、ほんはあぐとぼれば。（通訳：あつ、コントクトとれた）

一瞬だけ。とてもほんやつと。

薄れていっても、ぼやけていても。確かにあれは。

「何で、こらんだよ。雪ちゃん…」

一気に水が入つて来る。

夢か現か分からなくなりそうな程、思考は遮断されていて。

けど、僕は確かに見た。

旧校舎のプールの幽霊…眠つたままの、吉田雪の姿を。

第九話 眠り姫の目覚め

プールとは思えないほど深い。

その中に雪ちゃん…いや、吉田雪が眠っていた。

長い黒髪は水中に漂い、お姫様の様に手を組んで眠っている。全身黒で統一されたドレスは、その白い肌を際立たせていた。

…って、別に、変態的な目で見てないからねっ…！

あー…、そろそろ呼吸と意識がヤバいぞ。

この黒い手、何か魂的なものを吸つてる気がする。けど、この手。雪ちゃんの方へ連れて行つてくれている気がする。でも、着いた途端に僕、多分死ぬ。

「こんのお、大馬鹿者があ…！」

最初の走馬灯が、教官の声とは…。

ある意味、死んでも死にきれん。

ドンッと凄い衝撃が来て、黒い手がいきなり僕から離れた。

うん、此処で普通は浮くんだけど。

ほら。僕、トンカチだからさ。…沈むんだよね。

まあ、良いか。助太刀はありがたいけど、雪ちゃん救助優先させてもらひつよ。

後、あと少し…。手が届きそうなのに…。

でも、さっきの衝撃で、洗濯機の中みたいな感じに…。流れのプールの比じゃない。回転掛かってますよー。気持ち悪いよー。

悪化させたよね。何、そんな気に入らなかつたの?僕の「」と。

あつ、あともう少し…。手が届き…。

だがその寸前で、ぐいっ…と手を引っ張られる。そのまま引き上げられた。

「げほつ…、じほつ…。あー、久しぶりの酸素…。ありがと、一人とも」

プールサイドに上がり、スゲー目で僕を見ている一人に取りあえず礼を言つておく。棒読みで。でも、出来れば別の人をお願いしたかった。

怖いよー、お化けより怖いよー。

虫でも見る様な目で見下してるよー。

「何か、言い残したことはあるか?」

遺言ですね、分かります。

「えつと…、あのですね…僕、トンカチでして…」「それを言つなら、カナヅチだろ」

ツツ「ミは健在だつ!けど、低いつ!声、低い!教官に至つては、歯ぎしりがつ…。

「で、言い残したことは？」

カインー！待つて、どうしたのー？『機嫌斜めだねー？
ほら、早く教官止めようよー。剣、引き抜いてますう。

「えつと、ですねー…プールの中に、雪ちゃんが居たのは、何故で
しょつか…？」

おおおおお…………。

一人の動きが止まつた。

よし、死亡フラグを回避つ！

「「だから、どうした？」」

あれえええええ…………？

開き直られた。いや、困るんですけど。

「だから、何故プールに入り、出て来ない？…もう少しで死ぬところだつたんだぞ！」

「いや、雪ちゃん救助が優先かなつて…。僕が死んでも、いくらでも勇者の替えは利くでしょ」

ちらつと、一人を見てみる。

何故、拳を構えているのかな？
弱い者いじめは駄目ですよー。

「お前はつ、死者の為に命を捨てるというのかつー！」
「何故、自分を大事にしないツー？」

現状をお伝えしますと。

カインのグーパンチが鳩尾にヒットし、教官のグーパンチで頬を殴られ、ノックアウト中。

で、説教受けてます。

何かシユールだ。親にもされたことないのに。……冗談だけど。半分、本当。

ほんと、情けない。

「「さて、帰るぞ」

「……何か、歌が聞こえない……？」

その時、アーリの水が黒から青へ変わっていく。唯の晴といつも、秀き通つていて、人を魅

あつた。

そして、何處かじか白い花が咲き舌れる。それに、川を花畠へと
變えた。

その中心から吉田雪が姿を現す。

閉じた瞼が、ゆきりと開かれる。その瞳は虚ろだ。

はい、すみません。

『**闘犬場**』の時の様な禍々しい空氣だ。
ん? 何かうすら寒いものを感じる。

『**闘犬場**』の時の様な禍々しい空氣だ。

空が黒く染まり、雷鳴が轟く。

そして、雪ちゃん曰掛けて紫色の光の柱が立つた。

わー、UFOみたいだー。

その光の柱から誰かが降りてくる。

宇宙人つてこっちのミケガサキに存在するんだね。

「むつ…、またお前か」

こっちのセリフだ。子供の夢を壊すんじゃない。

『召喚』してないのに何しに来たんだ。

「吉田魔王様だ。どしたの？」

「姫君を迎えて来た。といつても、本当に用があるのは『死の夜』^{ノワール}だが…。

迎えの兵がたまたま出張中でな。私が来る破目になつた

やれやれといつ風に吉田魔王様は首をすくめる。

「大変だね」

といつか暇だね。そんのが侵略してんの?この世界。僕が言えることじゃないけど、大丈夫なの?この世界。

「ああ、大変だ。だが、仕方がない。…という訳で、連れてくぞ。もう、心なんて壊れている。これは唯の人形だ」

「あー…、ちょっと困るんだけど。それは…。『死の夜』^{ノワール}に交渉できない?」

「…私も困る」

「おい、セイ。仲良く会話しない」

カインがぺしと頭を叩く。

教官が一步前に出て剣を構えた。

勇者なんていなくても、普通に倒せそつた雰囲気だよ。

「別に、戦いに来たわけじゃないのだが…。何とかしてくれ
「…僕も困る。けど、まあ、助けてもらつた恩あるし…。
あつ、『死の夜』^{ノワール}に言つておいて、後で取り返しに行くつて

よい」
せつと二人から距離を取る。

気付かれない様に話しながらも何とか魔法陣を描く。

「分かつた。伝えておこう」

「それじゃあ、交渉成立つてことで『冒険』つと…。それから、退
場

二人は分かつてたのか、一步も動かなかつた。

まあ、一つわがままといつか、願いを言つなら僕もこの状況から退
場したい。

お一人とも、頼みますから剣收めて、怒りをお鎮め下さい。
今にも斬り殺しそうな雰囲気止めてー。

その後、五時間にも及ぶ説教を食らい、寝る間もなく朝に。
そんな毎日ですが、案外、僕は楽しくやっております。

「田中さん、何か嬉しい事ですか？」「えへへ…。分かります？優真君からメールが来まして…。元気みたいで、良かった」

陽一郎は笑いながら携帯を閉じた。

そんな彼を三浦春菜は苦笑しながら見つめる。

「優真君って、確かに家出したって言つてましたけど、消息はつかめたんですか？」

「消息っぽいのは何とか。いつもありがとうございます。三浦さん」「いえいえ、お役に立てたのなら何より。失礼ですが、由香子の方はどうするんですか…？」

その問いに陽一郎は困った様に頭を搔いた。

「離婚届とか、無かつたから…僕はまだ、由香子さんのこと信じてるんですけど…」

すみません。いつも愚痴を聞いて下さって…」

「私、由香子とは同級生で友達でした。昔から強引で勝手な所はあるんですけど…」

けど、根は優しい子でした。…帰つて来ると良いですね」

「はい。また、皆で暮らせる日が来ると良いんですね…」

第十話 小規模領土争い 前編

「ほら、剣持つて来てやつたぞ」

どうも、田中優真です。久しぶりだね、この下り。
現在、訓練所の木陰で一休み中。
お昼のギラギラ太陽が憎いです。

「勇者の素質はどうだ、アンナ？」

「飲み込みは早いな。だが、まだまだ甘いっ……行くぞっ！」

「ちよ、ちよっと待つ……ぎやあああああ……！」

何でも新しい剣が手に入つたらしく、朝からずっとこんな調子。
背景に、ふはははははという効果音付きの吉田大魔王様が降臨しています。

案外、守護靈が同じなのかもね。

つまり、僕は丁度良い試し切り相手なわけで……。

まな板の上の魚の気持ちをこれまでかと思つほど味わっていた。

「どうか、新しい剣なんて必要無いでしょ？ がつーお氣に入りの剣への愛着はそんなものだつたのか！？ 浮氣者！」

「あー……、言つてなかつたつけ？ お前が壊したの、お気に入りの愛着の籠つた剣」

なーぜー……？

「ほり、お前。アンナとやつ合つたときに剣に一発入れただろ？ 見事に真つ一つ。

まだ説明して無かつたが、此処に召喚された人々は身体能力が抜群に上がつてゐる。

魔法なんぞ無くとも、軽くジャンプただけで鳥と同じ位上がれるぞ」

「空を自由に跳べるのねー、はい、分かりましたー。いつせいの…」

「上がつてるのは身体能力だけで、跳べたは良いが骨だけは何の強化も無いから碎けるぞ？」

そういふことは先に言え。

「剣術より、魔術の方が才はあるかもしかんが、剣術はまだかな。

秘めた才能があつてもおかしくない。…一端、私は城へ戻り報告してくる。

「一日空けるが、留守は頼んだぞ。しつかりやれよ」

サアア…と長い金髪をなびかせて教官は消えた。

うわー、カツ「いい。姉鬼…間違えた、姉貴つて感じ。

「俺はちょっと野暮用があるんで少し外すぞ。素振りでもしどけ。しつかりな。三時間時間程で戻る」

そう言つてカインも消えた。

おお…。僕、今、フリーダム。

久しぶりの自由。三時間で終わるけど。

さあーて、寝ようかな。

お説教で寝れずじまいだ。暑いけど、木陰は涼しいし問題無い。

「勇者様っ！」

「ちゃんと、やつてますっ！！」

「…大丈夫です。分かつてますっ。教官達居ませんものね。書庫整理任されたんですけど、人出が足りないうえに、上級生いないし、同期もついて行つてるから、僕達五人だけで…。皆だらけちやつて…仕事が渉らないんです。手伝つてもらえますよね？お休みされてましたものね？体力は有り余つてますよね…？」

ヤダ、この子怖いつ。最後の間は何！？佐藤、僕何かした！？勇者の弱み握つて、何が楽しいんだつ！？

まだ一睡もしてねーよつ。

「まだ休んでないんですけど…」

「さつさと働いて下さい。ほら、皆待つてますよ」

背中を押されて、書庫に着く。

金箔なのか本物の金なのかは知つたところではないが、とにかく金色の豪華な建物が建つていた。

何、この校舎に不似合いな書庫は。城か？風紀委員一、校外の風紀が乱れております。直ちに取り壊しあ願いします。

「これ全部…？」

「はい。勇者様担当です」

「僕一人で、全部？」

「人出不足なんで…お願いします。この箱の中の本をこのリストに書いてある本か確かめて並べて置いて下さい。教官、此処よくご利用なさるんで少しでも位置が違うと怒られますよ。一週間全員の掃除洗濯を全てやらねばなりません」

何処のクラスの苛めですか、それは。

後に集団リンクと呼ばれますよ、本当に。

だって、一階とかあるんだけど。
量が半端ないんだけど。

何故、螺旋階段があるか理解不能なんだけど。

「それじゃあ、頑張って下さい。僕達、図書室に届ますから。終わ
つたら声かけて下さいね」

パタンッと扉が閉まる。

困ったな…。教官愛用の書庫じゃ、作業終わって無かつたらかなり
怒られそうだ。

寝るのはお預けということです、まあ、ぼちぼち頑張ろう。

「佐藤、勇者様は、何だつてー？」

伊東の問いに、佐藤は読んでいた漫画から口を離す。

「ん、サボろうとしてたし、事情知らないから任せとおいた。終わ
つたら来るつて」

「えー、駄目だよ。皆でやる約束だよ」

鈴木が少し困りながら言つと、佐藤は溜息を吐いた。

「なら、行つて来い。僕は漫画読んでくつろいでるから

「むう…。勇者様、すみません」

そんな兵士達の思惑に気付くはずも無く、優真は黙々と作業を続
けていた。

あつ、魔法つかえは良いのか。

おお…、楽だな。これなら直ぐ終わる。

一時間経過…。

「一階、終わった…量多すぎぬ…。一人でやるとか、無理なんですけど…。ああ、眠い…」

それから二十分経過…。

「…はつ。寝てた…。よし、あとひつと…」

またまた三十分経過…。計一時間過ぎた。

「N N N…」

完全に爆睡。

ピンポンポンポン…。

書庫内に取りつけられたスピーカーから放送が入る。

『ゴラア…!!』

「ひい…すみません!寝てません!」

よだれを拭きながら、枕代わりに積み立てた本を慌てて本棚に戻す。きょろきょろと辺りを見回しても教官の姿は無かつた。

『此処、ミケガサキ第一二三区ランクB魔法傭兵教育傭兵所は、我々、ラグド王国第三十二番騎士団が占拠させてもらつた!!何処に隠れているか知らないが、アンナ・ベルディウス!降伏するなら大人しく我々の前に姿を表し、新たに召喚された勇者をじからに引き渡せ!!』

ふーん。教室の本名つてアンナ・ベルティウスつて言つんだ。

初耳、初耳。

にしても、今喋つてんの誰？

外出中なんすけど。じついつつて、警察に連絡した方が良いのかな。

『早くしないと、兵達の命が無残に散ることとなるつ！お前の部下みたいだが、図書室で漫画を読みあさるとは弛んでるな！』

「「「「勇者様、助けてー」「」「」「」

……おつと。今聞きづて成らないことを聞いたぞ？

図書室で漫画読んただと？

ピー・ガチャンッ！

魔法陣でスピーカーを乗つ取る。これで奴らにも聞こえるだらつ。

『あー…あー…マイクテスト、マイクテスト…。聞こえてますかー？お返事どーぞ』

「なつ、誰だお前はー？」

聞こえてるみたいだ。なら良い。

『バーカ、バーカッ！人をパシるからこんな目に遭うんだよーざまあつ！』

「な、ななな…我が王国を愚弄するかー万死に値するー」

いや、人違ひです。

君に言つたんじやないから。

何、心当たりあるの？

そういえば、ラグド王国の北に住むとか言つてたな。
確かミケガサキの隣国で、魔軍に一番に領土にされた国らしい。
治安が悪く、奴隸商や娼婦が多くたとか。

にしても、助けに行かないと怒られるよな。

それじゃあ、助けに行くとしますか。僕、一応、勇者だからね。

第十一話 小規模領土争い 後編（前書き）

サブタイトル少し変更しました。

さて、どうしたものか。

僕、格闘技なんて全然無理だし、剣は置いて来ちゃった。

相手がどれくらいの人数とか全然そういう情報無いしな…。
思つたんだけど、いくら裏手にある場所に建つてるとしてもだよ、
これだけ目立てば誰か見に来るんじゃないかと思つんだよね。

まだ見に来ないということは、思つほど人数は多くないのかも。
というか、ランクBを狙うこと自体が雑魚の所業なんだよ。
ラスボスなら堂々と主人公の家破壊しに来るぞ。

第三十一番だか何だか知らないけど、たかが三十番代。

多分、大丈夫。十番代が来たら諦めるつもりだつたから安心したよ。
「あー、けど、訓練積んでるからな。僕の場合まだ五時間程度。実
力の差がなあ…」

「ああ、良い事閃きましたよ。

馬鹿の一つ覚え。此処で使おうじゃないかっ！」

「出でよ、吉田あ！」

『何だ、またお前か。何度も召喚するな。こっちだつて、こっちな
りの用がある。…そして、吉田ではない』

やつぱり、持つべきものは魔王だねつ！
これならあいつ等もイチ口口さ。

「…とこヽ」とで、占拠させられてしまつたのだよ」

『自分で何とかしろ。勇者だろ』

「吉田魔王様にはプライドが無いのかつ！？何れは自分が占拠する予定だつた場所が他に横取りされたんだぞ？」

すると吉田魔王様は呆れた目で僕を見ると、溜息を吐いた。
あー、その反応ほんとに吉田さんだ。いつも宿題の答え書きに行くとそんな目で溜息を吐かれたよ。

『私は場所など狙わない。私が狙うは國のみ。そうすれば一氣に手に入るだらうっ』

あら、ヤダ。

この魔王、何で魔王らしい魔王なのかしらーつて魔王だから当たり前か。

「そりいや、何で此処狙わないの？残つたのこの國だけなんじょ？」

『私とて、好きで他国を占拠して居るのではない。それがせぬおえないからやうするまで。』

お前に言つたところで無駄だかな』
「うん、全く分からん。まあ、愚痴相手にはなるよ。あつ、最後にノワールは何て言つてた？」

『迎えに来るのなら、次の満月の晩に道が開く。後は好きにしる』

そう言つて吉田魔王様は還つて行つた。
未来のハイテクロボよりケチだな。

まあ、いいや。周りに何の気配も感じないし、剣でも取りに行くか。

書庫室から出て、忍び足で物陰からさつき居た練習場を見た。
兵士が一、三人ほど木陰で休んでいた。

うーむ、弛んでるな。

おっ、あそこにあるのは僕の剣。

あー…駄目だ。兵士達が『勇者』っこ『ひっこ』始め出した。
良い大人が何やつてんだ。

仮にも本物の勇者の剣なんだから大切に扱えよ。

僕が物陰からそっと見守っていると、勇者の剣を振り回している兵士の一人が思いつきり剣を地面へ叩きつけた。

バキッ…。

そうですねー。どんな剣でも、そんな扱いされれば折れますよねー。

「ああああああああつ！…！」

「な、何だつ！…くそつ、まだ残つて居やがつたか！」

人の剣折つといて、何がくそだ。

そう思つてゐる間に三人の兵士が僕を取り囲んだ。

「何だ、兵士にしては鎧も着てねえぞ。…死ねえつ！…」

まだ一回も使つてないのに…。

確かに一日で売却される程の剣だけどさ、一回は使つておきたかったのに…。

「そこに座れっ！！」

僕の感情の高ぶりにより『魔眼』が作用し、三人の兵はその場に正座する。

鳩が豆鉄砲食らつたかの様なマヌケ面で。

「人の剣折つといて、何なんだお前らつ！親にそういう教育されなかつたのか、馬鹿が！親不孝めつ！お前らが振り回して折つた剣は正真正銘本物の勇者の剣なのにつ！」

良い大人が勇者じつこして遊んでんじゃねえよつ！…びーしてくれるのさ！？お前らのせいで魔王倒せないんですけどつ！？世界、滅ぶんですけど。責任取れんですかあー？」

倒す気元から無いけど。

何か良い人っぽいんだもの、吉田魔王様。

兵達は完全にうろたえています。

お説教効果ありなのか、これは。

じゃあ、この勢いで案内頼みましょく。

「お前らじや責任取れないよねー？責任者の所行こうか。穩便に話を進めようじやないか。

あーあ、どうするんだろう？剣折れちゃつたなー。魔王倒せないなー。世界滅んじやうなー」

そんな感じで、そのまま魔力で作つた紐で三人を縛り、案内させている。

こんなんで良いのか、僕。

勇者なら敵をなぎ倒して進むものだけど。まあ、剣、折れたけどね。

「「、「此処ですか…。」」めんなさい、本当に「「めんなさい…」」

近くの柱に三人を縛り付けて、恐るべくは教室室であるひ部屋の前まで来た。

奇跡的なのは知らないが、一人として兵隊に会っていないんだよね。どーしたものか。

「たのもー」

バンッと扉を開ける。

次の瞬間、物凄い数の兵達が武器を突き付けて来ましたよ。

何これ、サプライズ？

「お前がスピーカーの声の主か」

違ひつて言つたらどうするんだろ？

恐らく此処のお偉いさんだと思われる中年の男は黒い軍服を着ていた。

田はざよろづとこちらを見ている。

「まあ…そうですけど。勇者直々の演説なんてそういう聞けるものじゃないですよ。良かつたですね」

「なつ、こんな馬鹿そなのが勇者だと…？」この世界、終わつたな。まあ、一応名乗つておひげ。ラグド王国第三十一番騎士団副団長ゲシュト・ナジエロだ」

酷くね？何て言つたか、勇者とこつよつ、僕の扱い酷くね？

しみじみ言つなよ、地味に響くんだからな。

「どうも、田中優真です。

…こやこや、救いたくても、お宅の兵士三名が僕の剣壊しやがりましてね? どうしようかといつて…。どう責任を取るんですか、

バカヤローー

「…どうせ何も知らない様だな。まあ、馬鹿は馬鹿でも勇者だ。洗脳するには丁度良い。ひとつ捕えろつー

洗脳するには丁度良い。ひとつ捕えろつー

えつ、待とうよ。

タンマ無し? オーケー、分かった。

降参だ。

「さつきから後輩の姿が見えないんだけ? …安否は?」

御報告すると、魔力の繩で縛られて何処かへ連行されてる途中ですね。

先程まで縛られていた三人がドヤ顔で見て来ますよ。僕が魔眼持ちであることをチクつた為、魔眼封じの田舎じままでされます。

うむ、屈辱だ。

声さえ聞こえないってどうこいつ? 猿轡されてたつて少しほ声出すでしょ。

別の部屋に居るのか。…それにしても何の気配も感じない。人が多すぎるせい?

「ふんつ…まあ、良いだろつ。それにしてもあまりにも手応えが無いな。この兵達は。

やはり、強いのはアンナ・ベルティウスだけか。何故こんな屑兵の集まりに身を置くのか理解出来ん。

「余りも手応えが無さ過ぎてつに苛め過ぎたよ。もひ、死んでるか虫の息だろつ」

外に出た様で、蒸暑い空気が肌に纏わりつく。

ドゴッ…と何かが蹴られる音がして、続けてつめき声が聞こえた。

「お前つ…」

「身の程を知れ！お前が勇者だろつと何だろつと、剣ぶきも魔眼ちからも無ければ唯の肩だ！」

お前のその無能さ、いや、存在自体がそもそももの間違いであり、お前の無能さが、招く結果何だよつ」

『アンタなんて、産まなければ良かつた』

母の声が聞こえた気がした。

「優真君、これからはバーチャルリアルのゲームは禁止だよ。絶対に。

あの時…いや、それに限らずあれをやる時の君の目は、本当に僕は嫌いだから…。

約束だよ、絶対破っちゃ駄目だよ」

陽一郎さんが、空っぽになつた部屋を見回して言つ。物足りなく思うのは、昨日まで散乱していたゲーム機やらソフトが無いからだ。

「もし破つたら…？」

「……どうしようね？僕も、分からなによ…。約束できる？」

あの時、父は泣きそうだった。

今なら、何となくだけどその人が何でそんな約束を言いだしたのか分かる。

そして、何故破つた後のことを答えられなかつたのかも、分かる。

「なつ…、魔眼封じを上回る力を出しただと…？ありえん」

黒い魔力が身体から溢れ出でくる。それは自身を包み、黒い鎧となつた。

共鳴してゐるのかは知らないが、カタカタと折れた剣が魔力によつて元に戻り、姿を変える。

そのままゲシュトとかいう奴をぶん殴つた。

校門に当たつてうめき声をあげてゐる。

「勇者様つ、危ない！」

息も絶え絶えに誰かが叫んだ。

あつ、そりいえば、この子達の怪我ないとな。

そう思つた時、身体を何かが貫いた。

そのまま蹴りをいれられて、数メートル吹つ飛ぶ。

「その姿、『勇者』といつよりは、『魔王』ですね…？」

申し遅れました。ラグド王国第三十二番騎団騎士隊長ミハエル・ラ

グドネスと申します

何か、増えたー。

といつのが率直な感想です。はい。

わつきのよりは品がよさそうだ。けど、何か無理。

「お手合せ願います」

お引き取り願います。

もう帰れ。何だ、お前ら。暇なのか。

足に力を入れ、そのまま地を蹴った。

剣と剣が金属音を奏でるその前に、誰かが割り込んできて鳩尾を蹴られる。

「ちょっと、待った。誰の許可あつて此処に居るんだ?ミハエル・ラグドネス?

「お前も、何やつてんだ」

赤髪の騎士、カインの呆れ声が聞こえた様な気がして、兵士達から安堵の声が上がる。

視界にカインがぼんやりと映つて、後輩たちに替わった。

「ミケガサキ王国騎士長候補カイン・ベリアル…。勇者様に貴方ですか…。分が悪いですね。

一端、引くとしましょう。さよなら、勇者様。それとも、次期魔王様?…クスツ、[冗談ですが。半分ね]

煙幕の様なものが辺りに立ち込める。

緊張の糸が切れたのか、
僕は意識を手放した。

ただ単に魔力が死きたのか。

第十一話 小規模領土争い 後編（後書き）

歯切れの悪い終わりですねー。
すみません。次回から頑張ります。

第十一話 女神降臨！あと義父も

「状況説明求む」

「はいはい、田中優真です。えつ、怪我はつて？・ぴんぴんしてんや。前世、ミジンコをなめてもらつては困る。」

あの後、三日間昏睡状態だつたらしいけど。

勇者は倒れるわ、吐瀉されかけたわ、色々と後の対応が面倒らしく今も一人は対応に追われてます。

聞いた話なんだけど、もしかしたら降格をせりれるかもつていう噂。そんなことをせるかーと思つて、飛び出さうとしたら思わぬ敵に出来てしまつたのだよ。

「えつ、ですから…」

「ノンノン。いいから降ろせ。そして、何をやつてるのですか、陽一郎さん。いつ召喚されました？」

そう、僕の義父。田中陽一郎。
何してんですか、アンタ。とつとと働きに行け。

「陽一郎…？いえ、僕は女神様の僕。オズと申します」

つまりは、じつちの陽一郎さんってことか。
ちつ、こんな奴を寄越すとは…。女神、何者だ。

今どこにこながといつと…。何処だと思つ? カンパーー…間違えた、バルローー。…で合ひてる?

目覚めたら、お外で日干しなつて、ふかふかの椅子に座つてしまつたよ。どうこうこと?

正直、僕にも分からぬ。

観客らしき人達がキヤーキヤー言つてゐるのが確認できた。
あー、僕高いところ苦手なのに…。

「で、陽一郎さん。僕は如何すれば良い?」

「オズです。取りあえず、これ、音読して下さい。あつ、音読の意味分かります?」

ウゼツ! 我が義父ながら、ウザい!
僕はそこまで馬鹿じやないつ。

この人、腹黒だから嫌なんだよ。母の前ではへらへら惚氣てるの!

「読み終わつたら?」

「いいから、さつと読んで下さ!」

はーい。はーはー。

良じよ、全棒読みだ。

畜生、言いかえせない自分が情けない。

「私、新しい五代目勇者となりました。田中優真です。
今回、ランクB…」

僕つたらやけに饒舌じやないか。
ん…?

僕の舌の機能なんぞ、とつゝの昔に衰えている筈なんだけど。
ちなみに中一の時、あまりにも音読が出来ないから国語の成績は1
だった。

先生曰く、論外。

案外いつもよりは饒舌だなと思つた後の『感想が、『舌、退化しと
る。医者行つて来い』

先生。舌の退化は、医者で治せるものでしょ？

「責任につきましては、傭兵所最高責任者であるアンナ・ベルディ
ウスと、カイン・ベリアルに厳重なる処罰として、女神直々の命に
より処刑となりました」

ん？何だつて。僕、今何て言つた？

『処刑』。

うーーーーん？

おかしくね？

厳重なる処罰の後。まあ、此処までは良しとしよ。女神直々の命により、『処刑』。

何故、此処で女神？どうから生えてきた？何故、処刑。

一回のミスは取り返しのつかないものなのでしたか？
全然大丈夫だよねー。追い払つたものねー。問題ないよねー？

「ミケガサキの永久の富と名誉、栄光を祈ります」

わーっと観客というか、国民が盛り上がる。

お黙りつといふのが僕の感想なのだが、口が開かない。多分、魔術。どつかに、『縫いつけの陣』と『朗読の陣』が描かれているはず。

ミケガサキに富と名譽と栄光ね……。

まさに、由香子政権。

金に目が無い。

そのままバルコニーを後にし、陽一郎…じゃなくてオズさんに連れられて部屋へ戻る。

そういうや、最初は喋れたよな。といふことは、仕掛けたのは、陽一郎…オズさんということだ。

といふことはだね。つまり。

陽一郎さん倒せば、解決。そのまま一人を助けにいける。

「よ…オズさん、あれ何ですか？」

「どれです？」

オズさんが後ろを振り向く。

今がチャンスッ！倒すのは無理そんなんで、逃げる…喋れなくとも、多分、何とか…って、喋れたね。

なら、問題ない。

「せーえのつ！」

視界が暗転して、床にたたきつけられる。何が起こった？今。

「こう見えても、格闘技も魔術も得意なんです。逃げたら困ります。私が怒られるじゃありませんか」

怒られれば良い。

そういうえば陽一郎さん、昔何かの大会で全国行つたって言つてたな。

「諦めて、勇者を全うして下さい。魔王さえ倒せば、彼方は元の世界に帰れる。何一つとして悪い事はありません。少しの犠牲など付き物ですよ」

一つ、分かつたことがある。

この世界は、ミケガサキでパラレルワールドだ。

僕の良く知る人物がいて、魔法が使える。

違う。

確かにミケガサキで、パラレルワールドだけど。

僕の良く知る人達とそつくりだけど、違う。

陽一郎さんは、こんな冷めた人じゃないし、佐藤はあんなキャラじやない。彼はツンデレだ。

鈴木は確かに癒しキャラだけど、天然具合が比じやない。山田はあんなに影薄くない。

伊東は…どうなんだろ。ごめん、知らん。案外、合つてるかも。

確かに似てるけど、別人だ。

姿は陽一郎さんだけど、名前が違う。それだけで既に別人だ。…と思つ。

きっと、この人が崇拜しているのも同じ人だ。

多分、そうならないことを願うけど、これから待つ結末も多分同じだ。

パラレルワールドだから。

どれ程すれ違おうと、最初から決められてた運命は変えられない。

「オズさん。女神様は優しいですか」

「えつ… そうですね。優しくはありますんが、私はそんな彼女に捨てられ、一日惚れしたんです。

どんな扱いだろうと、僕は平氣です」

次の満月まで、多分、後四日。

それまでに終わらせられる自信無いけど。

「必ず、捨てられます」

この人を倒せる唯一の方法。

打倒精神。

惚気には一番有効な手だ。

「な、何を言つてゐるのですか。あなたに何が分かるといつのですか。知らないでしょけど、優しい時だってあるんです…。あんな表情で笑う人が、捨てるなんて有り得ない」

もしかしたら、陽一郎さんはこんな風に思つていたんじゃないだろうか。

言葉に出さないだけで、表情に出さないだけで、そう思つていたのではないだろうか。

けど、「めん。

僕、ちゃんと忠告したから。
怨まないでね、すみません。

「『転移』」

はい、案外あつさり。

最初からそうすればよかつたんじゃないかなと思うが、結果オーライ。

後ろは振り向かないのが僕のポリシーだ。

しかし、だ。

道が分からんよ。

誰か通りがかつてー。陽一郎さん以外ー。

しうがない。最終手段。

「吉田魔王様はケチだから、ノワールで」

いざ、召喚…と思ったのだが、予想外にカーペットがふかふかで陣が描けない。

ちつ、予防は万全か。

「あれ、優真様？」

「いえ、違いますです、よつ！」

肩トントン、振り向けば…。

「ノワールっ！」

ナイスっ！流石、ノワール！

ドケチは格が違う。マジ、女神。

「どうして、此処に？」

「私、優真様専用の女神ですから！」

それはとても嬉しいんだけど、何故、鎧？中身は空っぽみたいだけど。

等価交換に失敗したの？

…そりいえば、カインがノワールの正体は黒い靄だとか何とか。

「中身がないのは、気持ち悪いですか…？」

「ううん。ノワールは黒い靄でも何でも可愛いから大丈夫。で、ノワール女神様。カイン達何処に居るか分かる？」

「まあ…口が上手ですね。案内は出来ませんが、場所なら。此処をまっすぐ歩くと、広間に出来ます。そこを真っ直ぐ行って下さい」

要するに真っ直ぐ行けといつことか。

「優真様、もし姫君を返してほしくば、それと同じ価値のある器を下さい。そうすれば、直ぐにでも返してあげましょう。…そりいえば、優真様はゲームがお好きなんですよね。勇者らしく、カッコよく来て下さいよ…？うふふふ…」

黒い靄となつて、ノワールは消えた。
鎧が崩れ落ちる。

しそうがない。この前の二の舞は嫌だからな。

「言い訳は聞きませんよ。お一人とも。私はアレを処分しろと言つたのですよ？

だれも、助けるとは言つていません。折角、ラグドの兵を借り、襲わせたのに…。

アレは国の塵。脅威です。馬鹿としても。いえ、馬鹿でも。馬鹿

だから「

扉の隙間から辺りを窺う。

幸いな事に、広間には誰も居なかつた。

といつか、馬鹿言はずぎじやありませんか。お母様。『乱心ですね。
それじゃあ、行くとしますか。

「たのもー」

『構えつー』

扉を開けた瞬間、兵達に取り囲まれる。
ちよ、ちよつと……。刺さつてる、鎧に当たつてるつて……。

何だらうね?この光景、前も見たことがあるよ?

「ち、ちょっと待つてってば。仲間割れ良くない。ほひ、君達と同じ変態…じゃなかつた。兵隊」「構いません。殺るのです」

女神の声が木靈する。

結構広い部屋で、恐らくは女神専用だ。
天井にはクリスタルのシャンデリアがぶら下がつている。
ちらりと辺りを見回せば、金で出来た手すりや、高そうな宝石が確認できた。

王座に座るは、やはり女神こと由香子様。

長いウエーブがかつた黒髪に、見るからに高そうな赤いドレス。
頭のてっぺんには小さな冠が乗つかつていて。指にはプラチナの指輪がはまっていた。

手には刀をモチーフにしたクリスタルと金の杖が握られている。

待て待て。召喚したの貴女なんだから責任持て。

まあ、そんなこと言つても聞くような人じゃないからほつといわ。

そのまま気付かれない様にゴキブリの如くカサゴソと壁を伝い歩く。
一回で良いからやってみたかったんだよね。ほひ、忍者ってそんな感じじやん。
カインがそれに気づいて眉をひそめているが、気にしない。気にしない。

僕だつて、好きで壁を渡つてゐるわけじゃない。

あの人数じゃ通れないから仕方がないく壁をな歩いてるんだよ。

庶民なら誰だつて、レッドカーべッドを歩きたしさ。

あの鎧は囮で、中に『入魂の陣』を描いてあるから自動で動く。
自我を与えた鎧というわけだ。

親が馬鹿だけに鎧も馬鹿になつたよ。恐ろしいね。

馬鹿は遺伝するらしい。しかも、死んでも直らないらしいから余計に達が悪いね。

ん？ 視線を感じるぞ？

何処から？

はい、下の方から。

あらり、兵隊達がこつちガン見。
よくよく見れば、女神由香子も氣味の悪いものを見るような目で見
ている。

キヤツ、僕つて人氣者つ！

…何て反応が出来れば苦労しない。

カインは目を手で覆つて溜息吐いてるし。

教官は…、姿が見えない。別の所に居るのかな？

ポウツ…と足元が光つた。

おっ、この陣、見たことある。

最初に『呪喚』された時、暗殺者みたいのがいて、そいつに使つた
んだ。

確か、『ビィーネの業炎』…ってアレ？

炭を越えて、塵になりますよね。

由香子様容赦なし。女神というより、女帝だよ。

「死になさいっ！」

「だが、断る！ジンギスカンになるつもりは無いっ！」

「お黙りっ！」

お申し込みはキッパリとお断りします。
それが、意味不明の優真クオリティー。

陣が光り、火柱が上がる。

『魔眼』発動して、『瞬間移動の陣』を思い描いたから大丈夫。
何だからんで、やつと使い方が分かつて来たよ。
もう、何も怖くない…はず。

「お前が気付くから皆が気付くんだろうが…！」

「馬鹿か、お前。人が壁伝つて来たら、誰だつて分かる」

何とかカインの傍に到着。

特にこれといった仕組みはなく、カインも剣はおろか、外傷ひとつ無かつた。

「何故、ジンギスカン何だ？」

「僕、やぎ座」

「ジンギスカンは羊だぞ？」

「…で、カイン。どうすれば良いのかな？ピクリとも身体が動かんのは何故？」

「それは足元に『封じの陣』が描いてあるからな。警戒するの忘れてた」

「…助けに来なければ良かつたと、これ程後悔したこととは無ことよ」

その時、扉が勢いよく開いた。一人の人影が見える。

長い金髪の髪に、眼帯。

教官が立っていた。

何だ、無事じゃないか。

その隣のは、お懐かしゅ「ついで」こます。陽一郎をん」とオズをんではないか。

あらま、スゲー睨んでる。そんな警戒しなくても。けど、一応気にしてるみたいだな。

「何だ、無事じゃないか。カイン、良かつたね?」

「バーカ。アンナが執行人なんだよ。見事に売られた」

やーいやーい、バーカ!

リア充してるからそうなるんだよつー…関係ないけど。

「「」うなれば、最後の手段だな」

「…良いの、やつても。こんな公の場で」

「誰だつて、自分が可愛いものさ」

なるほど、この男末期です。

そうだけどさ、そんな人じゃないだろ君は。

教官は否定しないけどね。まあ、かく言ひ僕も自分が可愛いので。

「おいでませつ、吉田つー」

『魔眼』は無限の魔法陣といつゝとは、『召喚』だつて大丈夫なはず。

血は既に流れてるから問題ない。

「血は、どうしたんだ…？まさか、怪我が治つてないのに無理を…」
「壁に張り付いてた時に皮剥けた。地味に痛い」

「…心配した俺が馬鹿だつた」

辺りが黒い靄に包まれる。

そして、あの禍々しい気配を感じた。

『ドケチに何か用か、馬鹿勇者』

あれー？何かご機嫌斜め。

さてはノワール、僕の心の内を伝えたな。

「吉田様の手も借りたい事態になつてしまつてね。遊びに行つても良い？」

『散らかつてるぞ？それに『死の夜』^{ノワール}が何て言つたか…』

「事態は急を要するんだ。とつとと行くや」

魔法陣が白く輝きだす。

『召喚』の逆、『送還』の光だ。

多分、この魔法陣の中に入れば白ずと送還対象になる。
闇を光が完全に呑み込んだその時、ふと影が過る。

その正体が一応分かっていたから、とりあえず何も言わずに陣を拡大させる。

「わよつない。ゆさん」

たつた一言、そう言つておいた。
ほんの一瞬。光の中で、驚愕の表情を浮かべる女神の姿を見た気がする。

これが、あの人に対する最大の礼儀で、決別。
ほら、僕、馬鹿だから。

いくら勇者でも、絶つ対にこの国も、あの人も救えない。

貴女は、僕を見ようとしなかつた。此処でも、向こうつでも。
だから、貴女の言つ通りにはならないし、救わない。救おうとも思
わない。

それで良いくと、やつと思える様になつたから。

第十四話 未知との遭遇……？

「教官は分かつてたけど、オズさんまでついて来るとは……。国家反逆罪を着せられますよ？」

「私は、監視役です。勘違いしないで下さい」

「どうも、田中優真です。」

「とりあえず、皆で『魔城』にお邪魔しております。」

案外、明るいし綺麗だ。というか、普通の城だな。もつとお化け屋敷的なものを想像といつか、期待してたんだけど。

「あっ、おかえりなー！ 優真様！ 何故、此処にー？」

長い螺旋階段から、少女姿のノワールが降りて来る。そしてすぐさま、吉田魔王様の後ろへ隠れた。

「大丈夫だよ。ノワールは何でも、何着ても可愛いから。ちょっと色々あつてね。とりあえず、暫くお邪魔します」

「むうううう……。それじゃあ意味ないじゃありませんか……」

ふくーと子供の様に頬を膨らませるノワール。

『「どうか、前から気になっていたのだが、何故吉田魔王様？』

「ん、向こうの魔王様のそつくつさんが吉田って言つ人なの。前勇者吉田雪のお父さん」

『ほひ…。それはそれで見てみたいな』
「では、陽一郎とは…？」

オズさんがひょいと会話に入ってきた。

「陽一郎さんは僕の義父。ちなみに母親は由香子さん。今の女神様」「あ、ありえない。あんな聰明なお方からこんな馬鹿が生まれるなんて…！」

一発、殴つても良いですか？良いですよね。よし、殴りつ。

「父に似たんじゃないの？知らないけど」「元の父親はどんな人なんだ？」

カインが興味心身に聞いてきた。
教官も聞き耳立ててこる。気になるなら素直に言えれば良いのに。

「さあ…？覚えてないな…。僕が三歳くらいに家の金全て持つて蒸発したからね。

あの時の母の錯乱ぶりったらもひ。拳句の果てには、由香子さんも同じ道を辿るところ逆奇跡を起した人としか僕の記憶にはない」

皆が一斉に黙る。

えつ、ホラー要素何処だった？

そんな空白の時間が続き、耐えきれなくなつた僕は何かを言おうとした。

すると、何処からかドタバタと走つて来る音がある。

「王様…じゃなかつた、魔王様！勇者を連れてくるなんてどうこう

…何か沢山いるな。

失礼ながら、誰が勇者?』

全速力で飛び出してきた灰色のスーツを着た青年が飛び出してきた。

『ノーア…まあ、心配ない。色々あつてだな、友人になった

「一体、何が!?

ノーアというらしいが、中々のツツコミ役だ。とりあえず、拳手してみる。

「どうも、僕がゆ…」

「死ねえつえええ!…!…!」

待つてええええええ!話を聞けえええええ!

錯乱しながら、ノーアはスーツの袖からナイフを取り出して、僕に向かって投げた。

ノワールが飛び出し、全部はたき落とす。

「ノーア!私の婚約者に何てことするのつ?大丈夫、優真は良い勇者よ

「あ、貴女まで…。一体何があつたというのです…?」

懇願するような目でノーアは一人を見る。何の悪びれも無く、吉田魔王様は言った。

『『『召喚』された。ノワール込みで』

「前代未聞だつ!何処の勇者が、そんな不可能を可能にするというのですつ?!一体どんなプログラムがインストールされているので

すか！？奴には？

きっと、洗脳されたに違いない！おのれ、何て事を…ミリエニス
王国の第一騎士隊長ノーア、命尽きようと貴様などに負けは…」

『ノーア。洗脳もされてないし、言つただろう。友人だと。お前は、
私に何か不満でもあるのか？

あるなら今すぐに爆死しろ。なければ、客人を応接室へ案内するの
だ』

「あああああつ！仕方がない、そこまで王様…いえ、魔王様が言う
のなら信じましよう。

だが、ミリエニス王国の名譽にかけてお前らの王国など…げふつ…」

吉田魔王様と、ノワールが一人同時にノーアを殴つた。

『いいつちだ。行くぞ』

「ノーア、ぐずぐずしてないで、客人にお茶を出しなさい。優真様
に何かしたらタダじや済まないからね？」

床でびくびくと倒れているノーアをノワールが引きづり、吉田様が
応接室へ案内する。

何か楽しそうだな。というか、平和だな。この世界。
こんなのが魔族で良いのか、本当

僕は微笑ましく見ているが、カイン達は眉をひそめている。
一体何が不満なのかな。

応接室は何となく居心地のいい部屋だった。

由香子様の部屋ほどではないが、嫌みじやない程度の物々が置いて
ある。

高価なものだらうと思うが、見る人が見れば価値のあるものと言つ

たところだらう。

「地味に凄いね、この部屋」

『ほつ… 値値が分かるか？』

部屋に盆栽と日本刀が置いてある辺り、見る値値のある部屋だと思つよ。

和風にしたいのか、洋風にしたいのか良く分からぬ部屋だ。

吉田さん、意外に趣味深いんだよな。骨董品集めとか、盆栽とか、茶道とか、弓道とか、将棋とか…。

きっと、じいちゃんつてこんな感じなんだらうなーつて思った。

「…ほちほちね。で、これからどうするの。とこうか、ビリになるの？」

「さあな。女神様のことだから、絶対に行動を起こすと思つが…。何をしてくるのか今一な…。」

今日は、一端休んで、明日考えよう。空いてる部屋つてあるか？

『一、部屋なら空いてるが…』

その答えに、ノワールが勢いよく手を上げる。

「優真様は、私の部屋ねつ！ 良いでしょ？ お父様」

『仕方がない…。くれぐれも、何事も無くしろよ…？』

吉田様、声低い！

何で、そんな笑顔で脅迫するんだ、僕に！

「なななな、なりませんつ！ 一国の姫君と、あんな人畜ひど…ぐぎやつ！」

『良いからお前は戻りなさい』

何処からか生えてきたんですか、ノーアイさん。

顔面にパンチを食らつたうえに、吉田様に怒られたノーアイさんは渋

何も無いと鬼にばらべつだひづね?

「カイン」、さつさと行くぞ

「ア、アンナ……？俺は応接室で寝るからお前は……」

一 良いから行くぞ！ついでこいつ！

やや困り顔を浮かべるカインをずるずると引つ張つて何処かへ去つ

てく教官

本多天香が、結婚の場所を決めるのを手伝う。

「じゃあ、そういうことですか。吉田様、トイレって何処？」

「あひ、ちよつと待つて。携帯置いて行く

パタパタと二人が応接室を出た。

丁度、携帯が着信音を鳴らす。

『出た方が、良いのか…？』

残された二人は、携帯をじつと見つめた。

吉田魔王様が携帯を手にとつて、困惑した表情でボタンを押す。

ちなみに、ディスプレイに表示された名前は、『吉田さん』。

「もしもし、優真か？」

『おお……。向ひつの私か……』

静かに感嘆する吉田魔王様。しかし、会話がかみ合ってない。

「……誰だ？」

『生憎、優真はトイレだ』

「……そ、うか。で、誰だ」

『……名乗る名などない。……で、どうすれば良い？何か用があるのでないか？』

ふと、沈黙が訪れる。

「そ、うか……だ、が、直、ぐ帰、つて來、るんだ、ろ、う？大、し、た、様、じ、や、ない、ん、だ、が、よ、一、ち、や、ん、が、話、し、た、い、ら、し、い」

『ほ、う。そ、う、か。じ、ば、し、待、て』

「そ、う、ち、は、本、当、に、パ、ラ、レ、ル、ワ、ー、ル、ド、な、の、か？」

『そ、う、と、言、え、ば、そ、う、だ、し、違、う、と、言、え、ば、異、な、る』

しばらくした間の後、声が変わった。

恐らく、よーちゃんとかいう人の声だろ、う。

「もしもし……。優真君のお義父さんです。そ、う、ち、の、吉、田、さ、ん、で、す、か？」

『む、う……。お、前、が、勇、者、の、義、父、か。確、か、陽、一、郎』

「はい。一、二つお尋ねしたいのですが…。優真君、まさかと思い
ますけど危ない事とかやつてませんよね?」

「そうですね…。勇者とかパラレルワールドとか、信じないわけじゃないんですけど、例えば『ロシアン闘犬場』とかに出場したりとか、人を殴つて物を破壊したりとか…？…無いですよね？」

軽く、殺氣が伝わって来るのは何故だらうかと吉田魔王様は思いをはせる。

□

まさか勇者以外の者に脅される日が来ようとは……。
恐るべし、陽一郎。

「無言は肯定と判断しますが…。異論はありますか?」

「い、いや、あの、何と言つかない？」

優真君は一一伝言を頼んでもよろしくてし、うかうか

何てじよが

思わず敬語。

怒らせてはいけないと吉田魔王様は悟りました。

「次、帰った時…部屋は綺麗に片付いていますと、お伝え下さい」
『了解いたしました』

「そして、向こうの吉田さん」と魔王さん。優真君がダークサイドに墮ちる様なことがあれば…ふふつ。続きは、言わずとも知れます

よね……？』

『…………』

その時、丁度優真が帰つて來た。

『……勇者。お父上からお電話だ』

しかし、手渡された携帯は通話時間を示していた。

吉田魔王様に、何か聞くとかつて見たこと無い冷や汗を浮かべる吉田魔王様の表情が見える。

『お父上から伝言を頼まれたんだが……』

「あれ、何て言つてた？」

『次、帰つた時……部屋は綺麗に片付いている感じが……』

撤回しよう。

由香子政権の比じゃないぞ。

凄いな陽一郎さん。

魔王に恐怖を植えつけたよ。

女神なんて比じゃない。あの人さえやる気を出せば、本気で世界侵略できる。

黙り込む二人を、オズさんは不思議そつな目で見ていた。

未知との遭遇を果たした吉田魔王様。

しばらく着信音に怯える口が続いたといふ。

第十五話 指名手配

どうも、またまた田中優真です。

そろそろこの下りにも飽きてきた今田の頃。

「姫様ああー！」

「きやあああっ！」

事件発生です。

ノーラさんが、乙女の部屋に侵入。
数秒後、謎の変態死を遂げた。

顔は蜂の巣のように腫れ上がり、体には無数の痣が確認された。

しかし、その城に居合わせた全員にアリバイあり。
結局、凶器は見つからず、犯人の目星はたっていないまま、事件は未解決のまま幕を閉じた。

「カラカラ、人で遊ぶな。しかも、変態死じゃなくて変死体だろ」
「！」の場合、二つとも当て嵌まるから良いんじゃないの？

そうだなど、あつさり頷くカイン。

『ノーラ、朝から何を騒いでいるんだ』

部屋の前で騒いでいると、吉田魔王様がやつてきた。

「口リコン夜遣い未遂事件とでも題しつく？」

『まつ…。娘に手を出したか。ノーラよ』

「ち、違…」

「連續変態死事件にした方がしつくづくるな

カインが一人でに呟き、悲痛な悲鳴が響いた。

『実際に清々しい朝だな。なあ、ノーラよ

「はい。そうでござりますね…』

清々しさの欠片も無い顔面でノーラさんが詫つ。 そうだな、例えるならお菊さんと言つたところか。 お化け屋敷の作業員として文句なしの顔である。

『さて、勇者よ。國のことはばぢれくらい存じだ?』
「何で、敬語なの。…全くと詰つて良いほど知らないかな。まだ来て一週間くらいだからね

……といつわけで、どうこう詰か図書室にいます。

まずは各國のことを知れとつことらしこ。

しかし、各國のことを知るも何も、君が殆ど侵略しちつた感じ うが。

何故か、カインもついてきました。

僕つてそんなに信用ない?

ちなみに教官とオズさんは城内の見回りとか、ノワールと一緒に買 い物とか。

既に敵地であることを忘れ、満喫してますよ。

…敵地といつよりかは適地なのかもしれないけど。

まあ、ぼちぼち進めて行きましょうか。

＊＊＊＊

国は、五つあった。

『ラグド王国』

独裁政治で、治安が悪く、内部崩壊も時間の問題だつたらしい。軍事国家で、武器の扱いには長けていたとか。最初に魔武器を作ったのはラグド王国だつた。

『フェラ王国』

どいつもナルシスト。常に他国を下等の人種だと思い、それは酷い扱いだつたそうだ。美形が多いらしい。魔術に長けていた。

『ミリエニス王国』

『魔力魂』を開発した国。国民全員が魔族。

科学やオカルトが発展した国で、今は闇に墮ちた。つまり、今いる国こそ元・ミリエニス王国という訳だ。

『マファイネス王国』

『魔力魂』を武力を持つて奪おうとした国で、ミリエニス王国を攻撃したことから長きにわたる他国を巻き込んだ資源戦争開戦の火種。今でも恨む者が多いが、魔軍によつて滅ぼされた。

『ミケガサキ王国』

打倒魔族を掲げ他国と同盟を結び、急激な発展を遂げた国。

『勇者召喚』や、女神の誕生はつい数年前のことらしい。

ミケガサキを除く四国を簡単に言つてしまえば、独政、ナルシー、開発、開戦か。

事の始まりは、やはり『資源の枯渇』。

新エネルギー開発が思う様に進まなかつた各国は、ついにその事態に直面してしまつたらし。

此処での『資源』は、僕の世界の様に鉄とかそういう類では無い様だ。

どうにも、此処での『資源』は良く分からぬが魔力同等の何からしい。

しかし、ミリエニス王国は新たな資源の開発に成功していたらしいが、何故がそれを活用しようとしなかつた。どうやら、新資源の独占だらうということで、それを知つたマフィネス王国を筆頭に全世界を巻き込んだ『資源戦争』が始まる。

最初に仕掛けたのは、マフィネス王国だが返り討ちに遭い、全て滅ぼされた。

しかし、他国と連合を組んだミケガサキ王国により、資源の一部つまり『魔力魂』を奪われたといふことらしい。

しかし、そのおかげで今のミケガサキが成り立つてゐる訳だし。だが、あの吉田魔王魔が理由なしに資源の独占なんてする筈がない。

「カイン、この『資源戦争』って、何が理由で幕引きしたの？」

「『魔力魂』さえ手に入れば、これ以上の戦は無益だろ？だからじやないか？まあ、戦力が尽きてきたというのも一あるかもしねないが…」

「この時の国のリーダーって誰?」

「丁度、同盟を結んだし、ミケガサキの前国王様が何処かに逃げたんでな。フェラ王国の預言者を国王としたんだ。今の女神様の母だつたかな…」

うむむむ…。やけに引き際があつさりじゃないか。有り得ない。

『完膚なきまでに叩きのめす』があの血筋の性なのに。

「優真様ー、大変です!」

「ん?どうしたの、ノワール」

ノワールが血相を変えて走つて來た。

後から紙袋をたくさん持つたノーライさんと、教官が現れる。

そのまま引っ張られる様にして広間へ着いた。

「で、何が大変なの?」

『これを見ろ』

水晶の様な丸い透明な玉が光を放つてゐる。

その光の差す方向には涎を垂らし、寝てゐる僕の顔がでかでかと映し出されていた。

いつ撮つた、こんな写真。

ああ、生徒手帳からか。

……まさか、これ、全国放送?

「勇者は、闇へ墮ちました。私は、女神の名のもとに責任を持つて

彼を始末せねばなりません!」

皆さま、御協力下さい!今こそ、悪を潰す時。時は満ちたのです…

「！」

そこには、何故か武装した由香子様が立っていた。
「……しても、悪を潰す時と来ましたか。せめて倒すにしてほしかつた。」

「…………つまり、これ指名手配？僕だけ？」

『ああ。お前だけ。今、この時を以つて、お前は全国民の敵となつた。良かつたな、仲間だ』

「当初の目的と大分ズレていると感じるのは僕だけだろうか……？」

そんな感じで、勇者は指名手配されました。

「ちなみに、懸賞金とかつてあるの？」

『いや、お前の場合、捕まえてもタダだ』

「…………わーい、お金で買えない価値がある」

少し、虚しいとも思ひ今日この頃です。

第十六話 絶滅希望種？世界最強の哺乳類～やはり召喚はオプション付き～

「…まあ、こいつは以上、全国から猛者がお前を探しにやって来るだろ？が、まず此処に来る心配はないと言つて良い」

「何で？」

「昼夜がり。魔城の庭でお絵かき中。

いやいや、唯の『召喚』練習だけ。

流石に、吉田魔王様だけ召喚出来ても、折角『召喚』が使えるんだし、もう少し色んなのを『召喚』したいじゃないか。

「お前が知つての通り、この国はオカルト学と科学が発展していた。かつての戦争では、姿は見えても蜃気楼のように消え、指一本たりともこの国に入らせなかつたらしい。しばらくは安全だろ。それにアンナ曰く、女神様はお前が魔王を召喚したことなど全然信用して無いらしいから」

「そりや、良かつた。それにしても、やつぱり力押しは向いてないみたいなんだよね。魔術の方が良いかも…って、吉田魔王様が言つてた。物凄い剣幕で」

あの日からというもの、着信音に怯えてくる。

一体何があつたんだか…。

というか、世界を統べる魔王がそれでいいのか？

恐怖の対象が、向こいつの一般人の脅迫に恐怖を抱いちや駄目でしょ。

「お前はそれで良いのか？」

「吉田魔王様直々の頼みだし、良いんじゃないの？…此処でばつぐれたら後で大変な事になると思うし。被害はせめてゲームだけに留

めたい…。無血開城が一番だよ

「最後、意味分からんぞ」

「…さて、基本の形式は描いたけど後は如何すればいいの？」

「『召喚』は自分の魔力と相性の良いものが選ばれるが、それでは数に限りがあるだろう？」

理由があるらしいが、まだ分かっていない。だが、それでは困る。だから、その為の陣の構成なんだよ。ちゃんと描かないと、同じものしか『召喚』出来ない。そうだな、まず何を『召喚』したいか思い浮かべる

そんなこと急に言われても…。

そうだな、癒しが欲しい。それが無理なら、同じバのつく種族ながまが良いな。

多分、動物なら猫だろう。

根拠？

僕をあまり見くびらないで欲しいな。

こう見えて唯のゲームだけど、本だって読む。

何を隠そう、文学少年とはこの僕のことなのだ！…『冗談』だけど。

。何処の世界においても今や王道と呼べるに至る世界最強の生物『猫』。

まあ、外見は猫。正体は虎とかそれ自体が伝説の生き物っていう設定が最近は多いかな。

ゲームとしては、一度はお目にかかりたいものだ。

余談だけどさ、勇者モノとかさ、主人公が悪を倒すゲームって、最

後に悪の親玉との対戦になるじゃない。

僕の体験談だけどさ、必ず他のパーティーメンバーが倒さない？主人公が他の敵倒して、攻撃力の高い、主人公よりちょっとイケメンなキャラが止め刺すよね。

まあ、操作してるの自分だけど。

別に良いけどさ、一番ありがちなパターンは、魔術師が『召喚』して意外に攻撃力高い召喚獣が親玉倒すやつ。

勇者しゅじんの意味なくね？

最初からそいつ『召喚』しちよつて思うわけだよ。

「だから力イン、絶対に倒すなよ

「何をだ？」

「この世の悪の親玉」

「それを倒す為の騎士だろう。仕事にならないじゃないか。……で、思い浮かんだのなら描け。多分、それが吉田魔王以外の『召喚』になるとと思う。お前は『魔眼』持ちだし、召喚以外の陣なら余裕だろ」

ふーん。

それじゃあ、やるとしますか。

さて、吉と出るか凶と出るか。何が出るか。

「『召喚』」

黒い血が一滴、陣に落ちた。白い光が辺りを包む。

「二ア」

「おひ、何だ。田中じゃねえか」

おおひとー。

半分失望したよー。

猫だけど猫じやない生き物と、昔の馴染みが召喚されたねー！

お前、何でランプ持つてんの？

「何だ、慌てん坊で唯の馬鹿不良のサンタさんじやないか。相変わらず、幼稚園でアルバイト？」

「優真、誰だ？」

カインが真顔で聞いてきた。何だ、いつもの呆れ顔じやないのか。

「ひひら、僕の後輩。岸辺太郎。誕生日は四月。今は確か幼稚園のアルバイトやってて、昔はよく不良やってた」

「ハーフ？」

「いや、髪染めてる。にしても、お前、白髪に赤い紐はないだろ。第一な、白髪に染めるくらいなら爺でも出来る」

「それは老けただけだろ。お前は爺センだから、いつまで経つても彼女出来ないんだよ。バーカ」

「四年留年してた奴が何を言つたか。馬鹿は認めるけど、お前よりはマジだからな。

カイン、さつきからやけに真顔だけじうしたの。知り合いにでも似てた？」

カインは表情を崩さないまま頷いた。

猫の様な猫じやない生き物が、ニアと鳴く。

「一いつ呼び、シシコミたい」

「エハハ」

「何でどうこつも」こつも『召喚』された時に家具が付いて来るんだ?
「つ田は、お前、何をそんなにたくさん『召喚』する必要があった
?」

「そう言われましても、困るのですよ。
だつて、結果論としてやつちやつたとしか言こよつが無いでし
ょ。」

「猫については言わないんだね」
「にしても、田中。此処何処?俺、停電直しに行かなきゃならない
んだけど」
「あつ、わつ。じゃ、帰れ」

陣が光る。

何かを岸辺が何か言おうとして、その姿がかき消えた。
ゲーム機大量に持つた親父さんが店に来たぞつて聞こえた気がする
けど、幻聴に違いない。

さて、残るは猫か。いや、猫じゃないけどね。
中々可愛いじゃないか。

黒猫も良いが、白猫も中々だ。美人さんだな。」
オスかな、メスかな。

「お前、何で角と羽根生えてんの。イッカクにでもなりたかったの
?前世はブテラヌドンだったの?」

わしゃわしゃと頭を撫でてやる。案外無抵抗だ。
飼い猫…いや、飼い猫モドキなのか。

真っ白なつやつやの毛並みに、不釣り合いな赤と黄の目。これが噂のオッドアイってやつか。

背にはファンタジー小説に出て来るような、ドラゴンの羽根白バー
ジョンが生えており、時折ふわふわと浮いている。額には何故かご
立派な丁度良い長さの白い角が生えている。

「ユニ・コーン？」

「何故、区切る。それは、プラチニオンの幼竜だな。絶滅したと聞
いていたが、まだ生き残りが居たとは…。俺も生で見るのは初めて
だ。何でも、古来からこのミケガサキに居たらしく、この国のシン
ボルマークでもその姿が描かれている。平和の象徴らしい」

僕のところは、白い鳩ですよ。

「へえ…。案外、大人しいじゃないか。竜のくせに」

幼竜が欠伸する。

こんなのが竜を名乗つて良いのか？

ボオオオオ…。

燃えているんでしょうか。

はい、その通り。

「火い吹いたあー！あちちちち。何処が平和の象徴だ。めちゃくち
や好戦的じゃないか！！」

「詳しい事は知らされてないからな。恐らく、大丈夫だろうという
のが科学者の見解だ。」

だが、別の生物者曰く、プラチニオンは人より知力が高く、好戦的で、絶滅原因は共食いらしいぞ。

かつて、人より秀でていた為、食物連鎖の頂点に君臨し、『人間不味!』つてなつたから共食いを始めたらしい。世界最強の生物と言つても過言じやない』

何処のどいつだ、そんな見解を発表したるくなしは!?

見た目に騙されてるよ!

こいつは、羊の皮を被つた狼だ!

しかも、絶滅した理由は共食いかいつ!

「つーか、最初に発表したの科学者かよ! 何故、首を突っ込んだ?
? 最初から生物学者に任せろよ!」

『私が飼っていたプラチニオンはおつとりしてたからな。大丈夫だ
と思つたんだ』

いつの間にか吉田魔王様が立つていた。
発表したのアンタか!

「確かに強いんだろうけど…。大丈夫なの? けど、可愛いな…。
このふかふか感が堪らん…!」

「こいつ、飼えるの? つーか、何類?」

「飼う気満々だな」

『哺乳類だ。主に肉を喰つ。だが、好みはマタタビ酒と、枝豆、燻
製、唐揚げ、冷奴など』

まるつきりオヤジじやねーか。

あゅうひひひひ…と抱きしめる。

次は炎を吐くこともなく、素直にされるがままだ。
猫は気紛れだつていうしな……。猫じゃないけど。
まあ、可愛いから許す。

『おい、小僧。鮭の燻製よこせ』

あつ、ちなみに、叫んだの僕とカインね。
だって、喋ったんだもの。

意外に渋い声だったんだもの

鮭の燻製要求してきただもの。」といつ、オヤジが

そのふかふかで可憐なしぐ容姿に似合はずの声と、要求。

夢をぶち壊してますねー。いろんな意味で、子供マジ泣きたぶ。

唯の猫を期待した僕が馬鹿だつた。

卷之三

伝説の猫とか、実はものスゲー強い虎で済む筈がない。

ファンタジー界における永遠の王道をすっかり忘れていたよ

竜と囚われの姫君は、絶対要素だ。
（ルーラー）

このせの社も傳も語の時方もりない
だか／＼、皆さま。僕はこの生物の絶滅を希望します。

第十七話 不吉の予兆

おはよひ、じんにちは、じんばんは。
どうも田中優真です。

つーか、無理して僕が挨拶しなくても良いと思つんだけど。

…まあ、挨拶は大事だからね。

取りあえず、今のところ何事もない日々が続いていた…らしいんだけど。

えつ、何処にも刺客が来た様な描写がないって？

いやいや、居るじゃない。一人だけ。刺客に似た奴が。ナイフを投げつけるこの前変態死した…。まあ、だれとは言わないけどさ。

朝。天候は曇り。少し風が強い。

現在、魔城地下にて迷子中でござります。

いやー、書庫に行きたかったんだけど、案外此処広くてね。

けど一つ良かったことは、猫モドキのおかげで辛うじて辺りは照らされてるってこと。

プラチニオントークンのは、暗い所に行くと、毛が光るみたいで、今もぼうつ…と淡い白の光が辺りを照らしてこる。

「……ト、シ……」

「『』めんつて……。けど本物の『』じじやないか」

がぶがぶと容赦無く噛んでくる猫モドキ。

そろそろ名前を考えてやうつじやないか。猫モドキ。

……これで良いんじやないか？『猫モドキ』。

「命名、猫モドキだ」

決定だと言わんばかりに、持ち上げてみる。

……何か、がんもどきみたいだと思つたのは僕だけかな。

「フシヤアアア……」

超威嚇。

だが、猫モドキに臆する様な人間は一人としてこの世にいない！

チカッ……。

猫モドキの赤い目が光る。

ん？もしかして『魔眼』だつたりするのかな？

まあ、ゲームの世界でも召喚獣がそういう機能持つてたって不思議
じゃないからね。
結構レベル上げしないと無理だけど。

「……けど、一重構成式なのは何故かな？」

うわっ、こりう時だけ喋るの止めて！
身体的にも精神的にも結構キツイから！
僕の心はこれでも纖細だから！

えげつない。由香子様並みにえげつないぞ、この猫モドキ。
全く、何が気に入らないのか。
結構な自信作だぞ、がんもど…いえ、猫モドキ。

段々ややこしくなつてきたな。

しかし、この二重構成式。どうやって？

どのゲームでもジョブチョンジしたところで、二重魔法は無理なの

に。
いーなー。僕もやってみたいなー。何段までいけるか挑戦したいなー。

「ニア…！」

（人間如きに名など付けられて溜まるか。だが、仕方がない。受け入れようじやないか）

おお…。この陣、猫モドキの言葉が分かる様にしているのか。
翻訳の陣と叫んだところかな。

つか、何このシンデレ。

正直、反応に困ります。何、素直に喜ぶべきなの、これ。

「ども、よろしく。あつ。此処かな、書庫は」

目の前に立たずむ鉄の扉。

ギギイイイイ… という音が響き、ゆっくりと扉が開く。

凄いな、一応自動だ。

此処の国は、何故か魔法に頼らないみたいなんだよね。
重い荷物の持ち運びは、一人とか三人とかで行つてるし。
見ていると、どうにも魔法が使えない訳ではないらしいが。

辺りは暗く、視力の悪い僕には何も見えない。

うわー、暗いよ。僕、暗いの苦手。

とりあえず、猫モドキを抱きかかる。

だが、光が淡すぎてあまり役には立つていないが、無いよりマシだ。

見る限り、何かの実験室の様だ。

所々にフラスコやら、何か良く分からぬ液体の入ったビーカーが並んでいる。

そして、壁には恐らくは黒魔術であろう陣が描かれていたり、古びた紙に記されてたり…。

壁の一隅には棺桶まであるし、標本なのか骸骨で置いてある。

こうこうの、本当に無理。

大体、いるんだよ。こうこうとこに。本物が。

その時。ふと、何かが横切つたような感覚に襲われる。

証拠に、壁に人影が現れて消えた。髪が長かったから女性かな。

あわわわわ…。

無理、こういうのホント無理！

見えない奴らが羨ましいし、恨めしい！

『むつ…。また、お前か。びひしたんだ、こんなところに何か用か
?』

お前か、吉田魔王様!
けど、今はありがとう!』

「いや、書庫に行きたかったんだけど…。この部屋、何?』

『……研究室』

何、今の間は何!?
何の研究ですか、魔王様!?

「ノワールは?』

『ああ、体調が優れないらしい…。元から身体が弱いからな』

…身体が弱いも何も、元は霧のようなものじゃないか。

その時、ガタンッ!と棺桶のふたが開く。
そこから白い手が伸びた。

「あああああ!—!ごめんなさい!』

「何ですか、やけに騒々しいと思つたら…。まだ居たのですか、勇
者殿』

何だ、ノーヴさんか。

いやいや、何も解決して無いんだけど。
何で、そんな所に居るんだい?』

「何してるんですか?』

「見たらわかるでしょう。寝てたんですよ。魔族は、光に弱いですからね。私も此処で生活している間に、そういう体質になつた様で…」

呑気に欠伸をするノーアイさん。

一般的に、それは退化というのですよ。

そのまま永眠すれば良いと思います。

どうやら、彼は朝に弱いということだ。

道理で、ナイフとか投げて来ないと想つたよ。

「しかし、さつきから何を騒いでいるのです…？」

「いや、^{ワソ}10BKが見えたもので…」

『此処は普通に3LDKだ』

「いや、お化けだつて…。うわー、マジで帰りたい」

しばし、沈黙。

あれ、何か不味いこと言つた？

もしかして、皆お化け嫌いとか？

「ほう…。お化けが嫌い、ですか…。なら、この棺桶。蓋を取つたら何が出てくるか分かります…？」

『ノーハ、止めなさい』

いや…と笑いながら、棺桶の蓋を横にずらすノーアイさん。

そんなこと言つても、何か嫌な感じがするからパスしたいし、吉田魔王様も止めてるじゃないか。

棺桶の蓋が、誰の力も借りずに横にずれた。

そこにノーアイさんの手が添えられているが、彼が動かしたのではな

いことがはつきりと分かる。

ノーラさんの表情が少しだけ硬くなつたし、魔王様の表情が厳しい。そうだな…。決定打を言つとするなら…雪ちゃんの所で見た様な真つ黒の手が、隙間から見えたつてところ、かな…。

その手は、あつという間に僕の目の前まで来た。吉田魔王様が、腰を浮かす。遅いだろ、今更。

思わず、『魔眼』を発動させる。

部屋全体に、三重の魔法陣が浮かび上がつた。

部屋がカメラのフラッシュを浴びたかの様に激しく点滅する。

「ぎゃあああああああ！」

そんな、プライドとかありませんから！

安全第一！命は大事にしよう！

見えたことで、何度も危険にさらされたか…！

猫モドキを放つて、一寸散に部屋を出る。後先考えずに全力疾走。その姿を、二人と一匹は黙つて見ていた。

「…まさか、本当に見えるとは。驚きました…」

『だから、止めると言つただろ。あれは、馬鹿でも選ばれし勇者なのだから』

『才能はあるようだな。先程、一重魔法陣を見せてやつたが、見ただけで三重魔法陣を構成するとは…。見た目より馬鹿では無いらし

い』

どこまでも馬鹿にされる主人公。
今は、一体どこにいるのや。ひ。

「しかし、姫がないと困りますね…。最近は、こいつらも活発になっています…。」

やはり、姫が弱っているのが原因でしょうか

『そうだな…。前勇者が目を覚ますのも時間の問題だ。こんな時、何も無いと良いのだが、そう言つ訳にもいかないだろうな。この状況は女神にとつて好機に他ならな』

ふう…と溜息を吐く魔王を余所に、ノワールはじっと傍く輝く白猫モドキを見つめる。

「まさか、彼方がまだ生きていたとは驚きました…。お久しぶりですね、AINST。

「千年ぶりでしょうか」

ぽりぽりと、白猫は後ろ足で耳を搔く。

その様は、猫そのものだ。あくまで、角と羽根がなければだが。

『今は、猫モドキだ。ノーラというのは、その王に付けてもらつたのか』

「ええ。ノーラ・ヌル・フランクリン。良くなじでしょ?』

AINST、いや、猫モドキは大して興味が無いといつ様に棺桶を見ている。

プラチニオンにとって、数字こそが我が名。

誇り高き、神の化身が人に名を貰うなど恥であると、従来の彼なら思つただろう。

『たまには、良いのかもしないな』

「ええ。そうせ、直ぐに消えるものですからね。良くも、悪くも…
ね。さて、私達は作業に戻ります。

あの馬鹿についてはあなたに任せますよ』

こくりと頷き、猫モドキは鉄の扉をすり抜けて主の元へと去っていく。

天候はいつの間にか悪化し、雷鳴が轟き激しい雨が窓を叩く。
不吉の予兆のようこ、薄気味悪い甲高い笑い声が研究室に響いた。

第十八話 僕と彼女の午後

「ぎゃああああ…！」

ども、田中優真です。

前回からあんまり時間経つてないから挨拶いらしたこと思つねど、少しでも気を紛らわしたい一心で。

話変わるけど、僕、今日厄日なんだよね。
携帯つてさ、星座占いとか見れるじゃない。

携帯ニコースとかでや。

山羊座最下位なんだ。

現在、逃走中。

敵はいないけど。…多分。

振り向けば…何でオチが無いなんて誰が言い切れる？

誰か、誰か徐靈の出来る人は居ませんかー！？

取りあえず、近くにあつた部屋に乱入。

幸いにも鍵は掛かっていない。

…教官の部屋だつたら即死だな。

「ゆ、優真様…」

そこには可憐な少女の姿…つて、着替え中でしたか。

「うわあああ！すみません！何も見てません…ごめんなさい…！」

「 ゆ、優真様なら大丈夫ですけど…。お父様にバレれば大変ですわ」

急いで真っ白な寝間着であるう服を着るノワール。

第一の変態死を遂げた被害者にならなければいけないなんて。どうしようか…。選択肢なんて一つしかないけど。

あいむ、デッジ。

ちなみに名前じゃないよ。

「 だから、私と優真様だけの秘密です。ねつ？」

ノワール、マジ天使。

ゲームー以外の新たな理性が目覚めそうだぜ。

照れ隠しに辺りを見回してみる。

ゴシックの小物で統一された部屋は少し殺風景に見える。ノワールは少し恥じらうように、ティーカップにお湯を注ぐ。

何か、この雰囲気。

初めて彼女の部屋にあがつた嬉し恥ずかしのどうしていいのか迷うじれつたいあの空氣じゃね？

うわっ、意識したら余計恥ずかしい！

ちらりとノワールを見てみる。

目が合つと、ノワールもくすりと笑みを浮かべてくれた。

「 ……ノワール、女の子にこんなこというのは失礼かもしねいけ

「…やつれた？」

「最近、いろいろとありましたからね。少し、疲れたのかもしだせんわ」

ふう…と息をはくノワール。

無言で紅茶が前に置かれる。

お辞儀をして、ティーカップを手に取る。

きっと、家にあるやつの何倍の値段するんだろうな。

「女の子とお茶するのは初めてかも…。ノワールは、淹れるの美味しいね」

「有り難うございます。けど、私は、女じゃないのですよ、優真様。彼方もご存じの通り、肉体を持たない影。何も持たない唯のまやかし」

カタシ…とノワールがティーカップを置くその音がただ虚しく響いた。

長いまつげが優しく揺れる。

「ノワールは、肉体を持たない唯の影なのかもしれない。けど、影でも、とても美しく可憐だと…今まで見てきたどの子よりも可愛らしいよ」

その言葉に、俯いていたノワールが顔を上げる。

今にも泣きそうな、しかしこか嬉しそうに笑っていた。本当に、花の様な笑みだった。

「ふふふ…。優真様はお優しいのね…。女口説きがお上手だわ」

「本心なんだけど…」

「優真様は、こっちの世界は好き?」

唐突にノワールが訊ねる。

「そうだな…案外、嫌いじゃないかも。今のところは。ただ、居心地が良いというだけだから」

「じゃあ、私が城下を案内しますわ。気分転換には丁度良いでしょ？」

「うう、それが目的で走ってたんだ。

そう思つている間にノワールは僕の手を引いてどんどん進んで行った。

魔城の地下へ続く階段を降り、僕が進んだのは違う方向へと駆けて行く。

置いて行かれないよつこと必死に走り、トンネルの様な長い廊下を駆け抜け、出口へ向かう。

「どうです？ 我がミリュース王国へよつこそ、勇者様」

ノワールが、両手を広げる。

その先には、大人から子供まで様々な人たちが行きかっていた。

ミリュース王国は、そもそもそこまで人口の多い国では無い。そして、城の地下に街を作り、魔法陣によつて動く自動の城で場所を転々としてきたらしい。

何だか、ミケガサキより此処の方が平和だ。

闇市も無ければ、無駄な諍いもない。

身分なんてものは無いし、何より幸せそうだ。

「良い国だね」

「そうでしょうか？ 私もそう思いますわ。此処は、誰であろうと受け

入れてくれる。

国王の決めたことには、皆が協力するし、誰一人として不満を言いません。素晴らしい国です」

あつ、姫様だ！

何処かの子供がノワールを指さし、母親が嬉しそうに笑って会釈する。

ノワールも、小さく手を振った。

老人が近付いて来て、僕とノワールにリンゴを渡す。何でも、家の庭で採れたとか。

行き交う人々一人ひとりがノワールに挨拶をして過ぎて行く。やがて、僕達は街が一望出来る場所へと辿りついた。

辺りはいつの間にか、茜色に染まっていた。

「ねつ、良い気分転換になつたでしょ？私、この国が大好き。此処は何でも誰でも受け入れてくれる。優しくて、温かい街。だから、私はこの国を守りたい。それが、私の唯一の願い」

「…ノワール、体調は大丈夫なの？」

「ええ。最近、私の力を闇が凌いでしまって抑えが効かないの。一刻も早く回復して、事無きことにしたいのに…。優真様」

「ん？」

ちゅつ…と軽く頬に何かが触れる。

「ありがとうございます。それじゃ、先に戻ります。…今のは、皆には内緒ですよ？」

恥ずかしそうに照れ笑いを浮かべながらノワールは走っていく。だが、一度だけ止まって、振り向かずに言った。

「前勇者には、負けません」

一人残された僕は、頬に軽く触れてみる。

『この、ムツツリスケベめ』

「うわっ！猫モドキ、居たならいたと言つてくれ」
足元で、『ぐるぐる』と転がる猫モドキを抱きかかる。

「アツ！」

だから分からないつて、それじゃ。

＊＊＊

コンコンッ。

ノワールの部屋のドアが控えめに叩かれる。

「どうぞ」

「ノーライです。姫様。お体、大丈夫ですか」

ドアを開けると、ノーライが伏せ目がちに立っていた。

「あら、いつぞやの変態死の変死体だわ」

「そ、そんな…」

あからさまにショックを受けているノーライにくすくすとノワールは笑みをこぼす。

「別に、優真様のせいで、弱つた訳ではないのよ？半分正解で、半

分不正解だわ」

「ですが…」

「優真様のおかげで、恋が出来た。人になれた。…認めてもらえた。
それで、十分。

おかげで、光には弱くなってしまったけれど、生きれないといつま
どじゃないの。

ねえ…、ノーリーは知っているかしら？ある影の童話を。

昔、影で出来た女が居たの。田を浴びると死んでしまうし、皆氣味
悪がるからいつも一人、洞窟の中で暮らしていたわ。しかし、ある
時怪我をした青年が洞窟で倒れているの見つけて彼を助けるのよ。
そして、次第に惹かれあって、恋をするの。素敵だと思わない？
彼に連れられて外の世界を見て、田を浴びて、この世の素晴らしさ
を知るのよ。

最後は弱って死んでしまうけれど、きっと彼女は後悔なんてしてな
いわ。だから、私も良かつたと思えるの。幸せなのよ、凄く。この
国に貢献できないのは悲しいけれど…。お父様は偉大な方よ。優真
様もきっと手伝ってくれるわ…！

くまの浮かんだ田で、ノワールは言った。心底嬉しそうに。
ノーリーは複雑そうな田でそれを見た。

「姫様…。私は、いえ、私達残される側の身にもなつてください…」
「ノーリー、大丈夫よ。もう、あなたは一人じゃないわ。もちろん、
私も。

それに、弱ってるだけで死ぬわけじゃないもの。昔から、本当に心
配症は治つてないのね」

よしよしと、ノワールはノーリーの頭を優しく撫でた。

そして、月の様に静かに微笑む。

ノーリーは、泣き顔を見られまいと、ずっと俯いたままだった。

第十九話 戦線布告

蒼い月が照らす、美しい夜。
一面に、蒼い薔薇が咲き誇る。

何故か、僕はそんな場所に立っていた。
中央には、不釣り合いな棺桶が置いてあり、月がその表面を照らしている。

カタン…と蓋が開いて、蒼い薔薇の敷布に落ちた。

月明かりに照らされ、棺に横たわる少女が目を開く。
その蒼白な肌には赤みが増し、人形の様にぎこちない動作で立ち上がり、夜空を見上げた。

す…と息を吸いこみ、その小さな唇から音が発せられる。
ふと、彼女は歌うのを止め、こちらを見た。

彼女から冷たい笑みが零れる。

長い黒髪が風に揺れて、薔薇の花弁が散つて視界を覆つた。

次に視界が開けた時、少女は何処にもいない。

「うわああああ…何アレ」

冷たい汗が流れ落ちる。外を見れば、まだ夕暮れ。
ベッドの周りや、床下に魔術書が散乱していた。

そう言えば、新しい魔法陣以外のものを試してみたくて読み漁つて

たんだつた。

おかげで面白いもの出来たけどさて、誰にあげようか。

窓は開け放し。風に吹かれて何処からか薔薇の良い香りがする。

「――アツ！」

「ごめんごめん、煩かつたね。いやー、変な夢を見たよ。妙にリアルでさあ……」

ふと、手に何かを握つている」とに気付き、そつと手を開く。

深呼吸して、もう一度。

卷之二

猛ダッシュで部屋を出る。

猫モトキも何故たいて来てた

何處へ行けばいいのか

「じゅげむじゅげむ南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経うううわあああ

「頑」

廊下に出ていたカインが、タイミング良く頭を叩く。
「おお、何か久しぶりだね。教官は元気?」

「あああああ
「さつきから『あ』しか言ってないぞ。遂に退化したのか」

「夢だけど、夢じゃなかつた！…」

「…意味が分からん」

とつあえず、そのまま吉田魔王様の部屋へ。

『夕餉ならまだだぞ』

第一声がそれで良いのか！？
見て、僕の錯乱ぶり。伝わってる？明らかに、夕餉氣にして駆けこんでるようには見えないだろ？！

「で、何の用です？」いつは忙しいのですよ」

ノーラさんも呆れたように僕を見ている。

「此処つて、バラ園あるか？」

カインの問いに、吉田魔王様は静かに首を振る。

『バラ園…？そんなものは、無いぞ？』

「全く、人騒がせですね…」

「良かつたな、無いそうだ」

いやいやいや、何にしても、何で僕花弁持つてんの…？
何一つとして解決して無いよ。

「蒼い薔薇がたくさん咲いてる場所で、真ん中に棺があつて…」

びくりと、一人がその言葉に反応した。

『その後は…？』

「えつ…。棺が開いて、雪ちゃん出て来て、歌たつて消えた」

「幼稚園児レベルの説明だな」

カインが溜息を吐きながら言つ。ノーランも無言で頷いてゐる。
失礼なといかえせない自分の脳が憎いよ。

『ノワールの様子が心配だな。行つてみるか』

読んでいた書類を机の上に戻し、吉田魔王様が立ち上がる。
しかし、それをノーランさんが制した。

「書類を片付けてからにしてください。今夜中には、この辺。処理
してもらいますよ」

『チツ…。絶対抜け出して見せる』

そんな野望を一人ボヤく吉田魔王様だった。

一度深呼吸すると、控えめにノックする。

「ノワール、無事？」

「あら…、優真様。一体如何したんですか？」

きょとんっと首を傾げるノワール。

とりあえず、先程見た夢の話をしてみた。

「…まあ。前勇者様の目覚めですか…。しかし、まだ呪いが解けて
はいませんわよ？」

「そつか…。あつ、ノワール。これ、あげる
ポケットを漁つて、お手当ての品を取り出す。

「何ですか？」

「うーん。お守り…かな。うまく作用するか分からぬけど。多分、

大丈夫。だけど、作用しないことを願つよ

「ニア…？」

足元で小首を傾げる猫モードキをそつと抱きかかる。

「作つてはみたけど、ブレスレットにしかならなくてさ。これでも結構頑張つたんだ。

ほら、付けてあげる。腕出して」

ノワールが、その白く細い腕を差し出す。

あつ、別に変態的な目で見ているわけでも、ロリコンでもないからね。

「はい、どうぞ」

赤いブレスレットは、魅惑的な光を放ち血の様に透き通つた赤黒い輝きを放つ。

その色は、ノワールの白い腕にとてもよく似合つていた。

「次は指輪でお願いしますよ。もちろん、左手の薬指に」

「ははは…頑張るよ。婚約指輪は今は無理だけど…。これが、僕なりに人を守る手段なんだ」

そつと甲にキスを落す。

わー、初めてやつたけど恥ずかしい。こいつの世界限定だな。向こうだつたらモロひかれてる。

「お姫様、貴女にひじ多幸が訪れますよつて元

「ふふつ…浮気は駄目ですよ？」

『ほう…。結婚は、私を倒してからこじりこみ』

何時の間に…。

僕の横でとびつきりの笑顔を浮かべて、仁王立ちする吉田魔王様。後でノーアさんに怒られますよ。僕もかもしれないけど。

「二つの意味で怖い事を言わないで下さいよ」

『私は本気だが…?』

「まあまあ。優真様、頑張つて下さいね」

そんな取りとめのない会話をして、時間が経つて、別れた。辺りはすっかり暗くなり、独りでに蠅燭に火がともる。

星は瞬き、太陽を月が追いやる。

楽しい午後だつたから、全部忘れてたんだ。

さつき見た悪夢も、この国が狙われていることも、全部。

「優真様の夢…少し気になりますね。何も無いと良いのですが…」

蠅燭を片手に、ノワールだけが行き来出来る秘密の園へと足を運ぶ。彼女こそが、この国の要。影は入り口であり、出口。彼女こそが『門』。

良い夜風が吹く。

蒼い薔薇の花弁が舞い、月明かりが中央に置かれた棺を照らす。

そう言えば、今日は、満月だつたわ。

ふと、何処も欠けていない月を見てノワールは思つ。

『器』を手に入れられる絶好の機会。

短剣を片手に、そつと蓋を開ける。

そこには、蠅人形な美しい少女が眠つていた。

ノワールはほっと息を吐く。

此處で、『器』を手に入れるべきか、入れざるべきか。
短剣を掲げる手が、静かに震える。

自分の身を案ずるなら、此處で『器』を手に入れるべきだ。
しかし、心を案ずるのならこの『器』を諦めるべき。

「ふう……。困りましたわね。

しかし、この女だけは止めておきましょう。恋は、ライバルがいて
こそですわ」

ノワールは、静かに短剣を降ろす。トサッ…と敷き詰められた蒼い
薔薇の絨毯に短剣は埋もれた。

くるりと踵を返し、棺から降りると出口に向かつて歩こうとした。

恋は人を変える。

だから、それ故の過ちが彼女を襲うのだ。

人形の様な、ぎこちない動作で女が立つた。
長い黒髪は夜風に揺れ、瞳は蒼い光を宿す。

その手には、先程落した短剣が握られている。

「あつ…」

ノワールの目が大きく見開かれる。
気付くには、遅すぎた。

容赦なく、剣は振り下ろされ。

容赦なく、胸を黒い鮮血に染め上げた。

ドサッ…と、糸の切れた操り人形の様にノワールは力なく倒れる。

「良い所ね…。さて、援軍を呼ばなくちゃ」

吉田雪は棺から降りると、特定の人物にしか聞こえない声で囁く。

「さあ戦争を始めましょう。魔軍の皆さま。この世の、平和の為に」

……。
……。

返事はない。
唯の死体の様だ。

「……どうする？連れて行くか？」
「いくら強大な力を持つていたとしても所詮は死体だ。動くはずもない。行くぞ」

『結界が破れた……だと？』
「お久しぶりです。父さんに良く似た魔王様」

沢山の兵を引き連れた吉田雪が無邪気に笑う。
『さてと、どうやつて入ったのか…そもそも、何故呪いが解けたのか教えてもらえると有り難い』
皮肉げな笑みを浮かべる魔王に対し、吉田雪は優等生の様にすらすらと言つ。

「あら、簡単な話です。呪いは『死の夜』にかけられたものではないから。
……結界は、『死の夜』が死んだから。ただ、それだけです
『目的は…？他の者達はどうするつもりだ』
「心配性なところも本当に嫌になるくらい似てる…。
さあ…、女神様次第かな？私の知るところじゃない。私は貴方を倒

して元の世界に戻る。そのためには、目的は…領土争いといったところじゃないですか？あの国は新資源が欲しいだけ。だから貴方が生かしてもらえるんじゃないかと思いますよ？レシピが手に入ったら捨てられるかもだけど

『そんな事は判つきつてい』

ふう…と重い溜息をつく。

吉田雪は剣を片手に、近くにあつた椅子に座る。

『随分と余裕だな。…その剣、何処で手に入れた？』

『剣ですか？オズさんが預かってくれました』

吉田雪は静かに、壁の隅に寄り掛かるオズに目配せした。

ふと、この前のやり取りを思い出す。

魔城に騎士の間といつ鎧を並べてある部屋があるので、そこに何故か優真がいた。

拳動不審に辺りを見回し、一番奥の端っこに鎧を見つけると、そつと剣を外す。

『何をやつている？』

『おわっ！あっ、吉田魔王様か…。ビックリした。いやー、ほら、この剣隠した方が良いんじゃないかなと思って…。ほら、僕、魔術専門だからいるでしょ？木を隠すなら森の中だよ』

よいしょ…と、『勇者の形見』改め、『勇者の剣』を鎧に持たせる優真。

あの時はその考えに至つたことに感心して見落としていたが、あれらの鎧が持っているのは、全てフェンシング用の細い剣。それに比べ、『勇者の剣』は大剣の様に大きく太い。そして黒い。

いぐら隅の方だらうと、誰であろうと一目見れば分かる。

その最大の矛盾を忠告するのをすっかり忘れていた。

『結果がこれか。ふははははっ…死にたい』

「大丈夫ですよ。どの道死にます」

「勇者様、城内の反乱軍を捕らえました！」

ドタドタと数人の兵が駆けあがつて来て、ドアを勢い良く開く。

兵士たちに、剣を突き付けられたカイン達がぞろぞろと歩いていた。

「すまん。流石に、この人数は無理だった。後から増兵するみたいだしな」

「この軟弱者がつー剣さえ折れなければ」あらが勝つっていたというのに…」

アンナが悔しそうに言つ。

一番後ろで、ノワールを抱えたノーリはずつと無言だ。

『ノーリ…、死の夜』は？』

ノーリは静かに首を振る。

その時、ドアの隙間から猫に似た生物が入つて來た。猫モドキだ。

吉田雪がそれに気付き、手招きした。

「変なの。お前、猫じやないのね。……イタツ…！」

吉田雪の指から血が流れる。

思いつきり猫モドキが噛んだからだ。

フシャアアアア…！…とそのまま威嚇する。

「」のつー！勇者様に何て事を……！」

下つ端である「兵士」の一人が、剣を振るつ。
赤い鮮血が飛び散り、猫モドキの身体が壁に当たつた。
もし、この光景を優真が見たらどう思つだろ？
ふと、そんなことを考へる。

「お前ら、たつたそれだけの事で斬るのか？…兵士の肩だな。
そういうや、優真は何処だ？姿が見えないぞ。…まさか、この期に及
んで部屋で寝てんじやないだろな」

「優真…？それが、私の次の勇者の名前？彼方たち、見てない？」

吉田雪が兵達に聞く。兵達はお互い顔を見合わせ首を振つた。
だが、その中で二人の兵が小さく言つ。

「多分、そいつ。部屋で死んでましたよ
「……は？」

カインが思わず間抜けた声を上げる。

「死んでたんですね…。ベッドの上で、血塗れで」
「せつかく同じ境遇の人会えると思ったのに…。それにしても、
皆さん随分遅いわね。せつかく結界を解いてあげた言つのに」
「そんなことより、何で死んでんだよー！お前らの内の誰かが斬つた
としか言ひようがないだろ？！」

「どんなに抵抗しようと、一応生かすわ。…けど、指名手配人だから
殺されても仕方がないとしか言ひようがない。此処は、生ぬるい
考へで生き残れるほど優しい世界じやないのだから。そんなに気に
なるなら、見てみましょ？！その、優真君が死んだかどうかを。」

オズさん、お願ひ

オズが壁に陣を描く。

その陣が光り出し、壁に優真の部屋を映しだした。床に散乱した魔法の書の数々。壁には何やらメモ書きのよつたものが張つてある。

しかし、どれも真つ黒な血が付いていて。

ベッドシーツは真つ黒に染まっていた。

胸には刺された様な傷跡があつた。目は見開かれ、手はベッドからずり落ちている。

その肌色は白く、血が通つていなかつた。

「田中…優真君…？」

吉田雪の口からそんな言葉が漏れた。

そういうえば、知り合いだと言つていたな。

その時、床に突然、陣が描かれ、女神の声が響いた。

『初めまして、前勇者。仕事が早くて助かるわ。今から、魔城に総攻撃を開始します。

『魔力魂』はあるだけ貰つたし、その国に用は無いわ。もちろん、貴女にも…と言いたい所だけど、まだまだ仕事は尽きないわ。これからも手伝つてもらうわよ。…早く、元の制に帰りたいものね？ああ、それとそこにある反乱軍とかそうでない兵達は放つておいて。魔力の無駄よ。

そうね、筋書きとしては『勇者と共に魔王を倒しに行つた兵達は魔王のあまりの強さに生き残つた者は居なかつたが、勇者は授けられた力により、見事魔王を倒した』ってところかしら？』

「…そんな、女神様っ！私を捨てるおつもりですか…？」

オズが叫ぶ。

女神はあざ笑うかのよつて言つた。

『今までありがとう、オズ。おかげで上手くいったわ。前勇者は復活したし、もう彼方に用は無いわ。
さよなら』

床に描かれた陣が消え失せ、オズはその場に崩れ落ちる。それと同時に、吉田雪の足元に移動の魔法陣が描かれた。そしてその場から姿を消す。

兵達は、唯畠然としていた。

その時である。

「…ノーア？泣いているの？」

か細い声が聞こえた。

全員が、ノーアの方を見る。

そこには、うつすらと眠たそうにノーアを見るノワールの姿があった。

第一十一話 勇者復活！

「姫様……よくぞ、御無事で……」

「私、確かに前勇者に刺されて……その後、どうしたのかしら……？
といふか、ノーアイ。状況を説明してちょうだい」

『仮死状態だつた訳か……。だが……、状況は何一つ変わつておらん。
死の夜』が弱つている以上転移は無理だ』

うーんと唸る吉田魔王様。

その間にも、兵達はパニックを起こしていた。

「うわあああ……俺達、どうなつてしまつんだー!?」

「死ぬに決まつてんだろーーー！」

「助けれくれえ！」

「ええいっ！煩いっ！仮にも兵士だらうーーー！」

アンナが叫び、兵士たちがびくりと肩を震わす。

「なあ……吉田魔王様。魔力魂とノワールの力が無いとして転移は不可能なのか？俺達全員の魔力を合わせてば、もしくは……？」

『可能性としては否定できないが、唯、時間がかかる。だが、やらない手はないだろう。壁、とりあえず地下に集まれ』

全ての事情を知り、顔を蒼白にするノワールを、ノーアイが抱き抱えて後に続く。

ぞろぞろと、皆部屋を後にし、吉田魔王様を筆頭に地下へ歩み出す。アンナも部屋を出てこうとし、ふと壁の隅に蹲るカインの姿を見つけた。

「どうした？ やつをと行くぞ」

「ああ……。この猫も連れてってやらないと思つてな。……ほひ、もひ

少しだ。頑張れ」

「……ふん。目に見えて落ち込むな。それが騎士の役目だ。例え、誰が死のうとも……」

「アンナも十分、涙声だ。……お互いまつてことで。さあ、行こう

腕の中で苦ししそうに呼吸している猫モドキを抱え、カイン達も後に続く。

だが、途中優真の部屋を通り過ぎると、猫モドキはカインの腕から抜け出し、ドアの前へ座る。ドアは固く閉ざされ、入る隙間がないからだらう。

「お前のじ主い様はな、もつ起きないんだ。……そのくらい分かるだろ」

「フシャアアア……！」

猫モドキは弱々しく威嚇する。

アンナがカインの肩に手を置き首を振った。

カインはドアを少し開けてり、猫モドキが中へ入るのを見届けると、アンナと共に、地下へ向かつた。

地下の都市では国民が不安そうな顔で空を見ていた。国民を見張つていたであろう兵達も地面に座り込んでいる。

どうやら、女神の声は城内の地下まで届いていたようだ。

だが、国民は誰もパニックを起こしていないようで、指示を待つよう、強い瞳で吉田魔王様を見ている。

そして、一人の体格の良い女性が吉田魔王様の前に立ち、静かに言った。

「私達に出来る」とはありますか？…と。

吉田魔王様はその女性の瞳を真っ直ぐに見つめ、力強く頷く。そして、全員に聞こえる様な朗々とした力強い声で言った。

『IJのような事態になつて済まない。皆が知つての通り、事は一刻を争う。ノワールが弱つている以上、直ぐに転移することは不可能だ。そして、私一人の力を持つてしても不可能である。

…皆の力を借りたい。この通りだ』

吉田魔王様はその場で土下座した。

「国王様、お顔をお上げ下さい。事は一刻を争うのでしょう? 貴方は私達の王。王の決め事に口を挟む市民何てこの国に存在しませんわ。…さあ、皆! そうと決まればありつたけの塗料を運びましょう!」

『…ありがとう…』

吉田魔王様は泣きそうな顔で微笑んだ。

国民達は笑顔で返し、吉田魔王様に手を差し延べる。そして、各自の作業に取り掛かった。

「ノーバー、私達もやるわよ。陣の大きさを計算しましょ!」

「分かりました」

「アンナ、俺達も運ぶのを手伝おう」

アンナはこくりと頷き、近くにいた女性が運ぶ塗料を半分持つて中央へ走つていく。

中央では、既に陣の形成が始まつていた。

…感傷に浸つてゐる暇はない。

カインも、塗料を運ぶ為走り出した。

「貴女が前勇者様ね？さて、『魔力魂』の回収も終わったことだし、そろそろ始めようかしら…」

「女神様…、魔王を倒したら元の世界に還していただける約束はどうなったんですか」

吉田雪の問いかに、女神はにつこつと微笑んだ。何を言つてゐるのといつよいに小首を傾げて。

「それは前の女神との約束でしょう？魔王は後三体。大丈夫、貴女の実力なら直ぐに片付くわ」

拳が震えた。

怒りのためではない。恐怖故にだ。
後、三人。

いや、それ以外にも絶対に斬らねばならないだらう。そう思つと、身体に力が入らなかつた。

あの光景が脳裏に焼き付いて離れない。

「『じめんなさい、優真君…』

女神はそれを一瞥すると、声をあげた。

「総攻撃開始ッ！」

辺りに描かれた魔法陣が光だし、無数の炎の球が魔城目掛けて跳んでいく。

「あの薄気味悪い魔城が燃え盛る姿は、さぞ美しいのでしょうかね」
恍惚とした表情を浮かべ、女神は冷ややかに笑った。

＊＊＊＊

「国王様！描けました！」

ノーラが声を上げる。

吉田魔王様は頷くと、皆に陣に触れる様に言った。
やがて、陣いっぱいに人が集まる。

『子供と老人は陣の真ん中へ。何があつても、魔力注入を心掛けて
くれ。例え無理でも、陣が消え無ければいい。それじゃあ、いくぞ』

ぼうつ……と身体から魔力が流れ、陣へ吸い込まれていく。
まるで、砂漠に水を染み込ませるかの様に、陣へ膨大な魔力を注ぎ
込んでいった。

それと同時に轟音が響き、炎の球が降ってきて、近くの民家に当た
り、たちまち家は火だるまになる。

『始まつたか……！』

「お父様、此処は私にお任せをつ！」

ノワールが両手を広げると、ドーム状に透明な結界が現れる。
流星群の様に炎の球が所々当たって、少し地面が揺れた。

「蜂の巣にでもする気か！？」

誰かが叫び、子供が泣き叫ぶ。

天井は今にも崩れそうだ。

「うつ……。も、もう限界ですわ……！」

『ちつ……。まだ魔力が足りないつ……もう少し何とか持ちこたえられ

ないか？…？』

そのやり取りに、皆無言で家族を抱き寄せた。彼らの魔力もそろそろ限界なのだ。中にはとっくに死きている者もいる。

一段と大きな炎の球が魔城に当たって、天井が崩れるのと、結界が壊れるのは同時だった。

その場にいた全員が目をつぶる。しかし、天井はいつになつても落ちて来なかつた。

「何が起きたんだ…？奇跡か？」

『攻撃も止んだ様だな。一体、何が起こつた？』

ノーラと、吉田魔王様が啞然とした表情で天井を見上げた。落ちてくるはずの天井は、一メートル程の所で制止している。

『はいはーい。魔法（が使える）少女、少年、その他の皆様方。絶望に負けてはいませんよー』

気の抜けた声が地下に木靈する。

その声に、カイン達が顔を綻ばした。

落ちてくるはずの天井には、いつの間にか陣が描かれている。

「お前、死んだんじや…」

『カインはそんなに僕を亡き者にしたいのかい？

…まあ、冗談だよ。いやー聞いてたよ？珍しく取り乱してたねー。録音出来なかつたのが残念だ』

「貴方も仮死状態だつたのですか？」

『いや、本当に死にかけたよ。この前、ノワールにお守りをあげたんだけどさ、あれは、相手が受けたダメージがお守りをあげた人物が肩代わり出来るハイテクアイテムでね？まあ、結果的にノワールと血の契りして魔族になつてなきや、お陀仏だつたけどね』

ノーラさんの問いに、僕は冗談っぽく言つ。

「兵が来た時は、本当に焦つたよ。タイミング分からなくて、ずっと死んだフリしてたら猫モドキが来てくれて、此処まで案内してくれたつてわけ」

「優真様つ…！良かつた」

やつとの思いで陣の前に立つ僕に、ノワールは安堵したように、その場に崩れ落ちる。

ノーラさんがそれを支え、ゆっくりと膝の上で寝かせた。

「来るのが遅いぞ、馬鹿者…」

教官が泣きそうな笑みを浮かべて言つ。

「勇者は、遅れて登場するものさ。

…さて、巻き返しと行こうじゃないか」

とことことで、じつも嘘さま。

馬鹿勇者こと田中優真、堂々の復活です…一応ね。

第一十一話 逃げるが勝ち

「…だから言つたでしょ。僕、嘘付かないから」

打ちひしがれるオズさんを一警し、猫モドキを泣いている子供たちに抱えさせる。

あつ、逆効果とかにならないよね？

次に携帯を取り出し、電話を掛ける。

これが成功してくれないと、後々困ると思つんだよね。

『はい、もしもし…』

「あつ、陽一郎さん？吉田さん、近くに居る？…いや、まだかわらなくて良いけど。色々あつてね。一人鬱になつてる人がいるから適当に愚痴つといて」

僕、医者じゃないんだけどといつコメントは無視し、オズさんに携帯を持たせる。

「…で、お前はこれから何を？」

「逃げるが勝ちだよ、カイン。…さて、結界で防ぐのも中々辛いな…。向こうが攻撃止めてくれば助かるんだけど。とりあえず、応援呼ぼうか」

小脇に抱えていた書を開き、指でなぞる。

その仕草に、吉田魔王様が眉間に皺を寄せた。

今持つている本は何かつて？

正直、僕にも分かんないんだよね。魔城に来た時、いつのまにか、ベッドの下に落ちた。

言つておけば、H口のつく本じゃないからね？
こんな状況の中、そんなもの読む余裕があつたら、この窮地をとつ
くのとうに抜け出してる。

けど、この本。唯の本じゃないみたいで。
触れていると、魔法陣が溢れて来るんだよね。

馬鹿にお優しい、なぞるだけのワークブックでも言えれば良いんだ
ろつか。
とにかく、血で本に描いてある陣をなぞるだけ。普通に地面とかに
描くものあるナビ。

けど、複雑過ぎて魔眼で発動出来ないのが悩みの種だ。

「『召喚』」

黒煙が辺りに立ち込める。

だが、それだけだった。

何も起こらない。

あれー、確かに召喚したはずなんだけど。

「おい、何も召喚されてないぞ？」
カインがやや呆れ顔で言つ。

「うん、そう……あ

「どうした？」

今召喚したものと、一つの疑問が見事に一致した。

「僕、とつぐのとつに、結界張るの止めたんだけどさ。…何で、攻撃されてないの？」

「……。責任とつて、外見て来なさい」

「はい……」

何で、漫才をしている場合ではないのだけれど、カインの言つこと
も一理ある。

だが、見なぐても分かるんだよね。だって、召喚主だもの。

『どうせ、立て直すんだ。壁を壊せ』

何か魔王様完全にくつろいでますね？
さつきのやる気は一体何処へ？

子供達は猫モドキと遊んでるし、『婦人方は井戸端会議を開いてる
よ。

何、この体たらぐ。

ねえ、僕来ない方が良かつた？良かつたよね？シリアスな雰囲気が
山無じだよね？

「まあ、そういうとなら遠慮なく」

指を鳴らす。

同時に天井の一部が吹っ飛んだ。

そこから見える青空。

あら、まあ…良い天気。

…の筈がないじゃないか。

やべえよ、地獄だよ。召喚したの、僕だけど。

ぐるりと踵を返し、カイン達の元へ戻る。

「どうだつた？」

「……今すぐ、逃げよつ。侵略されるのも時間の問題だ」

真顔で言つと、カインは驚いた様な表情を浮かべる。
教官も怪訝そうな顔をした。

『そつだな、それが良さそつだ』

同じく壊れた天井の一部から空を見上げていた吉田魔王様がぽつり
と呟いた。

「や、そんなに押されているのですか…！？」

ノーアイさんが声を荒げる。

僕と吉田魔王様は同時に頷いた。

「押されてる」

『ああ、いつ潰されてもおかしくないな。さて、勇者。責任とつて、
お前一人で移動させろ』

「ヘイホー」

陣に手を置き、ありつたけの魔力を流し込む。

その間にノーアイさんとカイン達は慌てて天井を覗きこむ。
そして無言で帰つて来た。

そのまま無言でカインが僕の頭を叩く。

「何をどうすれば、あんな大惨事になるんだ？」

「僕も予想不可能だつたよ。召喚しといつても何だけど、何アレ。魔人大戦争？」

お外の状況を『』説明いたしますと。

天井の一部が吹つ飛んだ。

そこから見える青空。

あら、まあ…良い天氣。

…の筈がない。

お空から『』ゴーン…！

なんですよ。

いや、それだけで済めば良いんですけど。

お空から『』ゴーン！

お空から『』ゴースト！

お空から魔つ人ー！（何故か骸骨）

あと、その他諸々がわんさか出て来るんですよ。

魔人なんか、今にも此処を手すり代わりに使ってきそうな雰囲氣で、

だから、城が押しつぶされるのも時間の問題ってこと。

今は一応夜の筈なんだけど、空が朱染め…なんて可愛いものじやない。

マジで赤黒い。血でも零しましたかつてくらい。

兵士達悲鳴つたら、もつ。
心中お察しします。

僕なら、全速力で逃げるよ。

とりあえず陣を形成して、外の様子を見ているけどいたまれないな。

流石の女神由香子の顔も真っ青。うわー、超写真撮りてえ。
城の中で大人しくしてればいいものを、わざわざ出向くからにいつこうことになるんだよ。

いけ、良いぞ、もつとやれ。

さて、雪ちゃんはつと…。

おつ、いたいた。よし、女神由香子からは離れてるな。けど、目が死んでます。

：そろそろ、頃合いか。ホームシックなお嬢さんこ、救いの手を差し伸べてあげよつじやないか。

何やら物凄く話し込んでいるオズさんから携帯を何とか取り戻し、

陽一郎さんに吉田さんに替わる様命令する。

ふてくされた様なちよつと待つててという声がし、日曜の国民的家族アニメのメロディーが流れだす。

今のうしろ、雪ちゃんの位置を計算してつと。

そして、陣を形成する。僕の足元と、雪ちゃんの足元に。
ちゃんと、この声が届くよ。

「ポウ……陣が密やかに光り出す。

チャラララチャンチャラチャラチャラーラ。

その秘密を暴くかのように、大音量で日曜の国民的家族アニメのメロディーが木靈した。

僕は無言で、顔を覆いつ。

こんなはずじゃなかつたんだけど。

だが、状況が状況故に向こう側は誰一人として気にする者はいない。
こつちは皆が冷めた目で見て来るのにね……。

『もしもし、優真か？ 何か用か？』

僕の足元の魔法陣が光り、次に雪ちゃんの足元の陣が光る。
弾かれた様に、雪ちゃんが顔を上げた。

「お父さん……？」

次に雪ちゃんの足元の陣が光り、少し遅れて僕の足元の陣が光る。
そつ、この陣はお互いの声を陣越しに届けてくれる電話回線みたいなもの。

『その声……雪かつー？ 優真、一体何がどうなつて……夢なのか、これ
は……』

「非現実的な現実だよ。少ししか会話できないかもしけないけど、

後は一人だけで話してね。僕は、色々忙しいから
「優真君、ごめんなさい。後、ありがと。」

そんな声が伝わって来て、照れ隠しに頭を搔く。

「別に……吉田さんの為じやないし。元気でね。……ちゃんと生きて元の世界へ帰ろう?」

ほら、吉田父。後は一人だけで話してね」

後ろでカイン達がにやけているが気にしない。奥様方がウブねとか呴いてるのも気にしない。

吉田魔王様とかが青春だなとか言つてるとも気にしない!
今は集中して移動の陣を完成させるんだつ。

つーか、お前ら真面目に手伝えよ!責任取るとか言つたけど、一人で出来る訳ないだろうが。

徐々に陣が光を放つ。

時折吉田さん達の嬉しそうな会話が耳に入り、ほんの少し手を止めた。

家族ねえ。どうせ、僕には希薄な存在ですよーだ。

「……手伝います。ぐすつ……色々あつたんですね、彼方も……
横からオズさんが顔を出す。

何で泣いてるの、君。ていうか、今、何て言つたよ?」

「はいはい、同情するならゲームくれ

全く……陽一郎さん、一体、何を吹き込んだ?

「たっぷり休憩したし、俺らもやるか
教官も頷いて、陣に手を置く。

.....。

「....皆さ、慰めたいのは分かるけど、これっぽっちも魔力陣に注入
されてないんだよね。手伝う氣があるなら邪魔だから陣の隅っこに
でも座つてなさい。正直、狭いんだよ。全く、もうっ！」

ありつたけの、今出せる全て魔力を一気に注ぎ込んだ。
移動の陣が黄金に光り出し、周りがどよめく。

「『送還』」

本が光り、外の悲鳴が止んだ。
そして。

「移動開始」

「移動終了つて…此処、何処？」

蒼い空に、カモメが鳴く。海風が髪を揺らした。狭いが白煉瓦で統一された路地には出店が並ぶ。

前行つたミケガサキの市場より店構えが豪華で、高そうな品々が並んでいた。

その狭い路地の先をずっと目で追つて行つていたら、おそらく中心都市であろうものがずっと遠くにあり、その先に不似合いな黄金の塔なのかビルなのか良く分からぬ建物が太陽の光を浴びて輝いている。

その建物の中心には大きな横長の水晶がはめ込んであり、アナウンサーらしき人が何かを実況していた。

『フエラ王国の第四地区オルデュアの市場と言つたところか。随分遠くまで飛んだな』

ふーん。此処がある有名なナルシスト王国か。ああ、行き交う人々の顔面のクオリティーの高さつたらもつ。イケメンなんて一次元だけだと思ってたよ。滅べ。皆、滅んでしまえ。

「…皆は？」

さつきから声は聞こえるけど姿が見えない。

『『透明の陣』で姿を隠してるだけだ。すぐ近くに居る。ささと行くぞ』

ぐいっと袖を引っ張られたまま移動。

にしても、のどかだな。ミケガサキは魔力魂の略奪に忙しいといふのに。

魔術に長けているそうだが、『魔力魂』無しでも普通に生活できるだけの魔力を持った国なのか？

「…良いか、絶対に誰とも喋るなよ。此処の住民は関わると色々面倒だ」

直ぐ横からカインの声が聞こえた。

「その直ぐ隣には教官がいるよね？」

「ああ。良く分かつたな」

まあね。だつて、気配が隠れていませんよ。物凄くイライラしてますね？伝わってきます。

カインの声も心無しが上ずつていい。

「ニア！」

「ん、何？猫モードキ…って、わっ…！」

前から来た人と派手にぶつかり、双方地面に尻もちをつく。その拍子に本が腕からすり抜け、相手の足元に落ちた。

「あー、すみません。大丈夫ですか？」

よく見れば、金髪碧眼の子供というか、少年というか。

僕より年下なのは間違いないけど、僕より身長がでかいのが何かムカつくね。縮んでしまえ。じゃなきや、四分の一程ください。

「さつきから見ていたが、お前、誰と話しているのだ？」

あれ、こいつの気遣い無視ですか？

もしかして言葉通じてない？

アーゴージャパーズ？ノーノー、アイム、ナルシー……みたいな？いや、どんな感じか知らんけど。

「いや……独り言ですかね」

「お前、一人か？何しに来た？」

あつ、通じてない。オーケー、分かつた。もう知らん。

「人待たせますんで、さよなら」

「ちょっと、待てって……！」

ちゅうじ、本の見開きに足が乗っかる。

「あ」

突然立ち止まる僕に、向こうもカイン達も訝しげな顔で見つめている。

そんなことより、あいこら子供。何て事してくれたんだ。
まだ、契約解除して無いんだぞ。そんなことしたら……そんなことしたら……どうなるんだろうね？

予想、後でエライ目に遭う。

結果。胸の傷口が開き、シャツが黒く染まつた。……いや、ちょっと待つて。空氣読んで下さい。

「踏まれたぐらいで……そんな、怒ることないじゃん……」

これが僕の最後の言葉となつた。……というのはもちろん、冗談だ。
こんなで死にたくないよ。と言つが、死にきれない。

「おお…！何だ？」この本がお前の体なのか？」

僕の人体＝本。

人権を無視しした斬入なアイデアだな。せめて感覚神経とかにして。つか、足退けて。

薄れゆく意識の中で、そんなことを考えていた。

＊＊＊＊

差し込む白い光。太陽の光にしてはやけに強い。ぬつ…と何かの影がその光を遮った。

「二アツ…！」

ガツン。

頭に凄まじい衝撃が走って、思わず飛び起きる。その拍子に何かが落ちた。

「いってえ…。あつ、猫モドキ。おはよ。」

と言つても、姿は見えないのでけれども。気配は感じたので挨拶しておぐ。

それにもしても、此処は一体何処なのだろうか。

辺り一面、白く仄暗い部屋だ。蛍光灯の様なものが白い光を発す。寝台と言つには中々簡素な造りのベットに寝かされていた。

と云うが、ベッドというにも疑問を感じるな、この造りは。

とりあえず立ち上がり、先程落ちたものを拾つ。白いハンカチの様な綿の布だった。

起き上がった拍子に落ちたところは、顔に被せてあつたところだらう。

……考えられることは一つ。

だが、その前にまず感想を。

「扱いが酷過ぎるといつて、それ以前に、まだ死んでねえよ」
おそらく靈安室の様な所なのだろう。病院内のかどうかは知らないが。

しかし、火葬される前で目覚めて良かつた。猫モドキ、ありがとう。
その時ドアが開き、誰かが顔を出す。
残念ながら、顔は分からぬ。運ばれる途中にでもコンタクトが取れたのだろう。しかし、さつきの少年でないことは確かだ。身長と髪色が違う。

「あつ、生きてる」

第一声がそれだつた。

そもそも死んでませんよ。

「皇子、生きてましたよー。立つてますー」

しかし、皇子って誰？僕、そんな人に助けてもらひやつたの？

「おお。生きてたか！思つたより頑丈に出来てるんだな」
感心しながらひょこつと先程の少年が顔を出した。手にはあの本が握られている。

…世も末といふか。教育がしつかりしてないとか。この国終わったなとか。色々な感想が頭の中で渦巻く。

何はともあれ、いくら原因がこいつでも助けてもらつたことに変わりない。

「助けて下さつて、ありがとうございます」

日本人っぽく、律儀にお辞儀してみた。

「さて、ノイズ。お茶の用意だ。そろそろおやつの時間だからな」
神様、僕はこの国に嫌われることしたんでしょうか。
さつきから放置されます。

「分かりました、少々お待ち下さるませ。こじても、これはどうするんですか?」

「ん?もちろん、宮殿に連れて行け。こいつ、中々面白いからな。
友人にしてやつた」

何処に友達要素がありましたか?つか、何で上から目線なわけ?

「こちから願い下げだ、バーカ。ジャイアントチャイルドめ。空地でも守つてろ、バーカ」

小声で呟いてみる。どうせ聞こえてないだろ。

「ノイズ、やれ
「かしこまりましたー」

何をやるのかと思いつか、皇子がノイズとかいう男に僕の本を手渡した。

ノイズが指を鳴らすと、その手から炎が発せられる。

本をその炎の上に…って、あれ？ 炙り出し？ そんなことしても文字は浮かんできませんよー。

： 何てボケている余裕はない。あの本が燃えたりなんかしたら傷口が開く程度の事じや済まされないぞ。

こんな仕返しをされるとほ、ノビ助も真っ青な」とだだり。

「 猫モドキ、そここにいるなり本にしつこに弾いてくれ」

「 一アツー」

猫モドキの声がして、次の瞬間ノイズの手から本が弾かれる様にしてこっちへ飛んで来た。

それを素早くキャッチする。猫モドキも僕の足元にいるよつだ。

「『移動の陣』」

『魔眼』を発動させ、何とか脱出。

さらば、ナルシー共。一度と会わないと願うよ。

海の匂い。緩やかな風が髪を揺らす。

どうやら、さつきの市場に戻ってきたようだ。すると猫モドキが何処かへ駆けて行く。

その後を追うと、カジノと思われてもおかしくない酒場に辿りつく。何と、猫モドキはその豪華な店の中へ入つていくではないか。

「 ちよつ、待つてよー」

店の中にはいると、魔族の顔さまがくつろいでいた。

店の隅っこで立っていたカインが僕に気付き駆け寄つて来る。

「よく無事だつたな。お前がこの国の皇子と接触したときには本当に焦つた」

「で、置いて行つたと」

「仕方がないだろう。あんな者と関わつたら精神崩壊も考えられる。奥から吉田魔王様とノーライさんが出て来て、僕の姿を見るなり少し驚いた様な顔をする。どうやら、皆本氣で戻らないものと考えていたらしく。」

「ああ、良かった。無事でしたか。てっきり帰つて来ないかと思つてましたよ。」

もう少し経てば搜索にでも行こうかと相談してたのですが、手間が省けて良かつたです」

「ノワールの調子はどう? といつか、教官は?」

「ノワールならしばらく魔城で安静にしているらしい。アンナはノワールと一緒に魔城の守りをするらしい」

呆れ顔で言うカインに、余程この国に来たくなかったらうなと教官に同情してみた。

『何はともあれ、無事でよかつたな。さて、これからどうしたものか…』

その時、大音量でニュース速報が流れた。

おそらく、あのバカでかい水晶からだろう。

『さて、王国第一皇子からの直々の言葉だ。ありがたく思え、愚民共』

「カイン、幻聴が聞こえるよ。僕、少し疲れてるみたい」

「ああ。お前の気持ちは痛いほど分かる。だが、残念なことに現実だ」

外へ出て、水晶テレビを見ると画面にぱぱぱーとあの皇子の姿が映しだされている。

「わー、『ンタクト無くてもよく見えるやー』

「おいおい、正気に戻れ。そして、頑張れ」

つぎに、画面に涎を垂らし、寝て居る僕の写真が映し出された。僕達の動きが一気に固まる。

『この男、ミケガサキ国内では既に指名手配されている』

「どうしよう、カイン。この先が想像できて聞きたくない」

「ドンマイ。捕まつても達者でな」

『先程、この男を我がフェラ王国で見かけた。しかし、いくら同盟を結ぼうとミケガサキの指名手配犯はミケガサキで捕られるべきだ』

「おっ、ちょっと風向きが変わったな」

「無理無理。僕には全てが見えるよ。あは、あはははは」

「黙れだ、完全に壊れた」

『よつて、我がフェラ王国でもこの男を国内手配するー見つけた者は直ちに王宮に報告せよー以上ー』

ぽんつ、とカインが肩に手を乗せる。その手は同情に満ちていた。

『…そうだな、出来るだけこの国から去れるよう準備を整える』

吉田魔王様も、いつのまにか僕の傍に立ちそつちく。
その隣でノーラさんも憐れみの目で僕を見ている。

『さあ、僕には盐崎が配られる素質があるよつです。

次から女子の玉緋を増やしたこと願こめます。

第一十四話 女装

「…田撃情報が此処でありました故、調べさせてもらつてもよろしいですね？宜しければご案内していただけますか？」

「も、もちろんですわ…。おほほほ」

長い黒髪が動作にあわせて揺れる。フリルをこれまでかといふほどあしらつた丈の短すぎるゴスロリでくるりと向きを変えると、ふわりとスカートが揺れ、口を浴びたことのない様な白い太腿が垣間見えた。

店の至る所から視線が集中する。

「失礼、申し遅れました。私、第一皇子側近のメイドをやつてあります、メアリですわ。レティ」

手を差し出される。

…何ですか、この手は。いや、そりや意味は分かるよ。挨拶でしょ。漫画で皇子様が姫によくやる。けど、君、女でしょー？その差し出し方おかしいから！何、オカマなの？

店の奥から必死に笑いを堪えて、もがくカイン達の姿が田に入る。

「まあ…。けど、此処のお店にまた来てくれるところなら案内して差し上げてよ？」

一生来るな。内心そりやく、ひっこみ案内して

周りから何やら奇声と云う名の雄たけびといつか、歓声が飛び、くすりとメアリが笑う。

「良いでじょ、望むどりです……」

その間が、名前を教えないならないといつ空氣だつたので取りあえず名乗ることにする。

「たこや…いえ、ターニャ・コロフですわ、メリさん。親しい友にはコウコと呼ばれておつます。良かつたら、そうお呼び下さい。危ない、危ない……。もう少しで本名名乗るところだったよ。ちよつと待て、僕。何故、その名前から優子コウコとなつた? 何処にももう呼ばれる要素ないだろ。

何ともあれ、どうぞ。

田中優真改め、ターニャ・コロフ。愛称、優子コウコ。

只今、女装中ですわ。

何故このような事態になつたかと云ふと、一時間程前まで遡る。

早朝。

次の転移は、情報が集まつてからと云ふこと、しばらぐ滞在が余儀なくされた。

ということは、しばらぐ隠れ家であるこの店で営業をするらしい。珍しく、ノワールの姿もあつた。カインと僕、そしてノワールさんは机を囲んで朝食を取る。

「…此処が何があった時の隠れ店つことは分かつたが、国民全

員情報収集に回すんだろ？店員はビリするつもりなんだ？」

何か、文化祭の出し物決めるみたいだなとか思いながらコーヒーを啜る。

「ビリせ密はそんなに来ませんよ。私達だけでビリにかかるでしょう…と言いたいところですが、猫の手も借りたい程の忙しさになることでしょう」

床でご飯を食べていた猫モドキが、不安そうに顔を上げた。

「うん、大丈夫だよ。君、猫じゃなーから。

猫モドキだから。

「して、その理由は？」

「魔王様が料理の達人だからです。一度は何かの特集に組まれた程なんですよ。隠れ家といつても酒場なので、魔王様は仕事の合間にとかに息抜きに働いています」

カインの問いに、ノーラさんは胸を張つて答えた。
「魔王なのに？それとも魔王を名乗る前かな。
こつそりとノワールに聞いてみる。するとノワールもこつそりと返してくれた。

「魔王を名乗る前ですわ。…まだ当時の記事なら取つと/or/あります
が、見ます？」

「ぜひ見たいのだけれど、また今度、時間がある時にするよ
二人で顔を見合わせて、そつと耳を澄ましてみる。

店の奥でトントンと狂うことのない一定の包丁音が聞こえてきた。

吉田魔王様、料理に没頭中。

ねつ？とノワールが笑う。

「流石というべきか。あの人、何事にも熱心に取り組むもんな。邪魔しないでおこう。」

「… そうとなると、一人じゃなかなかキツイんじゃない？まあ、僕には関係ないけど。事態が事態だからね。何か騒ぎがあつたりして店潰れたりしたら、吉田魔王様目に見えて落ち込むよ」

「そう、そこなんですよ。どうしましようか？姫様には、会計を頼もうかと思っているんですが、大丈夫ですか？」

「ええ。会計くらいなら大丈夫よ」

それまでずっと黙っていたカインが不意に口を開く。そう、それこそが僕にとっての悲劇の始まりだつた。

「一つ、確認したいのだが

「どうぞ」

「バレなきや、良いんだよな？」

少しの沈黙。

ノーラさんがええ、まあ…と曖昧に頷く。

「そして、優真。一つ確認しておくが、吉田雪はお前のストーカー
とっても良い程のファンだな？」

「さあ…、僕としては違うと言いたいところだけど、僕の部屋の内
部構造全部知つてたからね。否定できない」

カインは、うむと頷いた。
そして静かに目を開く。

「バレなきやいいんだよな」

何回言つつもりだ。

まるで悪ガキが先生に見つからない様に話すかのようにカインは言う。

悪ガキらしく、けろりとした表情で。

「女装すれば良いんじゃないか」

「…カイン、コーヒーに毒でも盛つてあつた？」

ツツコミ役がボケに転じるなんて！君からそれを消したら一体何が残るというんだい！？

周りも、ああと納得していた。まるで鶴の一聲を聞いたかのような感心した表情で。

おいおい、納得しちゃ駄目だろ。

「仕方がないだろ。仮にも世話をなつての身だ。…がんばれ

「じゃあ、化粧は私がしますね」

「じゃ、そういうのです」

無言でショックを受け、惚ける僕に、猫モドキが膝上に飛び乗つて丸くなり、安らかな寝息と共にその身体が上下に膨らむ。トントン…と、小刻みに何かを切る音が延々と木靈した。

そして、トランクに收まりきらない程、大量の服を持ってきたノワールとその助手を勤める教官によつて、田中優子ちゃんは生み出されたのである。

「優真様…洒落にならないくらいよく似合つてますわね…。我ながら、少し妬いちゃうそうです」

「ああ、本当によくにあつていろ。優真…いや、優子。カインもよく頑張った」

腕組して満足そうに頷く教官。

「何で、俺まで？」

「ついでだ」

カインは、赤く長い髪に薄桃色の豪快にフリルをあしらつたワンピースの様な服を着せられていた。

騎士だけに、筋肉のひしきまつた体格がそれを拒んでいる。正直、異質だ。

「… そうか。まあ、最初に提案したのは俺だしな。

ほら、優真。出てこい。恥ずかしいのは皆同じだ。なあ？ 猫モドキ」カインが僕の足元で震えている猫モドキを抱き上げようとしたが、猫モドキは素早く身を引っ込めた。そして僕の足元でじっと様子を伺っている。

「心に深い傷を負つたようだな…」

「大丈夫だよ、猫モドキは両生類だから。良く似合つてると、猫モドキ。

「… そうだよな、いきなりだつたもんな。寝ている時の奇襲で、一瞬の出来事だつたもんな。怖かつたよな」

「… こいつが一番の重症だな」

呆れと同情の混じつた目でカインは僕を見た。

「一体、誰のせいだと思っているんだ。

「あつ、出来ました？ あはは、騎士長は全然ですね」 腹を抱えて笑うノーリに、カインはつるせーと返事をする。

隣には吉田魔王様が立つていて、摩訶不思議な生命物体に遭遇したかのような睡然と困惑の表情を浮かべていた。

「さてさて、お馬鹿な勇者の姿が見えませんが、どうしたんです？」

ノーリさんが意地の悪い笑みを浮かべて辺りを見回した。

ノワールが、興奮しながら早口に喋る。まるで、格好いい車を見つ

けた子供の様に。

「ノーリ、お父様、見て下さいー私達の珠玉の作をつー！」

カインに背中を押されて、吉田魔王様達の前へと飛び出す。

「えと、どうも…」

「あなた、女に生まれれば良かつたんぢやないですか…？」

『よく似合つてゐるぞ。そろそろ店を開けるから全員配置につけ。そして、お前は元に戻れ』

ぽかーんとしながらノーリさんが言い、吉田魔王様はカインを指差しながら指示を出す。

「はーい」

こつして、僕の悲劇は幕を開けたのだった。

第一十五話 厄介な来客

開店と同時に客が吸い込まれる様にご来店。すぐに満席となつた。酒場だからいつかの筋肉ハゲとかを想像してたけど、流石、国民が美形の国。

凄くお上品だ。

そんな男女問わずの視線がすごく刺さるんだよね。

酒場つて、こんなんだろうけど何か違う様な、そういうもんの妙な気分だ。

幸いにも、僕が指名手配犯だとは夢にも思つていないようで、会話に花を咲かせている。

かと言って、氣を抜く訳にはいかないんだよな。状況的に。

「ニア…」

「うん。今は集中しなきやね。終わつたら鮭の薰製あげるから元気だしな」

さつきからずつとしょんぼりとしてる猫モドキに、声を掛ける。バイト経験のない僕が、そう簡単に注文と密席を覚えられる筈がない。

だから、僕が食事を運び、猫モドキがそれを客の所まで案内してくれるという連携プレーだ。

「グリアンのソテーです」

それにもしても、注文の品名を言つて度に思つ。

本当に此処はパラレルワールドなのかと。

いや、確かに魔法は使えるし、顔は同じでも性格は違つたりする。

けど、三嘉ヶ崎の地形もそつくりそのままだ。

魔法が使えるということ、つまり魔力が生物に何らかの影響を『えで、新種というか珍種の生物を生み出しているのかもしれない。

グリアン…聞いたことのない生物だけど、お魚とかの進化形かな？
真縁で、やけに大きな鱗の様なものを備えた生物だったであろう物
体がフランス料理の様な美しさで皿に盛られている。

「カイン、グリアンって何？」

「グリアン？何だ、お前の世界にはいないのか。そうだなあ…ミミ
ズ、いや、百足に近い生物だ。世界三大珍味の一つで、結構美味い
ぞ。後で朝食として出されるから是非食うといい」
嬉しそうに笑うカインを横に、僕は一人呟く。

…真縁の、ムカデ。

つまり、鱗みたいなのは甲羅みたいな部分つてことで、きっと無
数の足が生えていたことだろう。
しかも、皿に盛られていたのはその一部分。あれで一部分というな
ら一体、元の大きさはどれ程なのか。

「カイン、僕の分も食べていいよ。一気に食力無くなつた…」

その時、キイッ…と扉が開く。客から歓声というか寄声があがつた。

「ちょっと、お邪魔しますね」

上品で落ち着きのある声。

「いらっしゃいませ」

「……」

とりあえず挨拶すると、来客である白いワンピース姿の女性が僕の方を見た。

カインは何故か黙つて店の奥に引っ込んだ。ノーラさんもさりげなく引っ込み済である。

ノワールも静かに会計の席を離れてカイン達の後に続く。

「あら、 可愛いわね… 新入りさん？」

「ええ、 まあ…」

曖昧に返事をする。

いつもなら可愛いと言われたことに苛立ちを覚えるのだが、そんなことより、カイン達が引っ込んだことの方が気になっていた。

この国に極力関わりたくないというカイン達。
一般客と普通に接することが最低限の譲歩だとするならば、考えられることは一つしかない。

結構な国の権力者だということ。

国民のあの反応といい、カインのこの反応といい、偉い人だらつ。恐らく。

カイン達が無言で去つたということは、店を放棄しても関わりたくない偉人にして異人というわけだ。

どーしよ、僕。

つていうか、指名手配犯の僕に任せてどうする。誰か犠牲になれよ。ノワールは許すけど。

「あのお、席は『自由でお座り下さい』

さつきからガン見されてるんだよね。無言で。僕がしどろもどろになりながら言つと、女性は静かに微笑んだ。

「ふふっ…本当に可愛いわね。今日は客として来たんじゃなくて、仕事で来たのよ。もうご存知かと思つけど、先に指名手配された青少年を捜してるので。田中優真をね」

はい。ご存知も何も張本人ですか。

女性は急に、名探偵が事件に挑む時の様な好奇心と、勝ち気の入り混じつた目で僕を見た。

「…田撃情報が此処でありました故、調べさせてもらつてもよろしいですね？宜しければご案内していただけますか？」

「も、もちろんですわ…。おほほほ」

きっと、犯人は早く帰れと思っているに違いない。
現に僕がそうだからだ。

だから、どうせ捕まるのなら、この挑発に乗つてみるのも悪くない
といつのも、きっと犯人は思つていることだろう。

だから、僕はお返しと言わんばかりに不適な笑みを零す。

相手もそれに気付いたのか笑みを浮かべていた。

「失礼、申し遅れました。私、第一皇子側近のメイドをやつてあります、メアリですわ。レディ」

手を差し出される。

成る程。道理でカイン達が逃げ出すはずだ。あの面倒な皇子の側近となれば話は別。

これ程の地位を持つてゐるといふことは、つい最近やつてきた僕ヨリカイン達の方が熟知してゐると言つていいだらう。いや、断言する。

見た目はまともだが、あのノワールが逃げ出すくらい達の悪い変人さんに違ひない。

だから、僕は。

今、とても逃げたい。

出あつて数分だけど、僕でも分かる。

この人、変人だ。

目がね。目が女子を見る口オオヤジの目と同じだもの。

「まあ…。けど、此処のお店にまた来てくれるといふなら案内して差し上げてよ?」

「良いでしょ、望むところです…」

ゾクゾクしますわ…。

と恍惚そうに呴いた言葉を聞かなかつたことにして、取りあえず一、三歩後ずさつた。

カイン達がオーケーサインを出す。僕も頷いて返した。

「たにゃ…いえ、ターニャ・コロワですわ、メアリさん。親しい友にはコウコと呼ばれておりますの。良かつたら、そつお呼び下さい」

うふふふふふ！親しい友…うふふ、うふふふふふ…！

一人悶えるメアリさんの姿を敢えて見なかつたことにし、十歩程後
ずかる。

猫モドキが不安そうな顔で僕を見上げた。状況が状況なので、抱き
上げてやる。

僕だつて不安だし、とてつもなく怖いよ。猫モドキ。…この人、友
達いないのかな？

「では、お独り様ご案内しまーす」

地獄に。とかだったら嬉しいんだけど。

取りあえず、さつさと終わらそつ。

僕はそう心に決めて、歩き始めた。後ろから熱視線が注がれるのを
感じながら。

第一一十六話 昨日の敵は今日の友

「やつと、一人きりになれましたね。ターニャ・ゴロフンと、田中優真君」

店案内が終わり、少し店から離れた公園に居る。メアリさんは大人びた笑みを浮かべ、楽しそうに言った。

「うーー、やはりバレていたか。

「いつから気付いてましたか…？」

「そうですね、最初から…と言つたところでしょうか。だつて、今、彼方は魔王と行動しているでしょう？あの人の料理、本当に美味しいんですよ。グルメ雑誌にも掲載された程の腕です。魔王になつても酒場は続けてくれていたので、ファンは結構大喜びなんです」「つまり…吉田魔王様が魔王でもこの国は大して気にしていないと…？」

「はい。だつて、台所で料理する魔王なんて前代未聞ですよ」

楽しそうに笑いながらメアリさんは言つた。

…恐らくは常連であるうメアリさんが最初に言つたあの言葉は、確認だつ。

彼方、新入り？とはそういう意味か。カイン達はこの人が変人だというのは知つていてるから逃げ出した。つまり、何も知らないで此処に突つ立つて居る人こそ、指名手配犯というわけか。

にしても、吉田魔王様。

彼方、皆の優しさに生かされてるな。
この国位じゃない？魔王を敵視しないの。しかも理由は、料理が美味しいし、魔王っぽくないから。
趣味が自分を救つたんだね。

「…で、どうしますか。メアリさん。僕を連行したりします？」「そうですね。けど、そう簡単に連れて行かせてはくれないでしょ

う？」

「勿論

「髪を剥ぎ取る。

服もどうにかしたいのだが、背に腹は変えられない。

…というか、初めてだな。まともに話を聞いてくれる国民。

「あら、髪をとってもやはり可愛いですね。男の子には到底見えませんよ。

けど、彼方、救世主なんでしょう？…私一人ではちょっとキツイと思つんですよ」

諦めて帰つて下さい。

「だから、応援呼びますね。『召喚』」

白い光が辺りを包む。

その光が完全に消えた時、一人の男性が立つていた。確か、ノイズさんだつけ？

あー、良かつた。やっぱり入つて『召喚』出来るんだ。そういうや、僕も召喚されたんだつけ。

「公園…？何だ、メアリか。何か用？」
「はい。指名手配犯の逮捕に協力して下さい。全ては皇子様の為に」
「そういうことなり。…あー、めんどくさい」

ちらりと猫モドキを見る。

猫モドキは「くつと頷くと、走って逃げた。

……？走って、逃げた…？

「えつ、ちょっと、待つ…」
「随分と、余裕じゃありませんか！行きますよー！」
メアリさんが叫ぶ。

ええ。来ましたね、ノイズさんが。
しそうがない。僕の平穏の為に、やるしかないか。

そつと、僕は自身の影に手を伸ばす。
ズブツ…と手が影に呑まれ、そしてまた出た。その手には黒い本が
握られている。

けどね、描く暇が無いの。

今避けているのも奇跡の様な、怒涛の蹴りが来るんですもの。

「ちよつ、まつ…

不意に足元が光った。
本当に、待つて下さい。

水が僕の身体を簡単に宙へ放る。
あー、この先が容易に想像出来るよ。どうせ、蹴り落とされんだろう？

それは嫌なので、指を噛む。黒い血が溢れだす。
そして、どっちが早いのかな。

素早く本を開き、田に入った陣をなぞる。
と同時に、ノイズさんは人間とは思えない脚力で僕を蹴り落とした。

『跳ね返しの陣』と、あともう一つ。

この本で、唯一『魔眼』で構成可能な陣。

派手な音が響き、砂埃が舞う。

二匹の蝙蝠が僕の周りを飛んでいた。

何とも愛敬のある蝙蝠で、デフォルメで描かれたかのような赤い目
と三日月の様な笑みを浮かべた口。

女子高生とかが鞄に付けていそうな奴だ。

『クケケケケッ！』跳ね返しの陣』か。案外、えげつないな。影の
王

だが、どうにも口が悪いんだよね。
何とかならないのかな。

先程、派手な音を響かせ地面に激突したノイズさんの姿を見て、流
石に反省。

呻いていることから、辛うじて息はあるようだ。良かった、良かつ
たつて…そういう問題じゃないか。

「つーか、影の王じゃないから。僕に中二病設定を押し付けないで
くれ

『クケケッ！闇の統治者の方が良いかあ～？』

「そつちの方がカツコいいけど、却下。僕は普通の高校生です。ちよつとい、お馬鹿な」

なんて呑気な会話をしていたら、小さなメアリさんの悲鳴が聞こえた。

いや、悲鳴と言つよりは息を呑む音と言つた方がいいかもしない。

「ノイズつ…。流石ですわね、勇者の力をはこれ程の…しかし、その姿。まさか、悪魔と契約した人がいるなんて…」

自嘲の様にメアリさんが顔を歪めて言つ。

止めて下さい、皆して中一病押し付けるのは。

『クケツ！ しうがないだろ、本当のことなんだからやあー。だが、まだ本契約はなされていない。

まあ、頑張れよおー馬鹿な勇者』

「折角、『召喚』してやつたのに、何でお前しか出て来ないんだよ『それは、契約が完全ではないからだ。召喚の陣。それは門である。契約が鎖、魔力がその鍵とするならば、今の仮契約者であるお前は門を半開きにしか出来ない訳ダ、クケケケツ！ バーカ！』

ウゼー、この蝙蝠達、ウゼー。今すぐ送還してやる。

ちなみに、語尾を伸ばすのがアイゼル、『ダ』とか必ず最後が片言になるのがヘブライ。

蝙蝠のくせに、中々カツコいい名前だ。…見た目にあつてないけど。『何処の世界に、闇だか影だかの力を借りて世界を救う馬鹿な勇者がいるんだ』

『救いは破壊。破壊は救い。同列にして異質。異質にして同列。お前はそう言つが、この世界に一人程その馬鹿がいたゾ』

マジでか。

『一人は一番初めの勇者。少し歳をとつた若い男だったゾ』
『二人は、勇者でない唯の男だ。だが、素質が無い為に、命を落とし、その息子が我々とはまた違う方法を用いて混沌を世界に生んだ』

「えー。最初の勇者は大人なのか。

てつくり、僕らくらいの歳の子を選んでいるのとばかり思っていたよ。

いや、それを僕が言つても説得力の欠片もないな。何だかんだで僕も一応は成人だし。

けどさ、ゲームとかつてそういうお年頃の少年少女ばかり召喚しない?

いや、大人だと盛り上がりに欠けるつていうのもあるかもしないけど、それはそれでちょっとおもしろそうだとか思つてみたり。

にしても、さつきからメアリさんが何も仕掛けて来ないのは何故? ちらりと見てみると、メアリさんは何やらぶつぶつ呟いている。長い茶色の髪が魔力で、浮かんでいた。

「…何かさ、ヤバくない?」

『クケケツ! バーカ! 気付くの遅せー!』

『あんなに魔力と時間を消費するつてことは、勝負に出たナ。ほら見ろ、あの陣。お前が何時も描く様なへなちょこの小さい陣でなく、結構大きな陣だろウ? ありや、そうとうな大物を『召喚』するぜ!』
「いちいち余計なんだよ、お前らはーお前達、何とか出来ないの!?

ぴたりと蝙蝠達の動きが止まった。

そして近くにあつた僕の後ろの木に止まる。

『出来るゾ!』

『だが、少々…いや、もしかしたら死ぬぜ…!』

『いや、だったら止めとく…って、何やつてんの?』

ボオ：と木に止まる蝙蝠達の口が赤く輝きだす。

待てえいっ！誰が許可したよ？つーか、せりげなく僕まで巻き込もうとしてないか？

嘘だよね？頼む、嘘だと言つてくれ。

『ちなみに、嘘じゃないゾ』

『潔く死に晒せ～え』

黙らつしゃい。

「何、召喚主をぶつ殺すわけ？仮にも契約者だし、召喚主よ？僕殺すでない」

ノンノンと手を振る。

蝙蝠達は、クケケッと笑った。目もいつの間にか二回三回で盛んでいる。

『ヴァルベル様の言い付けだゼ！』

『何としても本契約！じゃないと俺達に明日はない！…』

お人形、お人形と叫ぶ蝙蝠達を一瞥する。

ほほづ、読めたぞ。ヴァルベル様つていう吸血鬼の女王様がいるん

だけど、そいつに抹殺命じられたのか。出来ないと、めでたくお人形デビューとな。

ちなみに、ヴァルベルというのは、僕がこの蝙蝠達の代わりに召喚したかつた悪魔じやないけど闇の魔力を持つ吸血鬼のお嬢様。とうか、女王様。まあ、それは次回ら辺に話すとして。

僕は思いついてしまったのです。

なーんだ、簡単じゃないか。つまり、この状況を打破するには…。

「『送還』つ…やーい、バーカ！」

蝙蝠達の足元（？）に陣が浮かぶ。

蝙蝠達の姿が陣に吸い込まれる…のを蝙蝠達は踏ん張つて耐えた。

は…？耐えた？

「マジかっ！？『送還』つて踏ん張つて耐えられるものなの！？掃除機とか、トイレの比じゃねえんだぞ、多分！」

メアリさんは詠唱が終わったのか陣が盛大に光った。白い光が辺りを照らし、天使だかよく分からぬとにかく羽根の生えた人型の生物が白い光線を放つ。それに、蝙蝠真っ赤な光線が発射されるのは同時だった。

「ううそん

退路も進路もないな。ついでに時間もない。どうしよう。

つーか、メアリさん鬼だな。ノイズさんに当たるぞ。

…と思っていたのだが、ノイズさんの足元に『瞬間移動の陣』が浮かぶ。その姿はすぐにかき消え、メアリさんの横に現れる。

いや、別にノイズさんが居なくても困りませんよ。
もし、蝙蝠達の力が強ければメアリさん達が塵になる。メアリさん
の力が強ければ蝙蝠達が塵になる。
それは少し可哀想だ。

「一か八か。もし当たつたらゴメン。」

「『跳ね返しの陣』レボリューション!」

唯の二つ重ねた陣だけど。

一度は言つてみたかったんだよね。

両手に『跳ね返しの陣』が浮かび上がる。

ちと、大きさが小さいのが心もとないが、そこは勇者の底力でなん
とかなつてほしい。

まあ、仮に失敗したらこの両方向から来る攻撃により僕は木端微塵、
塵など残れば良いねなんて具合に消滅しかねない。…それはとても。

「怖つくな～いつー！」

正直、足ガクガク。冷や汗ダラダラ。

ちくしょー、恐いじゃないかー！ いつもの癖で肩を抱きたいのだが、
そんなことをしている暇はない。

二つの光が僕目掛けて直撃。

メアリさんよ、連行とかのレベルじゃないよね？ 最早殺す気だよね
？ 死体を連れ帰るつもりだね？

「いでてって……骨、折れる！ストップ、待つて、タンマー！」

『逝け』

「だから…！」

ホントに、痛いんだってば！

「いい加減にしろッ…！」

魔眼が一瞬光る。

瞬間、目に激痛が走った。

身体の底から黒い魔力が溢れると同時に、空に、一本の黒い光の光線が走る。

初だと思つ、逆ギレして形勢逆転する勇者。

蝙蝠達はそそくさと陣に吸い込まれて行つた。

ちつ…、逃げられたか。まあ、いいや。そんなことより。

「ほんと、ウチの子達がすみません」

未だ状況が掴めず、呆然とするメアリさんを余所に僕はノイズさんに駆け寄る。

僕だつて状況つかめてないし。…まあ、当初の目的とはズレているのは分かつてゐるけど。

手はボロボロだつた。

変な方向に折れ曲がつてゐるといつべきか。腫れあがつたかのよう
に赤い。実際、腫れてるのかもしれない。

『治癒の陣』でノイズさんの回復を待つ。

奇妙な沈黙が続いた。

「おーい、優真！生きてるかー？」

カインの声が遠くから聞こえて来たかと思つと、茂みから猫モドキとカインが飛び出してきた。

後からノワールや、教官、ノーベルに吉田魔王様が続く。

「生きてるよー。どしたの、皆。お店、放棄？」

「どうしたものかしたもないだろ。さつきの轟音と、黒い光を見た瞬間全員興味心身に外に飛び出して行つたよ」

「優真様、田から血が出てますわよ！大丈夫ですかー？」

ノワールがあたふたと慌てる。

地面に座り込む僕に、猫モドキがぬつと顔を出し、田から滴る血を舐めてくれた。

「お前、よくも逃げたな」

わしゃわしゃと猫モドキの頭を撫でてやる。その手に嘘、息を呑んだ。

『猫モドキは、助けを呼ばうとして去つたんだが、誰も言葉が分からなくてな。ノーベルがそれに気付いて事の次第を聞いていたら、外の方で轟音が聞こえてきたかと思うと、黒い光線が空に向かつて放たれていたので慌てて向かつたという訳だ』

「どうか、お前。その手はどうしたんだ？」

「手荒れとか…？そんなことよつ…ぐふえつ」

容赦ない教官の蹴りが、胸にヒット。

ブーツで蹴るのは止めて下さい。先の方が固いので痛いんです、結構。

「先に帰るつ！」

教官はすたすたと元来た道を歩き出す。

「はあ……それじゃあ、帰りましょうか。今日は閉店ですね……全く人騒がせな」

ノーラさんが、地面に移動の陣を描き始める。

未だ戸惑いの色を浮かべるメアリさんに、とりあえず言つておく。

「……お相こつてことで、良いでしようか……？」

その物言いに、メアリさんは苦々しく微笑んだ。

「……そうですね。いえ、勝負は彼方の勝ちです。だからまた、挑戦しに来ます。そうですね……明後日くらいに」

「そりやまた、随分と急ですね」

「その時には、穩便に飲み比べとか、食べ比べにしましょう。皇子も連れて来て。皆で」

ふふふ……と笑いながらメアリさんは素早く陣を描き、ノイズさんと共に姿を消した。

「結局、何がしたかつたんだろうな……？」

「それを言わないでよ。怪我した僕が馬鹿みたいだ」「大丈夫だ、お前は馬鹿だから。こら、動くなつて」

ノーラさんが陣を描き終わり、白い輝きが僕を包む。

鳥肌が立つたのはきっと、先の事がトラウマになつてているからかな。

「……まあ、昨日の敵は今日の友つてことで、良いんじゃないの

「ホント、骨折り損の草臥れ儲けだな」

返す言葉が無かつたのは、言つまでもない。

第一一十七話 説明しよう

一難あつて、夜。

救急箱を抱えたまま仁王立ちして待つ教官に説教付きの手当てを受けてから、風呂に入る。

部屋に戻る途中、ふと思いつき立ち、陣を思い描く。田の前に鏡が現れた。

つい、いつもの癖で、背伸びしながら鏡を見てしまう。

そこには普通の何処にでもいるようなパジャマ姿の青少年が映っていた。

「身長伸びないかなあ」

『無理だね』

ぐにゅりと鏡に映る僕が歪んだ笑みを浮かべる。

それを見て、僕は長い溜息をついた。

その反応が面白くなかったのか、鏡の中の僕は渋面を浮かべた。

うーん、僕そんな顔したこと無いから流石に様になつてないな。

「僕が言えることじやないかもだけど、君たちは自重と言葉を知つてゐるかな?」

もう一度、短い溜息。

幽霊が見えて毎日騒動に巻き込まれる主人公の如く、恨めしく鏡を見る。

それがあざ笑うかのよつて、答えたとして黒い手がぺたぺたと鏡に映る僕の前に現れた。

思わず尻もちをついた僕に、通りかかった猫モドキが不審者を見る
様な目で見て鼻で笑う。
そして通り過ぎて行く。

うわー、猫に馬鹿にされたよ。

「…仮にしても、この契約に期限あるの？」

『んー、生きてる間は有効。仮なら寿命を迎えるれば地獄に墮ちる』
ではない。まあ、本契約しても地獄には墮ちないけど『

「そりゃ良かつた。何にせよ、もう死ぬのは懲り懲りだ』

返事はない。唯の鏡の様だ。

『つまりは、一回死んだのか』

「何言つてんの。それで悪徳高利貸しの様に契約押し付けてきたの
は…」

そつちでしょ。という言葉は、唾と共に呑み込まれた。

鏡には、気まずそうに相手の言葉を待つ僕の顔と、恐らくはお見舞
いに行く途中だったと思われる皆様方の堂々たる顔触れが映つてい
る。

罪人の如く、教官とカインに挟まれ連行された。

吉田魔王様とノーアイさんが先に僕の部屋へ上がる。

消えゆく陣には、まだ人が映つていて。

鏡に映つた僕は、とても楽しそうに口元を歪めていた。

「…と言つても、何処から話せば良いのやう」
「もちろん、全部ですわ。優真様」

いつもは味方をしてくれる筈のノワールも、引き攣つた笑みを浮かべて僕を見る。

ドアは完全に立ち塞がれ、円を描く様に中心に座る僕を皆が囲む。

僕は息を大きく吸い、吐き出す。

そして、いつもはしない様な真剣な面持ちで話し始めた。

「今の僕は… そう、幽霊みたいなもので、この姿は魂の残滓といつべきかもしれない」

「本当に死んだのか？」

カインの問いに、僕はゆっくりと頷く。

「ああ。実は僕、前世の僕の未練を消し、成仏する為にいる浮遊霊みたいなもので、此処に召喚されたのは偶然ではないのかかもしれないし、そうでなくないかもしれない」

「どっちかにしろよという突つ込みは置いておくとして、何で死んだだんだ？お前の前世とは一体…」

組んでいた腕を解き、僕はしつかりを前を見据えた。

「実は僕…」

「実は…？」

「ぐつぐつと唾を呑み、一呼吸置く。

「実は、僕…前世はノワール…ぐあつー。」

教官の蹴りが脳天に直撃する。

一番のオチが台無じじゃないか。

カインはと言えど、状況が呑み込めており、口をはの字にしていたが教官の蹴りを食らった僕を見て現実に引き戻されたらしく、怒りに拳をぶるぶると震わせていく。

「結論の前に、僕がノワールの身代わりになつて死んだのは皆納得してるよね?」「まあ…寒感はないが」

「結論から言えど、僕も何で生き帰れたのか不思議なんだよね。だから、ここに聞いてみよつ」

僕は立ち上がると、自分の影に手を置く。
床に触れる筈の手は、そのまま影に呑みこまれる。

影から手を戻した時、その手には例の如く黒い本が握られていた。

『まさかと思うが、契約したのか…』

「あれ、知り合い? そういうや、何時ぞやかにこの本見て、眉間に皺寄せたもんね。

まあ、結論から言わせてもらひつど、この本が助けてくれたんだよ。仮契約とか高利貸し並みに達の悪いものを結ばされたけど」

「唯の本じゃないか」

カインがじろじろと本を見る。ノーベさんは氣味の悪いものを見るかのような目つきで本を見ていた。

「『悪魔の知恵』、『禁書』…色々、呼び名があるらしいけど、一応『沈黙の書』って僕は呼んでる」

その場の空気がいきなり変わる。

口調と声色一いつで、こんなにシリアスになつたことが、かつてあつ

ただろうか。
多分、無い。

『契約が出来たといつことは… そつか、悪運強いな
「褒め言葉と受け取つておいつ。別に、僕としては不満はないんだ
よ。最初から』

「…何やら不穏な空気を感じるんだが…？」

「あつ、大丈夫。唯の演出だから。ほら、たまにはシリアスがあつ
た方が良いじやん。
僕が『沈黙の書』の主を召喚する力はまだないから何とも説明しづ
らいけど、とにかく僕は一回死んで、復活するには仮契約が必要だ
った。たつたそれだけの話」

簡単にまとめて終わらしあつとする僕に、ノーアさんが呆れた様な声
で言つ。

「勇者が悪の力に頼つてどうするんですか」

「その点においては多分問題ない。…と思つ。良いじやん、黒魔術
が使える主人公。憧れない？
…そう言えば、『召喚』を補強する魔具とかないの？雪ちゃんにだ
つて勇者の剣があるんだよ？」

僕にだつて僕専用の武器があつても良いく頃だと思つんだけど。…あ
あ、ちやんと『送還』出来る奴ね

「優真様、『送還』は召喚主であれば、誰でも可能ですよ？」

「いや…反抗が起きてね。還つてくれなかつた。あいつら踏ん張つ
て耐えたんだよ…。出来るの、そんなこと…？」

必死になつて言つ僕に、教官は無言で一発殴る。

「そういうことなら、自分で作ればいい。…そんな事より、もつと
も大切な事を忘れていいのか？」

大切な事…？

にしても、何故そんなに怒っているのかな？教官。僕、彼方の機嫌を損ねる様な自爆行為しました？

「あー、魔力魂のこととか？」

「それもあるが、今はもつと優先させねばいいことがあるだろ？」

カイン達も首を傾げている。

僕にも分からんよ。

「……ギブ」

「明後日に何が起ころる？」

明後日…ねえ…。

「皇子達の『来店』が起りますね…まさか、大切な事ってそんなこと？」

「最重要事項だ。あんな奴らと同じ空氣を吸つ」と自体おかしいと思わんのか、お前は！？」

「まあ…そろかもされませんけど。そこは我慢して下さい」

そういうや、そんな約束をしたなーとか無責任な事を思いながら、ふと思つ。

いつもの展開から行くとや。

絶対、それだけじゃ済まないよね？

第一一十七話 説明しよう（後書き）

次回からはもつとほつちやける予定。

第一十八話 召喚？形成？結果は幽靈

残暑もようやく影も形もなくなつたある秋の朝方。

悲鳴…といつよりか奇声が響き渡り、近くの鳥達が驚いて飛び立つ。

「ちょ、ちょつ、ちょっと待て！落ち着いつへ話しあおう…！」
「というか、あいつ等話せるのか！？」
「問題ないっ！一応、口があつた！」
「そもそも、あれは本当に口なのか！？」
「知らんっ！」
「開き直んなっ！」

僕の背丈くらいまで生い茂る草木をかき分け、ひたすら走る。
時に後ろを振り返り、加速する。
走つてどれくらい経つだろうか？額には玉の様な汗が浮かび、走る
振動により地面に吸収されて行く。

えつ、今、何をやつているかって？ちょっと早い持久走？
それだつたらどんなに良い事か。

そうだなあ…リアルな鬼ごっこでとこるかな？
ある意味、青春だね。…あつ、違う？

まあ、毎度恒例の「挨拶」と「ことで」で。

田中優真。状態異常『混乱』。装備、木の棒。主人公と、勇者やつ
てます。

そんな優真と、愉快な仲間達を紹介しておこつ。
^タレ

カイン・ベリアル。状態異常『混乱』。装備、折れたというか、溶けた剣。

猫モドキ。状態異常『混乱』。装備（？）、羽根。

「何、アレ？というか、何で逃げてんの！？僕ら！？」

「そりや、アレだ！生理的に受け付けないと、追いかけて来るからだなつ！」

「案外、フレンドリーかもよつ！？」

「なら、今すぐ立ち止まって餌食にでもなれつ！」

何十回も後ろを振り向くが、状況は何一つとして変わらない。ムンクの叫びの様な、ボロボロの黒い布を纏った幽霊が巨大な鎌を持つて追いかけて来る。

そういう、何でこんな事態になっているんだっけ？

僕は、ふと憎々しいほど蒼い空を仰ぎ、思いに耽る。…要するに、現実逃避だけだ。

早朝。

欠伸をしながら『移動の陣』で店から少し離れた人気の無い野原に来ていた。

「いやー、大収穫だつたね。猫モドキ。後は、これが本物であることを祈るつ

僕は地面に落ちていた木の棒を装備し、猫モドキはぎつしりと物が詰まつた風呂敷を背に抱え、羽根を広げて僕の傍を飛んでいた。

何処に行つて来たと聞かれると、非常に困るのだが敢えて答えるとすれば、闇市に行つてきました。

うん、いつぞやかに行つた闇市ね。

こんな早朝だから、誰も気に留めないし、寝静まつていた。誰も外に居ないの。ちょっと、怖かった。闇市国民もいないから余計に気味が悪かった。

何しに行つて来たのか？

正直言うと、僕達ドロボーしてきた。あつ、良い子も悪い子も真似しないでね。

罪悪感も、もちろんあるよ？ほんの少し。いやー、だつて僕国内指名手配の悪人だよ？故意じゃないけど。だったら今更そこに盜難が加わつても問題ないよね？

「由香子様は後悔は役立たずだと言つし、後ろは振り向かないのが僕の主義だ。さて、やるか

ごりごりと木の棒で陣を描いて行く。

猫モドキは、風呂敷包みを解き、陣の中央に物を並べて行く。

今描いている陣は、五連星陣と呼ばれる陣で、中央に小さな陣を一つ。それを囲むように三つの中へりいの陣を描き、さらに四方に一周り大きな陣を描く。

作業は十分程で終わつた。

満足げな笑みを浮かべて陣の中心に立つ。

そして、自身の影から例の書を取り出し、最終確認。

「多分、大丈夫だと思つ

「――アツ――」

「あー、そうだね。武器が出来ると良いけど、絶対、吉田様関連の物が出て来るよね。

それはそれで楽しみだ。銅像とかだったら、店の前にでも置いておく?」

そんなことを笑いながら話し、小刀を取り出すと、肌に滑らせる。黒い血が滴り、地面に…正確には陣に吸収される。

ワクワク。

だが、反応なし。

僕と猫モドキはオウムのように首を傾げる。

「量が足りなかつた…とか?よし、もう一度…」

「よつ!――こんな朝っぱらから何やつてんだ…って、大丈夫か!…?」

いきなり声を掛けってきたカインに、思わず手が滑り思つたより深い傷になつてしまつた。

あらら、大変。吉田様初登場以来の大量出血だ。こんなに切れ味良かつたつけ?

猫モドキが心配そうに僕を見ている。大丈夫だよと声を掛けて陣を再度見た。

陣は一瞬光つた。

そして、黒い粒子を発生させる。

「何、召喚するつもりなんだ?」

「いや、『召喚』じゃなくて、『形成』かな…。ほら、僕専用の武器、あつた方が良いじゃん

「案外、コントローラーが出てきたりしてな」「間違いなく最強になるよ」

黒い粒子は煙へと変貌を遂げる。
綺麗だが、気味の悪い。そんな奇妙な感覚が鳥肌を起こす。

「おいおい、火の無い所に煙は立たずだぞ？」

「いや、そんなんたしかで……。燃えてるわけじゃないし……」

何だろね?といつ言葉は、喉の奥に引っかかって出て来なかつた。
猫王(デキ)は羽根をムダ、苗(アサガホ)浮(ハラフ)してゐる。

心なしか、その毛は逆立つていた。

陣から発生した粒子は、煙となり、音を発し始めた。

悲鳴の極が思ひ出しへなる

そう、それは次第にはつきりし、完全な『声』を発していった。

粒子は煙となり、煙は、良く分からぬ生物になつた。
僕の最も嫌う幽霊と言つ名の死物に。

「それがあのやつーーー。」

悲鳴が秋晴れの空に響く。

「力、カイン…！あれ、斬れる？どっちでもいいから退治してくれ」「俺は陰陽師でも何でもないっての。まあ…行つて来るか」

腰に差していた大剣を引き抜くと、幽靈にえいつと振りかざす。ずかずかと幽靈に近付く力ain。

空を斬る音がして、パキンッ…と金属が折れた乾いた音がした。
ゴボゴボと鍋の煮え立つ様な音がしたかと思つと、幽靈が活発に動き始める。

カインは暫く立ち止まつて、すぐさまひさしへ逃げて来る。
大量の幽靈を引き連れて。

「ヒーチ、来んなつー！…！」

「んな」と言つてゐる暇無いぞ！…ビーしてくれんだ！剣折れたというか、溶けたぞ！…？」

ほれつと言ひながら折れた剣を見せて来るカイン。

「あの幽靈が暖炉だとすると、お前のやつた行為は火に薪をくべる」という最悪な行為だつたんだよ！…」

「お前がやれつて言つたんだろ！」

その時、僕らの前を何かが駆け抜けて行つた。

飛行機雲の様に、光の軌跡が空に残像として残る。

「こんな、早朝から、流れ星…？」

「プラチニ」、オンは、光の、早さで、飛べる、らしい…」

光の速さというか、光そのものじやねえかつ！

といつか、必死だな！

「…見る。必死にも、なるぞ」

カインが後ろを見る。

僕もスピードを緩めない様に氣を付けながらも振り向く。

そこには、曇り空になれそうなくらい無数の幽霊が追いかけて来ていた。

「何、あいつ等！雨でも降らす気！？それともテル坊志願者なのか！？」

「雨は雨でも血の雨だぞ。鎌持つてゐる奴が、テル坊なんてなれる訳ないだろ。寧ろ、俺達がそうなるのかもしね。そうだ、お前『送還』やつてみる。あの陣から出てきたってことは、逆も然りだ」

「な、成程。『送還』つ

立ち止まって後ろを振り向く。
そして、全力で走りだした。

「反抗期じゃねーかつ！」

「何をどうしたらあんなものが出て来るんだ！？お前、一応は召喚主だろ」

「多分、契約が中途半端だから、奴らを拘束といふか、従わすの、出来ません、みたいな、ことじやないの？」

「じゃあ、ずっと走つてろってことか！？」

体力は既に限界に近い。

足が縛れて転ぶのも時間の問題だらう。

「おーっと、足が滑つた！
「は？…つてうわつ！」

なので、カインを囮にします。

死にたくないんで。大丈夫、君の死は無駄にならない。…はずだ。

足を引っ掛けでカインを転ばす。

見事にこけて、生い茂る草むらの中に姿が消える。

幽霊の内の一人がそれに気付いて草むらに姿を消した。

だが、残り何百という幽霊たちは僕目掛けて一直線で「ざわこます。

「ちつ…奴ら、よくもカインをつ！彼の無念は教官が晴らしてくれ
るぞ…つて、おわ！」

誰に向かつて言つてゐるんだか分からぬことを言つてゐる最中に、

僕まで倒れた。

別に足が縛れたとか、そういう理由でもなく、石こうでつまづいた
わけでもない。

じゃあ、何か？

「いてて…何だよ、もつつ」

足首を誰かの手が掴んでいました。

でも、叫ばないよ。生だから。

「何だ、カインか。よく、無事だつたね」

匍匐前進ほふくぜんしんで進んできたカインは、何も答えない。

「さて、どうしようか。すっかり囮まれてしまつたわけだけど…そ
ろそろ手、離してくれない？

立てないんですけど…つうわああああああああああああああ…！」

だって、いつものカインじゃないんですものー。

何か、いきなり死人チックになつてますよ？

何それ、生きてんの？死んでるの？乗り移られてんの？
トリック・オア・トリート。何もあげないけど、カインを返しなさい。

「どっちでも良いけど、どっちかにしろよ……怖いじゃないか？」

まあ、そんなわけで、次回に続く。

第一十九話 困った時は召喚を

「ちよ、ちよ、ちよと待て！落ち着いて話しあおいつ！」

同じようなセリフを少し前に言つたなとか思いながら、またひたすら走る。

後ろを振り向けば、カイン（？）と幽靈達が追いかけて来る。

あー、それにしても。

カインは乗り移られたのか、死んだのか、態とああいう演技をしているのか。

どれも有り得そうで怖いな。

乗り移られたにしても、絶対やり取りがあつたと思うんだよね。

「はい？…ってうわー！」

そう、この時。

幽靈の一人が駆け寄つたじゃない？

実はさ、案外フレンドリーな奴で、カインを心配してくれたんじゃないかと思うんだよね。

よし、名前はフレディ（仮）にしよう。

フレディ曰く。

「転びましたけど、大丈夫ですか？」

「うわ…喋れるのか？」

驚く力インに、フレディは「いつ間に違いない。

「唸ることが出来るんですから喋れますよ」

「成程…。にしてもあいつ、よくも餌にしようとしたな…」

「復讐、手伝いましょうか?」

「「」から死亡フラグに突入したのか、二人のドッキリ大作戦なのか…。どちらにしても達が悪いな」

「よく分かりませんが、一応私の名前、フレディになってるんですね。やけに幽霊というか、私達をフレンドリーな設定にさせようとしてますね」

「そうでも考えとかないと、やつてけないんだよ!…って、君、何か速くない? そんな、足速かつたつけ?」

肩を並べて走る偽力インを見て、目を瞬かせる。偽力インは気にする風でもなく、平然と答えた。

「はい。鎧脱きました。重かつたので」

「成程。その勢いで還つてくれないか? 君がリーダー格だろ」

「いえいえ…皆、下つ端です。我が本の主に、大總統から御忠告を頼まれまして…。驚かしついでに」

因みに大總統は、僕が持つてている『沈黙の書』の一 番偉く強い本の悪魔。

大總統と呼ばれ、親しまれている。

「此処の住民達は、何故かそういうのに親しみを持つんだよね。 吉田魔王様然り、大總統然り。」

「選択の時が来た。ということにして…」

「ごめん。話内容と、君の今の行動がいまいち分からない。攻撃するのか、伝言伝えるのかどっちかにしてくれ」

偽力インは普通に話しながら魔方陣で僕を消しかけようとしてくる。話しながら、攻撃なんて器用だな。フレディ。

「だから、自分が如何に無力だと思い知れ…だと何か何とか。他にも何か言ってたけど、忘れました」

「伝言はしつかり覚えとこうか、フレディ」

「実は僕、ディスピアという名前があるとか、ないとか…」

「そういう事は先に言おう！？フレディより全然カッコいいじゃないかつ！」

「いや…折角主に名を貰つたんで、改名しようとかと…」

「止めてっ！からかわれるから、絶対！」

それじゃあ、さよなら～とフレディことディスピアは姿を消した。ガタンッ…と真っ黒な杖が落ちる。

如何にも魔術師が使つてますよーみたいな、人を呪い殺せそうな杖だ。

先端が三日月型になつており、どういづ原理で浮いているのか不明だが、赤い水晶の様なものがある。

「あー、杖、出来たんだー」

「何が、あー、杖、出来たんだーだよ！人を餌にしゃがつて…」

「良かつた良かつた、カイン、乗り移られてただけなんだね。一件落着じやない」

カインが重い溜息を吐く。

そして、呆れたよつに僕を見た。僕もドヤ顔で返す。

「…何が、一件落着だ。何で、寝起き早々囮まれてるんだ？」

「ふつふつふつ…。僕もさつき気付いた。皆さん、ミケガサキ兵だよね?…」臨終済みの

追いかけっこで全然視界に入らなかつたけど、ずっと息を潜めて草原に隠れていたのは何となく分かつてた。まあ、確認のためカインを転ばせてみたんだけど。

「じゃあ、何故、死体兵が動いてんだ?お前みたいに黒魔術が使える魔術師はいないぞ?」

「…にしても、よく悲鳴あげないな。見直したぞ」

「あまり僕をなめないでくれたまえ。怖くて叫ぶことが出来ない。それ以前に、足に力が入らない」

「今すぐ前言撤回して、見下してやる。バーカ」

死体兵さん達は、剣を握つてじりじりと近付いて来る。何で朝からこんなに怖い思いしなきやいけないんだろう。

「…死んで、動いてるつてことは何らかの術が施されてるわけだよな。それ以前に、俺達の所に来てるつてことは、当然吉田様達のところにも行つてる訳か」

「『魔眼』で見る限りは、特に術を施された訳じゃないみたい。けど、中心に魔力に似てるけど少し違う…いや、混じつてるのか。確かに力の強い結晶がある。それが動かしてるんだね。桑原、桑原…。そんじや、杖のでき具合を確かめるとしますか」

とりあえず、もう少しで手が届きそうなくらい近付いてきた死体兵を杖で突く。

場所が悪かったのか、勢いが強すぎたのか。…もしかしたら、両方かもしれない。頭がもげた。

「『さやああああああ！』とれた！ひいいいいい…動いてる！」

「煩い！頭なんぞ突くからそなるんだ！死体なんだからそなるだろ！」

「分かつてんだつたら、言えよ！夢に出てきたらどうしてくれんだ！」いや、絶対に出るだろ！」

「ポロつて！あつさつと！案外、纖細だつた！敵だけど何が、ごめんね！？」

「ボウッ…と杖の先端の玉が淡く光る。

不気味で、綺麗な赤色に。生命の色に。死の色に。

「『ビィーネの業炎』…！」

カソンッ…と杖を振り上げ、地面を突く。
そこから魔法陣『ビィーネの業炎』が発生して、辺りを火の海へと
還した。

死体兵も灰となり、火の粉と踊り狂つて何処かへ消える。

あー、真つ赤だわー。

「おい、馬鹿」

「へい、何でしょ？」

「どうやつて此処から脱出するおつもりで？」

辺りは火の海。

当然、僕らもその中にいる。つまりは、閉じ込められてる訳でして。

「飛んでみるとか…？」

「天国までか？よし、今すぐ逝け。そして天使か何か呼んできて俺を助ける」

その言葉に僕は不敵に笑う。

そう。僕の十八番があるじやないか。

「それじゃあ、困った時の吉田頼みと行きまさか」

第三十話 猛獸使いに注意を

三嘉ヶ崎、田中宅。

「…此処が田中さんの家ですか。案外、殺風景ですね」「いえいえ。ついこの前、そうなったんです。あつ、ソファー無いですけど椅子はあるので、そちらに座つて下さい」

三浦春菜は辺りを物珍しそうに見物し、机の上に置いてあるゲームソフトを取り、声を上げた。

陽一郎は気にすることなく、台所で緑茶を出すべきか紅茶にするべきか迷っていた。

「『勇者撲滅』じゃないですか！私達の世代では一部に人気がありますが、最近では結構流行っていますよね」

「『勇者撲滅』。運命変換型革命RPG…ね。それ、捨てに行く予定なんですね。」

壊れていますし…全ての元凶は、これですから。あの、緑茶と紅茶どっちが良いですか？」

「ほうじ茶で」

にこりと笑う春菜に、陽一郎は困った様に頭を搔いた。

「火の七日間を俺はやるー」

「田覚めての第一声がそれか。いきなりどうした？まあ、お前なら不可能ではないな。意気込んでる時に悪いが、最後は餓死だぞ？」

陽一郎さんにも怒られるし

「あー、その心配は無いけど…それでも嫌だな。止めとく

げつそりと僕が言つと、呆れた様にカインは溜息を吐く。

現在、真夜中。ミケガサキ王国上空です。いやー絶景かな、絶景かな。

因みに、絶望的景色の略だから。

赤い龍の背に乗つて…なら良いんだけど、僕は驚掴みにされてるんです。

カインは服が引っ掛けつてぶら下がり状態。

黒い血がぽたぽたと生氣のない死に絶えた王国へと落ちる。

現在のこの状態を含め、何故こうなつているかは僕も理解不能だ。

なので、聞いてみる。

「カインよ。僕等は何故、栄えあるドラゴンの足に驚掴みにされているんだい？」

「何だ、覚えてないのか。まあ、無理もない。ならば振り返つてみよ

「うわ

僕は後ろを振り向く。

ドラゴンの鉄臭い固い鱗が見えた。

「何も無いけど…何かあるの？」

「ねえらことこつ意味でだつたんだが…」

「あのセ、セーラー、アーラゴンに驚愕されながらも、いつまでもボケられたる僕らつて素晴らしいこと思つ

まあ、そんな訳で記憶をおさらいしてみる。

「それじゃあ、困った時の吉田頬みと行きますか」

自信満々といつが、好奇心で僕は無い心何が出るかなと楽しみに陣を描き、杖を振りかざした。

「猫モドキとや、杖じゃなくて吉田魔王様の銅像をひそかに期待してたんだけど、外れたなあ」

「良いじゃないか。これで、『沈黙の書』とやらを思ひ存分こき使える訳だろ」

「うーん、どうだろね…。あくまで、幅を広べしに違いないからな…。まあ、フレディくらいは喰べるかも」

そう、確かにそんな会話をしても杖を陣に付けようとして…どうなつたんだ？

「あの後、杖振りがせしただろ？こぞ、『呪喰』つて時にアーラゴンの奇襲が来てだな。お前の頭を爪でガツーンとしたわけだ」「ガツーンじゃないよー音は可愛らしこけど、内容としては恐ろしいじゃないかー普通、頭吹っ飛ばないー！？」

「良かつたな。召喚されて肉体が強化されてなかつたら、お前が頭を吹つ飛ばした死体兵の様に何処かへ飛んで行つていたに違ひない。証拠に、出血してゐるだろ？」

「骨まで強くなるのか…。その勢いで伸びろ、骨
「最後まで聞け！」

「煩せえ…」この猛獸使いドグラ様の鞭の餌食になりたいのかいつ！？」

「ドグラ様の無知の餌食になる…？馬鹿同士ならその攻撃の効果はいまひとつだ」

黒い紐の様なものが頭にぶち当たる。そう、ちょうどガツーンしたと思われる所に。

ボタボタと止まつていた血がまた流れ出す。灯りの無い國の中へと吸い込まれて行く。

それを見届け、そつと人差指を動かし円を描く仕草をする。幸い、氣付いていない。安堵の息を吐くと、空に出現した杖をそのまま地へ落とした。漆黒の杖は、同じ死の色を纏う國に吸い込まれて行く。

「いででつ…！おまつ、キレるの早つ！氣性荒つ！」

「殺されるぞ、お前」

カインがド突く仕草をする。

そして、小声でMなのか…？と呴くのを僕の耳は聞き逃さなかつた。

「いやいや、違うから。そうかもしけないけど、取りあえず違うから。えーと、ドグラ様ー！質問宜しいですかー？僕達、どうなつちやうんですかねー」

「勇者は女神様の所へ。それ以外はキャンディの餌となる」

あつ、律儀だ。この人。

「キャンドイーとは、何でしうかあー？ペットの名ですかあー？」
「お前らを運んでるのがキャンドイーだが？」

赤いドラゴン。

恐らくはメスなのだわ。ナビ、ドラゴンって基本両生類じゃないの？

にしても、キャンドイーって！！

ドラゴンなのにキャンドイーって…ふ、腹筋が…割れるを通り越して裂けそうだ！

チャームポイントは何処ですか？鋭いおめめですかー？鋭いおめめがチャーミングなんですかー？

「プラチニオンに猫モドキと名付けたお前が笑える」とじやないと思つが…？」

はあ…と溜息を吐いたカインはふと氣付く。
そして、他人に伝えたくて仕方が無かった。

「ゆ、優真…。ドラッ…ドラゴッ…爪…頭…つぐ」
笑いをかみ殺すカインに教えられた通り、爪を見た。

「ま、マニキュア…！」

情けない声で何とかそれを発し、笑いをかみ殺すと、腹を抱える。
視線は頭へと向かった。

「リボン」というか、中華の器とか絵本に描いてあつたつな異国の龍と言つたところか。

立派な細長い髪に、立派な、一本の…角…。

ちゅうど僕の位置からはドグラの姿も見えた。二十代後半くらいのふつくらした体格の女性だ。

目つきは鋭く、髪は赤…おでこを見せる様に、前髪をちょんまげ結びにして…。

だから。

この湧き上がる笑いを抑えることなど不可能だつた。

「り、リボンで止めてる…！し、しかも…おそらく…何アレ！？今流行りのペアルック！？髪型も同じでこ見せだし！クオリティ高けえ…あは、ははははは…！」

「馬鹿つ…同じで皆良いんだよつ！そつとしつかっ！ふふつ…はははつ…！」

当然、鞭が直撃したのは言つまでもない。

そして、その衝撃でカインが落ちるのも、また必然だつた。

「おわつ…！」

「何つ…？キヤンティー！捕らえろ…！」

カインの身体が、闇へと吸い込まれていく。

血は既に落した。杖も同じ。

上手くいったかは正直、分からぬ。

もう一度、人差指で自分の側に一三度折り曲げる。

直後、黒い光の玉が街からドリパーン…正確には僕目掛けて飛んでき

た。

それは見事に直撃して、身体は空へと放りだされる。

「『召喚』つ！」

成功していることを願う。

ほら、じゃないと僕達確実に死ぬから。

キヤンティーはあからさまに怯んで、動きが鈍い。
これで『召喚』が成功していれば、助かるんだけど。

あー、頼むから余計なことしないで。

「くそつ！イチゴー行けっ！」

……ゴメン、突っ込む気力が無い。

ヒュン…とキヤンティーの背から人形サイズのドラゴンが放たれる。
ちっ。早いな。

イチゴはあつという間に僕に追いつく。
ガシッ…と鋭利な爪が僕の脇腹を掴んだ。

「『ペイ一ネの業炎』つ！」

『魔眼』でイチゴの足を焼く。

抉られる様な形で、イチゴは僕の脇腹を離す。欲しくもないスピン
を掛けた。

この話も僕の人生も次回に続く…と良いね。

第三十話 猛獣使い注意を（後書き）

優「三十話だねー。とこうわけで、唯の後書きじゅつまらねーので、
出てみたよ」

力「俺達が出たところで何も変わらないが？」

優「大丈夫。唯の自己満。一度はやってみたいじゃない。まあ、本題に入ろうか。お気に入りが十件になりました！どうもありがとうございます！これを励みに頑張っていきたいと思います！此処までお読み下さつてありがとうございました！今後ともご愛読よろしくお願いします！」

力「……まあ、明日には夢オチとして処理されてんじゃないのか？覚めない夢は無いからな」

優「……。今後とも、よろしくお願いします！」

第三十一話 第一次新資源戦争の序曲

目を開ける。

わお、天国。… かどうかは知らないが、僕は、美しい場所に居た。

見たことのない花々が咲き乱れ、甘い香りの風が髪を揺らす。
青々しい草花を踏み潰さない様に歩いて行くと、古いがその神々しさを損なっていない神殿があった。

その中央には小型テレビとコントローラーがあり、ゲームソフトが既にセットされている。

何処からか天使の様な綺麗な歌声と音楽が、ゲームのBGMを奏でていた。

「マジ、天国じゃん

がばりと身を起こすと、アイゼルとヘブライがぱたぱたと僕の頭上で喚く。

「どうか、やはり君等が召喚されるわけか。

「起きやがったぜ、こいつ！」

「臨終は此処じゃね、ようだな！」

「大丈夫か…？助かつた、ありがとよ」

カインが手を差し出す。困った様に笑うと、その手を取らず自力で立ち上がる。

幸い、何処も折れて無い様だ。

「にしても、お前の天国はゲーム機があれば成り立つのか。
つーか、天使に讃美歌じゃなくて背景音楽歌わせるって扱い酷過ぎ

だろ

「禁断症状が今まで出なかつたのが、僕は不思議でならないと思つ
んだけど。で、此処、何処？」

「パン屋だ」

「そりが、パン屋か。アイゼル、ヘブライもパン食つ？」

もひもひとパンを食べながら僕は蝙蝠達にパン屑を放る。
食ねえヨー…といながらしつかりとキャッチし、がつがつと食べて
いた。

「食つのか…といつか、お前も何食つてんだ。泥棒だぞ」

「今更強盗が罪に加えられたとしても国内指名手配にまでなつてん
だから痛くも痒くもないね」

「そういうところは母親似だな、お前…」

「僕はそれを無視して次の行動に出るつと…さて、皆助けに行かな
いとね。にしても、何で人いない。怖いんだけど。まさか、皆死
体兵になつたわけじゃないよね？」

クケケケッ…と蝙蝠が笑い、ばたばたとせわしなく羽根を動かし始
めた。

カインが神妙な面持ちで話す。

「それがだな…全員ではないが、死体兵にはなつてたゞ。女神様は
『魔力魂』を手に入れたことにより、他国との同盟をもみ消したら
しい。まあ、簡単に言えば『新資源の独占』といつことになるんだ
が…」

「何にせよ、武器が必要だね。僕は要らんけど。カインの剣は折れ
ちやつたし…。

とことことでだね、はい、プレゼント」

ほいつと潰れたあんパンを手渡す。

折れたんじやない、お前が原因で折れたんだと呴いていたカインは口をはの字にしていた。

「本当はフランスパンが理想だつたんだけど…。無いからそれで頑張れ。ほら、ナックル代わり。大丈夫、魔法陣でちゃんと加工したから」

「そういう問題じゃないんだが…何をどう頑張ればいい？馬鹿にしてるのか？」

「そういうことで、実践練習…」

肯定して受け流す。

優真は新たなスキルを覚えた！

「たのもー」

バンッと勢いよく扉を開ける。

まあ、予想通り死体兵が囮んでいた。

死体兵はともかく、このパターンに、ちよつとトラウマになるかもしれない。

「カイン、ちよつと借りるよー。これが菓子パンの底力だ！」

潰れたアンパンを握り締め、向かつて来た死体兵をぶん殴る。

バキンッ…！

「ぎゃああああああ！」

僕の拳は死体兵の顔面にクリーンヒットし、例の如く頭がもげた。

断じて、あんパンが使い物にならなくなつた訳でも、僕の骨が折れた訳ではない。

「「、「」」」」」うなつたら…あんパン最終形態…食らえッ！
「なつ…一まさか、内部に魔方陣を仕込んでいたのか！？」

ふつ…と僕は笑う。

そんなわけねーじゃん。

そしてパイ投げの原理で、僕はあんパンを死体兵の顔面にぶち込んだ。

例の如く顔がもげた。

別にね、それは予想出来てたんだ。もげるかなつて。だから心の準備もしておいた。

問題は此処からだつた。

パイ投げの原理で、あんパンを死体兵の顔面にぶち込む。

そう、そこまでは良かつたんだ。

その後、あんパン見てみたらさ、くつきりと死体兵の顔がプリントされてんの。少し頬が吊りあがつてるから笑つてんのかな？

あんパンが顔面スタンプに早変わりだよ。嫌がやせとして正月辺り年賀状に押したいくらいのリアルなハイクオリティーだ。…岸辺に百枚くらい送つておこづ。いや、携帯を取り出そとポケットを探ると、何も入つていなかつた。

「ぎゃああああー！」わっ…大丈夫…怖いけど、怖くないッ…さあ食

らうがいい！賞味期限余裕で過ぎた餡子を！死ぬぞ！」

「こいつに期待した俺を心底呪いたいっ！…というか、腹壊したんだな？」

「…僕じゃなくて、蝙蝠達が」

ちらりと横目で蝙蝠達を確認すると、地面すれすれの超低空飛行飛行で右往左往に動き回っている。

その間にもカインは自らの拳で死体兵をなぎ倒していた。だが、次から次へと死体兵は湧いて来る。

「成程！だから、さつきから動きが活発なわけか！にしても、こいつら不死身だな！湧いて出て来るのはまさにこの事だ！」

「カインってさ、騎士より学問の道に進めば良かつたんじゃない？色々とことわざ知ってるし…！」

「馬鹿言えっ！俺の様な孤児が学問の道なんて歩めるはずがないだろっ！アンナも俺も先の戦争で家族を亡くした。だが、最初の勇者様が俺らを導いてくれたからこそ、生き延びられたんだよ。

：お前みたいな、変わり者だつたがなっ！お前こそ、いい加減その下手な演技は止めた方が良いんじゃないのか！？」

「大きなお世話だとだけ言つておくつ！あー、埒が明かない！『召喚』ツ！」

体力もそろそろきつくなってきたので、『魔眼』を発動する。辺りが黒い霧に包まれた。

「…お呼びですか？影の王。フレディです。おかげで一階級特進しました」

「何、死んだの！？」

現れたのはフレディ」とトイスピアと無数の幽霊軍団なのだが、今

田のフレディは人型だった。

好青年という言葉がぴったりで、何とも死神らしい恰好をしていた。手にはあの大型鎌が握られている。

…そして、僕より背が高い。ちつ。これだから最近の若者は。

「いえいえ、意外にこの名前好評でした。次期影の王に名付けてもらつたんですからね…。

僕の今までの功績も評価され、大總統様からは器を「えられまして…。これからはフレディとお呼び下さい。…で、我々は何をすれば？」

「いや、じついう死体分野は君達の方が詳しいと思つて。何とか出来る?」

「…つまつは、片付けると言つた事ですね。分かりました」

そんじや、よろしくと黙つて『瞬間移動の陣』を形成すると、城へ飛んだ。

僕等が去つた後、フレディは外套から懐中時計を取り出すと時刻を確認する。

「…御武運を。あと、二時間一分四十四秒でお亡くなりになりますがね…。知らぬが華と云つこともあるでしょうし。その余生を「悔いなくお過ごしください…無理でしようけど」

第三十一話 死体兵のわざやかな夢

「『魔力魂』の力…思つたより強力ね。死なずの兵を造れるなんて…また徵兵令でも開始させようかしら…？ねえ、偉大な研究者様の息子さん」

『何が目的か知らないが、そんなことをすれば必ずそれ相応の裁きが下る。…必ずだ』

『縛りの陣』により、動きを封じられ芋虫の様に床に這いずる。自らの現状より、これから起こる無慈悲な行いに魔王は激昂していた。

女神はそれを物ともせず、笑みを浮かべる。

「うふふ…まあ、何とでも負け惜しみを言えばいいわ。…さあて、あのお馬鹿さんはいつ来るのかしら？早くしないと、可愛いお姫様が消えてしまうと言つのにね…！ああ、そうなつたらあの子はどんな表情を浮かべ、その心はどんな色に染まるのかしら？高みの見物と行きましょう？無力な魔王様」

そう言つて女神は巨大水晶に映る『死の夜』^{ノーナー}の姿を見る。

そして、自らの腕にはめた血の様に赤黒いブレスネットを見た。大きなワイングラスに並々を注がれた真つ赤なワインを高々と掲げ侮蔑を込めて言つ。

「乾杯」

ワイングラスをひっくり返し、床に這つ様にして女神を見上げる魔王に全てかかる。

「さうと、このワインの様に赤く、『死の夜』にあげたプレスネットより黒く、今の彼方の様に歪んだ瞳で笑死を見るに違いないわ。まあ、刺客を全て倒せたらの話ですけれど！」

無力で優しい若き王は、唯、この無慈悲で残酷な女神を睨むことしか出来なかつた。

＊＊＊＊

あと、三時間一分四秒…。

頭の中で誰かの声と、時計の針が動く音が木靈する。一体、何のカウントダウンなんだ？

「…ハッピー・ユーライヤー？」

「大晦日は当分先だぞ。城内に入れたは良いが、皆が何処に幽閉されてるのか分かつてんのか？」

ミケガサキ城内部。

廊下なのか、辺りは薄暗く、仄かな蠟燭の明かりで辛うじて足場が見える程度だ。

とりあえず、蠟燭を拝借し先を進む。

「それなら問題ない。ノワールにあげたプレスネットで辛うじて居場所が分かるよ。お化け屋敷とかダンジョンつてこんな感じだよね。突き当たりでさ、お化けとかが…」

ぴたりと足を止める。カインが訝しそうに僕を見た。

ヤバい。自分でフラグ立たせてしまった…。
どうじょつ、曲がり角。超怖い。

「戻る?」

「案外、後ろから来るかもしれんぞ」

「うわっ!止めるよ、そういうフラグ立たせんの!」

そして、遂にきました。曲がり角。

「うわ、うわ、うわー…。後ろに誰も立たせんよ?驚かさないでよ?よし、レッツ…」

ゴーと言おうとした時、白銀の光が煌めき、咄嗟に避けた頬に何かが通る。

続いて人影らしき物が飛び出してきた。

「曲がり角フラグ成立ううああああああああ…来んな!見んな!寄るな!触るな!成仏して天国行けよ!」

案外コメントが優しいなという突っ込みは無視してがむしゃらに拳を振るう。

それは何かに当たり、バキッ…とこつよつぱん!「ゴッ…と」言ひ感じだろうか。

重い音が廊下に木霊した。

あつ、僕が殴った音なんだけどね。そしてカインを置いて一目散に先へ進む。

「おいおい、置いて行くなよ」

少し先へ進むと、灯りが完全に普及していく氣味悪さの欠片もない

廊下に変わった。

相手が追つて来ないと確認すると、僕は一息ついた。

「カインのせいでフラグ成立したじゃん」

「幽靈じや無かつたぞ？よく見えなかつたが、女だな。あれは。強化されたお前の加減無し拳なんて氣絶して当然だ。もしかしたら、曲がり角でのドッキドキな出会いといつアレをやろうとしてたのかもしれん。食パンくわえて、曲がり角待機。ベタな出会い展開としては王道じやないか。女子の夢だぞ」

「マジで？それは…悪いことしたなあ。カビたパンで良ければたくさんあるけど…お供えとお詫び代わりに置いておこうか。此処に」「戻るのは断固拒否か…まあ、良いか。重要な事でもないし」

まあ、当然あのが刺客の一人なんて知る由もない訳で。

カインが壁に手を着く。

ガコソッ…！

と音がして、壁の一部が凹んだ。

「「ん？」」

一人して顔を見合わせる。

「ガコソッ…って言つたけど…？」

「ダンジョンをこの状況に置きかえるとして、一番来てほしくないパターンは何だ？」

カインが言わんとすることを察し、先程走つて来た道を振り向く。予想違わず、大玉が転がつて来た。

「誰だ、城をダンジョン風に造った奴」

「仕方がない。怨むなら好奇心旺盛な初代勇者を怨め。だが、良く作動したな。素人が作ったトラップだ。碌に稼働しないと思つていたが…」

「見ろ、カイン。自動じゃない。手動だ」

首を傾げるカインに、指さして教える。

本当にくだらないので『魔眼』などこんなところで使いたくないのだが、しようがない。

『透かしの陣』で、玉を転がしている主犯を見せてやつた。

「死体兵をこんなことに使はくなよつ…」

「良いじゃないか。彼だつて好きで転がしてるんだ。」

そうか…。奴らがあの運動会の日、親じやないのに必ず現れる『運動会の玉転がし』と恐れられた伝説の玉転がしオヤジトリオか…。噂では全ての小学校と幼稚園の運動会予定全てを把握しているらし

い…。

見なよ、あの無駄のない動きと転がし慣れた手を。あれは素人が出来る業じやない。熟練されたプロの業だ…」

「…唯の口リコンだらうが！もう勝手にしろつ…」

そう。三人ほどの死体兵が大玉転がしの様にせつせと玉を転がしている。

大変微笑ましいのだが、相手が相手故に引き攣つた笑みしか出て来ない。

「彼等のやる気は相当だな…恐らく、僕等を倒せば年間行事に運動会を入れてやると言われたんだろう…。見ろ、闘志を燃やすあの眼差しを。その中に純粋な子供の様なキラキラとした目があるのを」

「すまん。俺には唯の骸骨にか見えん。… そんなに怖いなら何とかしぃ。遅かれ早かれ、潰されるぞ俺達。こんな悠長に漫才してる暇無いだろ」

ちつ。ロマンの無い奴はこれだから困る。
まあ、カインの無いことも一理あるので僕は指をパキンッと鳴らした。

「玉が来るなら床を消せば良いじゃない」

「ううへ、『運動会の玉転がし』の夢は夢く散つたのであった。

「なあ、こんなとこりでぐずぐずしてないで、とつとと先に進まないか?」

カインの言葉に頷き、廊下を走つていぐ。

その時、頭の中で音が聞こえて、身体の隅々に反響する。
その響き、不安を覚えずにはいられなかつた。

カチリ…。

時計の針が一針動く。

あと、一時間十七分五十六秒…。

あと、一時間五十分二十秒…。

ギイイイイ…と鎧びた鉄の扉が開く。

僕が部屋の中へ入った途端、扉は閉まつた。

カインはどうしたつて？

囚われの教官とその他の子分達を救出しに行つたよ。思つたんだけ
どさ、あいつ勇者で良いんじゃね？

何だかんだで、僕がかっぱらつてきたパン全部使って『あんパン無
双』なさつてた。

カインが最強と言つより、パンが最強だと僕は思つ。蹴散らされる
死体兵達が少し哀れに見えたよ。

ミケガサキ城最上階の一一番奥の大きな部屋。

どうやら、VIP専用では無いらしい。さよつと期待してたんだけ
どなあ…残念。

「にしても、あのドア…自動ドア？普通、プラスチックで作らな
い？」

「…よく分かりませんが、硝子だと思います。
まあ、そういう問題じゃないと思いますが…。優真様、お久しぶり
です」

苦笑を浮かべつつも、ノワールは楽しそうに微笑む。
ちょっと照れくさくなつたんで、誤魔化し代わりに僕は辺りを見回
した。

「大丈夫？ 酷い事されてない？ 怪我とかは？」

「私の事なら心配要りませんわ。… そんなことより、大変なんです！ 優真様から頂いたあのブレスレットが… 女神の手に渡つてしまつたんですつ！」

僕の、そんな事よりも資源戦争リターンズが始まるみたいなんだけど、という言葉は、轟音と地響きによつてかき消された。

僕の言葉は天変地異にさえ拒否られるのでしょうか？ 一言も喋らせてもらつてないよ。城が大きく揺れる。

「… 地震つー？」

すると、ぼうつ…と水晶モニターが浮かび上がつた。倒壊した街の様子が映し出される。赤々と燃える民家から逃げて来る人は誰も居なかつた。

その異常な光景に、ノワールが目を伏せる。

『ラグド王国第三十一番騎団出動つ！ 女神の首を討ち取れえつー！ ケガサキを我が領土に收めよー！』

何時ぞやのラグド王国第三十一番騎団騎士隊長ミハエル何とかが、そんな事を叫んでいた。

うわー、遂に乗り込んできやがつたよ。しかも、どさくさに紛れてとんでもない発言までしていいる。

「あの人、絶対フェラ行つた方が良いと思つ。まさに理想郷だと思うよ」

「… それは名案ですわねー！ しかし、私達も此処に居ると巻き添えを

食らいますわよ?』

水晶モニターに、女神由香子様の姿が映し出された。よくよく見れば、吉田魔王様の姿もある。

それもそうだねと相づちを打とつとした僕に、女神由香子様の声が見事に邪魔をした。

もういい。僕は何も喋らない。…やつぱり喋る。タイミングは今だ。

「これは…」

『新資源戦争…、そして領土争い…。実に分かりやすいですね。弱肉強食。勝つたものが王座に座る。単純明快。素晴らしい事です。

『領土革命』とでも名付けましょうか』

これは領土争いなのか、はたまた新資源戦争とした方が良いのか。どちらだと思う?って言いたいんですけど。何、嫌がらせ?イジメ?もう良いよ、絶対喋らない。

「ぐすんっ…」

「まあまあ…。大丈夫ですよ、私にはちゃんと聞いてますから」

「あり…」

『『領土革命』…素晴らしい響きですね。ですが、それを起こせるのは我がラグド王国と貴国ミケガサキ王国…どちらが世界を統べるに相応しいか』

またしても僕の発言を遮つて、ミハエル何とかが、剣を構える。

何、この人。何、このカメラ意識した目線。何、このドヤ顔。

他の三国忘れてますよー。気付いてー、君達だけの問題じゃないから。

君達一人で決められるほど甘くないことに気付いてください!

『うふふ…魔武器如きが我が王国に勝てると思いませんかー?』

つちには『魔力魂』もある。兵も大量に…いえ、腐る程いる！それでも勝ち田があるとお思いで？』

ある程度の差こそあれ、本当に腐りますよ？

「何と言つか、もう手に負えない。ツツ」//も追い付きそうにない
「…その意見には同感ですわ」

『「」の動く屍が兵士？ちゃんとちら可笑しいですねー頭さえ切り落
とせば誰の「」ミだー』

憐れむ様な目でミハエルが笑う。
刹那、金属音が響いた。

「死体兵が不足なら、私がお相手いたします」

長い黒髪が揺れる。

騎士の鎧が妙に似合つている女勇者は静かに淡々と言つ。

手には滑り止め用の白い皮の手袋。細い腕には不釣り合いな大剣を、
吉田雪は使いこなしていた。

剣の持ち手には『魔力魂』が填められている。

『くつ…なかなかの腕ですね…』

モニターから苦笑を浮かべるミハエル何とかの表情が映り、画面が
切り替わる。
僕がドアップで映し出された。

「何これ、映つてるの？イヒーイ

画面がまた切り替わり、女神由香子様が呆れたように溜息を吐く。そして、唇の端をくいと上げて微笑んだ。

あー、この人がこいついう表情をしている時、碌な事が無いんだよな。

『時間が長いとはいえ、『魔力魂』も所詮は消耗品。要領を超れば消える。それなら、もつと大きな『魔力魂』を形成すればいい話じゃありませんこと?』

『馬鹿つ……わっわとその部屋から出るつ……』

吉田魔王様の声が一瞬だけ聞こえて、直ぐに途切れた。

『『魔力魂』は生命力と魔力の両方のつり合いが取れなければ意味が無い。』

『しかし、勇者はその両方を十分すぎるほど揃えています。今まで、粗雑な扱いをして悪かったわ。彼方は言わば金の卵ね。だから、この国を救つて下さいな。』

『私の可愛い、勇者様』

不覚にも、嬉しいと思う自分がいた。

ずっと、ずっと待つてたんだ。この人が、僕を見てくれるのを。

だから、僕の答えは既に決まっている。

「だが、断る」

第三十三話　自己共の野望（後書き）

ちょっと次回の更新遅れる予定。

次回の更新は22日を予定しております。

第三十四話 異世界の三種の神器＝武器＝パン？

『三種の神器』。

神より与えられし、至高の物であり、古来より皇位の印として歴代の天皇が受け継いだとされる三つの宝物。

八咫鏡、天叢雲剣。そして、八咫瓊勾玉。

三嘉ヶ崎を含む一般知識として、この神器があるのはご存知だと思う。

ならば、ゲーム界においての三種の神器とは何か？
勇者の形見とか、魔王の形見とか、魔王撃破のクリア記念で貰えるあの武器とか？

「否、それはパンである。b yヒューマン」

「人間ですか…？」

「いや、ちょっとミスつた。あー、ド忘れ。あれだよ、重力の人。あれ？全然違うかも…。
まあ、何にせよ人間には違いないんだし良いか。そんなことより、この赤い稻妻。何とかならないの？」

パンでガードしながら僕等は壁の隅に寄る。

恐らく触れた瞬間に僕等は新資源へと望まずの転生を果たすだろう。
ちょっと意外ですか？

「何処かにある魔力魂を壊さない限り無理ですわ。というか、パンで防げるものなんですね。」

「イースト菌の力は偉大だね。…だが、この八咫鏡こと、レーズンパンもそろそろ限界の様だ。

八尺瓈勾玉こと、あんパンを君に授けておこう」

「優真様…何か生き生きしてらっしゃいますね。子供みたい」

くすくすと笑うノワールに、僕はむつとした表情で返す。

「いーの。まだ子供なの、僕は。十七歳をまだまだ謳歌しきれてないんだ」

「自分の存在が母に認められるまで?それとも、誰かに甘えられるその時まで?」

ノワールが意地悪く微笑む。

うーむ。これでも一応ピンチ的な状況なんだけどな。この子に限らず、ミケガサキ住民にはシリアス精神が欠けてると思う。

「本つ当、君つて意地悪だよね」

「それが『死の夜』の特権ですわ。…よく、断りましたね。優真様」

「…ごめん、よく聞こえなかつた」

トンツとノワールが僕の背中にもたれかかる。

温かくも冷たくも無かつた。…かと言つて、ぬるくもないのだが。いや、そう言う問題じゃないか。

「優真様の心は、いつだって空っぽですね」

「奴は大変な物を奪つて行きました。…私の心です!」

きやあ、心が空き巣に入れられ、ハートを撃ち抜かれたようだわ。まさしく、恋のスナイパー…がくつ。ジェニー、しつかりするんだ! ジェニー!

…ノワール、そろそろツツコミが欲しいんだけど? ジェニーって誰

だよとか、そんなんで良いから

「あら、『じめんなさい。続きが気になつて』

仏の顔も三度までというが、いつまでもこの状況だと僕が困るな。
僕は自らの影に手を突つ込み、『沈黙の書』を取りだす。

そしてノワールにハ咫鏡こと、レーズンパンを放つた。

「ノワール、バス。…食べないでよ。後で大変な目に遭うから。ち
よつと、時間稼いで。直ぐ終わらせるから」

「良いですけど…いくらなんでも、そこまで食い意地はつてません
よ」

そんなノワールの言葉は、集中した僕の耳には届いていない。
書を開いた瞬間から魔力が身体から静電気の様に迸る。

あと、一時間零秒…。

「 - つ……！」

無意識に、何だかよく分からぬ呪文を唱える。何処の言葉でもない
い気がした。

吐息は統合され、音となり、声となる。

初めて聞いた言葉のだが、昔から知つてたような、…既視感という
べきだろうか。それに似た感覚というより錯覚が襲う。

辺りが静まり返り、暗闇が支配する。

声も、外の轟音も聞こえない。世界の全て音を拒絶してしまつたか
の様に静かだ。

「優真様、しつかり！」

「…ノワール？赤い稻妻は？消えた？」

「…覚えてないんですか？…あの、こんなこといつのまには非常に失礼ですが、あまり書の力に頼らない方が良いですよ。そして、やり過ぎですか？」

はあ…とノワールが溜息をつく。

僕等がいた塔の最上階の部屋は半分ほど瓦礫が吹っ飛んでおり、国をぐるりと見渡せそうだ。

「あー…まあ、良い…かな？」こっちだつて、好きで書に頼つていいわけではないんだけど。

だつたら未来の猫口ボに頼りきりの、のび助はどうなつてしまつんだ」「書を使い過ぎた者は皆、碌な事になつてませんよ。…地獄に墮ちます。あるいは…」

「残念ながら正統後継者と言つか、ちゃんと素質がありますから」心配なく…。久しぶりですね、『死の夜』…と、影の王

いつの間にか空中に浮いていたフレーディは、軽やかに僕らの前に降り立つた。

ノワールは少し警戒したように一步退く。

僕としては、何かおまけみたいに挨拶されたのが引っかかったが、不問としよう。

「あつ、フレーディだ。仕事お疲れ様

「いえいえ…まだ終わってないんですけど。一時間切つたので「ずっと気になつてるんだけど、何のカウントダウンなのこれ？」

その問いに、フレーディは空を仰いだ。

そして、何か思いついた様にこちらを見る。

「…えっと、新世界の幕開けですかね？」

「…石油王に俺はなれる？」

「石油はとつべの苗で無くなりましたわよ、優真様」

そういうや、そうだった。

とりあえず僕等は崩れかかつた城の塔から脱出した。

「あつ…カイン達置いて来ちゃった」

ぽんっと拍手を打つ。

すると、後ろで物音がしたかと思うと、頭に衝撃が走る。

「何が置いて来ちゃつただ。…で、一体誰のせいで俺達を置いて行く羽目になり、誰のせいで城があんなに崩れてんだ？」

「はははっ、分かってるのに聞く？それ…。いやあ、僕なんだけど、僕もよく分からなから、ノワールに子細は聞いてね。そうだ、パン、役に立つた？」

「聞くところは其処なのか？…悔しいが、凄く役立つた」

心底悔しそうに額ぐカインをドヤ顔で見返し、今後の事を振つてみる。

「…で、この状況はどう止めたら良い？簡単には止めてくれないよね、多分。はい、意見出してー」

「この前のアレ…やればいいじゃないか」

意見は案外あつさつ出した。

つまり、教官曰く、こいつがやにやつた『魔人大戦争』を起こせとうことらしい。

もう誰が悪だか分からぬ。いや、ないか。

といつより、明らか僕が悪にされるじゃないか。いや、もうそれてるか。

「……いや、それは最後の最後にしよつ。今はちよつと……とにかく、行動あるのみだ！」

「で、どうするんですか？」

ノーリさんと訊ねる。

僕は静かに頷く。

「とりあえず、安全な所に逃げる」

「…………。」

沈黙が訪れる。

アレ？ てつくり、そんな場所ねえよ！ みたいな感じで脣に蹴られる

ことを期待……いや、覚悟してたんだけど。予想外の反応だ。

「はあ……。いや、お前がへタレなのは分かってるし、馬鹿なのは尚更よく知ってる。

怒氣を越して呆れたよ、俺は」

「雪が戦っているんだ。助けようとかそういう精神はないのか、貴様には」

「……最低ですわ」

……まさかの言葉の暴力を振るつてきましたわ、ここに。

「いや、何と言つか……、マジ、すみません……」

「よく頑張りましたよ、王……」

フレディに慰められながら、僕等は吉田雪の元へと向かう。

ふと思いつき、後ろを振り返った。

フレディがどうかしましたか…と怪訝そうな顔を浮かべる。

「…いや、女神由香子様は無事なのがなつて。城、あんな状態だけ

ど。まあ、あの人しぶとそうだしだ丈夫か

「そうですね…」

フレディに背を押され、僕は崩壊しかけた城を後にし、皆の背を追う。

「あと、三十分四十四秒…」

「ん? 何か言った?」

「いえ…、ほら、置いて行かれますよ。行きましょう?」

第二十五話 ゲームオーバー

「にしても、多勢に無勢とは…なんつーか、弱い者イジメ?・実に大
人げない」

「口動かしてる暇があるなら、さっそく歩け!…」

ドラゴン使いだつたか、猛獸使いだつたか、唯の危険な動物愛好家
だつたか忘れたが、ピンマゲの女が後ろで鞭を振るつ。
てか、貴女ミケガサキ兵じやなかつたの?

はいはい、どうも。毎度お馴染み田中です。

只今、実はラグドの兵のスペイだつたピンマゲに捕らえられ、連行
され中。

え? 雪ちゃんを助ける為にカツコよくなび出したんじやなかつたの
かつて?

…何の事かな?

いや、そななただけど。いつも上手くいく訳ないのが現実つてもん
ですよ。

第一、今回の件に関しては僕は悪くない。全では奴のせいぢやない
ます。…いや、責任転嫁とかじやなくて。

「ピンマゲつてなんだよ」

「ピンクリボンの髪頭の略。ピンテロの方が良かつたかな?・けど、
それだと嫌だなー。センスと畜つより、美しくない。」

…ところで、カイン。前回あれ程意気込んで雪ちゃんを追いかけて
行つたのに、一体誰のせいで僕等は拘束される羽目になり、誰のせ
いで公開処刑されようとなつてんの」

「はこはこ。やつせ俺のせこですよー。やーせん」

いやこや、どうせじやなくて実際、お前のせいでひつなつてんだか
ひ。

開き直られても困る。

この件に関しては、僕、微塵も悪くないから。

「『はこ』は一回

「はー」

「…」メン、どうシッコめば良いか量り兼ねた。にしても、何だか
んだ言つて、皆逃げてんじやん。何、あの手際の良さ。打ち合わせ
でもした?」

「いやいや、普通逃げるだろ。あの武器なり」

てきぱきと処刑準備が整つている間に、僕等は回想に思いを巡らせる。

* * * *

それはつこ先ほどの事である。

僕は雪ちゃんを追いかける旨を追いかけていた。

「はー、早いよー」

「影の王が遅いだけですよー」

そうバツサリと切り捨てたフレディはふよふよと浮かびながら移動
している。

追い着いた時は、皆様大乱闘中。

ノーラさんとノワールは死体兵と他国の兵を相手に、オズさんは「ハ何とかを雪ちゃんと共に抑え込もうとしている。

教官は人とは思えない脚力で空から炎の玉を吐き出していく超巨大ドラゴンに跨ると切り掛かっていた。

つか、皆武器パンつてシユールな光景だわ。
いや、シユールを通り越してカオスだ。

何の闘いですか？パン屋の一揆ですか？米ならぬ、小麦騒動なんですか？

…携帯、携帯。やつぱりないか。何処行つたかな？
恐らく、オズさんが借りパクしてるはずだ。

あー…超撮りたい。連写したい。出来るなら動画も撮りたい。
こんな光景、滅多に見れない。一度とない。

にしても、皆強いなー。

…今回は僕の出番無いかなー。

「おい、優真！暇ならこつち手伝えつ！」

ちょっと階があまりにも強すぎて、手助けとかいらねえかなって思つて挫折しかけていた僕に救いの声が掛かる。

「…一体何をすれば？」
「取りあえず、全部追い払え」

カインがパンを振りかざして、空を仰ぐ。

だが、そんなことをしなくとも、それは視界に入つてくる。

僕等は大量のドラゴンが取り囲まれていた。

大きさはまちまち。

小さいのも大きいのも獲物を狙う狼の様に段々と低空飛行になつていき、しかも確実に逃げ場が無くなる様に彼らの渦の中心へと追い詰めていく。

数が数だけに十分な威圧感がある。

「…あつ、」じつひパン食おうとしてるぞ。ほら、中くらいのが食つた

んな、鳩じゃあるまいし。伝説上の生き物なんと心得る。

つて本当に食べてるな。良いのか、お前のプライドはそれで。

…いや、案外猫モドキもそんな感じだから特に誇りはないのかもしれない。

「両方にドンマイイと言つておく」

じつじりと距離が縮まって行く。

すぐ隣では、パンが食いちぎられる音が何ともリズミカルに聞こえてきた。

そういうや、昔。

海に由香子様達が僕を置いて行つてたので、行けないから、一人寂しくお手製弁当を公園で食べたつけ。

海では鳶が弁当のおかずを盗つていくらしいが、公園ではカラスと鳩の猛襲に遭つたな。

こつちでは城の近くでパンを振りかざしているとドラゴンがぐるりしい。

ふと、頭に過ぎつた考えを僕は実行に移す。

天叢雲剣ことレーズンパンをドラゴン達に向かって放り投げる。直後、それを食つたと思われる奴らがバタバタと落ちてきた。

「毒でも盛つたのか？」

「そんなことしたら、動物愛護団体に叱られるよ。

魔力魂の稻妻をたつぱりと浴びたこのパンを食えば魔力吸い取られて力尽きるかなって

「…毒より達が悪いじゃないか。だが、まだうじゅうじゅうこるや？」

「？」

「ふう…と僕は溜息をつく。

「正直な話。餌があるからじゃない？手頃な位置に

「……。ああ、こっちか

カインが納得したように、自分の握るパンを見た。

おい、お前。さつきの僅かな沈黙何だ？僕だと思つただろ、手頃な大きさ＝身長で考えただろ。

「唯、一つ問題が

「何だ？」

「せんせー、属性が同じですー

「つまり？」

つまり？じゃねえよ。お前の方が知つてるだろ。元々、この世界の住民なんだか？

術にはどれにも属性がある。

僕が得意とするのは一般的に無属性とされる瞬間移動などと、闇属

性であり、同属の「こつら」には無効というわけだ。

「降参と言つ事で」

その他諸々あつたのだが、まあそりせうでも良いのでほつといつ。
しうがないじやん。だつて、皆。僕等が竜に囲まれた辺りから全
力疾走して逃げ出したんだもの。

そんな感じで回想を終えた僕達に声がかかる。

「…またお会いしましたね。カイン・ベリアルと、次期魔王様」「
出た、ハエ・ナルシス」「
足りませんよつ！誰が蟻ですか！ミハエルつ！ラグド王国第三十
二番騎団騎士隊長ミハエル・ラグドネスですよつ！…まあ何にせよ、
彼方たちの御蔭で城は崩壊し、我々が勝つたも同然になつてしまつ
た」

つまり、ナルシーは認めるのか。

「…何か、言い残したことは？」
「それは私のセリフです！ああ、もうつ…どつせ、碌な事言い残さ
ないのですから、処刑を開催しますよー」

「恐ろしや。こいつ、何てノリがいい」
「…俺としては、お前に加勢を頼んだ過去の俺が恨めしや
「闇市にある飲食店は？」
「…なるほど、裏飯屋ですか。そうとも言こますね…つて、そうじ
やないつ…良いからお黙りなさい！」

ほら、ノリ良いでしょ？と僕等は呑気に喋る。

何としても時間は稼がないとマジで助けが来る前に始まっちゃうからねっ！

それだけは避けたいのですよ。

「…おい、何か話題提供しる」「ゴメン。何も思いつかない」

小声で言うカインに、僕は小さく首を振る。

「そういうや、女神様は？」

「ん？…ああ、あの愚かな女は、もうすぐ隣に来ますよ。順番としては執行人次第ですが、私としては、女神、魔王、そして馬鹿チビと、赤毛の順序が望ましいですね」

「…こいつ、嫌みを混ぜ込んできただぞ。心の狭い奴だな、友達いないだろ？」

「ふんっ。何とでも言いなさい。所詮は負け犬の遠吠え。…まあ、良い。おや、準備が整った様なので、始めましょうか。ドグラ、辺りの警護、頼みますよ」

僕らの体は地面に深く刺された丸太に縛り付けられる。ラッパとシンバルの中間の様なけたたましい音が鳴り響き、頭から血を流してぐつたりしている女神が兵士二人に運ばれて来た。

赤いドレスは、血で黒く染まり、所々破れてい。だらりと垂れ下がった手は白く人形の様だ。

吉田魔王様は、手傷を負つていはいるが、そこまで命にかかる様なものでは無かつた。

恐らく、吉田魔王様は大人しく投降し、女神由香子は抵抗し続けたのだろう。

「…えーと、久しぶり？皆に会つたりした？」

『会つていたら、こんな状況になつてないと思つが？…すまんな、

守つてやれなくて』

ちらりと吉田魔王様は女神を見た。

僕は肩をすくめ、自業自得の結果だよと呟いた。

ちなみに、右から順に、女神、僕、吉田魔王様、カインになつている。

後ろには逃げない様に見張つているのか、女神を運んで来た兵士が二人立つていた。

それにして、ナルシーめ。僕がカインと無駄口を叩かない様に采配したな。

もう一度、けたたましい音が鳴つたと思つたら、僕等から少し距離を置いたところに魔法陣が形成され、

『執行人』が姿を現す。

「あー、君まで寝返つたか…。吉田雪」

何となく予想はしていたんだけどね。

ところとは、雪ちゃんは皆とは別行動をとつたわけだ。

「…処刑を開始致します」

雪ちゃんはそう告げると、駆け足程度の速さで向かつてくる。徐々にスピードは上がつていく。

その手には大剣が握られていた。

その時、頭の中で時計の針が煩いほど大きく音を立て、動く。

「あと、五秒ですよ…。影の王

何時の間にか、僕の影から半分顔を覗かせたフレーティが言つ。学校の怪談みたいな不気味さがあり、背筋が凍つた。

骨の手をパチンッと鳴らすと、僕等を縛っていた縄が解けた。それが合図の様に、後ろに居た兵士も動き出した。

あと、四秒。

その時には雪ちゃんは確実に吉田魔王様の元へと近付いていた。止めようと駆け寄ろうとした時、それが違うことに気がつく。彼女は徐々に右に寄つて行つている。

… そう、女神の元へと。

ゆっくり、ゆっくりと。

辺りがスローモーションの様に動く。

「馬鹿つ！ そいつは『魔王』じゃない！」

君が倒すべき相手は、吉田魔王様でも、無慈悲過ぎる女神由香子様でもない。

君が倒すべきは『魔王』であつて、それ以外の、此処に生きる…、ミケガサキにいる人じゃない。

今にも、剣が女神の体に突き刺さりそうな、その僅かの間に身体を捻じ込んだ。

だつて、君が斬るべきなのはこの僕だから。

あと、三秒。

カインが何かを言つて、視界の端に皆の姿が映る。誰かが悲鳴を上げた。多分、ノワール。
ああ、来てくれたのか。…ふと、そんなことを思ひ。

鈍い痛み。

雪ちゃんの驚愕に歪んだ顔。

自分の体を見てみれば、一本の剣が突き刺さっている。

鋸びたロボットの様にぎこちない動きで、首を後ろに回す。
兵士の一人が、僕を背を刺していた。…正確に言えば、彼が刺した
かったのは、吉田雪だ。

…さまあみろと、そういうの顔を見る。

僕がもう少し成長したらこうなるだろうと思われるよく似た顔の青年を。久しぶりに見る兄の顔を。

身体は前に倒れ、刺さった剣がさらに深く刺さる。

黒い血が水溜りを作り、力が抜けて行く。

雪ちゃんは僕の身体を揺すつて。何か言つてはいるが、声が聞こ
えない。

…死ぬんだろうな。

そう思つた。

まあ、良いか。雪ちゃん、救えるんだし。母さん、守れだし…。

そう思つうと、少しだけ誇らしくなつた。

きっと、魔王との戦いで命じ討ちになつた勇者とかはこんな気持ち
なんだろうな。

あと、一秒。

乾いた音が響き、上から新たな赤い水しぶきが降つて來た。
後ろで何かが倒れる音がした。

あと、一秒。

息を呑む音。

何となく分かつてしまつて、瞼を閉じた。

テレビの電源が切れる様に、ブツンッ…と僕の思考は途絶える。

「零秒…。さてさて、彼方はどう選択するのでしょうかね…?まあ、
それは良いとして。

とりあえず、御愁傷様です…また、お会いできると嬉しいますけど…」

第三十五話 ゲームオーバー（後書き）

次回は舞台が少し変わり、三嘉ヶ崎だけじ、三嘉ヶ崎じゃない世界となります。

『ゲームオーバー』

暗い部屋を、小型テレビの明かりだけが照らす。

暗い画面に赤い文字。地の底から響く様な重苦しい音楽が鳴つている。

うーむ、これで二度目のゲームオーバーか…。

僕は、パッケージを手に取り、もう一度説明書を読み直す。まあ、そんなことしても攻略なんてできないだろつけど。

「おーい、優真……起きろー、朝だぞー」

階段を上がつて来る音が聞こえ、ドアが開く。

顔を覗かせた兄は怪訝そうな顔をし、思い溜息を吐いた。

「夜通しで、ゲームか…。そんなんで、大学卒業できるのか？ 第一、彼女だつて出来ないぞ」

「別に要りませんよーだ。そんなことより、今何時？」

兄はすかずかと部屋へ入つて来て、カーテンを開けた。部屋に光が差し込む。

「九時一十三分。早くしないと大変な事になるぞ。今日は昼からだろ？ それじゃ、先行つてるからな。

「ああ、明けましておめでとう。とにかく正月は終わつたが…」

「…あけおめ、」とひ

去り際に頭を叩いて、兄は大学へと向かった。

僕もいそいそと着替えて、リュックを背負うと部屋を後にした。階段を下りると、母由香子が上機嫌で弁当を大事そうに抱えて待っている。

ああ、一歩遅かった。

無事、今日と言つ口を終えられるのかが、たまらなく不安だ。人生きのものが終わる気がする。

「明けましておめでとう、優真。これ、おせち。頑張って作ったのよ。味わって食べてね。行つてらっしゃい。帰る時はメールしてね？」

「随分前だけど……明けましておめでとうござります。じゃ、逝ってきます」

「字が違つわよ、優真」

玄関の靴棚の上に飾られた父の写真に手を合わせ、小声で近々そつちに行くかもしだれませんと挨拶しておく。

父、明真あすまは僕が三歳くらいの時に行方を眩ました。

現在も行方不明中なのだが、ウチでは死人扱いである。まあ、母の酸味の効いた「冗談」なのだが。

：たまに、供え物までしてあるけど。恐らく、多分、「冗談だ。ちょっと酸味の効き過ぎた。

さてさて、どうやってあのゲームをクリアするか。

そんな事を考えながら駅を目指して歩く。

曲がり角を曲がった時、ドンッと何かにぶつかって尻もちをつく。

何これ、ラブコメ？

「あつ、優真君。大丈夫？」

「あー…、雪ちゃんか。あけましておめでと！」

吉田雪。黒髪の綺麗なそつ、美少女といつて差し支えない気品溢れる女子である。

お隣さんであり、同じ年であるが、けして幼馴染では無い。僕等は引っ越してきたからね。五、六年前ほどに。

「…そんなに慌ててどしたの？」

「えつ…ほら、絵具忘れちゃって…」

「今日は美術専攻者は室内で『ティサン練習』だよ？」

「あつ…そうだったわねつ。…その、優真君、良かつたら一緒に行かない？」

それが目的でわざわざ待機していたわけか。…いや、考え過ぎだな。雪ちゃんとは同じ大学である。

といつても、此処三嘉ヶ崎は都会と田舎の中間的都市であり、広い様で狭い。

市街地を抜ければ森だし、大学は一校しかない。田舎といつこには店は充実しており、活気がある。

…引っ越したと言つても、都内であり、三嘉ヶ崎生まれ、三嘉ヶ崎育ちな僕は実のところ都會を知らない。いや、どうでもいいけど。だつてさ、変に充実してるから良いかなつて。不自由も、便利さも中途半端なこの都市は、何だかんだで居心地がいい。

…他の所行つたこと無いから知らないけどね。

今まで通り、朝起きて大学へ行き、バイトをして七時くらいに帰宅し、ゲームをする。

二トすれすれかも知れない生活を送る。

その一日は、きっとこれからも変わらないと思ひ。

変わり映えのないつまらぬ一人生だな。ゲーム好きなら、冒險の一つや二つ、しても良いんじゃねえの？

…と余計な「メントを貰つたが、僕としてはこの状況に満足している。

だから変えるつもりもないし、また、それが続くことを願つ。

「優真君、何考へてるの？」

「……んー、嫌いな物をどうやって残さず食べるか、とか？」

「鼻揃んで食べると味しないよ？」

「…マジか」

僕等の通う大学には、顔見知りな奴らが「うじやうじや」といる。まあ、どいつもこいつも、都会を夢見ない内気つ子だからしちゃがない。

むしろ、東京とかへ上京した奴は英雄扱いだな。

雪ちゃんとは専門学科が違うので途中で別れた。
：お昼一緒に食べる約束をさせられて。

講堂の一番隅の場所が空いていたので座ると、同じタイミングで隣に人が座る。

僕は重い溜息を吐いた。

「明けまして終わりましょ。岸辺の人生」

「今年も終わりました。松下の頭脳」

岸辺太郎。

説明は以下省略だ。こいつの為に酸素を消費しなければならないなんて、非エコロジーだから。

「いや、存在が地球温暖化要因に言われる筋合いねえし」

「何言つてんだ。俺、平和の象徴だから」

「…一人とも、仲良いわね。でもレベルが小学生」

扉から入つて来た女講師がくすくすと笑つて、講義を始めた。僕らもノートやらを取り出して、ただひたすらにメモる。

そんなことを繰り返して、お昼になつて、何だかんだで岸辺もついて来て三人で食べて、また授業を受けて一日の大半が終わつた。

帰る支度をし、校門へと向かう。

ふと、冷たいものが当たり、空を仰いだ。

「うわ…。雪だ…」

曇天の空からは、白い光がゆっくりと舞い降りる。

そういうや、降るつて天気予報が言つてたな。

そう思いながら、僕は帰路へと着く。

そういうや、そろそろ進路を決めなきやな。大抵の人は、みけがさき此処で働くんだろうけ…どう。

ズルツと、見事にマンホールに滑る。

うわお。絵にかいした様な、見事な傾斜なんじゃないのか、今の僕。世界はぐるりと一回転して、重力に引きづり込まれて、僕の頭は地面に激突した。

意識を手放す最中、偶然通りかかったのであらう女性が驚きと喜びの表情を浮かべて僕を見ていた。

「何と言つか。物凄く恥ずかしいんで、見ないで下さい。」

マンホールに滑つて、頭打つて、気絶するとか……ありえないから。わづ、二十一だよ？」

「ほんと、馬鹿だな。お前」

「あら……残念ね。せつかぐ」馳走が頂けると思つたのに……。見た目より馬鹿じやないみたいね」

『ドケチに何が用か、馬鹿勇者』

「来るのが遅いぞ、馬鹿者……」

「何ですか、やけに騒々しいと思つたら……。まだ居たのですか、勇者殿」

呆れた様な、安心した様な、意地悪さがにじみ出た様々な声、様々な言葉が浮かんでは消えて行く。

初めて聞いたはずだ。だが、懐かしい。……ああ、そうか。思い出した。

それにしても、一つ言わせて貰つて良いかな？

「階じて馬鹿つて言つなよ」

がばりと身を起こす。

一瞬何処か分からなかつたが、聞こえてきた声の主により、何処に

居るのかが分かつた。

「まあまあ…優君、大丈夫？派手に滑つてたわね。私、あんな漫画チックな豪快な滑り見たこと無いわつ。次はバナナの皮でお願いね」

柔らかな、聞いていて心地いい声。

吉田雪乃。雪ちゃんのお母さんである。ほわほわした人で、警戒心とかそういう言葉に無縁な人である。

何より天然ボケだ。

「……雪乃さん？生きてる？」

何度も目を擦り、さつき自分の自分の思考を疑う。

雪乃さんは気にする風でもなく、和やかな笑みを浮かべてぴんぴんよくとガツツポーズをしていた。

辺りを見回す。ソファーから飛び起きて、窓を開けた。
子供達の笑い声、学校へと続く長い坂道、遠くに見える森。

「三嘉…ケ崎…？」

僕はミケガサキに居た筈で、大学びじうか、高校だつて卒業して無い永遠の十七歳のはず。

雪乃さんだつて、写真でしか知らない。雪ちゃんが生まれてすぐになくなつたらしいから。

なのに僕はどうして此処に居て、どうして少し背が伸びて、普通の二十一歳になつてるわけ？

畜生、どこのどいつだ！？身長に関しては感謝したい…！…というか、一言で良いからお礼を言わせて下さい…

「優君。お兄さん、帰ってきたみたいよ。優君もお家帰らないと、

閉め出されたやうわ！」

ドアの隙間から兄の様子を窺う雪乃さん。

さては、『家政婦は見ちゃつた』を見ましたね？そしてハマつたでしょ。

「そんなに熱心に拓誠を見て…、嫉妬するぞ？」

「まあ…！お帰りなさい、誠さん。駄目よ、私達は、その…ロミオとジュリエットだから…。嫉妬は良くないわ。ね…？許して？」

最早、意味不明。電波の領域です。

吉田さんは苦笑すると雪乃さんにキスをした。脣に。

「、子供の目の前で…何て事をつ！いや、もう大人だけぞ…ベタ甘だな、吉田家。

家には無縁だよ、この光景。

「何だ、優真居たのか。どうした？」

「優君、マンホールよつー私、初めてみたわつーつるつて…綺麗な斜めで、気絶したのつ」

嬉しそうに笑う雪乃さんと対照的に、僕の顔は青ざめる。吉田さんが事を理解する前に脱兎の如く僕は逃げ出した。

無事に卒業し、三嘉ヶ崎で暮らす『僕』の記憶と、ミケガサキで暮らしていた『僕』の記憶は最早不安要素でしかない。狐に抓まれた様とはまさにこの事だ。

深呼吸一つ。

三嘉ヶ崎特有の甘い空気を肺一杯に吸い込み、吐き出す。

分かつているのは、僕は今大学生で、二十二歳であるということだ。

家の堀には、『松下』と書かれた表札がはめ込まれている。

『松下』は、由香子さんが陽一郎さんと結婚する前の名字だ。つまり、不眞中の父である明眞の名字。

だから、今の僕は田中優真でなく、松下優真。

ごく普通の、家庭に恵まれた大学生。何処にでもいる平凡な奴だ。

何故こうなったのか。考えれば考える程分からぬ。

とにかく僕は、ただいまと緊張で少し上ずつた声で、住み慣れた松下優真の我が家へと帰つたのであつた。

第三十七話 望みの代償

「あら、お帰り。メールしてって言ひたじゃない。おせち弁当、どう?

私的には、渋みと苦みと酸味が足りないと思つたんだけど……ひょつと、優真?」

ドアを開けると、一丁度由香子さんが立つていた。

にこにこといつよつには、意地悪の様な知的な笑みで、お弁当の感想を求めて来る。

僕は、開けたドアを再び閉める。

深呼吸をして、ぼそりと真顔で言つた。

「…誰、あれ」

いや、由香子さんなんだけど。

僕の知つてゐる由香子さんは、食事?『ゴミ?』でも拾つて食べれば?な人のはず……。

しかし、松下優真の記憶の中には由香子さんは何処にでもいる誰の母親だ。

「優真、如何したの?」

ドアが開き、由香子さんが顔を覗かせる。

愛想笑いを浮かべると、逃げるよつとして自分の部屋へと駆けこんだ。

久しぶりに戻つて来た自分の部屋は相変わらずである。

本棚にはゲームソフトのパッケージが隙間なく並び、窓側の壁にはベッド。

部屋の中心には小型テレビが置いてあり、ゲーム機がセットされていた。

「懐かしーーああ……この手触り、この程良い重さ……本物のゲーム機だ。

やべえ、血がたぎる……絶対興奮して寝れないな、今日…」

背負っていたリュックをベッドに放り、テレビとゲーム機の電源を付けると、コントローラーを握る。

その時、ふと疑問が浮かぶ。

いつぞやかに、岸辺が陽一郎さんがゲーム機を売りに来たとか何とか言つてなかつたか？

そもそも、僕は田中優真であつて松下優真ではない。それに、ミケガサキにいたはずだ。

テレビ画面は僕の意思とは関係なくオープニングを流し、タイトルを表示する。

BGMが大音量で僕の頭に響く。それはまるで笑い声の様に、僕を嘲笑つている様だった。

『勇者撲滅』

問題の答えの様に。

その文字を見た途端、頭の中に電撃が走る。

不意に、部屋の明かりが点滅を繰り返す。

画面が白黒の砂嵐を起こし、ほんの一瞬、画面が変わる。

黒い水溜り。真つ白なYシャツは、黒く染まっている。

血の失せた蒼白の肌は黒い血を浴び、華奢な身体には一本の剣が突き刺さっていた。

雨の様に、ザアアー…と砂嵐は悲鳴を上げる。

その雜音に混じって、ちらほらと声が聞こえて来た。

誰か特定出来ないほどの、たくさんの声がしきりに僕の名前を呼ぶ。画面へ手を伸ばす。

途端、ブツリッ…と呆氣なく電源は切れ、一夜の夢の様に、素知らぬ顔で『勇者撲滅』のタイトルが表示された。照明が復活し、また部屋は光に満ちる。

「…つ大總統！」

思わず大声で叫び、辺りを見回す。

だが、辺りには誰もいない。唯、窓の外で溜息の様な木枯しが通り過ぎて行った。

「…優真、どうかしたのか？」

ぱたぱたと足音が聞こえ、兄が上がつて来たかと思つと、ノックも無しにドアが開く。

「えつ…いや、あの…、別に、何でも…」

「そうか。なら、良いが。お前が怒鳴るなんて…そんなこともあるんだな。…相談になら、いつでも乗るから、辛くなつた時は頼れよ」

兄は、と大人びているが優しさに満ちた笑みを浮かべて、部屋を後にする。

直ぐ隣からパタン…とドアの閉まる音が聞こえた。隣が兄の部屋ら

しい。

ただ、ぽかーんと間抜けた顔を浮かべた僕は一人呟いた。

「…誰、あれ」

僕の知ってる兄は、何か、もつとこいつ…由香子さんの子ですねって
いつのを惜しみなく受け継いだ生意氣の域を超えたどうじょうもな
く、強制不可能な性格の持ち主じゃなかつたつけ？

ベッドに突っ伏して目をつぶる。

意識は深淵へと墮ちた。

身体が死んだよつて冷くなつていぐ。

「…ん、起きろつて。さつさと起きろー馬鹿つ」

「痛…！カイン、何か用…？つて、あれ？元に戻つてる…」

その呴きに、カインは呆れた様に溜息を着いた。

布団の中では、猫モドキが小さな寝息を立てて寝ている。

「優真様、今日はデートの約束したじやないですかつ！忘れたんですか？」

「ででで、デートオオオオつ！？こんな奴とつ？姫様、お考えを改め下さいつ！それだつたら、このノーアイめがお供致しますつ！」

「ええ。ノーアイは荷物持ちよ」

くすくすと楽しそうにノワールが笑い、ノーアイは戸惑い半分、嬉しさ半分と言つた感じに笑つっていた。

いつの間にか、良い匂いが部屋に漂つて来る。

お腹空いただと皆で口々に言い合ながら、階段を下りると、吉田魔王様が厨房で調理していて、オズさんが皿を運んでいる。

教官は庭で、剣の素振りをしていた。

カインが駆け寄って、教官に声を掛ける。それをノワールとはやし立てて、教官は顔を真っ赤にして怒り、ノーラさんはやれやれと言つた様子で傍観して、吉田魔王様は苦笑を浮かべながら食事を運んでくる。

自分勝手で個性豊かな仲間達。

その姿が、徐々に薄れ、ぼやけていく。

「…つ…」

手を伸ばし、掴もうとして、ただ空を搔くだけだった。

身を起こす。

冷や汗が流れた。

いつもの、僕の部屋。

まだ、僕は『みけがわき』に留まっていた。

「…影の王（仮）は、そんなに『ミケガサキ』に戻りたいんですね…？」

聞き慣れたけだるそうな声が降つてくる。ほんの僅かに、怒氣の籠つた。

そう高くない天井を見上げれば、フレーティが面白くなさそうに見下していた。

「（仮）って何だよ、仮って…」

「全く、我が儘な主を持つと大変です…。アナタにその覚悟があるなら、お教えしましょう…。実行するも、しないも好きにしなさい」

「あ…とフレディは明後日の方を向いて溜息を吐く。

何かやけに不機嫌だな。

僕、何かした？

「…で、その方法は？」

僕の問いに、フレディは真顔になる。

小さな唇から言葉が発せられた。

その言葉に頭が真っ白になる。

「…え？」

僕のその態度に、フレディは少しイラついた様にぶっきらぼうに言う。

自嘲の様に歪んだ笑みを浮かべて。

「今の彼方が松下優真なら、彼方が『田中優真』になれば良い。松下優真の人生をぶち壊して、出来る限り『田中優真』の人生に近付けて、あの時と同じようにするんです。…運が良ければ、『ミケガサキ』に還れますよ？失敗すればそれつきり、母親に冷たい目で見られ、兄には蔑まれる人生に逆戻りです。それが嫌なら、大人しく松下優真として生きれば良い…」

憐れむ様な視線を僕に向けて、フレディはぼそりと呟く。
僕はただ黙っていた。

「代償無しに、願いは叶えられませんよ…。どんなことにも、不正を行えば、それなりの代償つてものを払う。それが世界の理なんですから…。

だから、彼方は、『松下優真』の人生を代償にして、自分の望みを叶えるのです。彼方にその覚悟があるのなら、私達はいつでも彼方を王として迎え、その願いを叶えましょう。我々の願いと引き換えに…。

では、彼方が自分に有意義な選択を選ぶことを願つて…『大總統』

by大總統をやけに強調して、フレディはそれだけ言つと、夕靄の様に溶ける様にして消えた。

残された僕は、一人ぼやく。

「…大總統、自分で言いに来いよ

第三十八話 ゲームに仕組まれた罠

僕が『みけがさき』に留まつて、早三年。

桃栗共に実る年月を、何の実りも無く、朽ちる若者の青春があつた。
まあ、二十五になつた大人に青春は不要か。

別に何の収穫も無く三年間過ごした訳じゃない。

だが、三年といつ年月は、良くも悪くも、重しに過ぎなかつた。

誰かに『ミケガサキ』の話をした事は一度も無い。

三人程、勝手に勘づいて愚痴染みた説教を受けた事はしばしばあつたが。

いや、説教染みた愚痴なのかもしれない。

現在、『みけがさき』。

季節は夏。時刻は夜七時。

家へと続く急な坂道をゆつくつと歩いて行く。

空を仰げば、満天の星空と白い月。

時に風が髪を揺らし、木の葉と砂埃が舞う。

何処からか、風鈴の音と蝉時雨が夏を奏でていた。

昼間でも無いのに、汗が滴り落ちて、コンクリートに吸収される。

「あれ、いつの間にこんな暗くなつたんだ？あつ、夏だからか。冬は明るいよな、この時間帯。

…懐かしいな、この台詞。實に三年ぶりだ」

三年と半年。

帰路僅か五分が、今では一時間と長引く。

他に変わった事と言えば、会社員になった。

陽一郎さんが務める田中カンパニーの平社員として。

そういう思いを馳せている間に、家の前に到着した。

松下といつ苗字の表札は剥がれ落ち、田中の表札が掛かっている。

あれから三年が経つた。

季節は巡って、夏。

今日、僕は『みけがさき』に戻る。

正真正銘、『田中優真』になつたから。

詳しい仔細は、後々機会がある時に話そいつと細つ。

今、主觀となるべき舞台は此処『みけがさき』ではなく、『ミケガサキ』なのだから。

…単に、説明が面倒なだけだが。

しかし、手向けの花束代わりに少し話でもするとしよう。

フレディというか、大總統から忠告を受け、途方に暮れる僕とは正反対に、軽快なメロディーが鳴る。
画面を確認せず、ボタンを押した。

「ハロー。僕、マイケル。ジョニーは行方不明だ。他當たれ」

ブツンッ…と一方的に電話を切る。

しかし向こうも諦めが悪く、何度も掛けて来る。

そんなやり取りが十回ほど続き、僕が折れた。

「…もしもし？どちら様？生憎、松下優真なら行方不明だ

「優真君、やつと話せたね。僕だよ、僕

「…」
ほう。これが巷で噂の『僕僕詐欺』か。

ネーム、いまいちだな。

「確かに優真だけど…で、誰？返答次第では切る」

「僕だよ。田中優真の義父。田中陽一郎」

電話越しから苦笑が聞こえてきた。

「ふーん、生憎だけど…って、ええええええ！？よ、陽一郎さん！？な、何で…？いや、ミケガサキに繋がるくらいだ。不思議じゃない…のか？」

「今、『みけがさき』の駅前に居るんだけど…。今、出れる？」

「…何処に？」

「家の外。もう下に居るんだけど…」

「…の前。つて、今、何て言つた？ワンモア」

「もう下に居るんだけど…？」

そつとカーテンを開けて、家の外を窺う。

成程、人影確認。ストーカーだと勘違いされないか？だが、僕の目は誤魔化されないぞ。

「メリーさん、成仏せよ
「うふふ…、僕、陽一郎さん。今、彼方の後ろに居るの」

ぽんつと肩に手が置かれる。

振り向くと、陽一郎さんが立っていた。

「…せめて、ノックはしよう?」

「突つ込みどころ、間違つてないかい? 優真君

「不法侵入?」

「…に変わりはないけど、普通は何処から入つて来たとかが無難じ
やない?」

成程。ツッコミとは難しい。

つまりは、こういう事か?

「メリーさん、成仏できない?」

「随分と根本的なところに戻るんだね」

「さつきから全部疑問形?」

「ギブアンドテイクを試みても、もう何も提供しないよ」

ちつ、思惑が外れたかっ…! 「冗談だが、

「久しぶり。何も出せないけどゆつくりして、行って。何か用があるんでしょ? 用件話してさつさと帰れば?」

「矛盾を感じずにはいられないんだけど? といふか、遠巻きに帰つて言つてるでしょ。」

折角『ミケガサキ』について教えてあげようと思つたのに…

その言葉に少なからず反応を見せると、陽一郎さんは困った様な、曖昧な笑みを浮かべた。

「…余程、気に行つたんだね。『ミケガサキ』が。

別に、止めようとかそういう訳じゃないから。その選択が君にとって有意義なものか…。

これから話すのはね、ちょっととした僕の体験談。それを聞いて尚、何に変えても、行くという覚悟があるなら、僕は何も言わない。

…今から、何年くらい前かな。僕等が中学生の頃、あるゲームが流行つた

そう言って、陽一郎さんは近くのベッドに腰掛けた。ちらりとゲームを一瞥する。

そして昔を懐かしむ老人の様な目で、静かに語りだした。

今、君がハマつている運命変換型革命RPG『勇者撲滅』。有名なゲーム会社の大作つて派手に宣伝されてたから、大人子供構わず皆が買った。

僕も、その一人。

「けど、唯のゲームじゃなかつたんだ」

「確かに、唯のゲームじゃないよね。クリア出来ない。超難しい」

「…そういう問題じゃないんだけどね。そもそも、クリアなんて想定されて作られてないんだよ」

そう。誰もが攻略出来なかつた。

だが、誰も不平を言う者はいない。何故なら、プレイヤーの殆どが、三嘉ヶ崎から姿を消した。

「社会現象じゃん」

「そうだよね。普通、そう思うだろ? だが、誰一人として気にする者はいなかつた。

まるで、その人が直ぐそこにあるかの様に振舞つているんだ。いや、本気でそう思つている。

けど、時間が経つと魔法の様に行方不明だつたプレイヤーが帰つてきたりした

「何だ、戻つて來たんだ。良かつたじゃん」

僕のその答えに、陽一郎さんは先程と同じような笑みを浮かべた。 そうでも無かつたんだよと小さく呟く。

「僕も、その行方不明者の中の一人。僕も、一度は『ミケガサキ』に行つた事があるんだ。一番田の『勇者』としてね。此処まで言えば、君でも分かるはずだ。

君が吉田雪にそうさせた様に、このゲームの一部…つまり、『魔王』と『勇者』に選ばれた特殊プレイヤーと呼ばれるプレイヤーだけは、ゲームの意思により目的を達成しなければ還る事を許されなかつた

『特殊プレイヤー』。

ある程度の時差こそあれ、必ず、二人『召喚』される。

一人は、ゲームの世界を救う『勇者』。残る一人は、この世を我が物にせんと企み、目障りな勇者を滅ぼさんと企む『魔王』。

『勇者』プレイヤーは魔王を倒せば、元の世界へ還る事が出来る。『魔王』プレイヤーは、元の世界に還る事は出来ない。つまり、ゲームを盛り上げる為の捨て駒。

…或は、人柱と言つたところだろ？。

「それは分かつてゐるんだけど、特殊プレイヤーと、普通のプレイヤーはどちらも『召喚』されてくるものじゃないの？」

「鶏が卵を産むのが先か、卵が鶏を生むのが先か…よく覚えてないけど、そんな例えがあるじゃない。」

だからさ、こうは考えられない？プレイヤーがゲームを選ぶんじゃなくてさ、ゲームがプレイヤーを選ぶんだ。ゲームにとつては特殊プレイヤーさえ手に入れば良い。だから、他のプレイヤーはついでなんじやないかって。実際、僕も何人かに訊ねてはみたけど、『刷り込み』の可能性が高い』

「刷り込みって事は、いつの間にかゲームのプレイヤーとして『ミケガサキ』で暮らしてたつけ訳？じゃあ、何で還つてこれたの？そのままゲームに取りこまれる可能性だって無くはないでしょ」

僕の問いに、陽一郎さんは小さく頷いた。

「それについても、一応は答えられるんだ。『勇者』が『魔王』を倒せば還ることが出来るように、プレイヤーも条件さえ満たせば還る事が出来たんだよ。商人なら金持ちに。村人なら結婚と言う風にね。

だから、本当に必要なのは『特殊プレイヤー』と呼ばれる一人だけなんだ。

それが一体何の目的で必要なのかは分からぬけど

「…陽一郎さん、二代目『勇者』なんでしょう？」いつ言つちや失礼だけど、誰を殺したの

陽一郎さんは一瞬、息を詰まらせた。
しかし、直ぐに話を続けた。

「その前に、『魔王』プレイヤーについて話しておこう。

『魔王』プレイヤーは、元の世界に還ることは出来ないことは君も薄々感じたと思う。

なら、魔王プレイヤーにはデメリットしかないのかと言つと、そういうわけでもないらしい。

魔王プレイヤーになつた者には必ず特殊能力が授けられた。切り札とも言つべき、一度だけの能力が。

それはプレイヤーによって違つただけど、それがある」とは僕が一番よく分かってる。

ねえ、優真君。レベルアップと道具とか武器以外でプレイヤーを強くするとしたら、どうする?」「

「『クラスチョンジ』とか、最悪…『転生』かな?」

その答えに、陽一郎さんは満足した様に微笑んだ。わしゃわしゃと頭を撫でられる。

「よく出来ました。…じゃあ、さつきの聞いてて答えよう。僕が二代目『勇者』として…、『勇者』プレイヤーとして誰を殺したのか?…他でもない。僕は、君を殺したんだ」「…生きてますけど?」

陽一郎さんは弱弱しく微笑んだ。今にも泣きそうで、触ると崩れてしまいそうな脆さを滲ませて。

「そりや、転生したんだから、覚えてないのも無理ないよ。寧ろ当たり前だ。

けどね、僕は確かに君を殺した。そして君は、そうなるなり業と仕向けた。お互い、ウンザリしていたかもしない。少なくとも、僕はこの世界に留まっていること自体が嫌だった。…君は、何が嫌だったんだろ?うね?けど、君は言つたんだ。『殺してくれ』って「…もしかして、罪悪感感じてる?」

窺う様に僕が陽一郎さんを見ると、陽一郎さんは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべていた。

そして憎々しげに吐き捨てる。

この人でも、そんな感情を抱く事があつたんだと少し感心した。

「だつて、君がそう望んでいようと望んでいまいと、例え異世界だとしても、僕のやつたことは人殺しに過ぎない。君を殺して元の世界に還つて来た僕はね、あまりの理不尽さに思わず死にたくなつちやつたよ。何故かつて？…何でだと思う？誰一人として気にする者はいなかつたつて、さつき言つたよね。

それはね、プレイヤーが還つて来たからこそその結果論に過ぎない。還つて来たからこそ、誰も気にしなかつた。なら、還つて来れなかつた…例えば、死んでしまつたとか。

そんなプレイヤーはどうなるのか？どうなつたと思う？」

「…問題になつてなつて事は、誰も気にしないつてことじゃないの」

「半分正解、かな。気にしないか…確かにそうだね。したくとも、出来ないんだよ。その人の記憶、存在そのものが消されているのだから。償いたくても、誰も覚えていないんだ…一部を除いてね」

陽一郎さんが頭を抱えて蹲る。

ガタガタと窓が揺れる。ふと、窓を見れば、雪が雨の様に激しく降り続いていた。

まるで、陽一郎さんの静かな激情を表すかのよ。

第三十八話 ゲームに仕組まれた罠（後書き）

ソシコニ係とボケ要素がない『みけがさき』から早く抜け出したい一心で書いてます。ちょくちょく話が飛ぶかもしませんが、後々書けたらいいかと思つてます。

此処まで読んで下せり、ありがとうございます！まだまだ続きます。

「…けどさ、陽一郎さんは僕を殺したんでしょう？仮に前の僕の能力が、『転生』だと仮定したとする。

普通は、三嘉ヶ崎じやなくて、ミケガサキの住民として存在すると思うんだけど…。何にせよ、ゲームの中で死んじやつたんだし」

「…ゲームの中でさ、三嘉ヶ崎での顔見知りとかに会つたでしょう？例えば吉田さん。実際はゲーム上のコンピュータプレイヤーとなつてるんだけどね。

結論から言つてしまえば、『リンク』してるんだよ。顔見知りのコンピュータプレイヤーは全員、過去にこのゲームに関わった事のある人物。一度遊んだことがあるとか、製作者とかね。一度関わつてしまえば、『リンク』が発生する」

ゲームの話かと思ひきや、パソコン用語まで入つて來たな。
正直、理解できるか自信ない。

「『リンク』って、どういう事？」

「穏やかじゃないけど、例えば、ゲーム上のコンピュータプレイヤーが死んだとしよう。

それが、『リンク』で繋がつてこのコンピュータプレイヤーだとすると、三嘉ヶ崎に生きる元と言つべきプレイヤーも死んでしまうんだ。その逆も然り。

例えば、吉田が不慮の事故にあつたとする。すると、『リンク』で繋がつてこの向こうの吉田魔王様も何らかの形で事故に遭う。

しかし、元々ゲーム上で設定されたオリジナルプレイヤー…つまり、元々設定されていたコンピュータプレイヤーだけは『リンク』が発生しないというわけだ」

つまり、カインや教育はオリジナルプレイヤーといつ訳か。

じゃあ、ノワールはどうなんだろ。雪ちゃんに似てるけど、『器』がどういうつ言ってたし、あのが本当の姿じゃないから、オリジナルなのかな。

「それじゃあ、僕とか、ゲームに関わりある特殊プレイヤーはどうなの？」

陽一郎さんが言う様に、僕が『転生』で第一の人生歩んでるんだつたら、僕なんかは関わりあるんだから、ミケガサキにも僕そつくりのプレイヤーが居ると思うんだけど」

「うん。実際は居ると思うよ。確かにいるんだけど、君の場合何故か『リンク切れ』になってるんだよね。何かしたの？ゲーム側からして有意義な存在とされたのか、それとも、特殊能力によるものか……」

ゲーム側から有意義な存在か。……無縁だな。

寧ろ、国際指名手配犯という邪魔者以外の何者でもない。

……いや、『魔王』プレイヤーだから良いのかな？けど、何だかんだで勇者紛いのことをしてるし……。

「そういうや、陽一郎さん。どうやって、此処来たの？」

「ゲーム上のミケガサキも、このみけがさきも、僕らの居た三嘉ヶ崎を元にしたパラレルワールドみたいでしょ？ゲーム上のミケガサキだって、製作者が造つたものだし。だったら、此処も同じなんじやないの？見た所、此処は、優真君とは限らず、皆の望みを叶えた世界。誰かによってこの世界も造られたんだよ。三嘉ヶ崎を元にね。

僕の話は此処まで。それじゃあ、話を元に戻そうか。……ミケガサキがどういうものか分かった上で、君はまだ、行きたいと思う？

「うん。戻りたいけど、陽一郎さん、どうやって此処に来たの?」

陽一郎さんは、曖昧な笑みを浮かべたまま無言。

話すつもりは無いらしい。

「僕は、君に謝りたかった。ただ、それだけだよ。

…進むと決めたなら、どうか後悔だけはしないでほしい」

陽一郎さんの姿が徐々に薄れしていく。

彼自身もそれに気付き、こつもの様に微笑むと、小さく手を振った。

「…話のお礼に一つ、言つておく。

僕は、陽一郎さんの謝るべき相手じゃない。何故なら貴方が謝るべき相手は何処にもいないから。

だからこれは、貴方の自己満足でしかない」

陽一郎さんが、驚いた様に目を見張り、小さく口を開く。

「けど、だからこそ僕は、今の今まで生きれたんだ。償い相手じゃないけど、僕は貴方を赦すよ」

「そつか…。ありがとう、優真君。それで十分だ。
僕に出来る事はもうないだろ?けど、頑張つてね。それじゃ、さよ
うならだ。またね」

やつぱり、陽一郎さんの姿は跡形もなく消えた。

* * * *

まあ、そんな訳で回想終わり。

そんなこんながあつて、今に至るのです。

これから、僕が行うこと。それは、最低最悪、最終最後の手段だ。

この世界が三嘉ヶ崎を元にした、パラレルワールドの内の一いつだとしよう。

分かりやすく例えるなら、縦一列に並ぶオセロを想像してほしい。まあ、何でも良いのだが。

端に黒駒を一つ。これを『田中優真』の存在する三嘉ヶ崎とし、他のパラレルワールドを全て白にしてしまう。

今、僕はその内の一つにいる。そうだな、一番最後列の方が分かりやすいから、最終尾としよう。

『田中優真』に戻るということは、駒をひっくり返して黒に変えるということ。当然、そんなことをすれば前に並ぶ…つまりは原点まで続く無数の白い駒も黒に変わってしまう。自分勝手な、僕の意志によって。

そんなことは、ゲームをバグらせることと同じ。

つまり『禁忌』ってわけ。だから、どんなことが起きよいつと覚悟を決めておく必要がある。

大總統達が言いたかったのはこいついう事だ。

ドアを開ける。家中は真っ暗だった。

「ただいまーって、陽一さんまだなのか。じゃあ、ゲームでもやるか。折角居ないことだし。

あー、エアコンタイマー予約し忘れた。珍しいー」

靴を乱暴に脱ぎ棄て、早足で廊下を抜けた。

嬉しくて涙が出そうだった。条件が揃っていても、何かしらの不祥事で還れないこともあった。

日付、季節、天気…一つでも欠ければ、また来年。だが、三年目で成功するのであればまだ良い方か。

テレビとゲームの電源を入れ、ゲーム機に一礼するとコントローラーを握り、指定席に座る。

「スイッチオン！」

床に魔方陣は浮かび上がらない。
代わりに、小さな溜息が聞こえてきた。

「…僕の覚悟、分かつてくれた？」

誰も居ない暗闇に問いかける。

「…本当に、後悔しませんね？何があつても…もし、仲間達が全員死んでいたらどうするんです？彼方が、還る意味はあるんですか？」

フレディの声が聞こえてきた。

振り向けば、後ろに立っている。

「…大丈夫。覚悟できてる。全部、何があつても大丈夫だよ。だから、僕を…僕を、『ミケガサキ』に還して下さい」

「そうですか。では、大統領。よろしくお願ひしますね。それでは、私は失礼します」

「…とフレディの姿が消える。
また、静寂が部屋を包んだ。

「大總統、ついでにもう一つ。頼み事していい? 代償はちやんと払うから」

『願いは何だ?』

何処からか声が聞こえて来る。幾重にも重なった重い声だ。

「『魔王』は、僕一人で良いと思うんだ」

『お前はその為に、何を犠牲にする?』

「三嘉ヶ崎での、『田中優真』の存在を代償に、僕はそれを望むよ。流石に、プレイヤーを送り込めないようにしては無理だと思うから」

『それがどういうことか、分かっているんだな?』

小さく頷いた。

「だつてさ…、このまま進んだら、僕のせいで人生滅茶苦茶にされた松下…いや、『田中優真』が報われないじゃないか…。僕はね、ずっと考えてた。もし、僕が最初からいなかつたらどうなるんだろううつて…。ずっとね、母が何で僕を邪険に扱うのかが分からなかつた。今も、分からない。もし、僕がいなかつたら母は…、松下由香子は幸せなのかなつて。親孝行なんて今までしたこと無いから、最後くらいね。

：邪魔者は消えるべきだ

大總統は何か言いたそうな雰囲気だったが、何も言わなかつた。

たつた一言。

『我らが王よ。彼方の望みを叶えましょ!』

僕の足元が、黒く光る。
ふと思つて、訊ねてみた。

「思つたんだけどさ、僕の死体つて火葬されてないよね？」

『お前が死んで数秒経つた時に還すから心配ないだろ』

大總統の声が遠くなる。

目を閉じる。どうか悪夢となりませんようにと、それだけを願つて。

「…つ、……い。…おいつ！」

血の匂い。生ぬるい風。蒸暑い気温。

ああ、戻つてこれたのかな。久しぶり、『ミケガサキ』。

「うーん…、ああ、皆。久しぶり？」

目を開ければ、皆が取り囲むようにして僕を見ていた。
その姿をみて、ノワールが僕に飛びつくと共に、泣き崩れる。

「全く、無茶しますね…」

『無事でなによつ』

ノーアさんと、吉田魔王様が苦笑を浮かべて微笑んだ。
教官はカインの後ろで号泣している。

辺りを見渡せば、火の海。

ラグド兵の皆さまは茫然としているというか、驚愕しているというか。

「…ノワール、ちょっと良い？立ちたいんだけど…」

「ぜ、絶対駄目ですっ…行かせませんっ！」

泣きながらも、ノワールは頑なに首を振る。

困った様に吉田魔王様に視線を向けると、困った様に視線をそらされた。

「大丈夫。ちゃんと、分かってるから。心配しなくて良いから。…
ありがとうございます」

そっとノワールを退かす。

未だふらつく足で立ち上がると、ゆっくりと歩く。

そして、目を開けたまま血だまりに沈む母と寄り添つ様にして横たわる兄の傍へ寄つた。

「雪ちゃん」と、決めていたんですね…復讐を。オズさん」

陽一郎さんそつくりなその人に、静かに問いかける。
後ろに居た兵士の内、一人は変装したオズさんだ。その片手には弾切れになつた銃が握られていた。

もし弾が残つていたとするならば、この人はきっと死んでいたことだろう。

「恨みますか？」

オズさんは何処か投げやりに問いかけて来る。
僕は小さく首を振つた。

「生きててくれて、何よりです」

その答えに、オズさんは驚いた様な顔をした。

そしてその場で泣き崩れる。きっと、向こうの陽一郎さんも母に殺意を抱いていたのかもしれない。

これもまた、自業自得の結果だ。いや、因果応報かな？

そう、全部分かつていた。

だから、今更『田中優真』の存在を消したところで松下由香子と兄の命は、救えない。

運命は既に決まってしまったのだ。

『田中優真』の存在を消したところで、駒は進んでしまっている。こればかりはどうしようも出来ない。

『リンク』で定められた運命により、次期が来れば母と兄は必然的な『不慮の事故』で命を落とす。いや、事故というより殺人か。…陽一郎さんに、なるのかな。犯人は。

カインが僕の肩に手を置いた。

ノワールも、心配そうに僕の傍に寄る。

「…泣きたいときは、泣いて良いんだぞ？」

進むと決めたなら、どうか後悔だけはしないでほしい。

そう言つた陽一郎さんの言葉が頭の中に浮かぶ。

あの人は分かつていたから、そう言つたのか。僕には分からない。

「大丈夫。…分かつてたんだ。だから、僕は…。これは、ただの『逃げ』だよ。自己満足の代償で、願いなんだ」

だから、泣く資格も、誰かを怨む資格もない。
これは、僕が招いた結果だ。

全部背負つて生きる覚悟を、僕は決めたから。
全てを天秤にかけてでも、僕は此処へ還りたかった。

だから、後悔なんてしていない。

第三十九話 夢から覚めて（後書き）

ミケガサキにスピード送還を果たさせました。ええ、やりましたとも。

シリアルムードは変わらずです。

まだまだ続きます。お読み下さりありがとうございます。

第四十話 罪の清算

「勇者に剣で貫かれてなお、生きとこなす。魔王といつぱ
化物ですね、彼方…」

「お誉めの言葉として頂戴しておくれよ」

引き攣つた笑みを浮かべて、ミハエル何とかは言ひ。

そんなこと言われてもねー、やつだからじょうがないじやんとは流
石に言えない。

僕、そこまでKYOUじゃないから。…懐かしいね、この言葉。

「というか、化物より魔王の方が強くない?」

「知るか、そんな事。それより…びひするんだ、これから。まあ、
選択肢は一つだらうが」

カインが至つて真面目な口調で言ひ。
どうやら突つ込んでいる暇はないよつだ。

「…逃がしあしませんよ?我がラグド王国がこのミケガサキを滅ぼ
すまでは。

魔王を倒したとなれば、後々有利に立てますからね。びひにせよ、
こんなに倒壊してしまった国、建て直すのも不可能でしょ?。唯一
の権力ともいうべき女神と勇者はもういないんですから」

「勇者はどひかなあー…。案外、これからバンバン来りやうかもよ

？」

「減らす口を…」

ミハエルは腰に差してある剣を引き抜くと、僕に向ける。

あー、僕も剣の一つや二つ持つべきなのか？

そう思つていた僕の前に、皆が立ちふさがる。

うん、物凄く嬉しいんだけどさ。皆、そろそろ恥を知りつつ、

「皆、お気持ちは大つ変嬉しい。だが、武器を変えて出直してくれ
折れたパンとかパンとかパンとか真顔で構えながら田の前に立たな
いでほしい。

シユール過ぎて笑っちゃう。

「しようがないだろ、武器がこれしかないんだから」「はいはい。皆、疲れてるんだから、休んだ休んだ。僕の代わりに

女神様達見といて」

「優真様の方が遙かに重症ですが？寧ろ休んで下さい！」

そつこひつこ言つているうちに、剣を構えたミハエル何とかが突進して
きた。

意外に早い。教官といい勝負だ。

手を差し出す。黒い霧が集まり、黒い本が現れる。

ノーラさんと吉田魔王様は何かを悟つたのか、カインとノワールを
僕から離した。

「何をするか知りませんが、読む暇など『えませんよつ』

ですよねー！けど、それは困るんです。…昔の僕ならね。

「本は読む為だけのものじゃないと証明してやるよつー！」

「…やけに強気だが、大丈夫なのか？」

『あ…』

カイン達が遠くからそんな事を呴く。
さりげなく酷いな、お前ら。少しは信用してくれても良いんじゃな
いの？

「戯言を…！」

剣が僕目掛けて近付いて来る。

こう言う時こそ、本を使うのだ。

ザクッ…といい音がして、剣が刺さる。
流石早さが凄いだけに、深く刺さったな。そう簡単には抜けなさそ
うだ。いやー、危ない危ない…。

「本に差した…だと?くつ、抜けん！」

「馬一鹿、馬一鹿! 本の分厚さ舐めんなよー! こうしてやる、えいつ」

バキッと鈍い音が響き、剣が中心から折れた。
遠くからカイン達が溜息を吐く。

『低レベルな争いだな』

「…いつもの事だから良いんじやないか? それより、『沈黙の書』
が受けたダメージはお前も受けるんじやなかつたのか?」

「その点については、色々あつて大丈夫になった。さて、ミハエル
何とか。降参するなら今之内だよ」

「残念ですが、彼方は我が王国が何に秀でているかお忘れなご様子。
思い知りなさいつ」

ミハエルは魔力を脚に集め地を蹴ると、僕から距離を取る。そして『瞬間移動の陣』で、辛うじて僕の田に見える場所へ移動した。

その魔力に反応したのか、剣が光った。

うーん、何かヤバい感じ。

「…もしかして、爆発？」

「馬鹿っ、やつぞ逃げろッ！」

君等もねーと言ひ暇なく派手な爆音がして、黒煙が辺りに立ち込める。

「…案外、あっけないですな。しかし、これで最終兵器を出す手間が省けた…」

ほう…とミハエルは息を吐く。

そして辺りを注意深く見渡す。だが、煙が邪魔で見えそうもない。果たしてこれは煙なのか？

そう、煙というよりは余りにも濃い。田の光さえ遮断しているかのようだ。

訓練で特化された五感で、暗闇でも田が効くはずだ。なのに何故見えない？

焦りを覚え、ミハエルは陣を形成する。しかし、何の反応もない。

「危ないな、もう少しで首も巻き込まれやつてこりだつたじやないか」

暗闇から声が聞こえてきた。

ミハエルは自嘲を浮かべる。魔王ともあるひつ者が、あんな猫騙し染みた玩具で死ぬはずがないと。

「空間固定ですか…。成程、流石ですね」

「今度こそ、お詫びの言葉として頂戴しておくれよ。

闇討ちは趣味じゃないけど、これ以上危険に晒せられるのは困る。皆の為にも、僕の為にも、ね…。

それじゃあ、さよなら」

何の感情も含まれていない声色。

詠唱が暗闇に響く。

それが止んだ時。

身体のありとあらゆる感覚が遮断された。

『…何処が闇討ちなんだ?』

笑いを含んだ楽しそうな声色が聞こえて来る。幾重にも重なった深く暗い声。

「こやー、流石こそ、空間」と軽を瀆しますとは言えないじゃない。だから闇討ちっこと。知らない方が良い事つて、世の中にはたくさんあるよ…。わつきから楽しそうだね、大總統」

ずっと笑い声の様な空間の震えが伝わって来る。

何処からか生温かい風が吹き、長くなつた髪を揺らす。

何故か書の力を使うと伸びるんだよね、髪が。その方が悪っぽいからかな。まあ、背が伸びてるから文句は無いけど。

そして手に持つていた本を閉じる。

「パタンッ…と小さな音が一つ。それが合図の様に、元の場所へと戻つた。

「どうやら僕の姿も元に戻つているようだ。せめて身長だけはそのままにしてほしかつたな。

「馬鹿つ、さつさと逃げろ…って、何とも無いな?ナルシスも見当たらないし、何処行つたんだ?」

「まあ、居なくなつたらそれはそれで良いじゃん。一件落着つと…」

流石に、空間の中に閉じ込めて潰しちゃつたとは言えないし。

指先から炎を出し、書を燃やす。

パキバキと燃えているが、灰は出ない。

『燃やして良いのか?』

「それが約束だから、叶えてあげなくちゃ。それが条件だ」

完全に炎に呑まれた書を、自身の影に落とす。

それは地面に当たることなく、影にゅつくつと吸収されて行つた。

「… わてど、どう立て直してみる?」

「…」の状況の事か? それとも、国?…あることは両方?」

やや面倒な調子でカインが返す。

辺りには上司(?)を失つて尚鬪志を燃やすラグドの皆々様。いや、上司失つたんだから当たり前か。

「けど、正直面倒

「答えになつてませんよ」

ノーライさんが近付いて来て隣に並ぶ。吉田魔王様もオズさんもノワールも教官も笑みとか、泣き顔とか、色々な表情を浮かべて側に立つていた。

「そこで、一つ。提案が」

「最初からそれを言いたかつたんなら、さつさとじる。ほら、ハチの巣にされるぞ?」

銃やら何やらを構えたラグド兵が狼の様な鋭い目つきで睨んでいる。今にも撃ちそうだなどかそんな事を考えながら、言った。

「『魔人大戦争』でなんとかなるかな?」

皆さま、覚えていらっしゃるでしょうか。いつかのあの、無茶苦茶な一活召喚です。

『成程。…止められる自信は?』

「それは、この争いのこと? それとも魔人大戦争?」

吉田魔王様の問いに恍ける僕だが、ノーライさんが真顔で答えた。

「両方に決まっています」

「…何でも良いが、早くやつた方が良さそうだ。今にも撃ちそうだぞ」

「はーい。それじゃあ、出来るだけ離れた方が良いかもって…無理だね。まあ、大丈夫でしょ。人数は減らしておいつ

静かに目を閉じる。

それだけで何か見えない力が働きかけるのが分かる。

「我、ファウストの王。暗黒の使者、破壊の限りを尽くす者。美しい貴女、我が盟約の友よ、我が声に答えよ。」

「詠唱といふことは、この前の比じやないと思うが…本当に大丈夫なのか？」

巨大な魔方陣が足元を中心に形成される。

黒く光つたかと思うと、黒い光の柱が空を裂く。辺りは暗闇に包まれ、兵士達は戸惑いの表情を浮かべて辺りを見ていた。

「これは……。違う」

「何が違うんだ？ 召喚に失敗したのか？」

僕は暗闇に包まれた空を仰ぐ。カイン達もつられて上を見た。

「確かに召喚したけど、これは僕が召喚した相手じゃないよ。どういう事だ…？」

『この感じ…魔力魂の魔力と似ている…。人の魔力と生命の混じつた歪な魔力…。まさか思うが、魔力魂が独自の意思を持つたのか？』「ちょっと待て、何でそうなるんだ？ 訳が分からない」

戸惑いの表情を浮かべるカインに、ノワールが説明した。

『『魔力魂』というのは、前にも行つたかも知れませんが、人の生命と魔力を結晶化した代物です。』

そして、女神はそれを悪用し、多くの人を犠牲に魔力魂を造りました。

ある特定の場所で多くの生命が失われれば、当然その場所に、人の残す感情によつて膨大な力が生みだされるんです。一時的なものですが…。『魔力魂』は言わば人の想い…魂の結晶。

私達は人の生命を犠牲にしたくはないので流出を拒んだのです。——人につき一つ。中には結晶にならないでそのまま命を落す者もいました。

女神の場合、複数に一つを造っていた様です。複数の意思が統合し、もしこの場に溜まる犠牲になつた人々の想いに反応し、共鳴したのならば…。意思を持つまでになつても不思議じやありません。元は、意思がある唯の、人間だったんですから…」

空が裂ける音。その間から甲高い悲鳴が聞こえてきた。
赤い光が稻妻の様に轟く。

その裂け目から真っ赤な目が覗く。
ぎょろぎょろと蠢き、僕等に視線を固定する。

地を震わす悲痛な叫び声。

あまりの声量と悲痛さに、ノワールや教官が耳を塞ぐ。

「…何と言うか、ラグドの兵を追いかえせそうな雰囲気だけども、こつちにも火の粉が飛んできそうだね？」

「明らか、巻き込まれるだろつな。何が起こるか知らないが…」

呑気に呴く僕に、カインが真剣に返す。

一方、吉田魔王様とノーアイさん達は沈んだ表情でうつむいている。

『これが、私達のしたことへの代償なのかもしれないな……』

勇者でない唯の男。素質が無い為に、命を落とし、その息子が我々とはまた違う方法を用いて混沌を世界に生んだ。

もし、ヘブライ達の言つ混沌が『魔力魂』で、その息子とこうのが吉田魔王様なら色々と辻褄が合つた。

なら、素質が無い為命を落としたのは吉田さんのお父さんとこうとか。

三嘉ヶ崎の吉田さんはどうだつたんだろう？…確かめる術はもつ無いけど。

「だつたらさ、清算すれば良い。赦されない罪なんて多分、無いよ。僕はそう信じてる。

…流石に僕一人じゃ、これはキツそうだ。皆、手伝つて

「『当たり前だ』」

教官とカインが声を揃えて言い、僕の前に立つ。

ノワールも静かに隣に寄り添い、オズさんもさり気なく側に寄つてくれた。ノーアさんは呆れたように僕を見ているが、その顔には笑みが浮かんでいる。吉田魔王様は暫く呆気に取られていたが、観念した様に首をすくめて笑う。

「あはははっ、皆で戦えばお化けなんて怖くなーいっ！」

「…要するに、怖い訳だな？」

「……正直、夢に出て来そうなほど怖いんだけど」

第四十話 罪の清算（後書き）

そろそろ『新資源騒動編』も終盤で『いやこます。』長くなりましたが、お読み下さりありがとうございます。全体的な話はまだまだ続きます。

第四十一話 魔力魂の意志

地鳴りが響いて、辺りが一瞬だけ黒一色なる。皆、無言で寄り添う様に一か所に集まつた。

何処からか肌を刺す様な冷たい風が吹き抜け、赤い稻妻が轟き、空の裂け目から鮮やかで不気味な赤い一つ目が覗く。辺りが暗いだけに、それはより一層不気味に見えた。

『空間固定か…？いや、まだ廃墟だな』
「恐らく、ミケガサキ全体の空間を囲もつとしているから時間がかかるてるんだと思いますわ。けど、相手は魔力の塊…。そつは掛からないでしょ…」

吉田魔王様が辺りを見回し、ノワールは空の裂け目から覗く『魔力魂の意志』を見つめた。

そして、祈る様に胸に手を当てて、目を閉じる。

「何と言つか、普通の攻撃は届きそうにないな？」
「あー…、未練というか祟られない？倒しても大丈夫なの？嫌だよー…」
「真面目に考えて下さー…どうするつもりです？明らかに物理攻撃は無理でしようね…」
「…それについては、時間が経てば可能なんじやない…？ほら、ゆっくりだけど迫つて来てる」

ズズズツ…と微睡から覚める様に、ゆっくり『魔力魂の意志』は地に近付いている。

時に胸が張り裂けそうな悲鳴を上げながら。

「總員、攻擊ツ――――！」

野太い声が響き、紫色の光の弾が空の裂け目目掛けて飛んで行つた。ラグドの兵も流石に身の危険を感じたのだろう。『魔力魂の意志』を攻撃して行く。

耳を劈く悲鳴が響き、赤い目玉がぎょろぎょろと右往左往に動く。その悲鳴に呼応し、赤い雷が轟いたかと思うと、複数の雷が一いつ向かつて落ちた。

「……来るぞつ！」

「さてさて、防げるかな……？」

田玉に負けないくらいの巨大な黒い陣が一重に展開され、そこに雷が落ちる。

しかし、全て防げる訳じゃない。ラケは兵の方に落ちた雷までは防げず、悲鳴が聞こえてきた。

そして
螢火の様に小さく儚い光が空の裂け目に向かって上がり去っていく。

「……っ！あれに当たつたら魔力魂に成る訳ね…。 しうがない、まだいる奴は助けてやるか…」

「おおっ！ たまにはやるな」

「感心してる暇あつたら、何とかしてよ……結構、疲れるんだから……」

セーのつー

ぐぐつと陣が大きくなり、一瞬凹んだ。そして膨れ上がる。その衝撃で雷は、四方八方に散った。

「うへー…疲れた。吉田魔王様、何か策無い?出来れば穩便なの『どちらにせよ、このままじゃ空間を固定されて死ぬ。一端、倒すのは諦め、アレを押し込むことに専念した方が良いだろうな。ノーア、行けるか?』

「ええ。この場合、仕方がありません」

吉田魔王様がノーアさんを見て、仕方なさそうにノーアさんは頷く。

「…つまり、あれを何とかして裂け目の中に押し込んで、その中で倒すってこと?別に良いけどさ、雷被害で大変な目に遭うんじゃない?僕らも、ラグドの奴らも…。無理じゃね?」

『死ぬか結晶となるかの選択しかなくなるが?』

「どちらにせよ、同じ事じゃない?うふふつ、我が主。お久しぶり。遅れちゃつてごめんね~?」

女の声が響いたかと思つと、蝙蝠の大群が僕の影から飛び出してきた。そしてぐいっと後ろに引き寄せられる。

「わわっ。その声…、ヴァルベル?」

「うふふつ、正解。お呼び出し、光栄で!」さいます。それにしても、丁度良い大きさね、主様は。

大人主様も凜々しくて素敵だけど、覚醒前の主様も可愛いわ

ぎゅうーと抱きしめて来るヴァルベルから逃げようかと視線を彷徨わせる。

氣のせいかな？女子から殺氣を感じるんだ。

血の通つていない様な白い蒼白の肌。長い白銀の髪を後ろで束ね、奇抜とも言えるメイクをしたこの女性こそ、ヘブライ達の主。氣高き吸血鬼の女王…いや、お嬢様。ヴァルベル・バルデン。闇の女王と呼ばれ、大總統の十三の側近の一人でもある。

『…他に策があると？』

吉田魔王様が困惑と疑問を混ぜた挑発的な口調で、ヴァルベルに問う。ヴァルベルは妖艶とも言える大人びた笑みを浮かべ、微笑んだ。

「我が主と、『死の夜』がアレを何とかすれば良い。意志の疎通なら今なら可能でしょうし。
残りは…そうねえ…。脱出の準備でもしてれば丁度良いんじゃない？そこの人は、さつきから色々と下準備してくれてるし」

ヴァルベルはオズさんをちらりと見た。

オズさんが何かを言う前に、ノーラさんがヴァルベルに普段は見せない様な剣幕で詰め寄った。

喧嘩かな？何でも良いけど、僕を解放してからやってくれ。

「お前が、姫様の何を知つていると言つのですつ！？」

「あら、逆に彼方が何を知つているというの？元々、『魔力魂』になれなかつた残り力スが集まつたのが、『死の夜』なんだから。あれにとつては、成功して結晶になつてしまつた事よりね、失敗した奴らが集まり一つの意志となつて生きている事が許せないのよ。自分達はあんなに醜い姿にされ、人の願望の為だけに利用されると言

「……兀のう」

ヴァルベルの言つ事に、ノーラさんは頭を伏せる。

そんなノーラさんに、ノワールは静かに近寄ると抱きついた。

「ノーラ……私は大丈夫よ。心配してくれて有り難う。優真様……お供、お願ひできますか？」

「勿論、僕で良ければ何なりと」

「……私は、乗せませんからね。絶対……」

静かに呟くノーラさんに、吉田魔王様は、半ば困った様な、最初から分かっていた様な曖昧な表情を浮かべてみていた。

「優真、俺達はどうすれば……？」

「荷物つてほどじやないけど、ちょっと色々と困るかも。だから、ラグドの奴の面倒見といで。

売れる時に恩は売つておかなくちや。一端は退いてくれると想つよ。空間固定つて、結構脱出するの難しいから、吉田魔王様はオズさんのサポートに。教官はカインと同じくラグドに一喝入れてあげて「……」。教官は頷くと、カインを片手で掴みあげそのまま引きづつて行く。吉田魔王様達は僕を見るだけで動こうとしなかった。不満というよりかは、僕の次なる行動を待つて居るようだ。

「『『召喚』』

魔眼を発動させ、召喚の陣を形成させる。

白い光が辺りを包み、勢いよく何かが飛び出て来た。

「——アツ——」

「久しぶりだね、猫モドキ。お前…、あの時はよくも逃げたな？ははっ。見ないうちにでかくなつたなあ！強そだ！」

「優真様、でかいの域を超えてますわ…。しかも、一目見て強いつて断定できます…」

ズシンッ…と猫モドキは地に降り立つと嬉しそうに僕を見る。

真っ白でふかふかだつた毛は、純白の堅そうな鱗へと。赤と黄の目は、漫画とかで見る竜以上に迫力があつた。額の角はカジキの様に長く伸び、先端が槍の様に尖つてている。背中の羽根は透明度が増し、養成の羽根の様だが、触つてみると甲羅の様に堅い。その姿は猫というよりは、正真正銘の竜そのものだ。

そして竜より神々しく、日の光の様な輝きを放つていた。プラチニオンと呼ばれるのも、頷ける。

「一つ言いたいのですが、プラチニオンの角と、カジキの角で比較してしまつと口マンがありませんわ…」

「いやー、他に言い例えが見つからなかつたから…。ごめん。早速で悪いけど、猫モドキ。あそこまで乗せてくれる？」

「二アツ」

「ありがとう、助かるよ。僕は猫モドキに乗るから、ノワールはノイさんに乗せてもらつて」

「なつ、何を勝手な事をつ…」

怒氣と困惑が混じつた声色でノーライさんはそっぽを向く。うわー、大人が拗ねるのつて面倒だ。

「別に、ヴァルベルは一言もノワールに死ねとは言つてないよ。意志の疎通が出来るなら、もしかしたら…つていうことを言つただけ。嫌なら置いていく。ただ、僕一人じゃ何かあつた時ノワールを守れないからね？」

呟くように囁いて、僕は猫モードキの背中にに乗る。ノーラさんは弾かれたように顔を上げた。

それにしても竜の背中か…。うん、堅いな。座布団敷きたい。とうか、僕は何処に捕まれば良いのかな。急降下とか、急上昇したら確実に落ちるよ?

「我が主。私が支えてるから大丈夫よー?」

「助かるよ、ヴァルベル。結果がどうであれ、やるしかないんだろう? 大丈夫なの?」

「その為に私が遅れて来る破目になつたのよー。サポートはするけど、どうなるかは分からぬわね」

僕等は空を仰ぐ。

赤い目は確実に迫つて来ていた。
圧倒的な魔力のせいで、思う様に身体が動かない。

キュオオオオーネン……。

笛の様な透き通つた声。

見れば、猫モードキともう一人。真っ黒な竜が鳴いていた。
その背にはノワールが乗つっていた。

「ま、まさか…ノーラさん? カツ」「いいーーー何あれ! あの人、竜

だつたの? ねえ、吉田魔王様」

『ノーラはプラチーナの亞種だ。本人は嫌つていつも人の姿でいたが。ほら、さつさと行きなさい』

吉田魔王様が苦笑を浮かべる。不意に、三嘉ヶ崎の吉田さんと陽一郎さんの残像が見えた気がした。

…寝不足かな？

「…行つてきます」

その声と同時に、猫モドキが羽根を広げ空へ飛び立つ。直ぐに上空へと上がり、隣にノーアイさんが並んだ。

「…何、泣いてるんですか？」

「優真様、どうかしましたか…？」

「い、いや…何でもないよ。あはは、変だね。僕…。うん、大丈夫

…。大丈夫だ」

涙を拭う。後ろでヴァルベルが痛みと悲しみの混じった優しい目で見ている。

静かに抱き寄せてくれた。

「生きて帰りますよ、必ず。…皆が待つてます」

「そうだね。それじゃあ、第一閨門突破と行こうか」

「一アツ」

空の裂け目へと僕等は全速力で向かつていった。赤い雷が大蛇の様にうねりを上げて僕等を迎える。

「…という事で此処からは別行動という事で」

「…ちょっと…、お供の意味、分かってるんですか！？」

「困った時はいつでも呼んでくれ。独自の判断でピンチっぽい時だけ駆け付けるから

そう言つと、分厚い雲の中へと身を眩ます。

ノーアイは溜息を吐いた。

「相変わらず、勝手な男ですね…」

「ふふふ…。その方が優真様らしいわ。さて、行きましょう。『魔力魂の意志』の元へ。

それが終わったら、皆で優真様の為に大説教会でも開きましょう」

うふふふ…と腹黒い笑みを浮かべるノワールに、ノーラは少しだけ
優真を哀れんだ。

第四十一話 真の標的

「いやー、急に大人に戻ったから驚いた…。せめて予告が欲しいよね」

「にしても、我が主。いつ、書の力をお使いに？書の眷属を召喚したところで、その姿には戻らないでしょ？」

長い黒髪を風が揺らす。

ヴァルベルが気を利かせて後ろで一つ結びにしてくれた。

「話すにしても、あの雷は邪魔でしょ？それに素直に行つて『魔力魂の意志』が攻撃してこないとは限らないし。だから、少しだけ話し合いの場を作つてあげただけ。猫モドキ、僕が合図したら『魔力魂の意志』の元まで運んでくれ」

少し低くなつた声に、猫モドキは困惑しながらも一鳴きした。

少しもたれかかるようにして座る。その背をヴァルベルが支えてくれた。

既に額には弾の様な汗が浮かんでいた。ヴァルベルはそつと手を当てる。母親を見つけた時の様な安心しきつた笑みを浮かべて、僕は目を閉じる。

「けど、変装とか正体がバレなかつた主人公はいないからなー。きっと早々にバレるよね」

「要するに、それが心配なんですね」

「期待と心配…半分半分かな？」

「…にしても、雷が落ちて来ませんわね？向こうの意志によるものかしら？」

「いえ、違うみたいね。攻撃したいのに出来ない様だわ。一体、何故…」

ノワールは『魔力魂の意志』を見て言つ。

『魔力魂の意志』は一つしかない大きな目を色々な所へ動かしていった。どうやら困惑している様だ。

「姫様には見えていないでしきうが…、恐ろしく巨大な魔力が『魔力魂の意志』そのものの動きを抑え、辺りの雷は『時間停止の陣』でせき止めているようです。証拠に、『魔力魂の意志』が全く落ちて来ないでしきう？」

「けど、そんな膨大な魔力をこれ程までに完璧に隠せるなんて…」

困惑したようにノワールが言い、ノーラは溜息を吐く。

「まさに、『火事場の馬鹿力』この事ですね…。もう、人の域を越してます。我々竜でさえ、不可能ではありますんが、若輩者には無理です。是非とも大説教会を開くべきですね。賛同します。

何にせよ、急ぎましょ。これはリスクが大き過ぎる…」

「魔力の消耗が激しいから命に関わるのですか？」

「いえ、根本的に雷を止めている陣の力と『魔力魂の意志』を抑える力…どちらかが無くなつた時点で、意志の傍にいる我々より、攻撃を邪魔したアレの方が目障りとされるでしきうね。即魔力魂の仲間入りとなりますよ。全く…、変なプレッシャーの掛け方をする。嫌な奴ですね、恐らく友人は少ないでしきうね」

「時間内に説得できないのなら諦めて戻つてこいと言つことですか…。とにかく急ぎましょ」

ノーリが黒い翼を大きく羽ばたかせ、一気に『魔力魂の意志』の元へと詰め寄った。

ノワールは立ち上がって、手を伸ばす。

バチンッ…と大きな音がして、手が弾かれた。

それが『魔力魂の意志』によるものなのか、意志の動きを抑える為の魔力による妨害なのかは分からぬ。ただ、『魔力魂の意志』は零れそうなくらい大きな目をさらに見開いて、ノワールを見た。

その目にはしっかりとノワールが映っている。

次の瞬間、ドブンッ…と手が沼に嵌つたかのように『魔力魂の意志』の元へ呑みこまれて行く。

「わっ…」
「姫様っ…！」

抵抗も虚しく徐々に呑みこまれて行き、ノワールの身体はノーリの背から少しづつ浮いていた。

ノーリは成す術なく見ていたが、ふと思い出したように辺りを見渡す。

空気を大きく吸い込むと、あの馬鹿を呼ばうとした。

「待つて、ノーリ…。大丈夫、何もされてないわ…。」していると、『魔力魂の意志』のね、想いが伝わって来るの…。そ、寂しかったのね。気付いてもらえないのが、苦しかったのね…」

ノワールの漆黒の瞳は何処か虚ろで、寝ぼけた様な口調だ。どう考
えてもおかしい。

そう思つてゐるうちに、呑みこむ力が強まりノワールの身体が完全

に『魔力魂の意志』の元へと吸収された。

「あら、一歩遅かったかしら…。困ったわね～、これからどう来るか…」

「…タイムリミットは後、どれ位です?」

「無茶な事言わないで。我が主だって、無限の魔力を持っている訳じゃないわ。もう限界よ」

少し苛立つたようにヴァルベルがノーラを見た。ノーラも負けじと見つめ返す。

「あと、五分」

目の前に、困った様に笑う青年が一人。

長い黒髪を後ろで束ね、赤い目が不気味に光っている。

「あと、五分だけ。待つてあげる。後はもう、待てない。いや、待たない。

皆の元に帰るんでしょう? なら、出来るよね。ほら、行つた行つた。ヴァルベルもお供お願い!」

いつもと変わらぬ笑みを浮かべて優真は言った。

仕方なさそうに、ヴァルベルがノーラの隣に浮かぶ。優真はそれを確認すると、片腕を前へ突き出すと横に広げた。

不意に突風が吹き、目を閉じる。

空気が一瞬にして変わった。暗く、重く、呼吸が苦しくなる。

「ちょっとお～しつかりしなさいよ。時間が限られてるの? 助けたくないの?」

「煩いつ…何処です? 此処は」

目を開けると、人の姿になっていた。

目の前には巨大な心臓の様な魔力の塊がドクンッドクンッ…と鼓動をしている。

その魔力の塊の中に、ノワールが膝を抱えて眠っている。

「『魔力魂の意志』の中心核かしら。分かりやすく言つならコンピューターのメインコントロール室つてところね。要するに心臓で、要」

「一つ、聞きたい事がある。さつきのは、やはり…」

「ええ。彼方たちのよく知る人よ？同時に書を統べる王。我が主」「無理に契約させたのか？卑劣な…」

吐き捨てる様にノーライが言つと、ヴァルベルは呆れたように溜息を吐く。

「あら、人聞きが悪いわね。今回は違うわ、唯の契約じゃない。お互い望んだ事よ。…まあ、良いわ。さつさと何とかしなさいよ。早くしないと完全に同化して『魔力魂の意志』の一部よ？触れると問答無用で『魔力魂』に成るからね～」

「…成りません」

少し強張った声色でノーライは言つて、『魔力魂の意志』の傍に近寄つた。

ヴァルベルは驚いたように目を見張つていたが、目を細めると小悪魔的な微笑みを浮かべ手を振る。

「あつそ。頑張つてねえ～？」

ノーライは、そつと鼓動を繰り返す魔力の塊に触れる。

そして静かに目を閉じた。

＊＊＊＊

「フレディ、ちょっと下に降りて皆に『魔力魂の意志』に向けての攻撃準備お願いして来て。」

猫モドキは、危ないから皆の所に戻つてて

猫モドキの背の上で棒の様に突つ立つてている僕は、傍らでふよふよと浮いてるフレディに頼む。

フレディは少し意外そうな表情を浮かべて言った。

ふらつきながらも空中に魔力を固め足場を作ると、そこに立つ。

「…そんなことしたら、当たりますよ?」

「それも仕方ないよ。どちらにせよ、無傷では帰れなさそうだし。紫の光が空を覆つたら、それが合図だと思って。猫モドキも、お疲れ。無理してその姿で頑張つてくれたんだ。帰つたら鮭の燻製たくさんあげるよ」

「…ア…」

ぽんつ…と白い煙が猫モドキを包み、元の姿へと戻つた。

それを抱きかかえると、フレディに持たせる。

直ぐ上では赤い光が点滅を繰り返していた。

『時間停止の陣』もそろそろ限界の様だ。さて、どちらが早いかな?

何時の間にかフレディは消えている。どうやら伝言を伝えに行つてくれた様だ。

「一人になると、中々迫力あるよね。この目。…何で僕ガン見な

のかな？他の所見ようよ、瞬きしようよ…？ドライアイになっちゃうよ…？

…せめて、叫んでも良いから何かしらの反応が欲しいんだけど

…。

…結論から言つと、怖いんだよー。一人にしないでー

『…彼方も、独り？』

誰かの声が聞こえた。直ぐ、後ろから。正確には斜め上かな。

さて、どうしたものか。

大總統からの指示を仰ぎたいけど、何も言つて来ないし。

『私と一緒に…』

くすくすと可愛らしい笑い声が耳元で囁かれる。

困ったな。動けない。

ひやりと、後ろから伸びた手が頬に触れた。

背筋が凍る。

『お友達、捕まーえた』

うん。キャッチアンドリリースの良心に基づいて放そつか。

頭上では、一つの大きな目が三日月に歪み、笑みを浮かべていた。

第四十二話 動き出した時間と、失われた機会

「君が、『魔力魂の意志』そのものか…。まさか、会いに来てくれるとは思わなかつたな」

じんわり…と頬が熱を帯びる。

程無くして、温かな液体が頬を伝い服に染み込んだ。

『皆、アレが私だと思つてゐるから困つちやつた。どう、可愛いでしょ？ 皆ね、どうしても復讐したいって言つから『器』をあげたの』
「あれが、『器』ね…。悪趣味だ。それとも芸術センスの問題なんか？…生憎、僕は素人なんで理解出来そうにない」

くすくすと『魔力魂の意志』は笑う。

だが、がつちりと頬を二つの手で挟まれてゐるので振り返れそうになかつた。

「にしても、今更現れるなんて。もつときまではあの『器』に居ただろう？」

『だつて、あそこに居たら食べられちゃうわ。だから、抜け出して来ちやつた。だから、あれを食べたいならどうぞ？』

「僕に言われてもなあ。…で、何の用なんだ？ 単に食われる心配をして出てきた訳じやないだらつ？」

薄く微笑むのが分かつた。

頬に触れていた手は、抱きつゝよつに前に組まれる。案の定、背中に吐息の様な熱を感じた。

『私達、似た者同士だと思わない？誰からも愛されず、またそうしてもらう事に畏怖し、自らの殻に籠り、心を閉ざす…そして何をかも忘れ、忘却の日々を過ごしては嘆き悲しみ、自らを傷つける』

「……否定はしない」

溜息に似た吐息を吐きだす。

空を仰ぐ。まだ目立つた動きはない。

『だから、お友達に成りましょう？』

「…僕は既に『沈黙の書』の主とお友達なんだ。むやみに友達を作ることの内気な命令が下つてゐる

『別に良いでしょ？彼が友達を作りたがらないのは『器』を壊さない様為の配慮。彼方が私を認めるなら、私達はお友達に成れる。書は燃やされ、代わりに彼方が彼等の『器』になつた。それが、彼の『沈黙の書』を統べる古き知恵の惡魔の唯一の願い。彼方は、もう人ではない。朽ちて死ぬことも、美しく散り果てる最後も無縁となつてしまつた。彼方は本当に独りぼっち。それは私も同じ。けど、どちらもそれを代償に出来る覚悟と願いがあつた。…ね？だから私達は同じ。だから、お友達になれる』

「もし、断ると行つたら…？」

『私が彼方を食べちゃう』

声がワントーン低くなる。

：「ああ、本気だ。諦めに似た感情が溜息となり吐き出される。

我が儘な妹をもつた兄の気持ちってこういうものなのかな？…違つ？

「…けど、安心した。君は友が欲しい、手に入らなければ食う。

僕は仲間が側に居てくれれば十分だ。…今はね。だから今僕がすべき事は、あの魔力の塊を食らうのみ。

…本当は君だつたんだけどね。お互い、食う事を目的としてるんだ。
協力し合つのが得策だと思わない？」

『どうしてそり思つの？』

きゅつと回された手に力が籠る。まるで蛇に締められいる様だ。
だが声色からして楽しむかのよつな、からかうような意地悪な口調
である。

「君は先程あそこにいた。なのに今は、こうして僕の隣にいる。
食われるのが怖くて、逃げ出すような性格、じゃないだろ？、君は。
口ぶりからして、真つ向から挑むタイプだな。何故、そくならない
か？答えは君が言つてる。『独り』だと。

君は『魔力魂の意志』。ある感情が集まって、固まって、生まれた
感情の集合体。

もし、あれが母胎とするなら、君はつい先程生まれ落ち、目覚めた
わけだ。

しかし、どれ程の力を持つと巨大な感情が渦巻く塊の中に唯一確
定した意志を持つ異端児でしかない。

だから追い出された。…違うかい？」

『うふふつ、正解。例え、どれ程巨大な力を持つ者が居よつと、多
数の人の前では、いづれ力尽きる。

…そんなの、私は嫌。折角手に入れた自分だけのものなのよ。取り
上げ、抑え付けるなんて許さない。

そんな時、貴方が道を作ってくれた。だから私は抜け出したのよ。

私は『魔力魂の意志』。それは間違ひじゃない』

「なら、一瞬で良い。内部の動きを止められる？」

くすりと可愛らしい笑みが聞こえた。

『良いわ。けど、そうしたら確実に殺されるわよ、あなた。

頭良いのね。探偵みたいだつたわ。演技なんて必要無いと思つけど

？』

拘束が解かれる。

頬に触れると、ぞりとした生温い液体が付着した。シャツを見る
と黒い染みが出来ている。

溜息を吐く。

「…生きやすい。

人間はね、自分より下位の者には警戒しないんだ。…ほら、よろしくの握手。友達になるんだろ？」

『…えつ？』

懺悔の様にぼそりと言つ。

何故、彼女にそんな事を打ち明ける気になつたのかはよく分からない。似た者同士だからか？

振り返り、手を差し出す。後には真つ白な少女がほうけた顔で立つてゐる。

ノワールとは対照的な真つ白な少女だ。

髪は短く、くせつ毛なのか所々跳ねてゐる。女の子と云つよりは中性的な顔立ちだ。

まさしく、教会とか、絵画で見る天使そのものだった。

僕が意地悪な笑みを浮かべると、彼女は現実に引き戻されたのよう
に目をしばたかせる。そして微笑んだ。天使の様な清らかでまばゆ
い笑顔だった。

ぐいっと差し出した腕を引つ張られる。

元々疲労により言つことの聞かない身体は、あっけなく前へ倒れた。
受け止める様にして抱き抱えられる。

そのまま、見つめ合つ。

奇妙な時間だ。

その時だけは疲れと無縁でいられた。

頬に両手が添えられ、動けない様にしつかりと挟まる。彼女の顔が近付いてきて、唇が重なり合つ。

うーん、似たような事が昔にもあつたような…？

僅かな痛みを感じ、眉を潜める。

唇が離れ、僕は手の甲で唇を拭つ。

どうやら唇の端を噛み切られたらしい。血が滲んでいた。

しかし彼女は悪びれもせずに笑う。

相変わらず、無垢な笑みを浮かべて。

『よろしくね、優真？』

「ああ、よろしく。ソルト。けど、君は『魔力魂の意志』と呼ぶにはあまりにもちつぽけな存在だ。だから違うよ」

苦笑しつつも、唇を舐めてみる。

新たな契約は、血の味がした。

一方、魔力魂内部。

「ずっとああだけど、大丈夫なのかしらね？まつ、私には関係ないけど～」

赤い魔力の塊の中に居る少女を抱きかかえる様にして固まつたままのノーライをぼんやりと見つめていた。

ふと、真つ暗な空を仰ぐ。そして溜息を吐いた。

「相変わらず、女の子に弱いみたいね～？あーあ…、帰つたら大總統をどう宥めようかしら～？」

早々に契約しちゃつて…。怒られるわよ～、我が主？彼方の人気は物凄いんだから～。カリスマなのよね。闇のカリスマ。昔から噂とかで聞いていたからどんな子かしらつて思つてたけど、入っぽくな人間つてもう…ドストライクなのよ～！…あら…？」

鼓動が止まる。

死んだの？いや、そんなはずはない。それなら動きを止めただけかしら？長くは持たないわね。

辺りは静まり返り、何だか氣味が悪かつた。

『死の夜』を抱きかかえたままのノーライを引っ張り出す。

『死の夜』を抱きかかえたままのノーライは、やつと意識が戻つて來たらしく、辺りを見回した。

突如、『魔力魂の塊』の要である心臓の鼓動が早まつた。

「うう…。おや？一体、どうなつているんですか？」

「説明する時間はくれないみたいだから、さつさと逃げるわよ」

パキンっと指を鳴らすと、空間が歪み、ブラックホールの様な穴が出来る。

何処からか蝙蝠の大群が飛び交い、穴に入つていく。すると、一気に穴が広がり、黒い扉が現れた。ギイイイイ……といふ錆びた音を出しながら扉は開く。

「出るわよつ」

腕を掴まれ、引っ張られる。

複数の意志がこちらを睨んでいる。そいつは、自分の真後ろに居て、未練がましく自分を見ている。きっと錯覚ではない。

扉が閉まる、ほんの一瞬だけ。

ノーラは、今し方自分達の居た場所を振り返る。

沢山の目がこちらを見ていた。血の涙を流しながら。ギョロリギョロリと目玉を動かす事なく、ただ自分達だけを睨んでいる。

もし、彼等に口があつたなら。

発する言葉は一体何であつただろうか？…ふと、そんな事を考える。

それをヴァルベルは見抜いたかのように呴いた。

「あれは、自らの意志がない。ただの未練感情の集まり。口があつたつてただ呻くだけよ…」

「…けど、仮にそうだとしても、私は彼等に謝るべきなんです…」「口があつても無くても、意志があろうとなかろうと、それはすべきだったわね。もう、その機会は失われた。一度とないわ」

淡々と言つヴァルベルに、ノーラはただ絶望に似た喪失感に囚われ

ながら、遠ざかっていく暗闇を見つめた。

＊＊＊＊

「…よし、無事に出たみたいだな」

脱出の有無は、上で血相を変えて、ギョロギョロと瞳を動かす『魔力魂の意志』を見て分かつた。

結果はどうであれ、抜け出したことに変わりない。

魔力で作った火の玉を上へ放る。
見事、『魔力魂の意志』の瞳孔ひとみへと命中した。

「よっしゃっ、満点ゲッツ！」

空が一瞬、紫の光に覆われる。

横で拍手を送っていたソルトはにやりと笑う。

『何点狙いで来るかしらね？顔面は満点。腕、足は十点。心臓は千点。胴体は五点…と言つたところかしら？』

「あははっ…笑えない現実だな」

げつそりとしながら僕が言い終わる。空を仰ぐと、『魔力魂の意志』は僕を睨みつける様に見下していた。目は最大にまで見開かれ、今にも飛び出して来そうである。暁の様な、不気味な光を周りに飛び散らせながら。

同時に上からは赤い稻妻、下からは魔力弾の猛攻が襲つて来た。数からして、外す確率の方が低いかなつて量。

雪合戦で言つ、敵の少なさに對して玉数千個みみたいな？

お前に逃げ場ないからーって感じ？

そもそも、僕の事考慮されてるのかな、頼んだの僕だけど。別に、いたぶつて欲しい訳じゃないんだけどな。分かつてるのかな？それとも、ごせぐさに紛れて殺れみたいな？後で事故処理で済ますみたいな？

とにかく、映画で見る様な壮大なスケールの攻撃が、今良くも悪くも僕の目の前で繰り広げられていると言つ事だ。

「…喜ぶべきといひなのか？」

『身の不幸を嘆くべきね』

第一章終話 お帰りなさい

頬や、腕に掠り傷が次々と付いて行く。既に脇腹や腕には抉れた様な深い傷があつた。

流石の僕も、疲労により一步も動けないでいる。

『魔力魂の意志』といえば、千をも超えるであろう魔弾の的となり、苦悶の叫びをあげている。

頭上では赤い稻妻が轟き、いつ僕の元へ落ちて来ても不思議ではない。

ギャアアアアアアアアア……………！…！…！…！

一際大きな悲鳴が響く。

先程とは比べ物にならないくらいの声量。そして、心を搔き亂るかのようだ、聞く者全てを発狂させかねない悲痛な悲鳴だ。

何なら、地上で苦悶の叫び声が聞こえてきた。

よくよく田を凝らして見てみると、主にラグド兵が苦悶の叫びをあげて地にのた打ち回っている。

吉田魔王様やカイン、教官も頭を抱えてしゃがみ込んでいた。

「最終形態つてところかな？それなら、最初からベストを尽くしてほしいよ。疲れてんのに頑張つても逆転なんて無理でしょつて、いつも思うんだよね。全く、付き合わされるこっちの身にもなつてほしいとおもわない？倒したぞーって舞い上がるてる最中さ、見苦しく反撃して来てさ。しかも、意外にしぶといから倒されそうになつ

て、女神とか覚醒とかして倒すんだよ？

「すつごく恥ずかしいよね。舞い上がってた俺ら、何？みたいな。例えるなら、ラストだと思って、一番狙って全力でダッシュしたけど、実はもう一週くらいあって結局、ビリになるつていう……以上、優真君の独り言でしたー」

うん、誰も聞いてねえ。

酷いな、せめてツッコミ入れてほしかった。

『どうやら、私達には効き目が無いみたいね？私は、元が魔力魂であるから。彼方は……』

意地の悪い笑みを浮かべてソルトは、僕を見た。正確には、僕の身体に生々しく残る傷口を。

『人間じゃないから、当たり前ね』

腕、脇腹共に深く抉られた傷口。そこからは、ただ黒い血が流れるのみ。

そう。骨も、肉も、臓腑も全て、存在しない。四次元の様に果てしない暗闇が存在するだけ。つまりは、空っぽなのだ。

「空っぽの器…か」

そう呟いた僕の直ぐ横を何か赤い光の玉が横切つて行つた。魔力による魔弾ではない。それは次々と地上から『魔力魂の意志』の元へと吸い込まれて行く。

「『魔力魂』か？：あーあ、強制的に捲き上げてる訳か。悲鳴を聞

いた奴らの命奪つて

『ついでに言うなら、魔力と人の意志。その源である生命は深い関わりがあるわ。魔力そのものが意志を持ち、強姦の様に生命そのものの意志を支配してしまえば、可能の業よ』

下からは悲鳴など、色々な叫びが聞こえでは消えて行く。つまりは、今苦しんでいるカインや教官達も例外ではなく、その危険性があると言う事か。

「ははははっ…。それは、困るなあ」

僕の表情を見て、ソルトは意地の悪い笑みの様なものを浮かべた。今、僕はどんな表情をしているのだろう?

『ギャアアアアアアツ……………！…！…！』

『魔力魂の意志』がもう一度、奇声を発した。ギョロリと大きな一つ目が僕を見下す。

雷鳴が轟いたかと思うと、赤い稻妻が、僕の直ぐ横に落ちた。かと思えば、すぐに次の雷が地上に降り注いでいく。空から槍という例えがあるが、まさにこんな状況だろうか。

下から一際大きな悲鳴が聞こえて途絶えの繰り返し。それを嘲笑うかの様に『魔力魂の意志』は三日月に歪む。

別に、僕が手を下さずともこのまま事が進めば自然消滅を果たすだろう。だが、それでは色々と困るのだ。

溜息を一つ吐き、前に手を伸ばす。

黒い光の粒子が集まって、杖に変わった。

そう。手を下さずとも、相手は虫の息。だが、それを悠長に待てる程、人は忍耐強くない。

そうなれば、一人残らず魔力魂へと転生するだろ？

だが、こいつを倒すにしても、それは中々骨の折れる事だ。

フレディ達、下級中級の死靈達なら、擦り傷の一つ付けられただけでも上出来だろ？

ヴァルベルの様な大總統お付きの使用人なら、一人二人召喚しておけば片付くだろ？が、生憎そんな力は残されていない。

残るは一人。

こうなつたら、賭けるしかない。

「孤高の貴方、我が盟約の主よ。古き書の悪魔、貪欲なまでに知恵を求める愚者よ。

樂園エデンの鍵を持つて、参ります。私は、ソロモン。知恵の王。森羅万象を司る賢者」

興味深そうな表情を浮かべ、ソルトが舐めまわす様に僕を見ている。その口が、数回動いた。

『死ぬわよ

動きから察するに、そんなところか。

ふふん、僕を舐めてもらっちゃ困る。一体僕が何度死の淵を垣間見

てきたと思っているんだ。

それにして、何か期待してるのかな？

「今、その門を開き、新たな罪人に裁きの手発を整えましょ。『
終極審判』」

辺りが黒一色に染まる。

誰も見えない。何も感じない。

『どういうこと？知恵の悪魔…書の主を呼んだんじゃないの？』

「今の僕に、そんな力残つてないよ。それに、皆の居る所で大總統
何て召喚したら皆お陀仏だつて。

…かと言つて上級悪魔達を召喚する力もないし、下級悪魔、死靈は
呼び出せても手も足も出せないでしょ？』

ソルトは呆れと侮蔑を込めた目で僕を見た。

どうみても僕は、庶民だぞ？所持金僅かなのに、高価な買い物をする
人なんて何処にもいないさ。

低コスト、高確率。

その何が悪いと言つんだ。

買えない物は買えないし、召喚出来ないものは出来ない。

『それより、此処は何処なの？魔力魂の意志はどうなつたの？』

「それを今から、裁くんだよ」

ザンッ…！と鈍い音が鳴る。

ソルトの両足が切り落とされ、体勢を崩したソルトはそのまま倒れ
た。

「…」れより、罪人に裁きを下す

漆黒の闇の中、僕の赤い瞳だけが不気味に光る。ソルトの両脇に死靈が立つ。右にフレティが大鎌を持って立ち、もう一人の死靈がソルトの首に鎌を突き付けていた。

『終極審判』

人は人生が終わると、天国と地獄のどちらかに行く。だが生きているが、この世の理に反する行いをする者等は行きながらにしてこの『終極審判』を受けなければならない。つまりは、レッドカードというわけだ。勿論、三回忠告はする。だが、一向に直らない者は強制的に送られるのだ。

えつ、僕も十分反してるだつて？
否定はしないけど…。というか、出来ないね。事実だし。

『優真、どういうこと？裁くのは、あの大きな玉であり私じゃないわ。仮にそうとしても、私達は血の契約をしてしまっているのよ？』

自覚が無い嘘。彼女は気付いていない。何も知らない。知る必要は多分ない。

「その点については問題ないから、大丈夫。だから君は静かに眠るといい。可哀想な嘘つきさん」

ザンッ…と鈍い音がして、首が撥ねた。驚愕に歪んだまま、じろじろと転がる。

人工知能をご存じだろうか？記憶・推論・判断・学習など、人間の知的機能を代行出来る代物だ。

コンピューターも、これがあるからこそ可能な事で、ありとあらゆる身の回りの電腦器具に使用される。

ゲームにも当然ながら使用される。お気づきだろうか？

此処は『ミケガサキ』。誰かが作り出したゲームの世界。もしかしたら、元からあるのかもしれないし、それを誰かが悪用したのかもしれない。

だが、何にせよ盛り上げる役がいなければゲームは面白みに欠ける。また、ストリがそう安易にならない様に進行役も必要だ。人工知能の代わりであり進行役。それが、人の意志の塊である『魔力魂』。

本人は知る由もない。神から言い渡された運命とでも言つべきだろうか。

それが自分の意志で行動していると思つても、実はすでに決まつていた事だったとは。

そういうえば、陽一郎さん。転生がどうたら言つてたけど、前の僕はどうだつたんだろう？

案外僕も、決められたシナリオ道理の道を歩んでいるのかもしれない。

「随分、あつけない終わりでしたね…。何か、もっと…」抵抗するかと思いましたよ…」

「そういう風に、決められてたのかもよ？」

「へ…？」

フレティが呆気にとられた顔で僕を見た。

暫く硬直していたが、振りを振るとそうですか…と呟く。

「何だか、疲れたよ…。もう、戻つても平氣?」

「ええ。無事、『魔力魂の意志』…贊は捧げられました。今宵の糧に、大總統も満足することでしょう…。お疲れさまでした…」

パズルのピースの様に、空間が剥がれて行く。

突如、光が弾けて、光の雨が地上に降り注ぐ。身体はいつの間にか元に戻つていた。

下から歓喜の声が上がる。

その声に少し安堵するとともに、身体から力が抜けて、落ちている様な浮遊感に捕らわれた…って、本当に落ちてるよ。あつ、当たり前か。さつきまで空の上に居たんだから。

受け身を取れば何とかなる?いや、高さから無理だな。それ以前に死なないから大丈夫じゃん。

けど、痛いの嫌だし。覚悟を決めて、僕は目を瞑つた。

下から皆の声が聞こえて来る。

「全く、世話の焼ける人ですね…」

「ニアッ!」

ボスン…と、お世辞にも柔らかいと言えない感触。寧ろ堅い。

おそるおそる目を開けると、青空が広がつていて。太陽が僕等を照らしていた。

ぬつと、いつも姿に戻つた猫モドキが僕の顔を舐める。ノワールが膝枕をして、僕の髪を優しく梳く。

「あー…、助かつた。ありがとう」

「今は休んで下さいな。…魔力魂の意志は、もう誰かを怨むことも、嘔を吐く必要もなくなりました。」

優真様が救つてくれました。…ありがとうございます、優真様。きっと、彼女は楽になれましたわ」

「…僕は、誰も救つてないよ。けど、ありがとうございます…」

ノワールは何も言わなかつた。ただ、黙つて僕の髪を梳いていた。ゆつくりと高度は下がり、やがて地面に着く。

カイン達が急いで僕等の傍に寄つて來た。

地上ではラグド兵が声をあげ、心の底から喜んでいる。中には歌い出す者や、ダンスを踊る者も居た。

「おじおい、大丈夫か…？ 酷い怪我じゃないか」

その言葉にギクリとする。だって、僕の身体は人間の構造をしていない。傷口を見れば一目瞭然だ。

「怪我と言つても、見た限り骨折と擦り傷だろ？。しかし、魔力の過剰消耗は危険だ。早く何処か休める場所を確保しなければな…。よく、頑張つた。偉いぞ、優真」

その言葉に、ほつと…息を吐く。

どうやら、『魔力魂の意志』が大總統の糧となつた御蔭で、僕の身体も傷が塞がる程度には回復したらしい。

吉田魔王様が笑いながら、僕の頭を撫でる。

皆が笑いながら会話をし、僕の頭をぐしゃぐしゃと撫でながら楽しに何かを言つ。

ああ、戻つて來たんだ。本当に、僕は戻つて來たんだ。
今更のよつこ、そんな感覺が湧いてきた。涙が頬を伝づ。

僕が捨てたモノはきっと無駄なんかじゃない。無駄になんかしない。

皆が、驚いた様に僕を見る。そして、一斉に言つた。

良く分からぬが。

「お帰りなさい」

そうだな、欲を言つとするなら。

良く分からぬは、無しで言つてほしかつた。

けど、まあ良いか。^{問題}いや、//ケガサキらしい答えだから。

第一章終話 お帰りなさい（後書き）

更新遅くなりましたすみません。何かこのへ、無理やり終わらせた感満載ですね。

『新資源騒動編』はなんとか終わりますが、全体的な話はまだまだ続きます。

お気に入り登録並びに、評価ありがとうございますーこれからも頑張りますね。

此処までお読み下さり、どうもありがとうございました。

第一章 プロローグ

ミケガサキの秋を感じることなく、冬が訪れる。

気付けば、『新資源騒動』から一ヶ月近く経っていた。

倒壊した国をどうするか途方に暮れていた僕等に、秘密裏にフェラ王国から絶大な支援の元が送られ、建物の損傷、倒壊は少しずつだが修復されつつある。…流石に城は半倒壊し、修復不可能だが。

だが、それでは困る。

城は言わば国の象徴。国の威儀を示す建造物だ。

無いとその国に何か物理的異変があつたことが丸分かりだ。つまり、他国からしてみれば攻め込みのチャンスってわけ。だが直せないとなると、とても困る。

東京に東京タワーが無いくらいの違和感だ。

何はともあれ、フェラ王国の支援のおかげで何とか外見だけは、元のミケガサキ王国を保っていた。

ラグド王国との対立については何やら協定を結ぶ事で片が付きそうだ。

だから、残るは城と王様と国交問題かな。

ミケガサキ城周辺。

瓦礫に埋もれる半ば倒壊しかけた城を仰ぎみる。

こんなに壊しやがつて。全く、何処のどいつだ？…うん、やつたの僕だけさ。

だが、街の被害は僕じゃないからな。…原因は僕かも知れないが。

御蔭でノーラさんや吉田魔王様は設計に大忙し。

ノーラは料理担当として、ミリエース王国民と戻つて来たミケガサキ国民の為に野外炊事に励んでいる。戻つて来たミケガサキ市民は、ミケガサキの変わり果てた姿に呆気ていたが、今は母国をより良い国にするべく作業を手伝ってくれている。

まあ、今回は別に城の状態を見に来たのではない。

生憎僕は不器用だし、作業の邪魔にしかなりそうにない。消費した魔力が戻るまで暫く安静にしろというのが教官からのお達しなのだが、それはとても退屈な事だ。

というわけで、何か無いかと散策中。

何でも噂によれば、すっかり教官に惚れ込んだドムのラグド兵達が、教官の部下になつたらしいじゃないか。今の時間帯は一度瓦礫整理をしている頃合いで、運が良ければお田にかかる。

「一度でいいから、見てみたいものだよ。本物のドムつ！」
「昼間から何、飛んでもない事口走つてるんだ…。まさか、朝から待機していたわけじゃないよな？随分朝早くから出掛けていたようだが…」

「そりや、一応は家族なんだから墓参りくらいに行つてあげないと駄目でしょ。まあ、あの人達にとつては大きなお世話だろうけど。…」
で、統率者の目途つて立つてるの？」

しまつたと言わんばかりの表情を浮かべ、カインは氣まずそうに首を振つた。
あのお一件以来、皆何かと僕に氣を遣うんだから調子が狂う。心おきなくボケれないじゃないか。

「いや…まだだ。第一、王制も初代勇者が廃止したしな。全く、何

が不満だつたんだか…。

普段は間抜けなんだがな、あれは影で活躍するタイプだな。そういうときは、実力行使で戦争止めたし…何だかんだで凄い奴だつたぞ。ちょっとお前に似てるかもな

「いやいや…僕でも、実力行使で戦争は止められないよ。何それ、必殺仕置き人！？」

そう言えれば、初代の話はよく聞くけど、陽一郎さん世代はあんまり…というか全然聞かないな。

「ねえ、カイン。初代勇者の話はよく聞くけど、二代目勇者の話は全然聞かないんだけど…。担当じやなかつたの？」

「ああ…。何でも、二代目勇者は群れるのを好まなかつたらしい。女神様をどう説得したのかは知らんが、言い包めるとなると凄い事だな。まさしく勇者だ。代々の女神は全員事案を通したがるから」

「…ちなみに、カイン。女神はどうやって決めてたの？」

「ミケガサキ城の地下に洞窟があり、その奥に湖がある。満月の晩、心音の清らかな者がその泉を覗くと女神の姿が見えるらしい。実際そうして女神は誕生して行つた。確かに泉に映る者は並外れた魔力の持ち主。他にも、第六感と言うべきか？俺達には感じることの出来ないものが感じられたり、見えたりしたらしい」

「…城の地下つていうと、今は瓦礫の下つてわけか…。ふーん、第六感ねー…。第一、魔力がそうなんぢやないの？」

急にそっぽを向く僕に、カインは苦笑した。

「あー、そういうや、お前第六感あるらしいな。ははっ、だが、心音は清くないから安心しろ」

「あははっ地味に傷つくかな」

適当に足元にあつた瓦礫を蹴る。

バヒューン…と鉄砲弾の様に吹つ飛んだ。

「……といつか、闇市とかつて無事なの？」

「おい、話を濁すな。何だ、今の蹴りは。いくら強化されているとはいえ、前はあそこまで飛ばなかつたぞ。まあいい。闇市は、空間ごと移動する特殊な場所なんだ。無事だろ。また街が元に戻り、何処か人気の少ない狭い路地に現れる筈だ。で、お前の事だから、ただ単にドMを見に来たんじやないだろ？

「いや、仮にそうだとしても何か用があつたと言つてくれ」

「何だ、本当に真に受けたの？冗談だよ、冗談。単なる散策だつて。暇つぶしに此処に寄つて、確かそう言つ噂があつたな」つて思つたの。つい先程、真っ白な鳩が来てね？伝言を頼まれたわけ。これ、

証拠ね

はいと僕は、ポケットから例の物を取りだすとカインに渡した。カインはそれを受け取るやいなや、わなわなと震え始める。

「しまつた…。そうか、この季節だからな…」

「どうしたの？何か来訪でもしてくるわけ？」

僕の問いにカインは頷く。

「毎年各国で開かれる…首脳会談なんだが、今年は此処ミケガサキでの主催だつた…。

しかも、遠征に出かけている先輩方も帰つて来る頃合いだ。本格的にヤバいことになる…」

「つまり、城と統率者を何とかしろつてこと？」

「考へても見る、女神不在、勇者は馬鹿。魔王は実は偽物で、本物は別人ですなんて、誰が言える？」

「成程。癪に障るのが一ヵ所あつたけど、不問にするよ」

最も、本当の勇者が不在で、本物の魔王様は目の前にいるんだけど。まあ、とにかく面倒な各国の色濃いメンバーが揃つてわけか。カイン達の先輩方が来るとなると色々面白い事になりそうだ。いつも通り、面倒な事にもなるんだろうけど。

「ははっ、やつぱりミケガサキは退屈しなくて良いね」

三嘉ヶ崎。

何処までも澄みわたる蒼い空。時に流れる白い雲。いつもの日常で、普通の毎日だった。

学校のチャイムが鳴る。

私の一日の半分が今、終わった。

荷物を整理し、教室を後にする。仲の良い友達と別れの挨拶をして、昇降口で靴を履き替える。

家に帰れば誰も居ないが、七時になればお父さんが帰つて来る。

私はそれまでに宿題をし、お父さんの大好きな料理を作り、帰りを待つのだ。

それが、私の毎日。私の日常。

「えっと… 吉田雪さんですよね？」

校門の前に一人。ロングコートを羽織った男性が一人、立っている。お隣さんの田中陽一郎さんだ。吉田と雪の間に間が生じていたけれど、名前を忘れていたのかしら？

陽一郎さんは、顔から見ても優しい人なんだなあつていうのが伝わつて来る。

つい最近引っ越してきたばかりだけど、今では、お父さんの飲み仲間で大の仲良し。

けど、由香子さんや一、三個上の拓誠君の姿はあまり見たことが無い。

「どうしたんですか、陽一郎さん。仕事は？拓誠君ならとっくに卒業したじゃありませんか」

「…ああ、そうだったね。いや、そうじゃなくて、ちょっと頼みがあつて…」

「え？」

陽一郎さんから聞いたのは、途方もない話。何の信憑性もない、到底信じられない話だつた。

此処では無い、ミケガサキというゲームの世界。それは此処、三嘉ヶ崎にリンクしているということ。

その世界に思いを馳せてみる。

未知の世界。パラレルワールドとは異なる異世界。

何でも、自分達はそこへ行つたことがあり、勇者を務めていたと言うのだ。

「私が失つたもの…」

「そう、選ぶのは君自身だ。それを取り戻したいのなら、僕は惜しみなく協力する。君をミケガサキに連れて行ける。現に、もう一人。既に行つているからね。君もよく知つていてるんじやない？」

あつ、どうだね…。けど、会つたことはあるかも…」

「陽一郎さんは、一体、何のためにこんな事を?」

狼狽しながら言つ私に、陽一郎さんは少し笑つて言つ。迷いのない、澄んだ笑みだつた。

「そうだな…。恩を仇で返した…うつん、余計な事をしてくれた、お馬鹿な息子への仕返しつてところかな?」

何処か楽しそうに陽一郎さんは言つた。

腹黒い笑みをチラつかせて。

私の失つたもの。取り戻すか否かは自分次第。

私は、私の答えは…。

「雪、どうしたんだ?…さつきからやけにぼんやりして…」

「えつ、ああ、うん…。お父さん、もし私が長い間家出するつて言つたら?」

「今すぐにでも死ねるな。ショック死だ」

そう真顔で言い放つと、お父さんはビールの缶を掴むと一気に飲み干した。

「しかし、どう言つのも何か理由あつての事だね?…何でも聞くよ、話してみなさい」

ぽんぽんと大きくて温かい手が、私の頭を軽く撫でる。頼もしい、お父さんの手だ。

「あのね、本当に、突拍子もない話なんだけど…」

私は、陽一郎さんから聞いた話を全てお父さんに話した。

お父さんは笑いもせずに、真剣に私の話に耳を傾け、相槌を打つ。聞き終わると、静かに田を閉じて酒精の混じった溜息を吐いた。

「…陽一郎が、お前に言ったんだな？」

「うん…」

真剣なまなざしで、お父さんは私に問う。そして大きく頷くと、もう一度頭を撫でた。

「雪は、何でお父さんが宅急便屋さんになつたか、知つているか？」「うん。お父さんはサンタさんのお友達で、サンタさんが休暇を取つている間に、皆の夢と荷物を届ける為でしょ？夢のある仕事なんだよつて…」

「あ、ああ… そつだつたな。そつ説明したかもしね。けどね、本当は違う。

ただ、逃げたかっただけなんだよ。雪は、自分の失つたものを取り戻すつもりなのかい？

それは、雪にとつて本当に大切なもののじゃないかもしね。その先には辛いことだつて待つてているかもしね。それでも、取りに行きたいと思うかい？」

「それが、私にとつてどれくらい大切なか、私には分からいわ。けどね、心の何処かで、それを探していった様な…呼んでいた様な気がするの。だから、どんな苦難が待つていたとしても、私はその正体を暴きたい。大切な物を取り戻したい…」

その答えに満足したように、お父さんは笑う。真剣な表情だった。

「なら、雪。行つてきなさい。頑張るんだよ。…お父さんも、頑張るから。逃げないで、立ち向かうから。もう、子供じゃないんだ。

自分の道は、自分で決めるものだ。**陽一郎**、雪を頼んだぞ
「僕は送るだけですって。この子の騎士ナイトが、ちゃんと守ってくれますよ。…ねえ、優真君」

何時からいたのか、陽一郎さんが私の後ろに立っていた。
陽一郎さんが指をパキンッ…と鳴らすと、私の足元に魔法陣が浮かび上がる。

真っ白な光が、私を包んだ。

お父さんの姿が、見慣れた部屋が、点滅を繰り返して薄れて行く。
『頑張りなさい。そして、どうか幸せに』

お父さんのそんな声が聞こえた様な気がした。

気付けば辺りは、一変していた。

見慣れない瓦礫ばかりの風景が広がっている。

此処が、ミケガサキ…。

訳もなく涙が溢れて止まらなかつた。

知つてはいる、私はこの場所を知つてはいる！

そう思つた途端、次々と記憶が溢れだして止まない。

「ついに、来たのね…。久しぶり、ミケガサキ…」

「…」と涙を拭う。

そして、城の方へと走り出した。

私の、失ったものを取り戻すために。

第一章 プロローグ（後書き）

とこりわけで、新章突入ーってなわけです。
お気づきの方もいらっしゃると思いますが、一部サブタイトルを変
更致しました。

面白くなるのか、とこりよりこれからどう進んでいくのか私自身全
く予想できません。

頑張つて更新して行く予定なので、誤字・脱字等ありましたら容赦
なくご連絡ください。此処までのじ愛読、誠にありがとうございます。

す。引き続き、楽しんで頂けると幸いです。

第一話 騎士団の帰還

ミケガサキ城跡地前。

「『復国祭』を行いたい？」

「別に構わないけど、各国の首相が集まるの今日なんだよね？」

「ああ。流石に隠すにしても何れはボロが出るだろ？ 何なら、最初から明かしといった方が良い。幸い、相手の二力国とは同盟を結んでいる。それを逆手に、国交再確認というわけだ。終わった後の余興なら別に構わないだろ？」

「成程。しかし、二人かあ…。案外、寂しいね」

「いや、首相と参謀。騎士隊長の三人だな。二力国プラス俺等三人だから計九人だ。料理は先に吉田魔王様に作ってもらえば問題ないよな」

「そうだね。全部まるっと解決だ」

そう言つて、僕らは新しく設えた城を仰ぎ見る。

かつて、白亜の城と讀えられていた城の面影は何処にもなく、ゴキブリの様に太陽を遮るかの如く黒光りしていた。

白亜の城と言つより、悪魔の城の方がしつくりくる光景である。

いくら辺りが復興の兆しを見せても、未だ瓦礫処理は残つていた。

それが余計に城を際立せている。

魔王の手に墮ちたと言わても、何ら不思議ではない光景だ。

端から見れば、何といつ度の過ぎた嫌がひむ。
間違いなく、確信犯だ。

実際、偽魔王様の本物の城だし。
いや、それ以前に、僕が本物の魔王様か。

凄いな、ミケガサキ王国。勇者と魔王の両方を輩出させたね。
他国を巻き込んだ、傍迷惑な独り芝居だと謳われても文句は言えないと。

「…本当に大丈夫なのか？いくら城が無いからと言つて、ミリュス
国の移動式城を代用して…」

凄い違和感だぞ。城黒いし…」

「ほら、模様がえとか…？ダークな感じに憧れてたんですけど…」
「何で勇者を誕生させた国が、ダークな感じに憧れるんだ」

「反面教師」

「無理だろ」

そういう言つている内に、辺りが騒がしくなった。どうやら各國の
お偉い様方が到着なさつたようだ。

「因みに、僕はどうすれば？」

「そうだなあ…、まだ指名手配犯だが、万が一の時の為に城内には
居てほしいな」

その時、城の厨房裏口からノーアイさんが顔を出す。

「おや、こんな所に居たんですか？そろそろ行かなくては出迎えに
間に合いませんよ」

「分かった、今行く。じゃな、優真。ちゃんと城内にいるんだぞ」カインは相槌を打つと、駆け足で去つて行つた。

とにかく、場内を目立たない様、ふらつけば良いのかな?

「暇なら、城内を見学してはどうですか?暫くはこの城だと思いますし」

「それは名案だ。やう言えば、猫モドキとオズさんの姿が見えないけど……」

ああと少しそっぽを向く様にノーラさんは答える。

「……先程、墓参りに出掛けましたよ」

「ああ、やうなんだ。それなら良いけど……。それじゃあ、僕行くね

城内へ向かう僕に、ノーラさんは少し考えた素振りをし、拍手を打つ。

「『復国祭』の事ですが、吉田魔王様が、世界三大珍……」

「チョンジで」

「……の内、一つが出る予定ですが、何が良いですか?」

「グリアン以外の、見た目が普通な物が良いです」

皆様、覚えていらっしゃいますか?

世界三大珍の一つ、グリアン。

……真縁のムカデ。

僕には堪えられない。

いくら美味しくても、生理的に無理だ。

「見た目が普通ですか…。料理すれば皆、同じだと思いますけどね…」

僕の異様な迫力にたじろぎながらも、ノーラさんは咳く。

「似て非なる物だよ、ナンセンスだよっ！」

あの真縁が、皆同じだと言いたいのかつ！？
いねーよ、あんな色した奴つ！皆違つて良いんだよー！十人十色なん
だよつ！何だ、アレは！？

青汁パウダーでも塗まぶされましたか？前世は緑黄色野菜か？来世はキ
ュウリなのか！？

「…来世は、流石に色で決められるものではないと思いますよ？
まあ、彼方の言い分は分かりましたので、とつとつ城内回つて来な
さい」

まだ言い足りずにいる僕に、ノーラさんは少し呆れた表情を浮かべ
て溜息を吐く。

半ば強制的に追い出される形で、僕はその場を後にした。

「お待ちしておつました。フェラ王国ソエム国王、並びにラグド王
国ジユリア女王陛下」

ミケガサキ城内に緊張が走る。

真っ赤なレッドカーペットを悠然と歩く六人の姿があつた。

「見ない顔だな。他の二人は何処だ？」

カインは、緊張した面持ちで案内を勤めた。

「今日は」こちらの都合により、女神様、及び騎士長、参謀長は「」ぞいません。

代わりに、私、カイン・ベリアル、及び各代理人がご同行致します
「おいおい…、これは何の茶番だ？俺達は、遊びに来ている訳じや
ねエんだよ。しかも、見ねエうちに、随分と様変わりしたじやねエ
か？」

奇抜なファッショントした年上であるつ青年が、野犬の様な鋭い目
つきで見てきた。

言えない。

模様交えとか、ダークな感じに憧れてたとか、とても言える雰囲気
じやない。

「中々良いじやねエか」

良いのか…。

何だか、ノリが優真に似てきた気がする。
気のせいであつてほしいが。

…恐らく最近碌に休んでないから仕方がない。

カインはそう割り切ることにして、内心小さな溜息を吐く。

「止しなさいな、グラン。…私の忠犬が無礼を働き、申し訳ないわ。
国内を見る限り、酷い内争があつたとお見受けするけど、今回はそ
れを込みでお話下さるのかしら？」

ラグド王国女王陛下、ジュリア・イグネスか。

ラグドは、代々女性が国を統べる。しかし、今回の内争。主な原因はこちらにあるが、ラグド王国も乗り込んで来ている。あれがミハエル何とか一人の独断で動いたとは思えない。…要注意だな。

「ええ、勿論ですとも。遠い所からわざわざお越しくださったんです。

料理を堪能してからでも、遅くはないでしょ？…それから時間の許す限りお話をさせよ

「一つの大きなドアの前に立ち止まり、取っ手に手を掛ける。そしてゆっくりと、扉を押した。

＊＊＊＊

「へくしゅん…。誰かが、悪口にも似たことを言ったのかな？

それにして、広い。あって、何処に行こうか

「影の王…、少しあ耳に入れたい事が

前、後ろと交互に延びる影から、フレティが顔を覗かせる。今は姿が半透明だ。

そのまま、僕の隣にふよふよと浮かび上ると、後をついて来た。

「ん？…どうしたの」

「先程、城内に…」

フレティがそこまで言つた時、何かがこづり田掛けて突つ込んできた。

「ザスッ…とフレディを貫通して、直ぐ横の壁に突き刺される。靈体じやなかつたら、普通に死んでる容赦無い攻撃だ。

「…け、剣？」

「おい、セヒのチビ」

まだ若い男の声だ。

アレかな？ 今日来るつて言つてた各国の誰かとか？

にしても、聞きづてならないうことを聞いたぞ。

いくら真実でもなあ、傷付くんだからなつ！ ビーセ、162センチですよーだつ！

男性では最下位だがなあ、一部の女子には勝つてるんだぞー！ 大半には負けるがなつ！ ドヤつ！

「わー、何処だらう？」

「お前だ。此処で一体何してる？」

僕の後ろから二つの影が伸びる。
がしつ…と頭を掴まれて、そのまま持ち上げられた。

「うわっ…」

僕の頭を大きな手が一掴みにし、身体が宙に浮く。
クレーンゲームの玩具じやないんだから…。とにかく、首への負担
が半端じやない。

「いててててつ…。首、ギブツ、タンマツ！」

「がはははは、威勢の良い子供だな。アンナが気に入りそうな子だ」
「ダズラス隊長、そろそろ下ろしてやらないと、本当に首がもげま

すよ

「ははつ、 そうだな」

直ぐに手が離され、 地面に尻もちをつく。

睨みつける様に僕の後ろに立つ人物を見上げると、 体格の良い大男と、 ひょろ長い青年が立っていた。

「君いつ！ 何処の配属だ！？」

「は、 配属…？ あ、 ああ、 新人です。 廚房の。 城の再建の時に雇用してもらった一般市民です。

今、 電気の点検を任せられまして…」

よく分からぬが、 あまり関わらない方がよさそうだと、 本能が警鐘を鳴らす。

甲冑といい、 見るからに騎士だ。 けど、 見ない顔だな…。 他国の騎士長か？

… というか、 この若い方の騎士さんは何をやつしているのかな？
さつきから僕の影に触れているけど。

「どうだ？ バーズ」

「… 読めません。 何の情報も読み取れない…」

何、 セキュリティチェック？ それとも、 床暖房でも確かめてるんですか？

この城、 最新式の割に床暖無いよみたいな？
そうか、 最近の城にも床暖はあるんだね。 魔法が存在する国だから、 当たり前みたいな感じかな。

貴族の習わしと同じよつに、 城には必ず床暖設置みたいな。

「僕が何で、床暖にこだわってるかだつて？単に憧れだよ。悪いかい？」

ホットカーペット買った後に、床暖の存在を知りましたが、何か？

「唯の、一般市民というわけでは無い様だな。よし、騎士団に入らないかつ！？」

騎士は男の口マンだぞつ。男の肩書きにして勳章が増えたな、良かつたじやないか」

何故、そうなる。何だか、入る前提の話になつてゐるぞ。

まあ、唯の一般市民じやないことは認めるけど。

『魔王』だけど、皆の認識は馬鹿な『勇者』。そして『指名手配犯』だ。碌な物が無いよ。

これ以上の肩書きは要らない。というより、欲しくない。碌なものじやない。

「…騎士団、騎士団つて、彼方達、一体何ですか？何処の騎士さんなんですか？」

半ば投げやりに聞くと、ダグラスは豪快に笑つて僕の頭を撫でた。横では心外と言わんばかりに口を開けたノーズ青年が立ちつくしている。

「我々は、救世の国を守る誇り高き騎士団。人は皆、『ホワイト・クロス白十字軍』と呼ぶ。

自己紹介が遅れたな、若人よ。ミケガサキ白十字軍指揮総官ダグラス・ボロだ。騎士隊長無き今は、代役を務めている。こつちは副補佐官、トーズ・アイ。

しかし、ミケガサキも我々が遠征に出でている五年間で随分様変わりしたもんだなあつ！がははははつ」

つまりは、この人が騎士隊長つてわけか。

だが、何も知らないこの人が出て来られては「こっちの予定が狂う」というもの。

だが、騎士隊長一人が増えた所で変わらないかもしね。見た目、馬鹿そудだし。

「…全く、誰のせいで五年間も遠征が行われたと思つてはいるんですか？探すこっちの身にもなつて下さい。…おやおや、誰かと思えば新しい勇者殿ではありますか？」

深い青みがかつた夜色の髪…まあ、要するに青っぽい黒髪ね。それにしても、久しぶりの登場の上に爆弾発言までしたがつたよ。

ゼリア参謀長。

ややこしい。非常に、ややこしい。

そして、最も言つてはならない事を暴露する。

「いや、失礼。今は、『国際的指名手配犯』でしたよね？」

場の空気が、一瞬にして凍つた。

第一話 二大珍味の大奮闘記？

さて、ボケようか、開き直ろうか。それとも素直に認める？いや、弁解という手もあるな。

そう考えていた僕を余所に、ゼリア参謀長が懐から拳銃を取り出す。その銃口を僕に向けた。

パンツ！

銃声が轟き、僕の直ぐ脇を銃弾が過ぎる。

「はい、分かります。よーいどんの合図ですね？ゼリーさんつ

僕はとにかく走り出した。

後ろから殺氣が、迸っているのを感じる。横ではダグラスが大声で腹を抱えて笑っていた。

あーあ、今日だけは問題を起さないようにしようって心がけてたのに…。

何これ、僕のせい？まあ、後半はぼくのせいだけ。

…根本的に悪いのはあいつらと血縁といつ言葉を知らない参謀長のせいだよね？

自業自得だよね、色々な意味で。

「と、とにかく近くの部屋でも転がり込むか…？」

「近くの部屋ですか…。曲がり角の直ぐはどりでじょ？死角なので、意外に見つかりませんよ…」

フレディが申し訳なさそうに言つて、曲がり角を指さす。

後ろを振り向くと、騎士の一人が追いかけて来ていた。だが、ゼリ一さん…間違えた。

ゼリア参謀長は追つてどころか、銃撃もして来ない。

「小賢しい…」

ゼリア参謀長は青筋を額に浮かべそう呟くと、銃をしまう。おつ、諦めたか？ よし、後は一人を撒くだけ……ん？

急に騎士の一人が追うのを止め、自分の大剣や、魔方陣で構成した障壁で背後を守っている。

その視線の先を見てみた。

ボウッ…とゼリア参謀長の前に陣が形成される。陣に触れ、自分を囲むように指を宙に滑させていく。

すると、一つの陣が二つになり、二つの陣が四つこといつた具合に、どんどん増えて行くではないか。

といふか、あの動きつ…！

「何か格闘家っぽくね！？ ほら、今にも何か気合球が出そうな雰囲気じやんつ」

「……ええ、マジで殺されますよ。それ以上言つと

「にしても、あの陣。一重構成じゃないみたいだけど？」

「…同じ業を同時に繰り出すには、銃ならば二丁必要でしょう？ 魔法陣も続け様に繰り出すのは『魔眼』でなければ成しえない業ですよ。普通の人間が陣を形成するには魔力があれば良いって問題じやないんです。それなりの努力あつてのものなんですよ…」

「わーい、僕、天才つ！」

「いきなり人名をゼラチン構成する奴が天才なわけないでしょ？」

…。

影のH。言つておきますけどあの陣、『連射の陣』と言われてて、彼方の所で言つマシンガンと同じです…」

そういう事は早めに言つてほし。

途端にズズズズズズ…と銃声に似た音が響き渡り、壁に弾痕を付けて行く。

「がははは、ゼリアの奴。相当キレているな」

「笑い」とじやありませんよ。このまじや追えないじやありませんか。どうしますか?」

うーん、君達は何をしに来たのかな?実は城を壊しに来たとか?ミケガサキの国交を遮断する気か。鎮国願望をお持ちですか、コノヤロー。

咄嗟に、『障壁の陣』で防いではみたが、走つて逃げてたら今頃ハチの巣となつていただろつ。

未だ眉間に皺を寄せながら、ゼリーさんは低く言つ。

えつ、言つて直さないのかつて?案外氣に行つたから、このままでいいじやん、三十路であろうオジサンに愛着が湧くーックネームが付いたんだ。

嘆くことじやない。寧ろ、喜ばしい事だよ?

「…逃げないのか、屑」

「心外だなあ。僕は馬鹿だ」

「威張れる要素が一つもありませんが…?」

花を持たせるという言葉を知らないのか。

良いじやないか、こんなところで出しゃばるへりー。…一応主人公

だし。

とにかく此処は逃げるが先決だ。
後で力インとかに合流して、弁解してもらおう。

ということで、犠牲：いや、囮になれ。これから召喚する誰か。
僕はお前の屍を盾にして行くよ。

「案外、外道ですね。影の王…」

「誰だつて、自分の命が最優先だ。『召喚』つ

廊下が白い光に包まれる。

おや、いつもの吉田加齡…『ほんつ、黒い霧が漂つてないな。一体、
誰を呼んだのやら。

「あつ、優真君。久し…」

「送・還つ…！」

「悪霊退散と言わんばかりに還しましたね。仮にも義理の父親でし
ょうに…。それに、あの人…」

「絶対、怒つてるつて！無理無理、もつと何かマシな人いない！？」

良く見えなかつたが、声でわかつた。そして確信した。凄く、怒つ
ていると。

という訳で、もう一度『召喚』を試みる。

頼む、陽一郎さん以外のこの場を打破してくれる人物よ、カモンッ！

一際大きい陣を召喚の陣を構成する。

廊下が今一度白い光に満ち溢れた…かと思えば、瞬時に黒く染まつ
た。

「ちよつ……、ハゲの王……あつ、すみません。噛みました。影の王つ……、陣が大き過ぎますつ！」

何を召喚するつもりですかつ……？」

「僕はまだ、禿げてねええつ……とにかく、陽一郎さん以外の何かつ」

陣の中心から赤い稻妻が迸る。

『ギヤアアア……』

「ギヤあああああああああつ……！」

いや、確かに打破出来るけど！

打破どころか、新資源まで生産してくれるけどつ！

「……ほら、言わんこつちやない。折角出てきたんですけど、叫ばしてあげましょうよ……」

「人にも成れるけど、人でもねえだろつ！アレはつーつてか、何で居るんだよツ！大總統何やつてんのつ！？」

「いえ……アレは大總統が美味しく頂きましたよ……。

知らないんですか、大總統に食べられたモノは、手駒に出来るんですけど……」

ふむふむ、便利な機能だな。流石、知恵の悪魔。

俺の物は俺の物、お前の物は俺の物つて胃袋なのか？

「……意味が分かりませんよ」

フレティが静かに溜息を吐く。

「魔力王になれるんじゃね？僕」

「その分、人口は激変しますが……？」

「折角手駒にしたんだし……、この際、人間じゃなくて色々な物を食べさせてみたら？意外に出来るかもよ？」

「鶏じやないんですから、無理ですって……」

「ほら、早く送還しないと、皆『魔力魂』になっちゃいますよ……」

「……………『送還』」

「半分本氣で『魔力魂』にするつもりでしたね……？」

辺りはまた白い光に包まれ、元の少し薄暗い廊下に戻る。

三人は、完全に僕を敵視していた。

殺氣というか、闘争心なのかな？これ、明らかに、やる気満々つてのが、見て取れる。

まあ、その内の一人は明らかに殺氣だけビ。

「いや、今ので敵視しない方がおかしいですよ……。とにかく、今は逃げる方が先決でしょう……」

「……三度目の正直とも言つし、後もう一回だけやつてもいい？どうせ、もうこっちで誤解解くのは無理そつだし。ほら、案外弁解代わりになるものが来てくれるかもよ？」

「要するに、やりたいならやれば良いじゃないですか……」

「『召喚』つ……！」

陣は先程の半分。

それをゼリーさん方式に則つて、三分割してみた。

つまり、同時に三つ『召喚』してみましょうってこと。

まあ、陣一つで一人召喚出来たこともあるから、そんなに必要なかつたかもしれないが、まあ良い。

「少し、大きいのでは…？ちゃんと、コントロール出来るんですか…？」

「……『気合』で、」

三つの陣が同時に光つた。

この際、人外でも何でも良い。…さあ、何が来る…？

『…………』

『…………』

『…………』

「おーとつー全員、無言だつ！つてか、何これ？虫つ！？でかつ！」

「虫だけに、無視つてことじやないですか…？ええ、すみません。つまらないですよね…。」

「…どうか、全部三大珍味じゃありませんか…」

「へー、これが三大珍味ねえ…。」

真つ青なトンボに、真緑のムカガテ…あつ、これが噂のグリアンか。

最後は普通だな。巨大ウサギ…？

「前の二つは分かるけど、ウサギは珍味に入るの？ウサギ肉つて意外に食べられたりするけど…。珍味とは言わないんじや…？それとも、こっちではあまり食べられないとか？」

「ああ、向こうの兎はサイズが小ぶりでしょ？ミケガサキでもそう言つた小ぶり…いや、普通の兎はもちろん居ます。市販で売つてゐる食用兎とか、普通にペットとして飼われていますよ。」

「この兎は見ての通り巨体で、捕まえるのが難しい割に、肉は左程美味しくはないのです。市販の小ぶり方が余程美味しいと言われていますね…。」

だから、食べるのはあの大きく長い耳の皮と、目。食べると、長寿

に成るそうですよ。まあ、影の王には必要無いかもしませんが…

「成程、確かに珍味だ。どんな味がするのか知らないけど。

これ、三体召喚しなくても良かったな…。一体で何とかなりそう。ウサギなんて、耳が天井突き破つてゐるし。見てて痛々しいよ。あれじゃ動けないだろ。因みに、この兎は何て名前なの?」

僕は巨大兎を見る。

隣ではグリアンやら、トンボが縦横無尽に飛びまわつていた。騎士たちは果敢にもそいつらに立ち向かつてゐる。当分は心配しないで良わせつた。

「確か、テンマデトドクミミナガ兎でしたよ…」

「そのまんまだなつ…?」

「耳の長さは、そうですね…、彼方のところにこう東京タワーに匹敵するんじやありませんか?」

「…ということは、この城を余裕で突き破つてること?」

「ええ。それはまさに、シユール以外の何者でもないでしょうね…。晴天の下、魔城にそびえる一本の耳…。この国は一体何処へ向かうつもりなのでしょうか…と人々は思つに違ひありません…」

とても楽しそうにフレディが笑う。

目は何処か虚空を見ていた。恐らく、そんな城の姿を妄想しているのだろう。

「送還送還送還送還…!…そつこには先に言えつて!」

取りあえず、ムカデをウサギを送還する。

テンマデトドク…の居た場所を仰ぎみれば、案の定、一本の巨大な耳が突き刺さつていた場所から青空が覗いていた。

うわー、皆にどう説明しようか。
絶対怒られるだろうなー…。

その時僅かな風を感じ、突起に退く。

剣がその横を掠めた。

「おおつと…」

「ちょこまかちょこまかと…。指名手配犯めつ…よくもまあ、ぬけと我が城に入つて来れたものだなつ！」

いや、君達の城じやないし。ちゃんと、所有者関係者に、裏口から入れてもらいましたよ。

鋭い斬撃と、止まぬ銃弾が僕を襲う。

ダグラス隊長の方を見てみれば、巨大トンボと格闘していた。トンボの方は傷だらけで、目がチカチカと点滅している。

「…影の王、これじやあキリがありません。とつとと逃げますよ。幸い、アゼルギスは最速のトンボ。因みに食べる個所は羽ですね…」

「よし、アイゼル。乗せてー…つわつ」

凄い勢いで襟を掴まれ、身体が宙に浮いたかと思つと、田にも止まらぬ速さで廊下を疾走していく。

例えるなら、ジェットコースターくらいの速さだろうか。

そのまま廊下の曲がり角を突つ切り、一際大きな扉の前に突き進もうとしている。

待て待て待て、そこは一番行つてはマズイ場所じやないか?
各国の代表が集まつてゐる部屋じやないのか?

送還するにも、この勢いだと僕自身が扉を突き破りかねない。

「フレディ、どうするべき?」

「言ひ忘れてましたが、アイゼルの視力は凄まじく低く、碌に物が見えません…。

音で認識している程度です…。まあ、良いじゃありませんか。いつもの展開ですよ…?」

そつ言つてゐる間に、扉は目前で。

轟音に近い音を立てて扉を突き破る。

そのまま無様に床に転がり、何処の壁かは知らないが、とにかく壁にぶち当たつて止まった。

奇妙な物を見る様な、何とも言えない視線が一斉に僕に向けられる。

さて、どうしようか。ボケようか、開き直りうか。弁解といつ手もあるけど。

とにかく、何らかのアクションを起こさなければならぬ気がするが。

その術を僕は知らない。

「えつと…、何て言つたか…。ミケガサキへようじや…お越し下さいました…かな…?」

その時の彼等の心情は如何ほどか。

突如扉を突き破り、床を転げ回った拳銃、真っ青な巨大トンボが横たわる傍で、何か照れて、頭を搔きながらも挨拶をされる。

僕だったら、リアクションに困る……かな。

一般市民……もし、それが知り合いとか、親しい人物、またはそれが
国交を結ぶ国のもてなしなら……そうだなあ。

……絶交とか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1488w/>

馬鹿勇者は世界を救う？～パラレルワールドだと思っていた世界が実は異世界

2011年11月26日16時51分発行